女學雜誌

第[illegible]六十[illegible]

明治三十一年十一月五日發兌

女鑑第百六拾八號

目録

兵衛佐道清の妻



人の慾

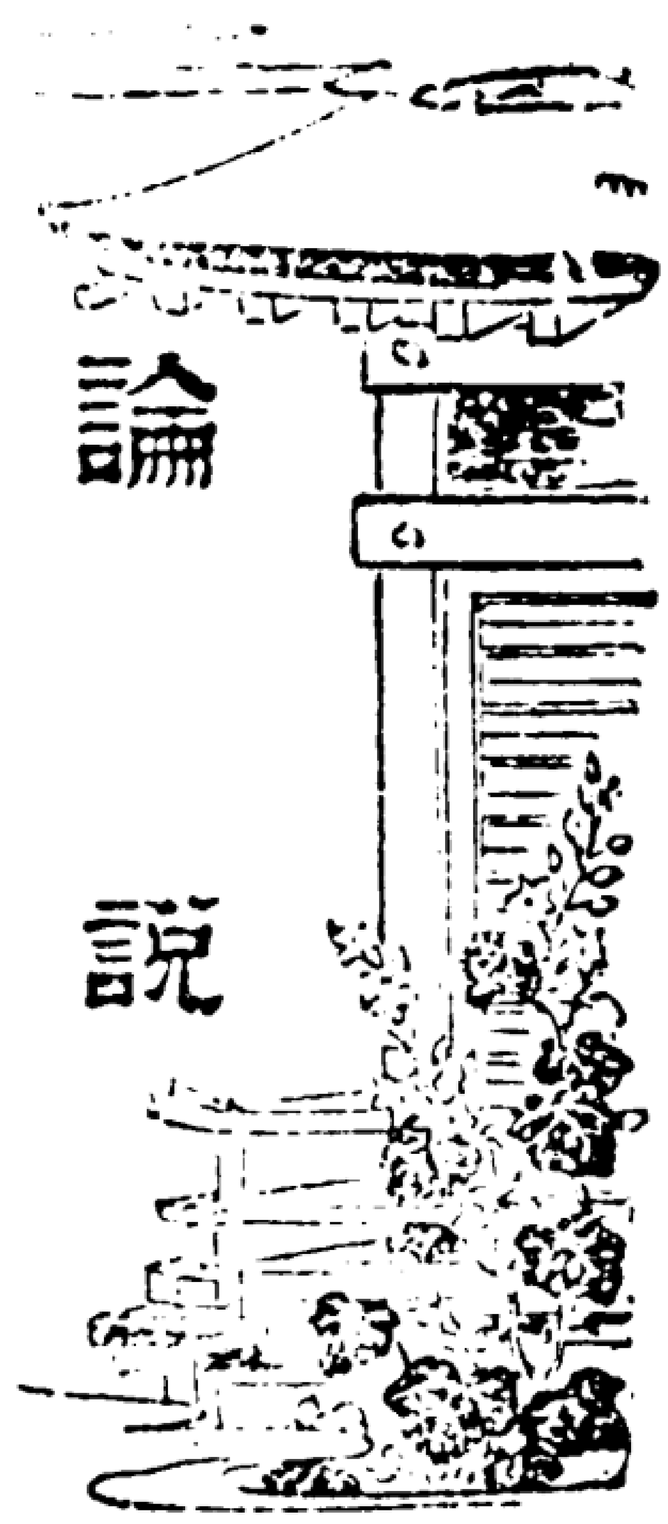
凡そ、人に慾なきの人はなし。されど、慾と云ふものは、極めて恐しきものなり。人の非行、人のあやまちも、大かたは、これより來り、人のよしあしも、また、この如何によりて、定むるを得べし。されば、人は常に最も心を用ひて、これを抑へん事を心懸けさるべからず。かの世にいともありふれたる詐僞の如き、或は、心にもなき金品を贈りて、貴人の意を得、高位高官に上らむとするもの、或は不正の利を一手にしめんとするもの、すべて、汚きあさましき罪を犯すものは、皆、わが私慾を抑ふる能はずして、我が慾に迷ふが故なり。またかの守錢奴なるものゝ如き、如何なる破廉耻の行ひをも耻とせず、人の爲め、つゆほどの情もなく、信をも盡さず、人非人、人鬼の如くなりはつるも、また、これが爲なり。かゝるいやしき、

くやしき身と成りはつるも、みな、この慾を抑へずして、慾に迷ふが故のみ。人の未だ壯なるに當りて、一身を過つ事多きは、大方は、また、我が情慾によるものにして、かの現時の學生が、不品行の極、遂に下流社會に墮落して、生みの親の心をこめたまへる、多くの心勞と金とを、忽ちに水泡に歸せしむるが如き、或は、此の汚き慾に狂ひて、一家の不和を釀し、家をも身をも滅するに至るが如きは、世上屢々聞見する所なるが、かくの如きは、いづれも、わが慾を抑へずして、これに迷ひ、これに狂ふが故に起るものなれば、ふかく戒めずぞあるべからず。

また、世人の、やゝもすれば、流行病にかゝりて、あたら千金の身を、北邙一片の烟と化せしめ、限りなき恨をのむで地下に朽ち去るが如きも、いかでか、食慾をほしいまゝにせし結果ならざるべき。もとより人に慾なきものはあらず。たゞ、これをよく抑へゆくと、せざるによりて、人の賢愚の別れ、人のよしあしも定まるにこそ。しかのみならず、もろ／＼の世の中の人の悪事、墮落、不忠、不義、非道、非倫、不和などのあさましきものは、大方は、かくて、これに起因するものなれば、古の

人も、已れの慾情に打ち克たむものこそ、いとも賢き人なれとて、これをいとかたく、いとめでたきものに、敎へたまへるにあらずや。げに、宜なる事どもにて、世の慾情に溺るゝものは、よく／＼思ひみるべき事なりかし。

昔は、深夜數里の道をかへりて、馬鞍にありし大金を、客に返しゝのみならず、その謝禮さへとらざりし馬子ありしときく。さるを今明治の聖代に生れて、學業を初めとして、其の他百般の事ども何不足なき身にありながら、なほ、一の私慾を制する能はずして、古の賤しき馬追風情だにも如かざるもの多きは、そも如何なる事ぞや。きたなき利慾、情慾、わがあさましき大方の私慾に溺れて、不忠、不義、非道、非倫のあさましき淵に沈めるもの多き、見聞きにたへぬばかり。これを思へば、行末いとれぼつかなくもおぼゆ、悲しさの胸に溢るゝ如き心地ぞする。これも、わが前回に述べたる、是非に打ち破らではれくべからざる社會の狀態にして、やがて一家の婦となり家庭の母となるべき女子諸子の力をかりて、必ず正しもなほしもせむと願ふ處のものなり。孃たちよ、あはれ、心して、わが事をきゝたまひてよ。



割烹と禮節と（七）

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

石井泰次郎

有住齊氏（二）

類聚婚禮式を評す

有住氏が著書中に於て既に世に刊行せるもの、曰く女禮式と婚禮法、曰く類聚婚禮式。女禮式と婚禮法は一小冊子にして其所說を伺ふに足らず、而して能く其意見を吐露し、博覽强記以て禮節の爲に身力を盡されたる程度の如何を知らるゝは、即此類聚婚禮式なるべし。

淺學無識の身を以て、敢て今此書の批評を試みんと欲せるは、未だ此書を以て、此類聚婚禮式の題目の下に、論者をして拜讀せしむるの價値あらざるを以てなり。如斯博覽强記を以て編輯せられたる此書は、論者をして此著述の下に屈伏せしむる勢力あらざるを

以てなり。然れども、爰には其價値と勢力とを論ぜんとするにあらず。只此著述の、齊氏が所論を滿足せしめたる著述に非ざるよしを聊か論ぜんと欲するなり。齊氏が禮節の意見は、此書に依て能く知る事を得ざる理由を陳述せんと欲するなり。

類聚婚禮式の組織

序

我國の萬の禮は天津國の御儀をならへとは天津神のたきて給ひし事なり、されば朝庭の御式はいふもさらなり、人民の年中の行事にいたるまで、神ながらの手ぶりしるくて、海の外の國とはことなる事多かり、これ神の榮の國なるしるしなり、然るに時世のうつりゆくまに〳〵外つ國のならはしもかたはしまじりて、いとまぎらはしくなりこしを、かゝるめでたき御代にたゞさてあらめやと、有住ぬしたもひおこして、まづ撰びとゝのへられたるはこの婚禮式なり、ふるきあとにもとづき、世のならはしをもとりまじへて、そのときごと皆より處あれば、此を正しき式とやいふべき、さてこのわざはおのづからおこなはれしからに、世にこれはといふばかりの書もなく、國々處々にて その式もさま〲かはれば、この禮をとり行ふものもいと困じたるを、今この書あらはれいでなば、いかにたよりよからまし、そも〲婚は 人の大禮なれば、まづこれをただして、つき〲その他にもおよぼさんといふ、さてこそ神ながらの手ぶりも いよ〲しるくて、妹背の中らひも正しくむつまやかになりまさらめ、これ大御代の光をそふるわけなれば、いとうれしくてことほぎがてらかく一言をそふるになむ。

明治二十五年四月廿五日　　久米幹文

叙

めをまくはひするは、人の道たるみなもとなれば、そが禮を正しうするこそよけれ、さればいづれの國に於ても、斯の道のみはよく行はれて、それ〲の禮あり、まして我が國は神代のいにしへより、禮義正しとたゞへられつれば、此の事に就ては、あだしくにのかゞみともなる定めなかるべからず、さるに言あげせぬくにぶりとて、まことには種々の儀式の行はるれど、ふみにものして世に公けにせる者は少なく、あるは秘事口傳など唱へ、たやすくは人に示さゞるもありて、之を集めて大成したる者なきこそ、いとも憾みなれ。然るに東陽堂のあるじ、一書を余に示してそが校訂を委ねらる、是此婚禮式にて、有住うしのものせられし者なり、披き見るに、凡そ婚禮にかゝはれる事は、遍く其の類を以て聚められ、其の意見をも記されたれば、ほと〲大成とやいはまし、又旨とせられし所は、もばら御國風を傳ふるに在れば、余は喜びて之を諾ひ、そゞろに朱筆を加へ、うしに遇ふて議りしに、うしは一々に善しといひつゝ從はれたりけり、余はうしの心の寛かなる

に慼てゝ、飽まで力を盡さむと思ひ、之にかゝりつれど、身は公けにつかふまつれるのみか、風俗畫報繪畫叢誌の編輯監督なども爲し、又ふみまなび教ふるとて、夜は行くべき所ありて心に任せず。そがうへ印刷を急ぎたれば、なほ校訂のたらはぬところ多かんめれば、みむ人正し給ひれかし、しかはあれど、此書は、古今の婚禮式を記つるものなれば、世の人を資くること尠からざるべし、有住うしのいさなしは、余がこゝにのべずもあらむ、よてわが此書にあづかれるゆゑよしなば、卷のはじめにかきつくるものなり。

明治のはたとせあまり、八とせといふとしのしはすの月吳竹の四谷に住ゐせる山下重民しるす

その引用書目

日本書紀	日本後紀	續日本後紀	續日本紀	古事記
古事記傳	畧解古事記	釋日本紀	古語拾遺	文德實錄
三代實錄	類聚三代格	類聚國史	扶桑畧記	大鏡
增鏡	水鏡	世繼物語	日本靈異記	新猿樂記
源氏物語	續世繼物語	登里迦邊波屋	竹取物語	大和物語
鳴門中將物語	伊勢物語	枕の草子	宇津保物語	徒然草
住吉物語	落久保物語	宇治拾遺物語	西行物語	古今著聞集
源平盛衰記	平家物語	保元物語	平治物語	曾我物語
太平記	紫式部日記	十六夜日記	辨内侍日記	蜻蛉日記
奥乃細道	後松日記	土佐日記	乳母双紙	江談抄
遊仙窟	大日本史	日本逸史	拾介抄	東鑑
日中行事	内裡式	令義解	儀式	江家次第
北山抄	西宮記	公事根源	名目抄	建曆御記
侍中群要	法曹至要抄	延喜式	元文服忌令	代始和抄
令集解	律書殘闕	寶在類書	恒例年中行事	年中定例記
雲圖抄	和事始	歲時記	百寮訓要抄	職原抄
神皇正統記	年中式禮	貞和御飾記	正中御飾記	古老口實傳

兩大神宮儀式帳	大神宮諸雜事記	神風抄	祝詞考	大祓三學辨
サキ竹の辨	和漢三才圖繪	八十翁昔語	古今集	後撰集
拾遺集	古今六帖	撰集抄	後拾遺集	金葉集
詞花集	千載集	新古今集	諸家集	年中行事歌合
建禮門院右京大夫家集	職人盡歌合	萬葉集畧解	賴政家集	懷風藻
和名抄	雅語譯解	古言梯	下學集	新撰字鏡
雅言集覽	和訓栞	康熙字典	玉篇	詞の玉の緒
詞の八衢	八雲御抄	古折烏帽圖	武雜記	道照愚草
岡屋關白記	百練抄	裝束要領抄	新野問答	唯心院裝束抄
連阿口傳抄	裝束雜事記	物具裝束抄	服裝管見	三條裝束抄
次將裝束抄	雁衣抄	布衣記	束帶色目抄	女官飾抄
裝束集成	法中裝束抄	曇花院裝束抄	服色漫語	松陰拾葉
逍遙院裝束抄	餝抄	桃華蘂葉	故實抄	裝束拾要抄
雅亮裝束抄	世俗淺深秘抄	山中口傳	後深心院關白記	織久圖會
宮人裝束圖	將軍家御裝束記	東大寺御實物圖	法隆寺御實物圖	調度圖繪
輿車圖	懸物圖鏡	徵古圖錄	豐公遺法圖錄	類聚雜要抄
源語圖我	武家裝束着用圖	御禮服圖	紫式部日記畫卷	冠帽圖會
筆の靈	年中行事繪抄	北部叢草圖	南流籏鶉當	集古十種
燕衣圖式	古圖抄	裝束圖式	載禮畫圖	調度圖
婚禮法式	式三獻餘瓷國	伊勢流包結記	元服法式	產所法式
祝物飾圖式	婚禮三冊書	推嘸記	禮節打聽	祝の書
上代禮式	禮格傳授	條々聞書	武田流禮書	草露傳
八番口傳書	故實口傳	銚子飾之卷	婚儀式	調度傳授

唐錦　女のしつけ　禮式書　諸札禮　進退記
女禮集　婚禮假粧道具　眉作記　化粧考　膳部圖
婚入童女記　婚記　女粧考　玉勝間　久保之取蛇尾
杜林漫錄　嘉良問答　名物考　貞丈雜記　欽萱堂雜錄
北邊隨筆　橘庵漫筆　四季草　家屋雜考　錦所談
蘇明漫筆　拾砂集　愚管抄　大三問答　山彥册子
鐘の響　冠學考　春湊浪話　擁書漫筆　片廂
俗說辨　用捨箱　提醒紀談　三養雜記　寸錦雜綴
玉石雜誌　綠拾雜記　南畝莠言　年山記聞　寛政系譜
伊勢家系圖　小笠原家系圖　二見の浦　月婚律　貞永式目
式目追加　長曾我部百箇條　慶長武家諸法度　鎌倉年中行事　室町殿年中行事
女房故實　武家女房裝束抄　綱業記　山槐記　後永尾院年中行事
左經記　內院年中御禮式　室町記　禁裡女房內々記　禮節要抄
歷史通覽　女官裝束著用圖　婚遊笑覽　留久米藩內記錄　胸之守傳書
天兒犬張子傳記　婚禮色直獻立傳記　嫁入道具飾傳記　婚入次第口傳　古法婚禮行列傳記
嫁入行列(婚禮)の傳記　略綱記經傳記　子のこの膳傳記　鴛鴦衾記　嫁入受取渡口傳
新撰立禮式　泰西禮法　雜學集　三議一統　吉良家の禮
今川家禮書　四條流包丁書　大草流料理書　曾我流書札の書

その所載目錄

巻の一　結納の部　一婚姻　一命を受て結婚し聘物を贈りて固さする古例　一媒人仲人の事　一氏姓を重する國法　一媒人の心得方　一結約
後鯨尺を贈る事　一婚家の年齢　一結納ゆひいれたのみの事　一七種五種の祝品仕立方　一祝物仕立方給圖　一唐錦の評
巻の二　里出の部　一琴　一三棚　一三棚小道具　一衛　一貝桶　一輿　一天兒　一胸の守　一南天包　一鴛鴦衾　一上刺袋　一衣架　一女
の髮の製　一黑齒　一笄　一祓衣　一掛　一幸菱　一嫁衣服　一大道具　一脂燭　一桂女裝束　一門火　一宿直物　一別れ酌　一雨出訓戒

巻の三　嫁迎之部　一床裝飾　一座敷裝飾　一打合餅　一饗膳仕立方　一貝桶授受　一輿授受　一婚禮行列　一神盃式　一合盃　一床敷様
一色直献酬　一作法書　一折裏作法
巻の四　三つ目以下の部　一引出物の事　一婚禮後三日四日を祝ひし事　一三日目餅の事
巻の五　雑事の部　一婦人姓氏を稱する事　一古代婚姻に關する慣例法律　一婚姻に關する古代法　一聽娶王女當一行三年離婚　一閉くさ
云事　一婚姻年齢　一忌秋字　一男蝶女蝶　一居喪嫁娶　一婦人頭飾　一執贄不葺菖蒲　一賤具直垂　一忌五月　一妾　一嫁娶擬凶禮　一
忌詞　一儲馬樂帷帳　一進物仲蛇　一まなさこ　一配子法　一和宮様御婚儀　一女子修身鑑・一和漢洋の婚禮式

女德のしをり（十六）

三輪田眞佐子

第六　怠惰　凡そ惡を行ふことのみを以て、道德に戻るものと限るべからず。我が本分を果さず、我が責任を盡さゞるも、亦道德を全うせざるものと言ふべし。思ふに、人は理性を有し、良心を懷くを以て、我が本分、及び責任のあるところを知らざるものはあらじ。然るに、これ等を實踐せざるため、不德の罪を得る所以のものは何ゆゑなるか、そは怠惰心に誘はれて、本分を果さむや、責任を盡さましと思ふまに〳〵、時は流水の如く去りて、己に業に機會を失ひ、唯我にのこるものは後悔ならんかし。女四書の學作章に、莫學懶婦。積小痴慵。不貪女務。不計春冬。針線組率。爲人所攻。と戒めけるがごとく、怠惰の結果は忽ち女子の家政に及ぶべけれども、その他總ての女德をも害すること大ならんを以て、女子たるものは、朝な夕な心して、この惡性

を脫却せざるべからず。見よ、人は約諾を守るぞ道德の一則となすべきに、怠惰の心あるものは、往々これを守らざる例あるを、亦怠惰に馴れし女子は、親に孝養する道も、子を養育する務も、あるは家事を整理する任さへ全うすること能はざるべし。元來人は生れながら德性を具ふとはいへ、日夜これを琢磨せざれど至善の域に進步せんこと難し。されど、怠惰は進步の大敵なるを以て、この惡性を根絕せざるべからず。

蓋し怠惰は、多く平素の慣習に由りて生ずるめれど、女子は幼少のころより、爲すべき事、行ふべき業は、寸毫の猶豫なく、即刻即時に實踐する慣習を養ふべし。伴蒿蹊の國詩に『よしあしにうつる習をれもふにもあやなきものはこゝろなりけり』とあり。されど、飽食暖衣逸居する女子にして、猶怠惰の慣習を避けんとせんも、岌々乎として危きかな。

第七惑想　熊澤了介は、心思の外に向ひて人前を愼むのみ、或は頑空、或は妄慮するものは小人となしけり。若し深く道を信じて疑はず、固く義を守りて動かざる君子ならんには、その心必ず磊落快活にして、露ばかりも繫累する處なかるべし。語に曰く、小人閑居して不善をなすとは、その心未だ强健ならざるを以て、徒然なるまゝ、あるは疑惑、あるは忘想を生じて、知らず識らず不善に陥る意ならんかし。

惑想の源は心の薄弱に基くものなり。心の薄弱なるは道義を修養せざるによるは明なれ

ども、亦知識の乏しきがため、萬事に疑惑の念を生じ、あるは忘想の暗に迷ふならんか、元來女子に最も肝要の德なる貞操の如きは、秋毫だに惑想あらんか、そを全うすること能はざるべし。

むかし山城の國に住みける者、その娘に夫を迎へけるが、やがて病にて失せにけり。されど、兩親も既に老いけるを以て、更に夫を迎へしめんと勸めけれど、娘いはく、この家に巢をつくりて子を生める燕あり、雄燕をとりて殺して、雌燕にしるしをつけて放ち給へ、さて明けん年、その雌燕はかの雄燕を具して來たらんときに、これを見てわれに男をあはせ給へ、畜生すら夫を失ひつれどほかの夫をまうくることなし。況んや人は畜生よりも心あるべしと。由りて雄燕をころし、雌燕に赤き絲を付けて放ちけるに、明る年の春、その雌燕はほかの雄燕に具せずして獨り來りけり。これを見て娘は『かぞいろは哀れとも見よ燕すらふたりは人に契らぬものを』とぞいひける。實に人生の最大事なる進路を決するときに際して、若し心に一點の惑想だに浮かばんか、逡巡躊躇して志を誤るに至るべし。思ふに、この娘惑想なかりけんを以てこそ、かくめでたき決心ともなりしか。

その他惑想眩溺する女子は、樂しき家庭を作ること能はざるは更なり、他人との交際も

濃やかならざるべし。わきて心の平和を有ち、幸福なる生活を送る能はざるこそあはれなれ。

女子のつとめ

前田美子

ちかき比、女の徳むげにいやしうなりもてゆきて、自尊の心のみ長じぬるこそ歎かはしき限りなれ。殊に征清のことありしよりこのかた、尚武の風やう〳〵盛んになりゆきて、優に女らしきをぞ、あなどり蔑しむ傾きあるこそうたてきや。容姿骨格の上よりみるも、性質智能の上よりいふも、生れながらに男女のたがひはあるものを、などか行爲所業の異らざるべき。さるを、男女同權とかや、西の國の風俗を見ならひて、愼ましげもなうあげつらへるなど、げに生物知りとやいはまし。古へより、男子は太陽のごとく、女子は太陰に似たりとかや。かまへて忘るまじきことになむ。おのれ未だ齢少なく學あさければ、物の理など知るべうもあらねど、尙、女のさかしらぶりたるかたはらいたしとおばゆるふしなきにしもあらじ。日に月にすゝみゆく世のならひとして、女の位置の高くなるにつけて、怠るまじきは學びの道になむ。されど其道はいづれにかよるべき、あはれ、外國のよきをとりて、我國のたらざるをおぎなふの外やなからむ。さはいへ、今は

かしこきあたりさへ、西洋のならはしをとり用ひさせ給へることにしあれど、強ちそをいやしむは、なか／＼に世にそむきたるしれ者とうとまれなむ。必しもかたよらで、よきにならひあしきをすてゝ、只ひとすぢに女の道をふみわけて、家庭教育の擔任者となりて能く家を治め、夫をして内顧の患なからしむるこそ肝要ならめ。わきて愼しむべきは、みだりに移りゆく世の風潮にのみ走り、あるは、わいためもなう外國のならはしになづむことになむ。あはれ、優美貞淑の徳を修め、長しへに神代のまゝの良習をのこさむことこそあらまほしきわざなれ。

史談



兵衛佐道清の妻

鹽井ふく子

世話にも、姑と持佛堂とはれき所なしなど、敬するにや、遠ざくるにや、勿体なき諺を習ひとして、兎角姑をむづかしきものにかしづく嫁の君の多き中に、之はいみじう姑を思ひ、れもはれたる、よにも有りがたき嫁、そのかみ陸の奥にすみける兵衛佐道清と云へる人の妻にこそはありけれ。みめより心ざま、さながら玉の如くうるはしく、夫に仕へてたゞ貞、姑にかしづきてたゞ孝、行ひつゆかけし處も見えざりけるが、老少不定の世の習ひ、天はやくも夫を失ひけり。妻がなげきは云はむ方なし、みちのくのあだちの眞弓、引きか

へせど、もとより歸り來べき人にもあらず、詮かた涙にかきくれて日を經るほどに、未だ年も若う、色香もうつろはぬを、早くひとり住ませむも悲しとて、子に迷ふ妻女が父母は、取り返してこと方へよめらせんと云ふを、妻はうけがはず、妾かつて傳へきゝ侍るに、貞女は兩夫にまみえずとかや、今、身、不幸にして夫にはなれ侍りたりとて、又よの人にとつがん事、軒のつえめに聞え侍るも耻かし、かぞいろの思召、御なさけ、嬉しさはかぞへつくすべくも侍らず、たゞこの上は妾をまことにし給へとて、石ならぬ心、又まろばす能はず、父も母も其のまことに服して、遂に其ことと云ひ止みたり。妻女はそれより紡績をつねの業として、晝夜いそしみ勵み、つゆ足を我門より外へふみ出さず、夫なき後は偏に姑を夫とし、また我身を夫ともなし、先きだちし夫が不孝身ひとつに報いんものとて、旦夕こゝろをくだき、春のさわらび、秋のきの子、たゞもえ出るまゝ、をかしきさまにすゝめ供して下くるしき色つゆ見せざりけり。さるに、ある時、姑の足に腫物出來て、いたむこと限なく、すでに玉の緒もあやふく見えけるに、嫁はいと悲しみ、心を碎きて介抱をなし、さまざまの療治を乞ひけれど、効見えぬに、いたく歎き、己が身にかへてもと神に祈り、醫師にも心の限りたのみけるに、醫師申すやう、このうみを人の口してすひとり、その跡に膏藥をつけなば癒えなむと云ふに、嫁いたくよろこび、さはいと容易きことなり、我が命、此のうみをすひて失ふとも、姑の病だに癒えなば、これこそうれしかるべけれとて飛び立ちよろこび、いさみて姑が腫物のうみを悉くすひつくし、さてからやくをつけゝれば、忽ちにはれひき、いたみさり、日ならず平癒したりけるは、かの糞をなめて父が病をこゝろみし南齋の瘦默婁、また唐土の胱通が文帝の癰を吸ひけるよりも、はるかにまさりて覺え侍る。されど、姑も此の嫁を思ふ、慈母をしたふ如く、唐土の孫夫人が、嫁に抱かれて乳を吸ひけるもかくやと思ふばかりなり

けるとぞ。

布幾女

山本正周

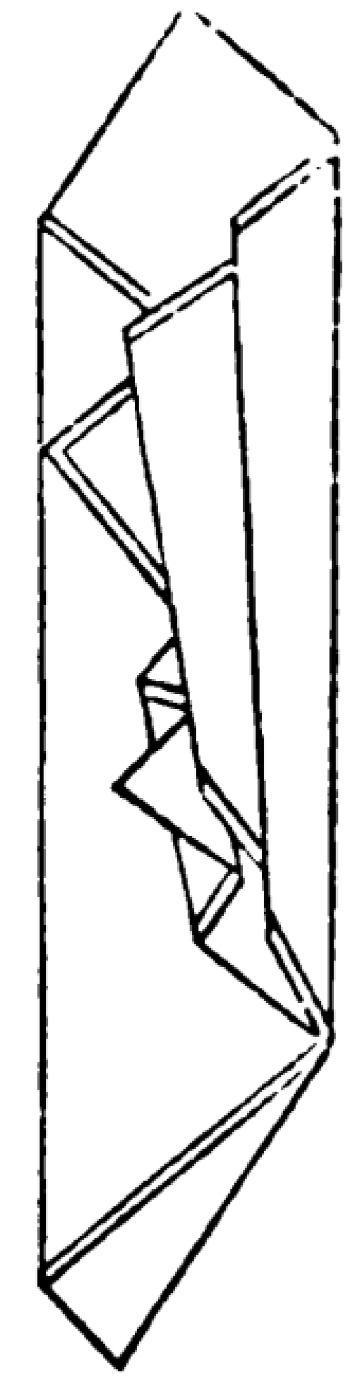
肥前國長崎磨屋街に住める某の妻布幾といへるは、もと天草島の生れなりしが、家貧しきより、長崎に出で、、或る家の婢となり居しを、後に緣ありて某に嫁ぎしなり。布幾女天資柔順にして克く舅姑に仕へ、夫に事へて又貞實なりしに、引違へて夫は兎角身持正しからず、果は其の地にも身を置きかね、或日何處ともなく出行きしまゝ又歸り來ず。迹に殘されし布幾女は、一時途方にかきくれたれども、赤心を取り直し、今は唯舅姑を安うし奉らんのみとて、其家業なる香塵を製することに心をこめ、晝は出でゝ蜜柑の皮を買ひあつめ、夜は之を搗きて粉末に製し上ぐれど、舅は之を荷擔ひて市に賣り、以て糊口の資となせり。かくて又家にはいさゝかの田圃ありけれども、舅ははや年老いて、耕耘の勞に耐へざれど、布幾女は家業の片手に、自ら耒耜を執り、肥料等をも荷ひ行きて之を耕し、黍、麥など作りて糧食となせり。鄕里の親戚等、布幾女がこのありさまを聞きて、離緣して歸るべきよし勸めしかど、布幾女は、妾もし歸りなば舅姑は凍餒したまはんといひて遂にきかず。されど、此の事官に聞え、米拾苞銀十枚を賜ひて其の孝貞を賞したへりとなん。



包の記

有住齊敎授
門人なみ子
鐐子筆記

岩田帶包　これは懷妊五ヶ月の時の帶の包かたな

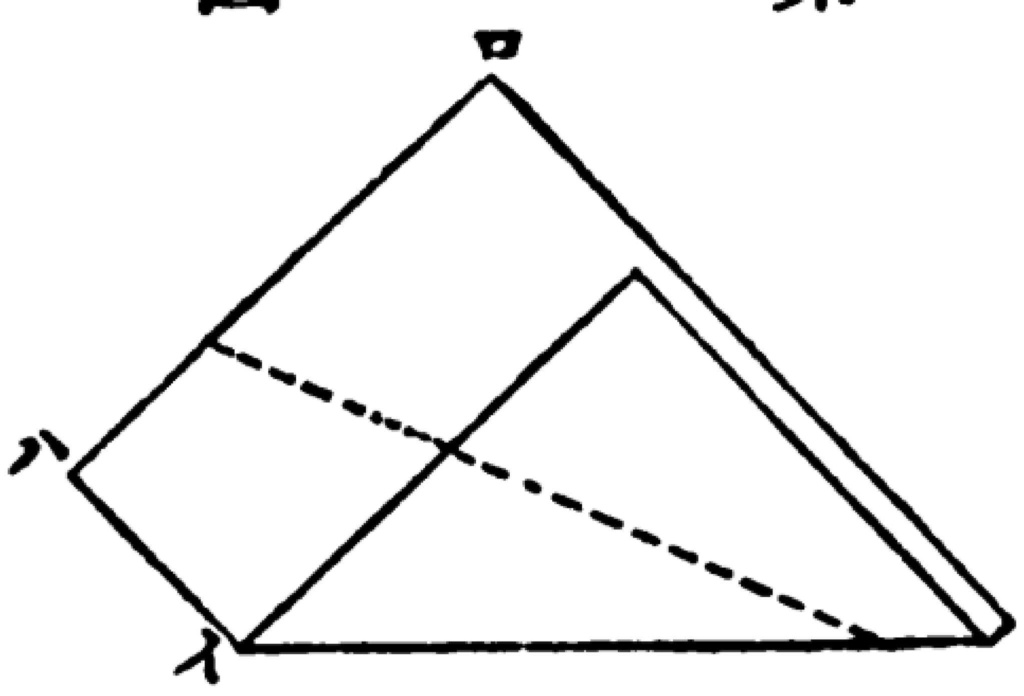


り。ゆひはだ帶の包なり。帶つかはす方よりの包樣なり。

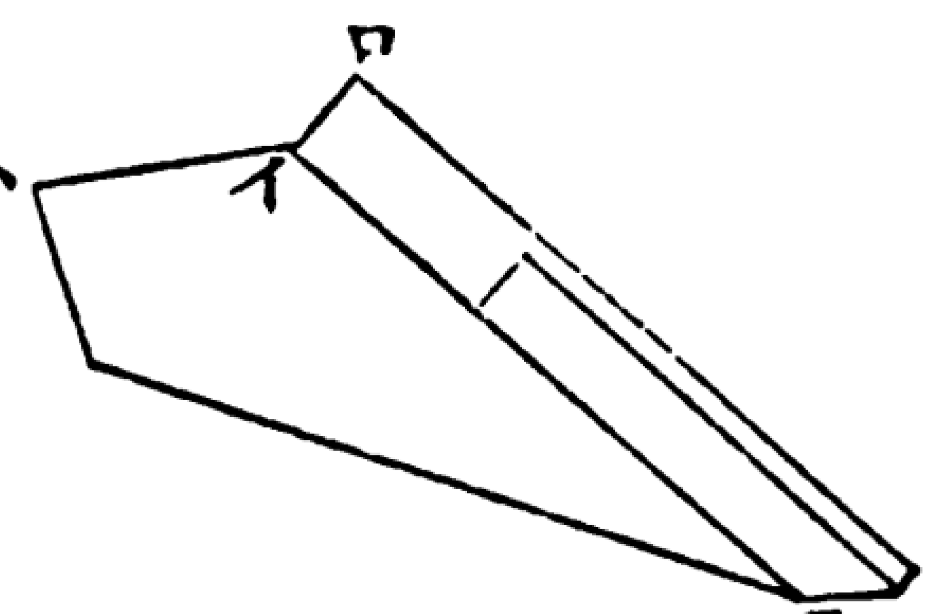
紙取は裏曲の法によりて取ること左圖の如し。先づ、奉書紙、其他何にても、第一圖の如く下端の一方を折り、是と同時に又其點線にて示せる通りに折りて、第二圖の如く「イ」點を「ロ」「ハ」の線中の或一所に合せ、斜めにならぬ樣、「イ」と「ニ」とを見合せて折り、さて其余り、即ち「イ」「ニ」の線より外部を斷ち落せば折形の紙出來上るなり。

（裏曲の圖）

第一圖



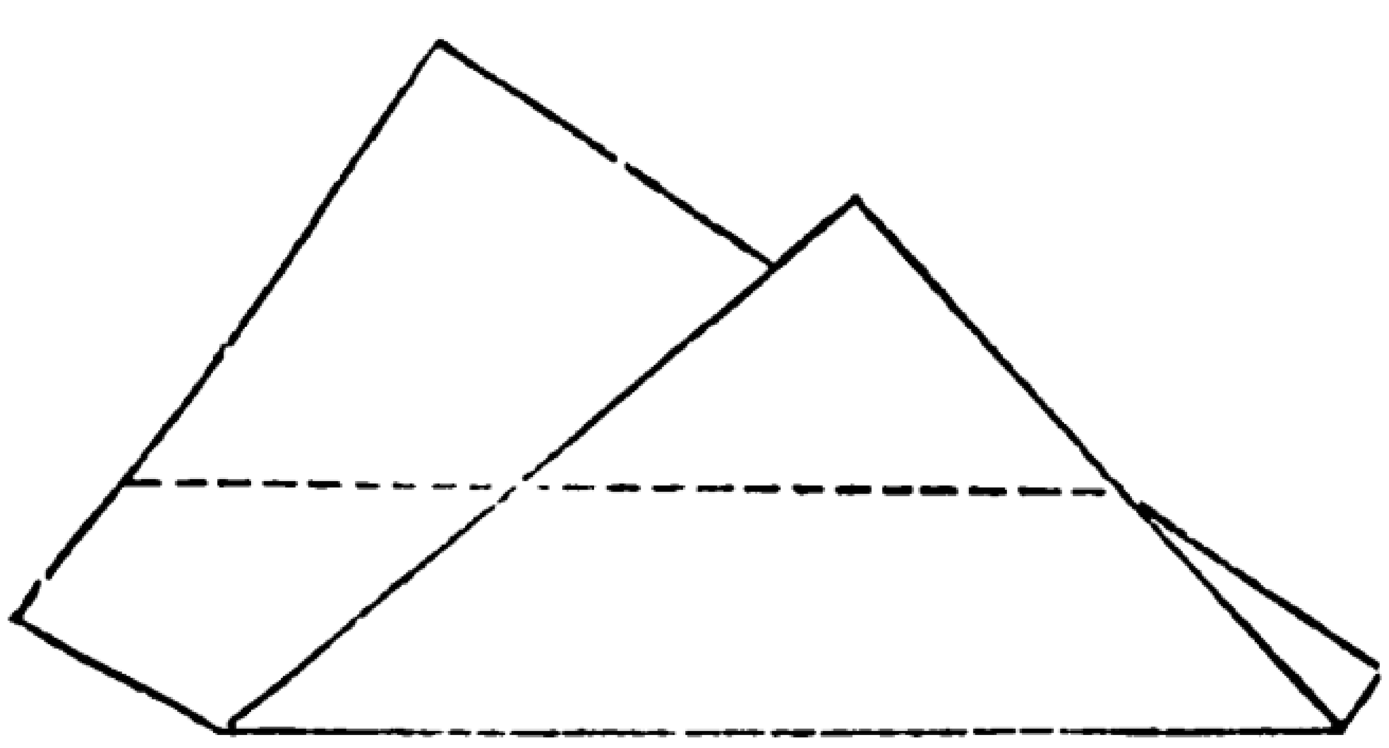
第二圖



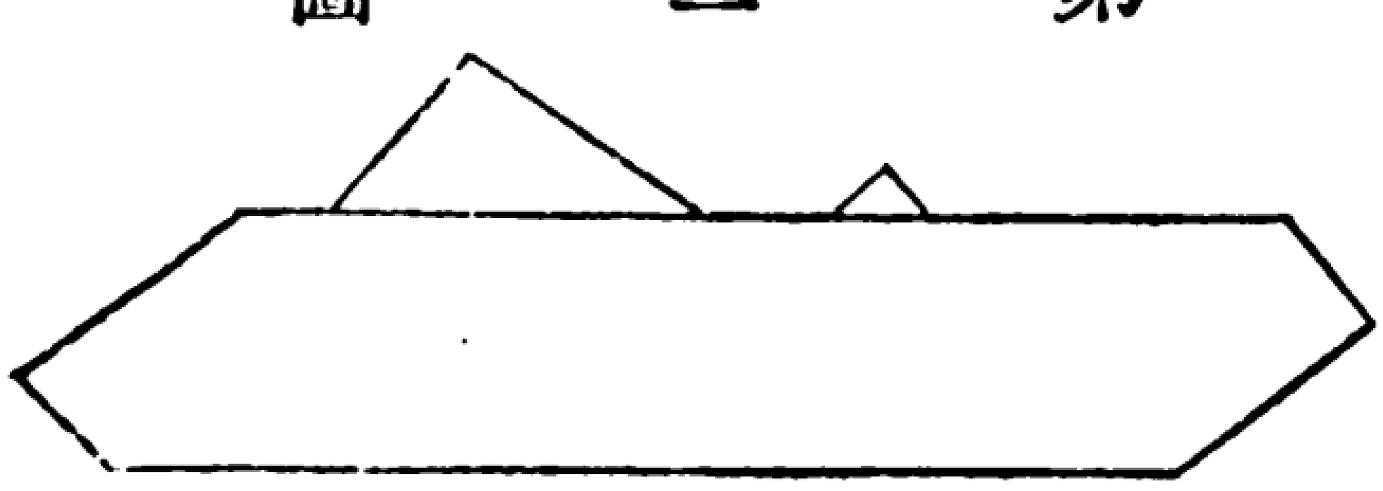
右の如く紙取をなしたる紙を以て次の如く形紙を折るべし。

さて、左に示せる第一圖の如く筋違に折りて、又其點線にて假に示せる程を手かげんにて折り　第二圖の如くすべし。次に此の二圖を裏反して第三圖の如く折り、斯く折りなしたるを、開かざる前に、墨にて折目〳〵を、表のは表より、裏のは裏より線を引き、裏の線を表より見易からしめんがために、表の方へと錐にて標をうち出して、表の方に丸標を錐の穴の邊に付置べし。

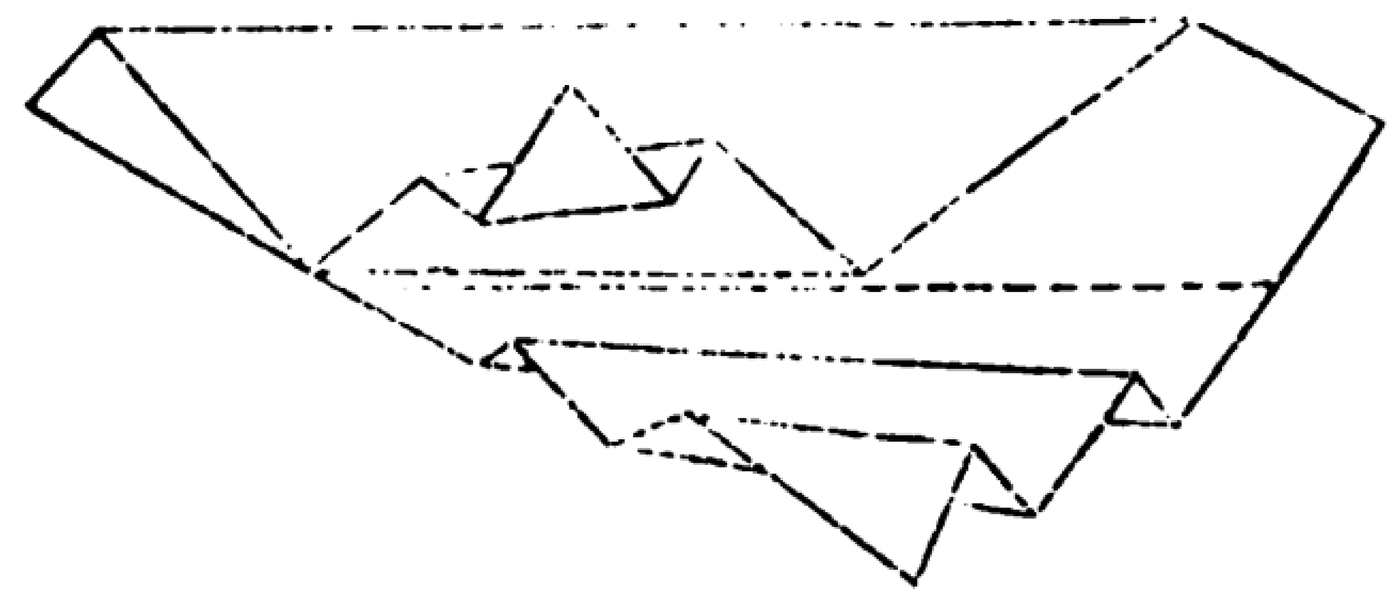
第一圖



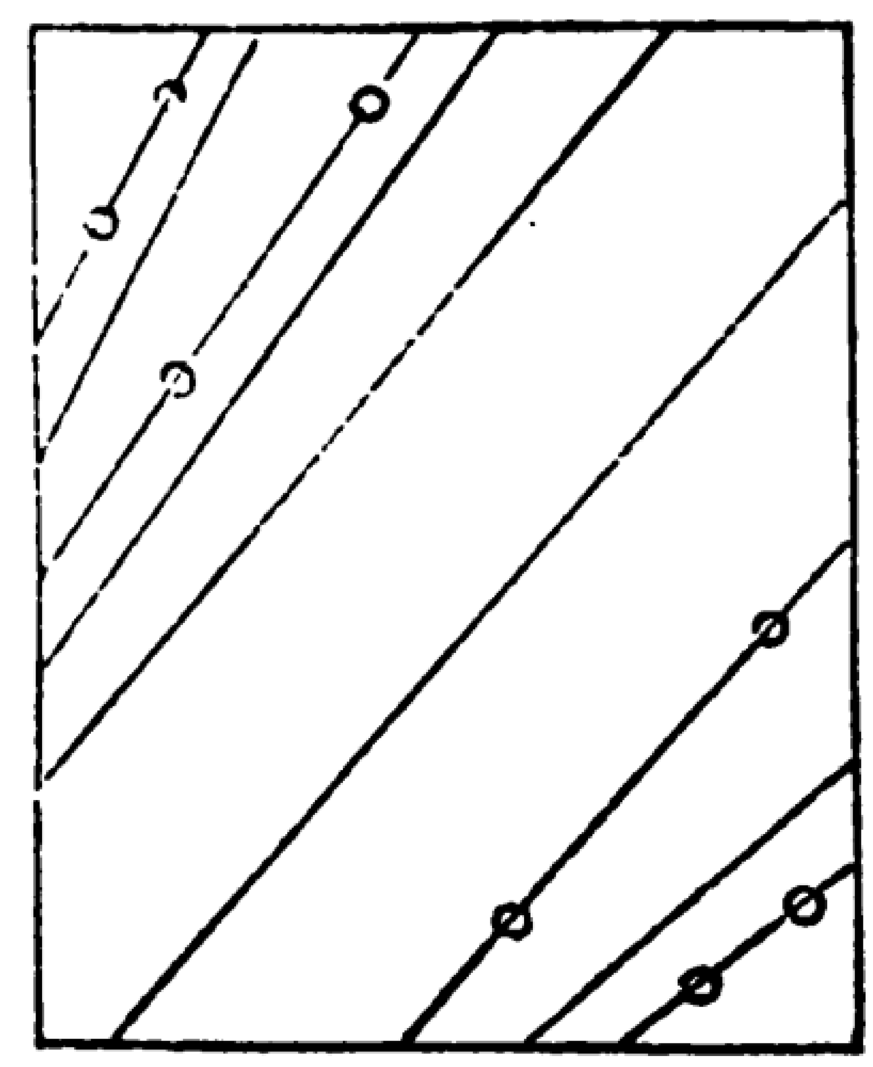
第二圖



第三圖



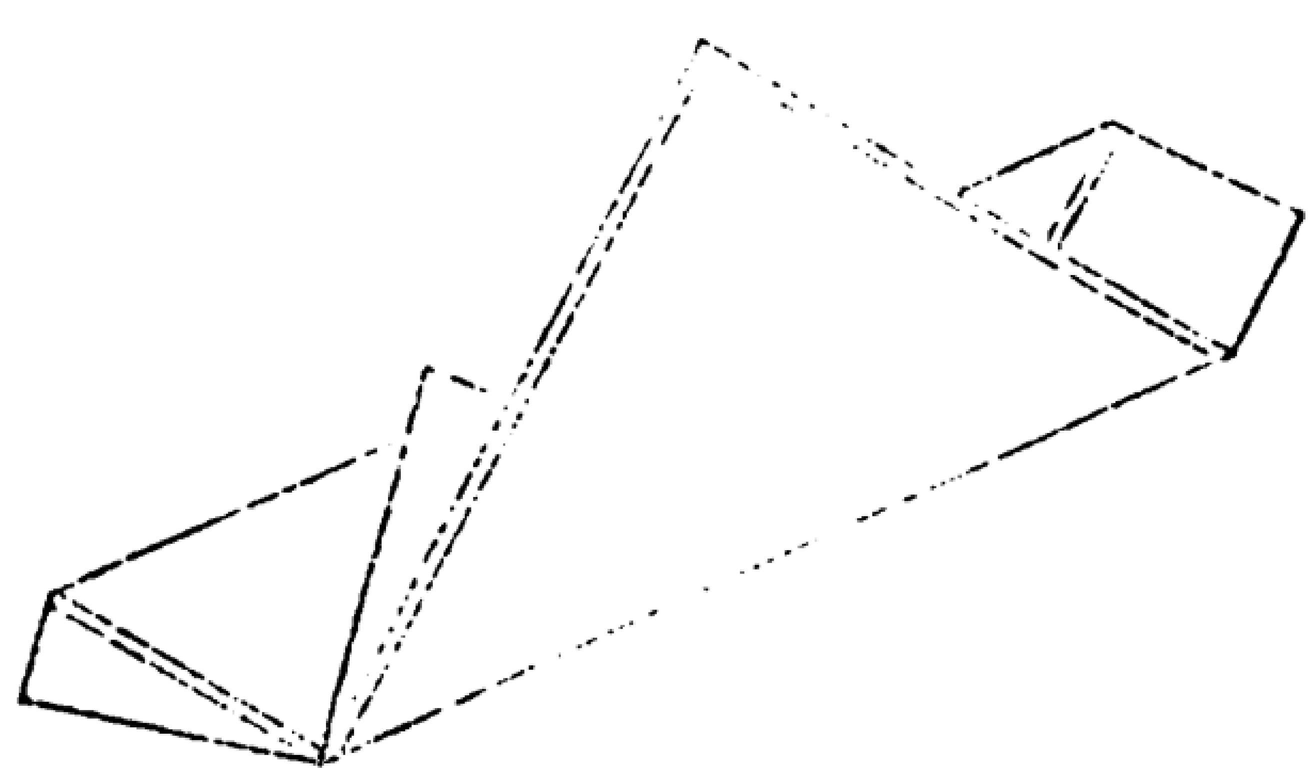
第四圖



形紙出來上りて後、墨をかわかしおき、今用うべき紙をたち板の上におき、表に形紙をあて〻紙取を定め、次に裏になすべき紙を、たち板にのせて、今の紙と合せて、眞中をそつと糊にて止めおき、四方に五厘ほどづ〻匂ひをとりてたちおとし、

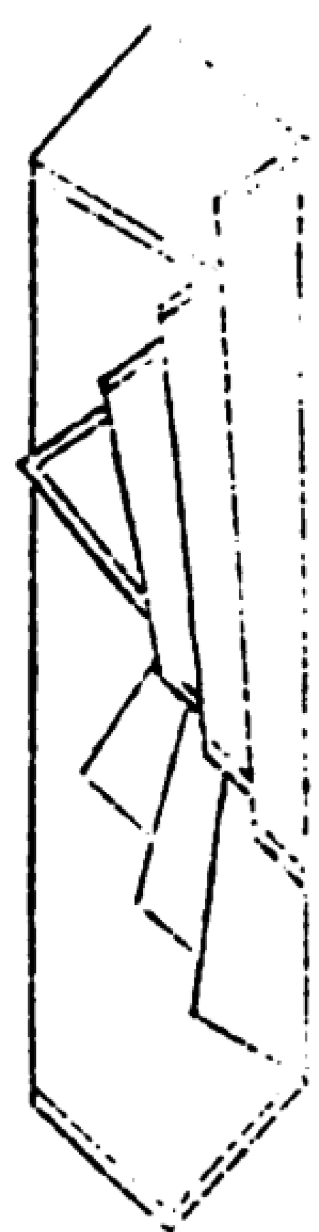
形紙を上よりあて、筋の上下上下へと、錐にて標をうちて、うらがへして、裏のかたより定木をあて、へらにて筋をつけて、篦と、左の手の指にてやは〳〵と折なしてつくるべし。

匂ひをとりて折りかけたる圖左の如し。



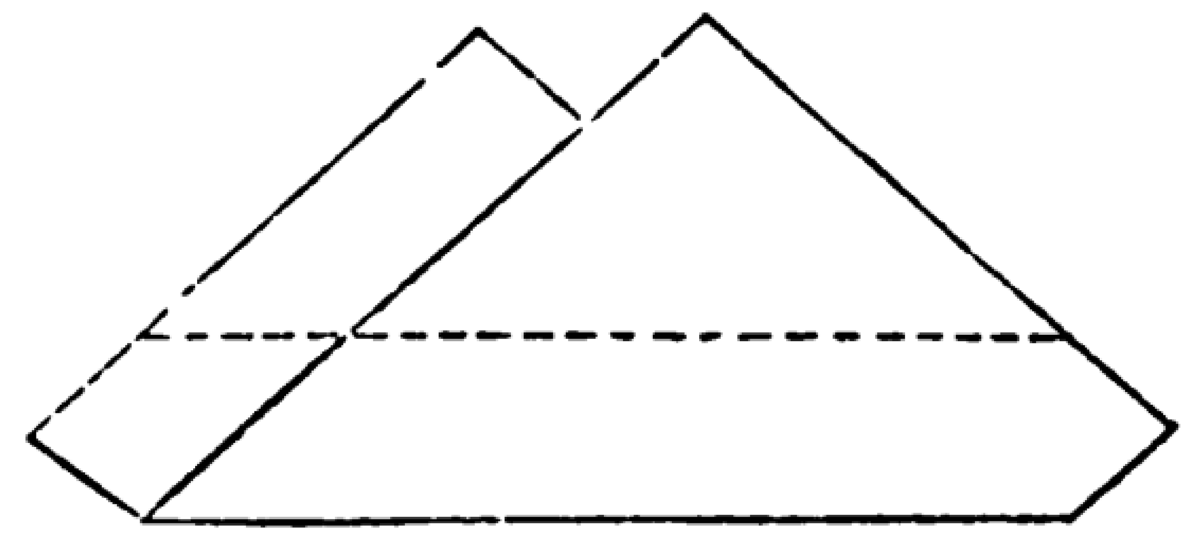
桑弓蓬矢包

こは年こしの祝に用うる包方なり。進物にもかく調へて用うるなり。

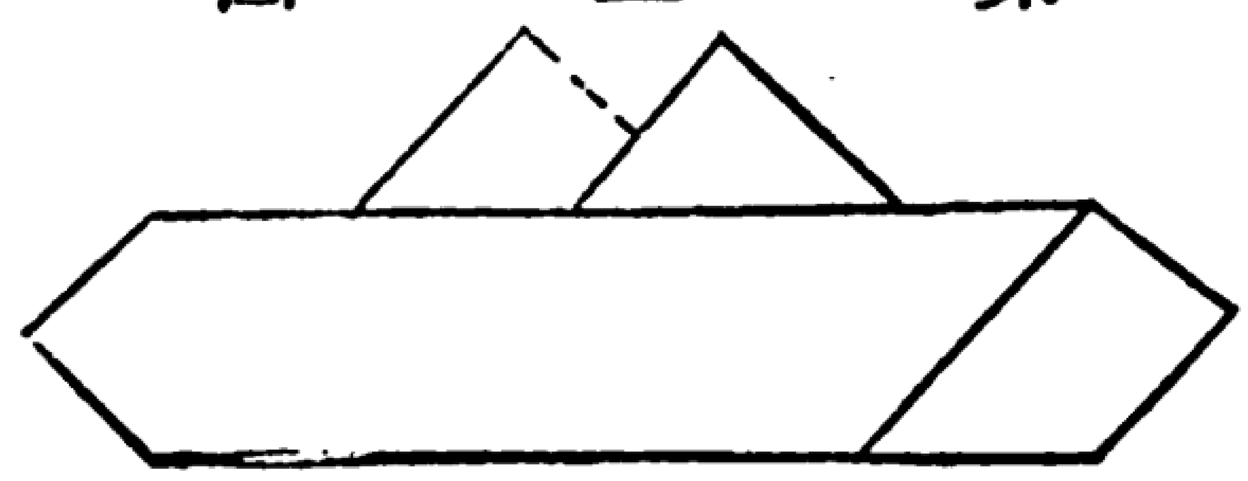


包方は前條の手順によりて考ふべし。紙とりも同じなれどはぶきてかゝげず。色紙を用うべし。

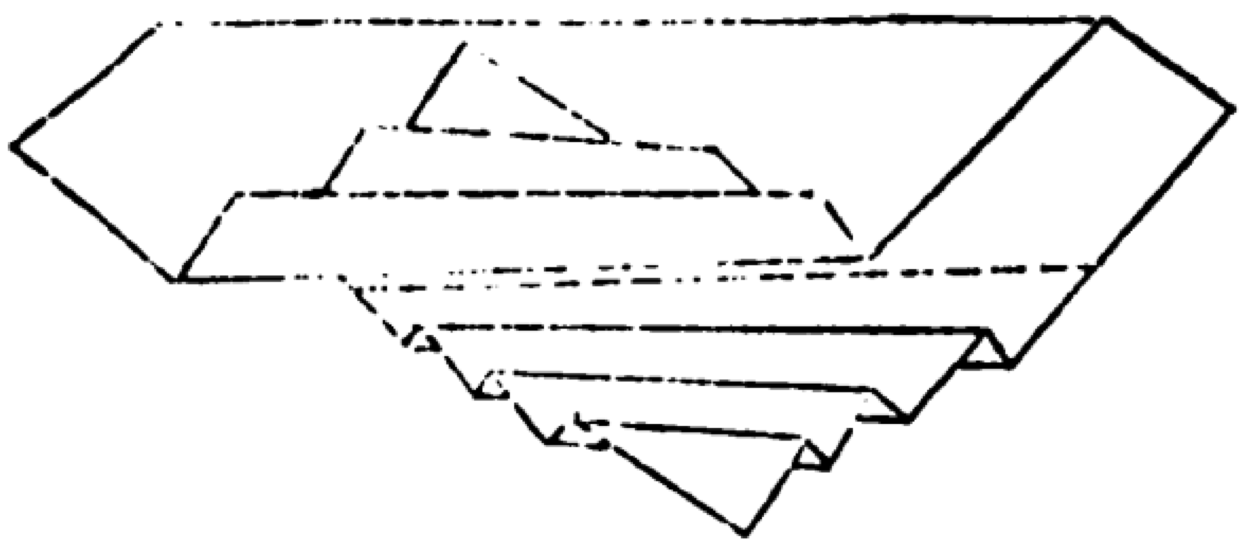
第一圖



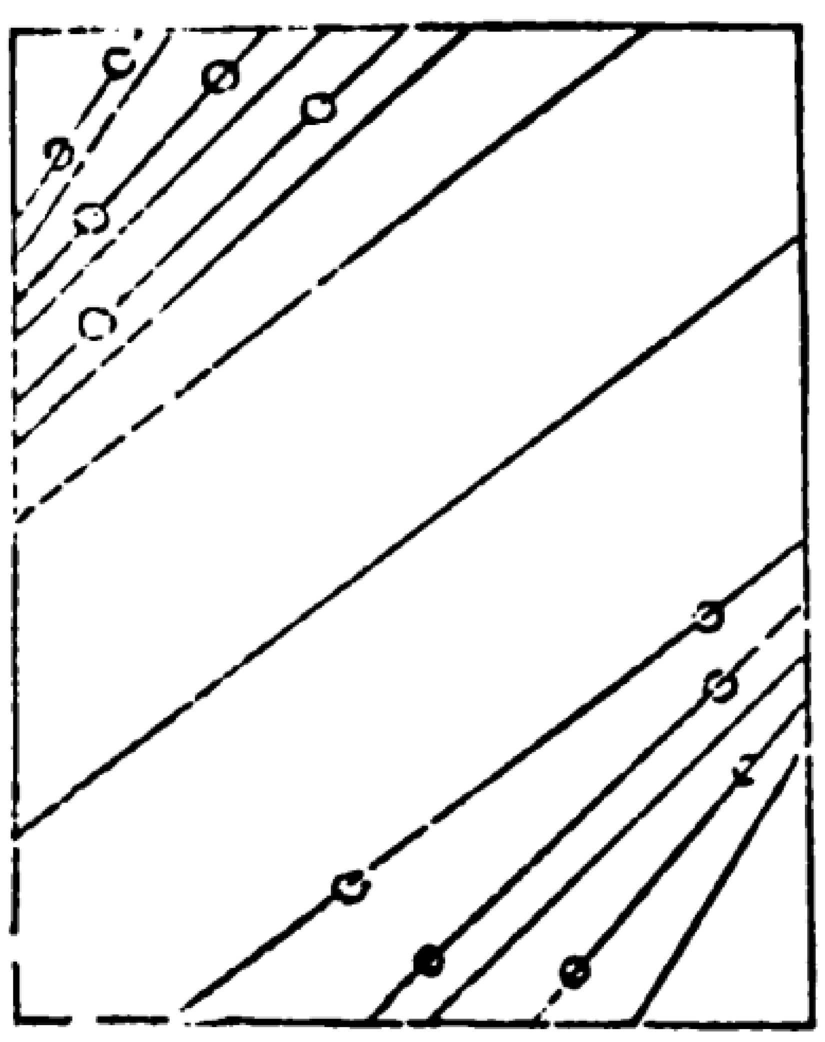
第二圖



第三圖

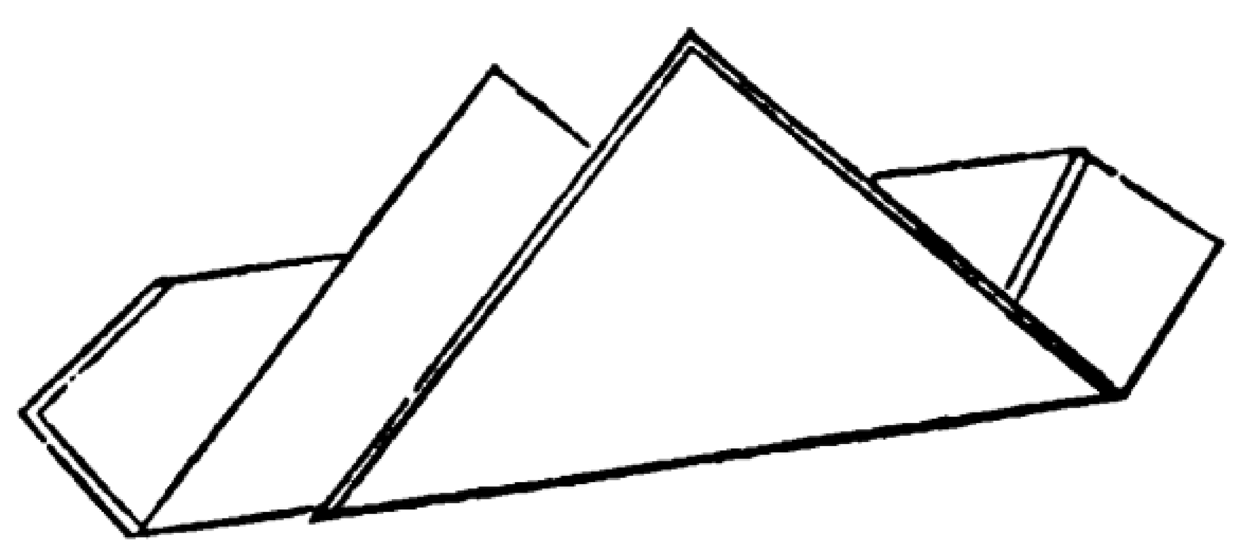


第四圖



包形

第一圖



茶の湯

茶禮初學

關　葦雄

次に亭主は、間鍋盃を客の數程盃臺に載せ、脇

取盃に据ゑて持出、勝手口を明け（但し此時より勝手口明置なり）上客の前に進み、臺共に上客に對し、御取廻しを願ふと云ふべし。上客は次の客へ一禮して、上の盃を一ッ取、臺を次客へ廻すべし。亭主は上客へ酌をなすべし、客は一應御銚子を此方へ借用すべくと云ふべし。先々と辭して酌を取べし。二客は次へ御先へと禮儀をなして盃を取、臺を又次へ廻す、亭主次客へ酌をなすこと上客のごとし。段々如此末座に至るべし。一順繼たらば、銚子は酒數奇か、末座へ預け置、通ひ盆を持て入べし、末座は盃臺を預り、便宜の場所に置べし。衆客酒を好む人は遠慮なく自酌して呑べし、又相客互に酌を取合も妨げなし、間鍋酒竭たらば末座の方へ廻し、亭主出て持入易き處に置べし。次に亭主は飯繼を盆に戴、蓋の上へ飯杓子を水に浸たる儘戴て持出、上客の前に進み、杓子を飯繼の中へ入、盆を差出して

飯の通ひをせん事を言べし。上客は謙遜して、御鉢を此方へ借用すべしと答ふ。左様ならば御自由にと飯繼を向へ振向て上客へ渡し、直に其通ひ盆にて、御汁を替ゆべしと盆を差出すべし。上客は次客へ會釋して汁椀を出すべし。上客ばかりは獨り別にすべし。（但し是は上客を尊むの敬禮なり）次に客方は、上客次客へ御先へと禮して、飯繼の蓋を取、次客へ廻し、二客三客と段々送り、末座に至り邪魔にならぬ處に置、飯繼廻り、飯掛終らば、此蓋を締むべし。（但し此飯繼に入たる飯は盛切を習とす、亭主方も其心して入置べし、先上客始飯の付方は、飯繼を左手の掌に戴、右手にて杓子を持、片端より、飯繼の中亂れざる樣法意して掛け廻すべし。普通は椀を持飯繼を下に置付る事なれ共、茶道にては反對なり。椀は折敷の上に有故、飯粒零しても疊に落ちず、見苦敷無き良法也、次に亭主は脇取盆を持出、二客

以下は汁椀を一時に載持入るべし。次に椀盛を、先上 客丈は一個別に、通ひ盆に載。持出て進むべし。(但し是も上 客を尊ての敬禮なり)直に入、脇取盆へ三人或は四人分一同に載持出、二客以下順次に進むべし、末座に至り飯繼明てあらで、此盆に載持入るべし。(但し此通ひ中精神の働を活潑にして、氣轉を能くし、間鍋等明き居らで、持入り、酒を入足し、又時宜に寄りて陶磁器の酒繼を出すも無 妨、又猪口も同樣と心得べし、次に汁の盛替を持出る。是も上客は別、其外は一同なり。次に飯繼の再進を出すべし。此時は、飯は澤山に入るべし。(但し此時飯繼幷に杓子能洗ひ淨め、飯粒付居らざる樣注意すべし。前の如く持出、上客へ進め置べし、上 客は又前の如く付廻すべし。二客以下も同斷(但し客方は此通ひの前後、間合見斗、向付の味、汁の加減、椀盛の鹽梅、宜敷御調理御上手、結構に藏へ、抔と 謹 で挨拶するを

茶禮の習とす。主方は何か一品差上度、實は色々心配を致候へ共本日は魚類も生憎拂底にて申譯無之、上り憎く御座るべし抔と云べし。主客互に世辭を言はよけれ共、餘り辨舌に任す時は、言葉多きは品すくなしと云俚諺もあれど、誠しやかに品行を謹むべし、其他の物語も俗談に不亘、夏は清 綠子規、秋は菊 花紅葉の咄、又は茶の咄に終るべし。席上寂寞ならざる樣すべし。是は主客茶道熟練の度合にて、次第になし得る事難にあらざるべし。偖又今一反汁を替ゆべし。(但し汁は一椀は是非替ゆるものなり、二椀目よりは隨意)次に燒物を出す、(但し是は尾鰭あるもの、或は切身、或は精 進物其時々の臨氣に任かすと雖、何れも鉢に盛、盆に載、青竹の箸を添る)持出 上客の前に進め、御取廻しを願と言ふべし、客 方は美事なる御燒物、御叮嚀にと挨拶すべし。此時亭主は間鍋、或は德利の空器あらで持下り、酒を足

すべし。飯繼も末座にわらた改め見て飲を足すべし。客方は何も彼も十分也、最早御世話に及ぜず、御亭主樣も御相伴可被降と言べし。其時亭主は然らば御免を蒙り、御相伴仕るべし、御用も候はゞ御呼可被下と云て勝手口を締切べし。(續く

女禮

千鳥掛膳出し樣

有住常子

これは、參らする人あまたの時に、膳を進する樣なり。まづ客の人數によりて、一行に出で、進むるに、入亂るゝ事なく、立歸る時にも、ついでよく入違ふ事なきを以て、千鳥掛の出し樣とはいふなり。

○客人十人左右に居たまふ時には、一行に出で參らする、配膳人、

一、三、五、七、九、の人は、左の客に据ゑ、

二、四、六、八、十、の人は、右の客に据うるなり。

さて、引さがる時は、

十九八七六五四三二一と下座の方より、立ちて一行になりて立かへるなり。

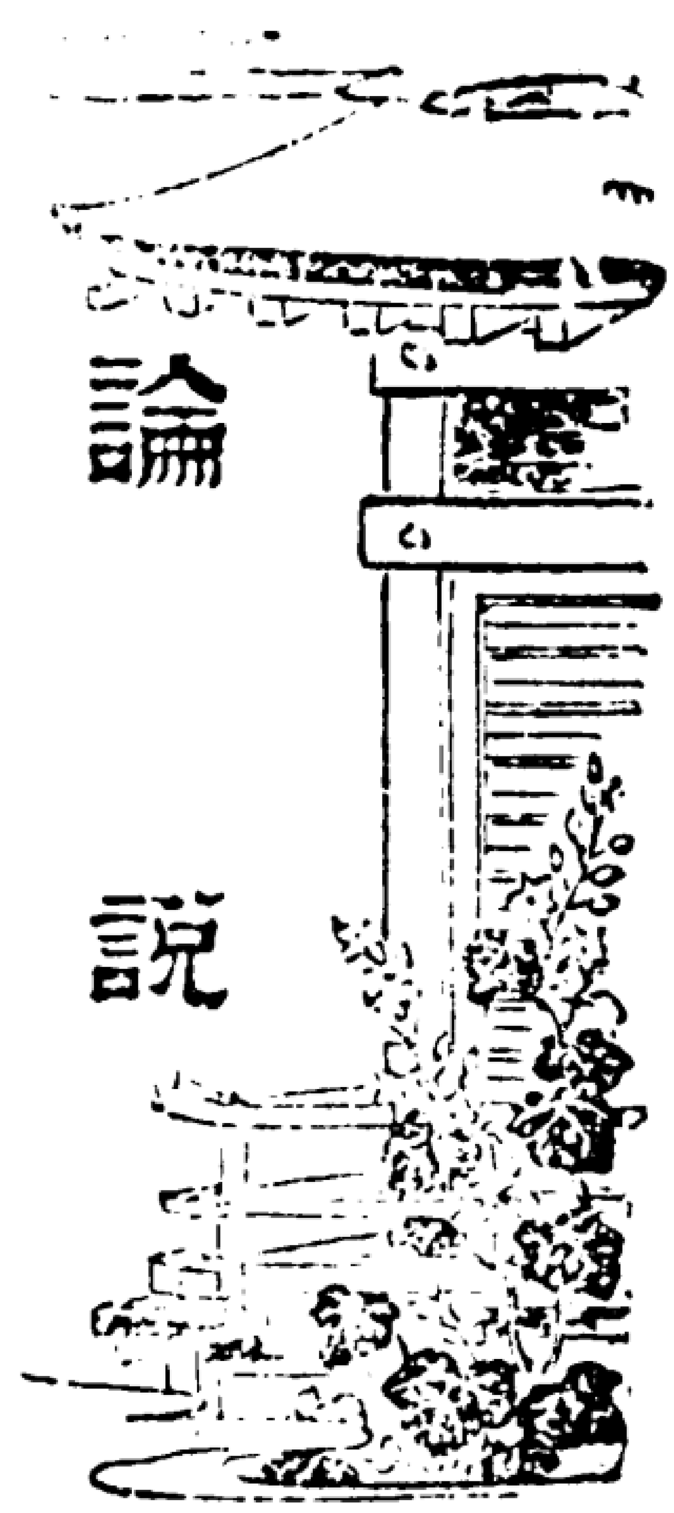
膳を持出で、一行にあゆみゆきて、一番の人立止りて、右の足を、左足のさきの方へ横につけて、左足をそろへながら、左の方へ向ひて、

このとき二三四五六七八九十の人々も左右にむきたつべし。

すゝみて、左右を半足ひきて、跪きて、右膝をすこし引て居り、左膝をもすこし引て居りながら膳を下におきて、左右の手にて押すゝめて參らすべし。

このとき、二番の人は、左足を右足の爪先につけて、右に向ひたちて、すゝみて參らすべし。

三は左、四は右、五は左、六は右、七は左、八は右、九は左、十は右と同時に進むべし。それぞれはやきあらんは見ぐるしききはみなれど、能々心すべき事な



割烹と禮節と（七）

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

石井泰次郎

有住齊氏（二）

類聚婚禮式を評す

有住氏が著書中に於て既に世に刊行せるもの、曰く女禮式と婚禮法、曰く類聚婚禮式。女禮式と婚禮法は一小冊子にして其所說を伺ふに足らず、而して能く其意見を吐露し、博覽强記以て禮節の爲に身力を盡されたる程度の如何を知らるゝは、即此類聚婚禮式なるべし。

淺學無識の身を以て、敢て今此書の批評を試みんと欲せるは、未だ此書を以て、此類聚婚禮式の題目の下に、論者をして拜讀せしむるの價値あらざるを以てなり。如斯博覽强記を以て編輯せられたる此書は、論者をして此著述の下に屈伏せしむる勢力あらざるを

以てなり。然れども、茲には其價値と勢力と二を論ぜんとするにあらず。只此著述の、齊氏が所論を滿足せしめたる著述に非ざるよしを聊か論ぜんと欲するなり。齊氏が禮節の意見は、此書に依て能く知る事を得ざる理由を陳述せんと欲するなり。

類聚婚禮式の組織

序

我國の萬の禮は天津國の御儀をならへとは天津神のたきて給ひし事なり、されば朝廷の御式はいふもさらなり、人民の年中の行事にいたるまで、神ながらの手ぶりしるくて、海の外の國とはことなる事多かり、これ神の榮の國なるしるしなり、然るに時世のうつりゆくまに〳〵外つ國のならはしもかたはしまじりて、いとまぎらはしくなりこしを、かゝるめでたき御代にたゞさてあらめやと、有住ぬしおもひおこして、まづ撰びとゝのへられたるはこの婚禮式なり、ふるきあとにもとづき、世のならはしをもとりまじへて、そのときこと皆より處あれば、此を正しき式とやいふべき、さてこのわざはおのづからおこなはれしからに、世にこれはといふばかりの書もなく、國々處々にて　その式もさま〴〵かはれれば、この禮をとり行ふものもいと困じたるを、今この書あらはれいでなば、いかにたよりよからまし、そも〳〵婚は人の大禮なれば、まづこれをただして、つぎ〳〵その他にもおよぼさんといふ、さてこそ神ながらの手ぶりもいよ〳〵しるくて、妹背の中らひも正しくむつまやかになりまさらめ、これ大御代の光をそふるわけなれば、いとうれしくてことほぎがてらかく一言をそふるになむ。

明治二十五年四月廿五日　　久米幹文

叙

めをまくはひするは、人の道たるみなもとなれば、そが禮を正しうすることそよけれ、さればいづれの國に於ても、斯の道のみはよく行はれて、それ〴〵の禮あり、まして我が國は神代のいにしへより、禮義正しとたゞへられつれば、此の事に就ては、あだしくにのかゞみともなる定めなかるべからず、さるに言あげせぬくにぶりとて、まことには種々の儀式の行はるれど、ふみにものして世に公けにせる者は少なく、あるは秘事口傳など唱へ、たやすくは人に示さゞるもありて、之を集めて大成したる者なきこそ、いとも憾みなれ。然るに東陽堂のあるじ、一書を余に示してそが校訂を委ねらる、是此婚禮式にて、有住うしのものせられし者なり、披き見るに、凡そ婚禮にかゝはれる事は、遍く其の類を以て聚められ、其の意見をも記されたれば、ほと〳〵大成ともいはまし、又旨とせられし所は、もはら御國風を傳ふるに在れば、余は喜びて之を諾ひ、そゞろに朱筆を加へ、うしに遇ふて謀りしに、うしは一々に善しといひつゝ從はれたりけり、余はうしの心の寛かなる

に感てゝ、飽まで力を盡さむと思ひ、之にかゝりつれど、身は公けにつかふまつれるのみか、風俗畫報繪畫叢誌の編輯監督なども爲し、又ふみまなび教ふるさて、夜は行くべき所ありて心に任せず。そがうへ印刷を急ぎたれば、なほ校訂のたらはぬところ多かんめれば、みむ人正し給ひれかし、しかはあれど、此書は、古今の婚禮式を記つるものなれば、世の人を資くること尠からざるべし、有住うしのいさなしは、余がこゝにのべずもあらむ、よてわが此書にあづかれるゆゑよしなば、卷のはじめにかきつくるものなり。

明治のはたとせあまり、八とせといふとしのしはすの月吳竹の四谷に住ゐせる山下重民しるす

その引用書目

日本書紀　日本後紀　續日本後紀　續日本紀　古事記
古事記傳　畧解古事記　釋日本紀　古語拾遺　文德實錄
三代實錄　類聚三代格　類聚國史　扶桑畧記　大鏡
増鏡　水鏡　世繼物語　日本靈異記　新猿樂記
源氏物語　續世繼物語　登里迦邊波屋　竹取物語　大和物語
鳴門中將物語　伊勢物語　枕の草子　宇津保物語　徒然草
住吉物語　落久保物語　宇治拾遺物語　西行物語　古今著聞集
源平盛衰記　平家物語　保元物語　平治物語　曾我物語
太平記　紫式部日記　十六夜日記　辨內侍日記　蜻蛉日記
奧乃細道　後松日記　土佐日記　乳母双紙　江談抄
遊仙窟　大日本史　日本逸史　拾介抄　東鑑
日中行事　內裡式　令義解　儀式　江家次第
北山抄　西宮記　公事根源　名目抄　建曆御記
侍中群要　法曹至要抄　延喜式　元文服忌令　代始和抄
令集解　律書殘闕　寳在類書　恒例年中行事　年中定例記
雲圖抄　和事始　歲時記　百寮訓要抄　職原抄
神皇正統記　年中式禮　貞和御餝記　正中御餝記　古老口實傳

兩大神宮儀式帳
サキ竹の辨
拾遺集
詞花集
建禮門院右京大夫家集
和名抄
雅言集覽
詞の八衢
岡屋關白記
連阿口傳抄
次將裝束抄
裝束集成
逍遙院裝束抄
雅亮裝束抄
宮人裝束圖
輿車圖
源語圖我
筆の靈
燕衣圖式
婚禮法式
祝物飾圖式
上代禮式
八雲口傳書

大神宮諸雜事記
和漢三才圖繪
古今六帖
千載集
職人盡歌合
雅語譯解
和訓栞
八雲御抄
百練抄
裝束雜事記
雁衣抄
法中裝束抄
餝抄
世俗淺深祕抄
將軍家御裝束記
懸物圖鏡
武家裝束着用圖
年中行事祕抄
古圖抄
式三獻餘簽圖
婚禮三冊書
禮格傳授
故實口傳

神鳳抄
八十翁昔語
撰集抄
新古今集
萬葉集畧解
古言梯
康熙字典
古折烏帽圖
裝束要領抄
物具裝束抄
布衣記
曇花院裝束抄
桃華蘂葉
山中口傳
東大寺御寶物圖
徵古圖錄
御禮服圖
北部叢草圖
裝束圖式
伊勢流包結記
推嗽記
條々聞書
銚子飾之卷

祝詞考
古今集
後拾遺集
諸家集
賴政家集
下學集
玉篇
武雜記
新野問答
服裝管見
束帶色目抄
服色漫語
故實抄
後深心院關日記
法隆寺御寶物圖
豐公遺法圖錄
紫式部日記畫卷
載禮[illegible]圖
南流微鶉當
元服法式
禮節打聽
武田流禮書
婚儀式

大敵三學辨
後撰集
金葉集
年中行事歌合
國風藻
新撰字鏡
詞の玉の緒
道照愚草
唯心院裝束抄
三條裝束抄
女官飾抄
松蔭拾葉
裝束拾要抄
織久圖會
調度圖繪
類聚雜要抄
冠帽圖會
集古十種
調度圖
產所法式
祝の書
草露傳
調度傳授

唐錦	女のしつけ	禮式書	諸札禮	進退記
女禮集	婚禮假粧道具	眉作記	化粧考	膳部圖
婚入童女記	婚記	女粧考	玉勝間	久保之取蛇尾
桂林漫錄	嘉良問答	名物考	貞丈雜記	嵌萌堂雜錄
北邊隨筆	橘庵漫筆	四季草	家屋雜考	錦所談
蘇明漫筆	拾砂集	愚管抄	大三問答	山彥册子
鐘の響	冠學考	春湊浪話	擁書漫筆	片朋
俗說辨	用捨箱	提醒紀談	三養雜記	寸錦雜綴
玉石雜誌	綠拾雜記	南畝莠言	年山記聞	寛政系譜
伊勢家系圖	小笠原家系圖	二見の浦	戸婚律	貞永式目
式目追加	長曾我部百箇條	慶長武家諸法度	鎌倉年中行事	室町殿年中行事
女房故實	武家女房裝束抄	軺業記	山槐記	後永尾院年中行事
左經記	內院年中御禮式	室町記	禁裡女房內々記	禮節要抄
歷史通覽	女官裝束著用圖	婚遊笑覽	留久米藩內記錄	胸之守傳書
天兒犬張子傳記	婚禮色直獻立傳記	嫁入道具飾傳記	婚入次第口傳	古法婚禮行列傳記
嫁入行列(婚禮)の傳記	罟鋼沿經傳記	そのこの膳傳記	鴛鴦衾記	嫁入受取渡口傳
新撰立禮式	泰西禮法	雜學集	三議一統	吉良家の禮
今川家禮書	四條流包丁書	大草流料理書	曾我流書札の書	

その所載目錄

卷の一　**結納の部**　一婚姻　一命を受て結婚し聘物を贈りて固とする古例　一媒人仲人の事　一氏姓を重する國法　一媒人の心得方　一結約後鯨尺を贈る事　一婚家の年齡　一結納ゆひいれたのみの事　一七種五種の祝品仕立方　一祝物仕立方給圖　一唐錦の評

卷の二　**里出の部**　一琴　一三棚　一三棚小道具　一荷　一貝桶　一輿　一天兒　一胸の守　一南天包　一鴛鴦衾　一上刺袋　一衣架　一女の髮の製　一黒齒　一笄　一裲衣　一褂　一幸菱　一嫁衣服　一大道具　一脂燭　一桂女裝束　一門火　一宿直物　一別れ酌　一宙出訓戒

女德のしをり（十六）

三輪田眞佐子

第六怠惰　凡そ惡を行ふことのみを以て、道德に戻るものと限るべからず。我が本分を果さず、我が責任を盡さゞるも、亦道德を全うせざるものと言ふべし。思ふに、人は理性を有し、良心を懷くを以て、我が本分、及び責任のあるところを知らざるものはあらじ。然るに、これ等を實踐せざるため、不德の罪を得る所以のものは何ゆゑなるか、そは怠惰心に誘はれて、本分を果さむや、責任を盡さましと思ふまに〳〵、時は流水の如く去りて、已に業に機會を失ひ、唯我にのこるものは後悔ならんかし。女四書の學作章に、莫學懶婦。積小痴慵。不貪女務。不計春冬。針線組率。爲人所攻。と戒めけるがごとく、怠惰の結果は忽ち女子の家政に及ぶべけれども、その他總ての女德をも害すること大ならんを以て、女子たるものは、朝な夕な心して、この惡性

を脱却せざるべからず。見よ、人は約諾を守るぞ道德の一則となすべきに、怠惰の心あるものは、往々これを守らざる例あるを、亦怠惰に馴れし女子は、親に孝養する道も、子を養育する務も、あるは家事を整理する任さへ全うすること能はざるべし。元來人は生れながら德性を具ふとはいへ、日夜これを琢磨せざれど至善の域に進步せんこと難し。されど、怠惰は進步の大敵なるを以て、この惡性を根絶せざるべからず。蓋し怠惰は、多く平素の慣習に由りて生ずるめれど、女子は幼少のころより、爲すべき事、行ふべき業は、寸毫の猶豫なく、即刻即時に實踐する慣習を養ふべし。伴蒿蹊の國詩に『よしあしにうつる習をおもふにもあやなきものはこゝろなりけり』とあり。されど、飽食暖衣逸居する女子にして、猶怠惰の慣習を避けんとせんも、岌々乎として危きかな。

第七惑想　熊澤了介は、心思の外に向ひて人前を愼むのみ、或は頑空、或は安慮するものは小人となしけり。若し深く道を信じて疑はず、固く義を守りて動かざる君子ならんには、その心必ず磊落快活にして、露ばかりも繫累する處なかるべし。語に曰く、小人閑居して不善をなすとは、その心未だ强健ならざるを以て、徒然なるまゝ、あるは疑惑、あるは忘想を生じて、知らず識らず不善に陷る意ならんかし。惑想の源は心の薄弱に基くものなり。心の薄弱なるは道義を修養せざるによるは明なれ

ども、亦知識の乏しきがため、萬事に疑惑の念を生じ、あるは忘想の暗に迷ふならんか、元來女子に最も肝要の德なる貞操の如きは、秋毫だに惑想あらんか、そを全うすることを能はざるべし。

むかし山城の國に住みける者、その娘に夫を迎へけるが、やがて病にて失せにけり。されば、兩親も既に老いけるを以て、更に夫を迎へしめんと勸めければ、娘いはく、この家に巣をつくりて子を生める燕あり、雄燕をとりて殺して、雌燕にしるしをつけて放ち給へ、さて明けん年、その雌燕はかの雄燕を具して來たらんときに、これを見てわれに男をあはせ給へ、畜生すら夫を失ひつればはかの夫をまうくることなし。況んや人は畜生よりも心あるべしと。由りて雄燕をころし、雌燕に赤き絲を付けて放ちけるに、明る年の春、その雌燕ははかの雄燕に具せずして獨り來りけり。これを見て娘は『かぞいろは哀れとも見よ燕すらふたりは人に契らぬものを』とぞいひける。實に人生の最大事なる進路を決するときに際して、若し心に一點の惑想だに浮かばんか、逡巡躊躇して志を誤るに至るべし。思ふに、この娘惑想なかりけんを以てこそ、かくめでたき決心ともなりしか。

その他惑想眩溺する女子は、樂しき家庭を作ることを能はざるは更なり、他人との交際も

濃やかならざるべし。わきて心の平和を有ち、幸福なる生活を送る能はざることあはれなれ。

女子のつとめ

前田美子

ちかき比、女の徳むげにいやしうなりもてゆきて、自尊の心のみ長じぬることそ歎かはしき限りなれ。殊に征清のことありしよりこのかた、尚武の風やう〳〵盛んになりゆきて、優に女らしきをぞ、あなどり蔑しむ傾きあることそうたてきや。容姿骨格の上よりみるも、性質智能の上よりいふも、生れながらに男女のたがひはあるものを、などか行爲所業の異らざるべき。さるを、男女同權とかや、西の國の風俗を見ならひて、愼ましげもなうあげつらへるなど、げに生物知りとやいはまし。古へより、男子は太陽のごとく、女子は太陰に似たりとかや。かまへて忘るまじきことになむ。おのれ未だ齡少なく學あさければ、物の理など知るべうもあらねど、尚、女のさかしらぶりたるかたはらいたしとおぼゆるふしなきにしもあらじ。日に月にすゝみゆく世のならひとして、女の位置の高くなるにつけて、怠るまじきは學びの道になむ。されど其道はいづれにかよるべき、あはれ、外國のよきをとりて、我國のたらざるをおぎなふの外やなからむ。さはいへ、今は

かしこきあたりさへ、西洋のならはしをとり用ひさせ給へることにしあれど、强ちそをいやしむは、なかなかに世にそむきたるしれ者とうとまれなむ。必しもかたよらで、よきにたらひあしきをすてゝ、只ひとすぢに女の道をふみわけて、家庭教育の擔任者となりて能く家を治め、夫をして内顧の患なからしむるこそ肝要ならめ。わきて愼しむべきは、みだりに移りゆく世の風潮にのみ走り、あるは、わいためもなう外國のならはしになづむことになむ。あはれ、優美貞淑の徳を修め、長しへに神代のまゝの良習をのこさむことこそあらまほしきわざなれ。



史談

兵衛佐道清の妻

鹽井ふく子

世話にも、姑と持佛堂とはれき所なしなど、敬するにや、遠ざくるにや、勿体なき諺を習ひとして、兎角姑をむづかしきものにかしづく嫁の君の多き中に、之はいみじう姑を思ひ、れもはれたる、よにも有りがたき嫁、そのかみ陸の奥にすみける兵衛佐道清と云へる人の妻にこそはありけれ。みめより心ざま、さながら玉の如くうるはしく、夫に仕へてたゞ貞、姑にかしづきてたゞ孝、行ひつゆかけし處も見ねざりけるが、老少不定の世の習ひ、天はやくも夫を失ひけり。妻がなげきは云はむ方なし、みちのくのあだちの眞弓、引きか

へせど、もとより歸り來べき人にもあらず、詮かた涙にかきくれて日を經るほどに、未だ年も若う、色香もうつろはぬを、早くひとり住ませむも悲しとて、子に迷ふ妻女が父母は、取り返してこと方へよめらせんと云ふを、妻はうけがはず、妾かつて傳へきゝ侍るに、貞女は兩夫にまみゑずとかや、今、身、不幸にして夫にはなれ侍りたりとて、又よの人にとつがん事、軒のつばめに聞ゑ侍るも耻かし、かぞいろの思召、御なさけ、嬉しさはかぞへつくすべくも侍らず、たゞこの上は妾をまことにし給へとて、石ならぬ心、又まろばす能はず、父も母も其のまことに服して、遂に其ことと云ひ止みたり。妻女はそれより紡績をつねの業として、晝夜いそしみ勵み、つゆ足を我門より外へふみ出さず、夫なき後は偏に姑を夫とし、また我身を夫ともなし、先きだちし夫が不孝身ひとつに報いんものとて、旦夕こゝろをくだき、春のさわらび、秋のきの子、たゞもゑ出るまゝ、をかしきさまにすゝめ供して下くるしき色つゆ見せざりけり。さるに、ある時、姑の足に腫物出來て、いたむこと限なく、すでに玉の緒もあやふく見ゑけるに、嫁はいと悲しみ、心を碎きて介抱をなし、さま〴〵の療治を乞ひけれど、効見ゑぬに、いたく歎き、已が身にかへてもと神に祈り、醫師にも心の限りたのみけるに、醫師申すやう、このうみを人の口してすひとり、その跡に膏藥をつけなど愈ゑなむと云ふに、嫁いたくよろこび、さはいと容易きことなり、我が命、此のうみをすひて失ふとも、姑の病だに愈ゑなむ、これこそうれしかるべけれとて飛び立ちよろこび、いさみて姑が腫物のうみを悉くすひつくし、さてかうやくをつけゝれど、忽ちにはれひき、いたみさり、日ならず平癒したりけるは、かの糞をなめて父が病をこゝろみし南齋の瘦獸婁、また唐土の晄通が文帝の癰を吸ひけるよりも、はるかにまさりて覺ゑ侍る。されど、姑も此の嫁を思ふ、慈母をしたふ如く、唐土の孫夫人が、嫁に抱かれて乳を吸ひけるもかくやと思ふばかりなり

けるとぞ。

布幾女

山本正周

肥前國長崎磨屋街に住める某の妻布幾といへるは、もと天草島の生れなりしが、家貧しきより、長崎に出で丶、或る家の婢となり居しを、後に縁ありて某に嫁ぎしなり。布幾女天資柔順にして克く舅姑に仕へ、夫に事へて又貞實なりしに、引違へて夫は兎角身持正しからず、果は其の地にも身を置きかね、或日何處ともなく出行きしまゝ又歸り來ず。迹に殘されし布幾女は、一時途方にかきくれたれども、赤心を取り直し、今は唯舅姑を安うし奉らんのみとて、其家業なる香塵を製することに心をこめ、晝は出でゝ、檣柑の皮を買ひあつめ、夜は之を搗きて粉末に製し上ぐれど、舅は之を荷擔ひて市に賣り、以て糊口の資となせり。かくて又家にはいさゝかの田圃ありけれども、舅ははや年老いて、耕耘の勞に耐へざれど、布幾女は家業の片手に、自ら耒耜を執り、肥料等をも荷ひ行きて之を耕し、黍、麥など作りて糧食となせり。郷里の親戚等、布幾女がこのありさまを聞きて、離縁して歸るべきよし勸めしかど、布幾女は、妾もし歸りなば舅姑は凍餒したまはんといひて遂にきかず。されど、此の事官に聞え、米拾苞銀十枚を賜ひて其の孝貞を賞したへりとなん。



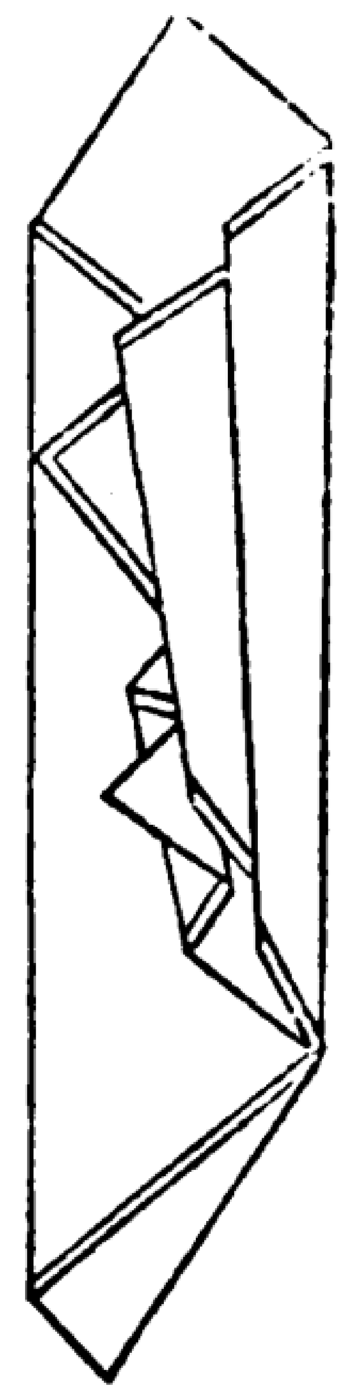
包の記

有住齊教授

門人　鎌なみ子筆記

岩田帶包

これは懐妊五ヶ月の時の帶の包かたな

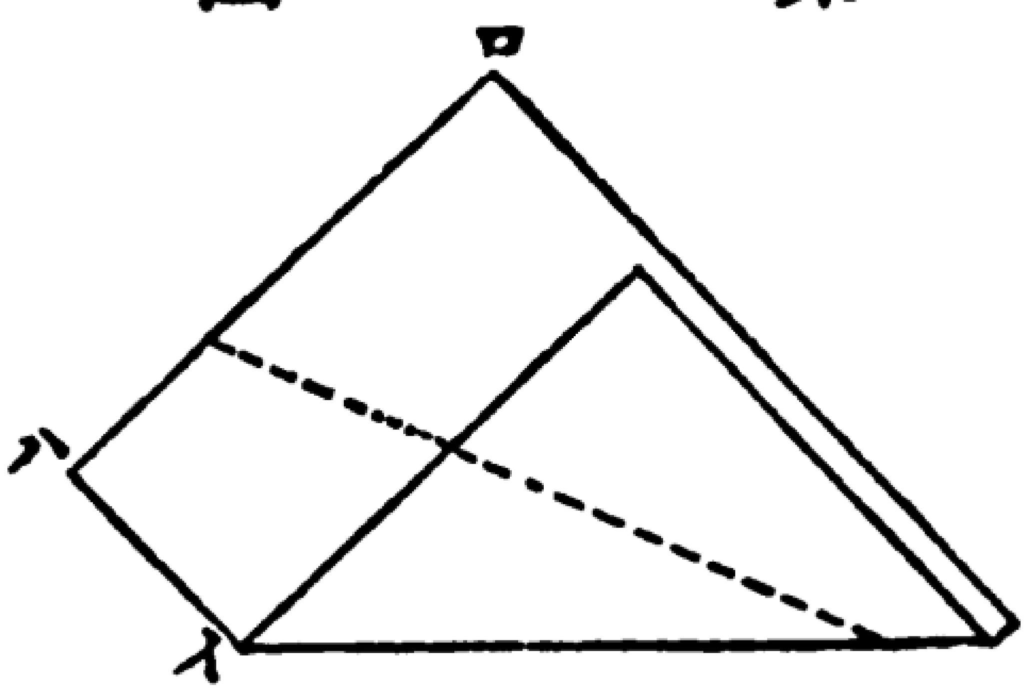


り。ゆひはだ帶の包なり。帶つかはす方よりの包樣なり。

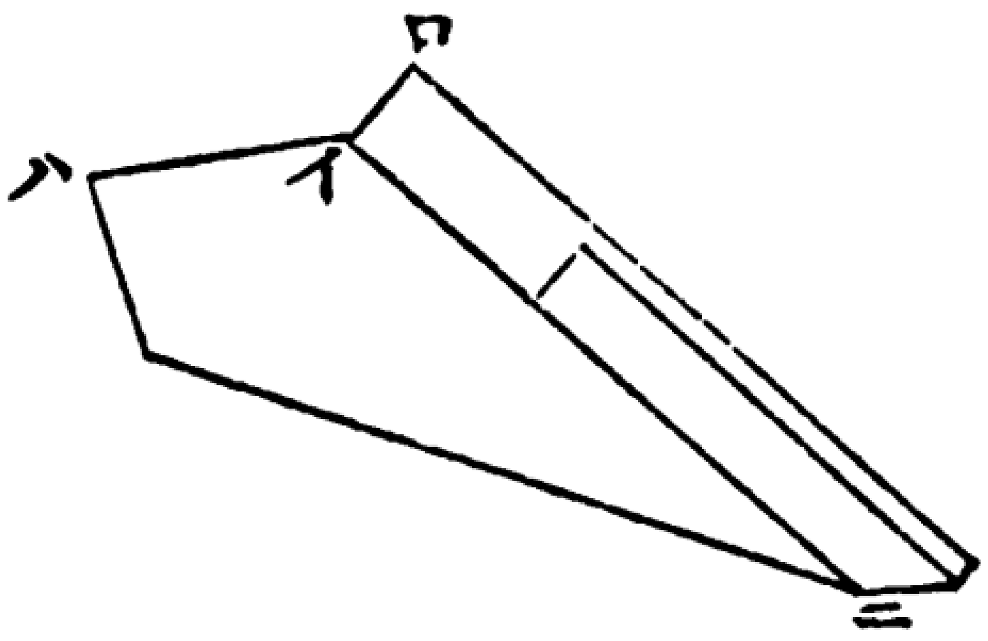
紙取は裏曲の法によりて取ること左圖の如し。先づ、奉書紙、其他何にても、第一圖の如く下端の一方を折り、是と同時に又其點線にて示せる通りに折りて、第二圖の如く「イ」點を「ロ」「ハ」の線中の或一所に合せ、斜めにならぬ樣、「イ」と「ニ」とを見合せて折り、さて其余り、即ち「イ」「ニ」の線より外部を斷ち落せば折形の紙出來上るなり。

（裏曲の圖）

第一圖



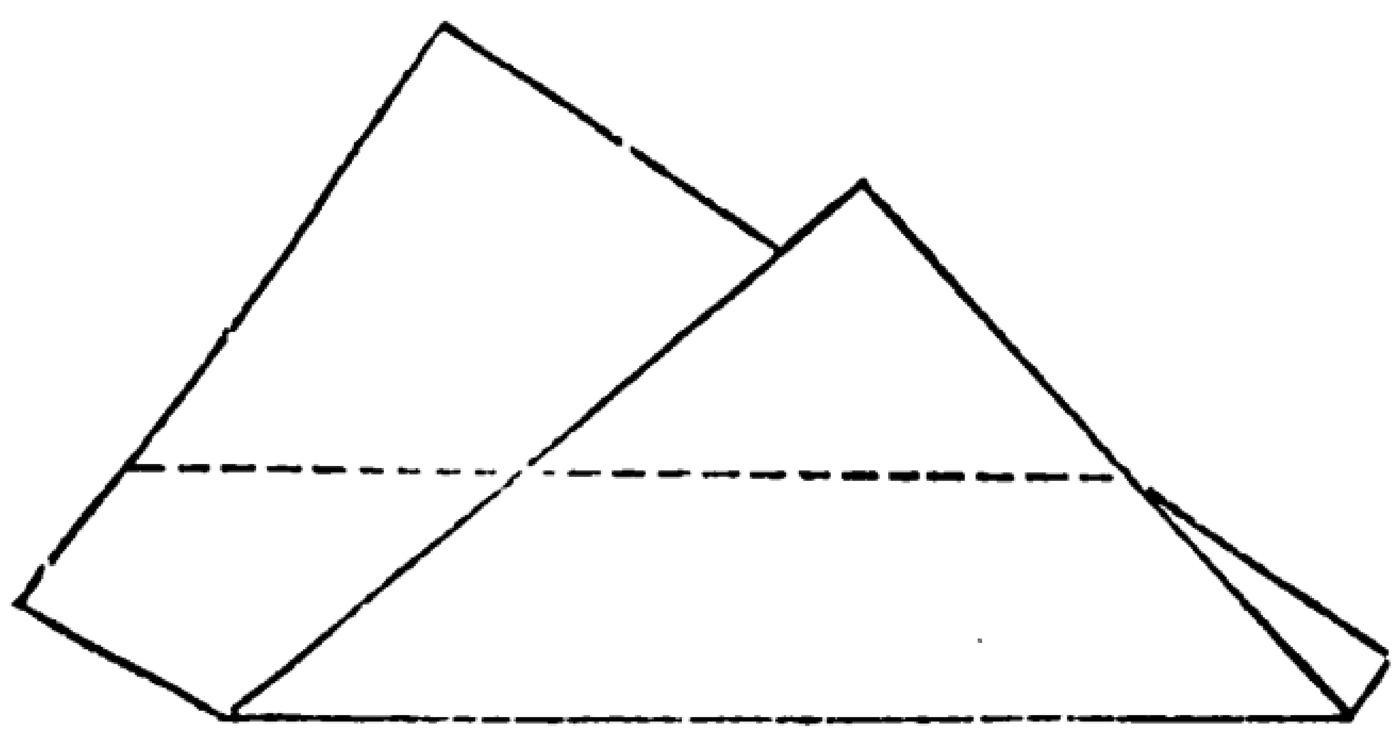
第二圖



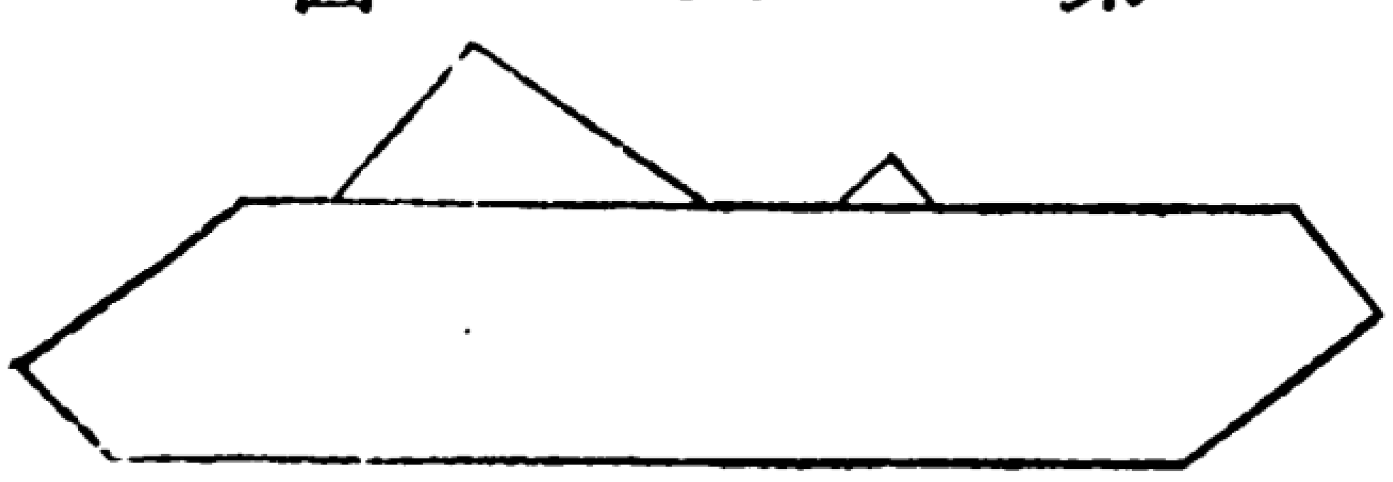
右の如く紙取をなしたる紙を以て次の如く形紙を折るべし。

さて、左に示せる第一圖の如く筋違に折りて、又其點線にて假に示せる程を手かげんにて折り第二圖の如くすべし。次に此の二圖を裏反して第三圖の如く折り、斯く折りなしたるを、開かざる前に、墨にて折目〳〵を、表のは表より、裏のは裏より線を引き、裏の線を表より見易からしめんがために、表の方へと錐にて標をうち出して、表の方に丸標を錐の穴の遶に付置べし。

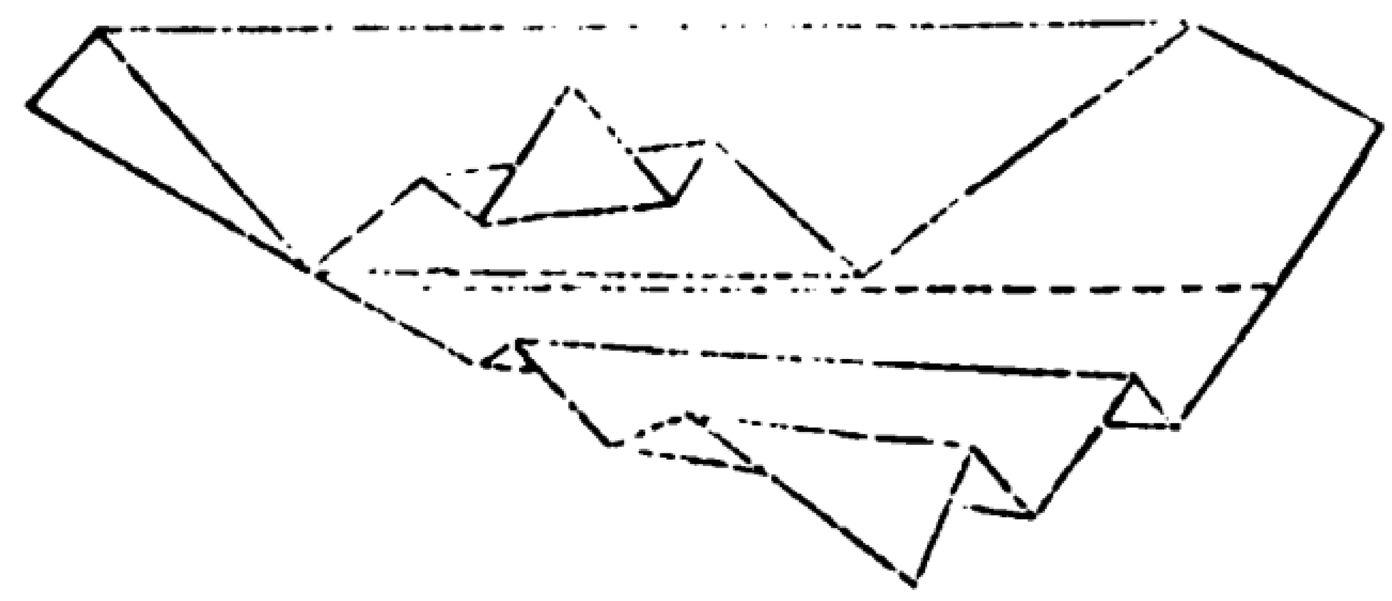
第一圖



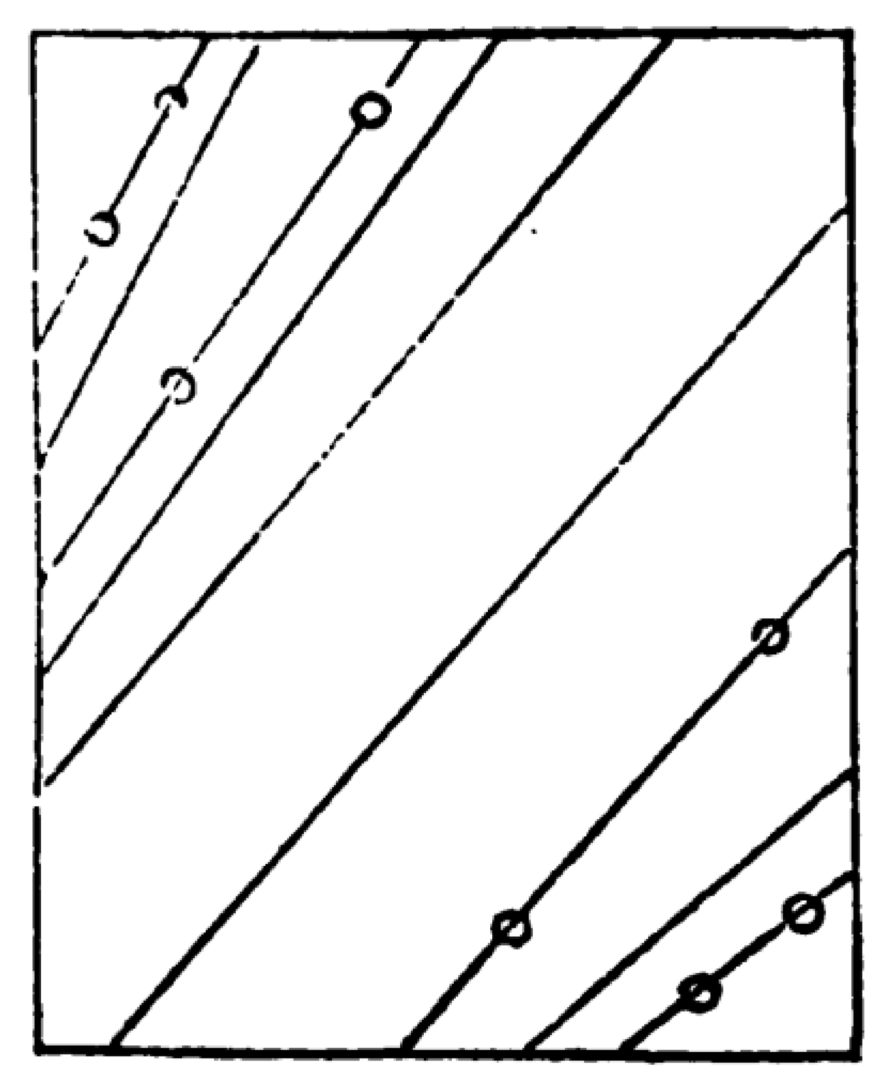
第二圖



第三圖



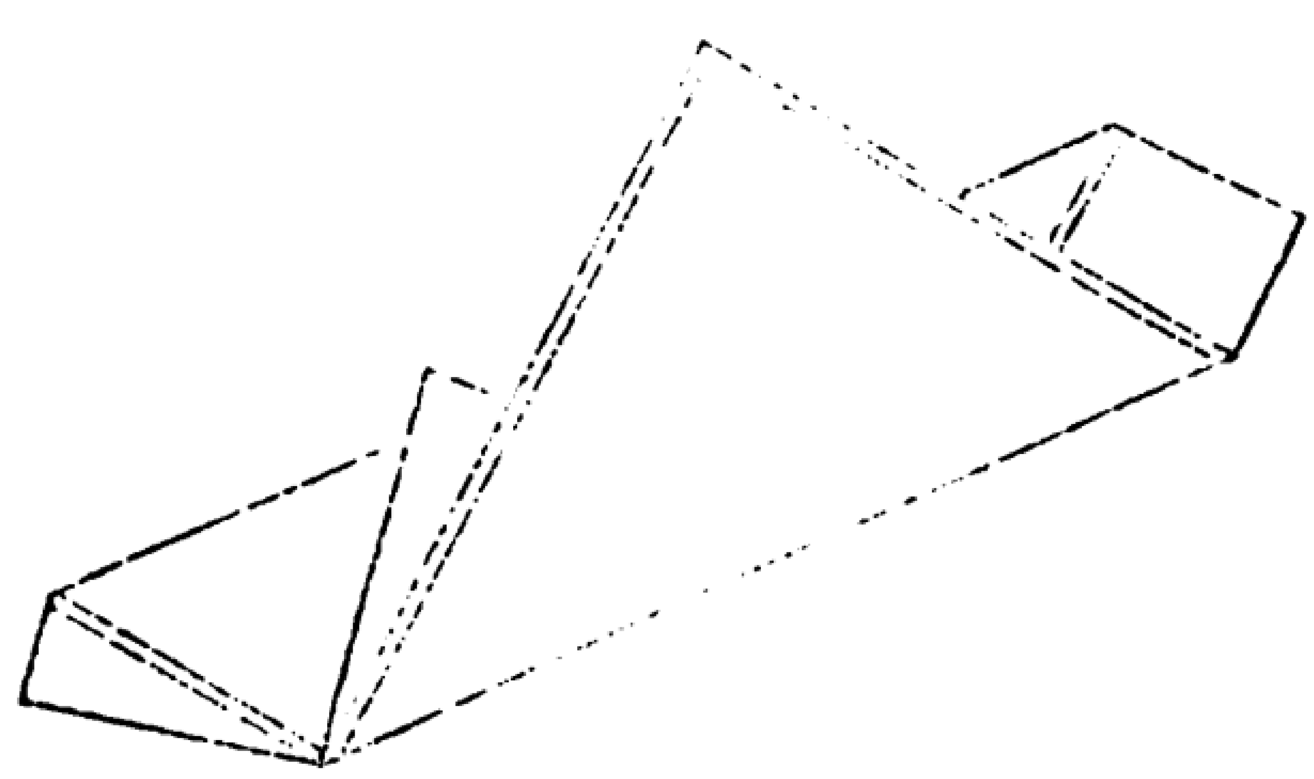
第四圖



形紙出來上りて後、墨をかわかしおき、今用うべき紙をたち板の上におき、表に形紙をあてゝ紙取を定め、次に裏になすべき紙を、たち板にのせて、今の紙と合せて、眞中をそつと糊にて止めおき、四方に五厘ほどづゝ匂ひをとりてたちおとし、

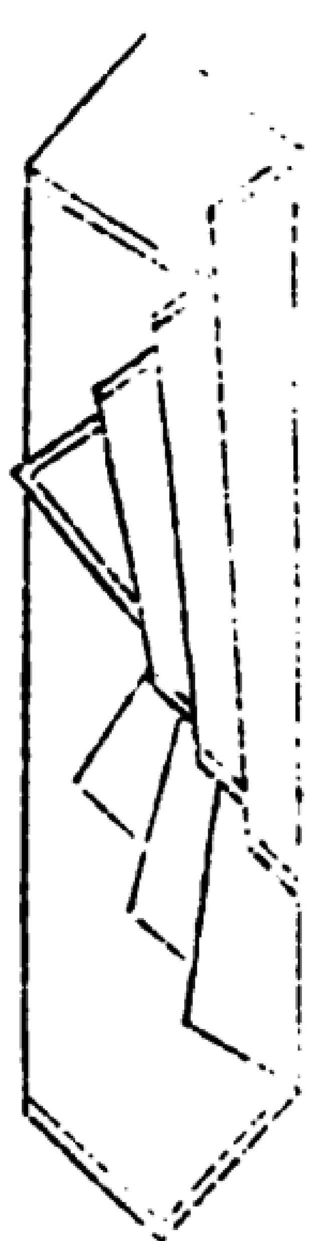
形紙を上よりあて、筋の上下上下へと、錐にて標をうちて、うらがへして、裏のかたより定木をあて、へらにて筋をつけて、箆と、左の手の指にてやは〱と折なしてつくるべし。

匂ひをとりて折りかけたる圖左の如し。



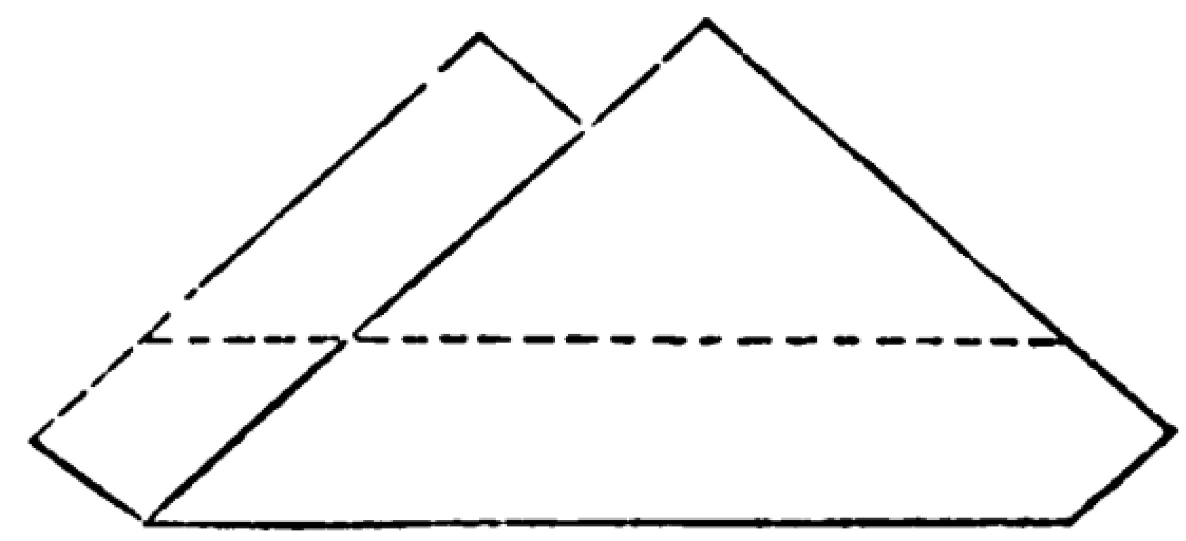
桑弓蓬矢包

これは年こしの祝に用うる包方なり。進物にもかく調へて用うるなり。

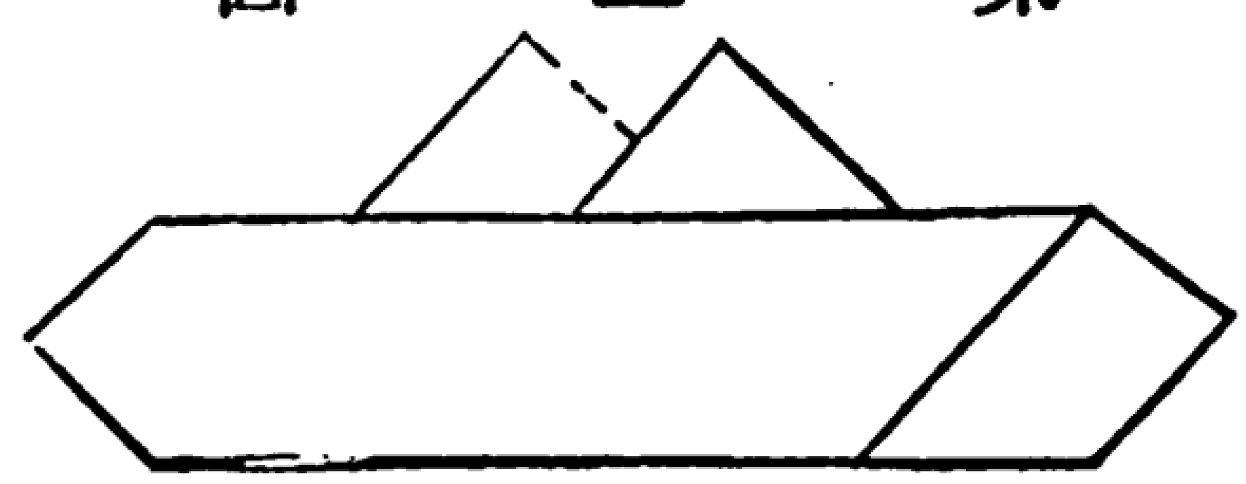


包方は前條の手順によりて考ふべし。紙とりも同じなれどはぶきてかゝげず。色紙を用うべし。

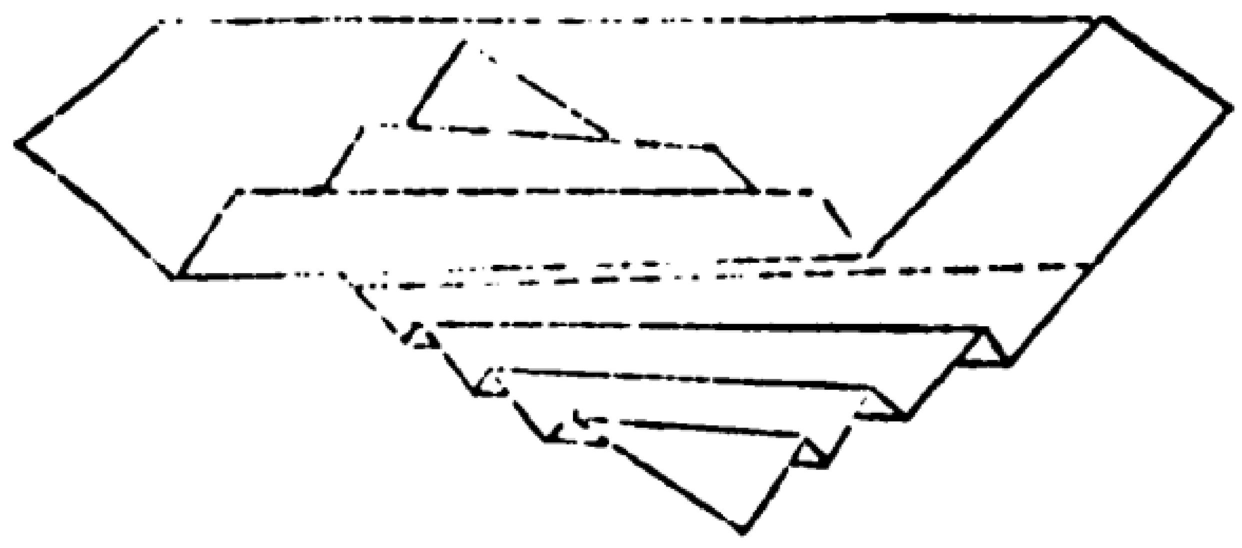
第一圖



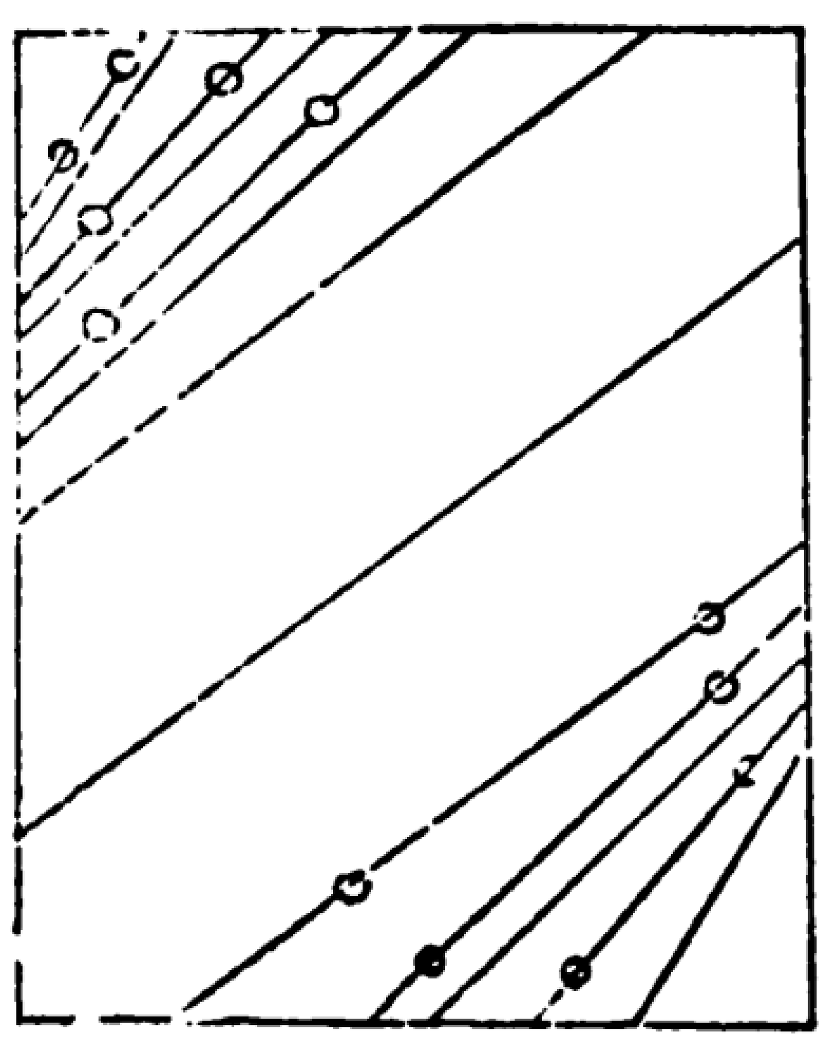
第二圖



第三圖

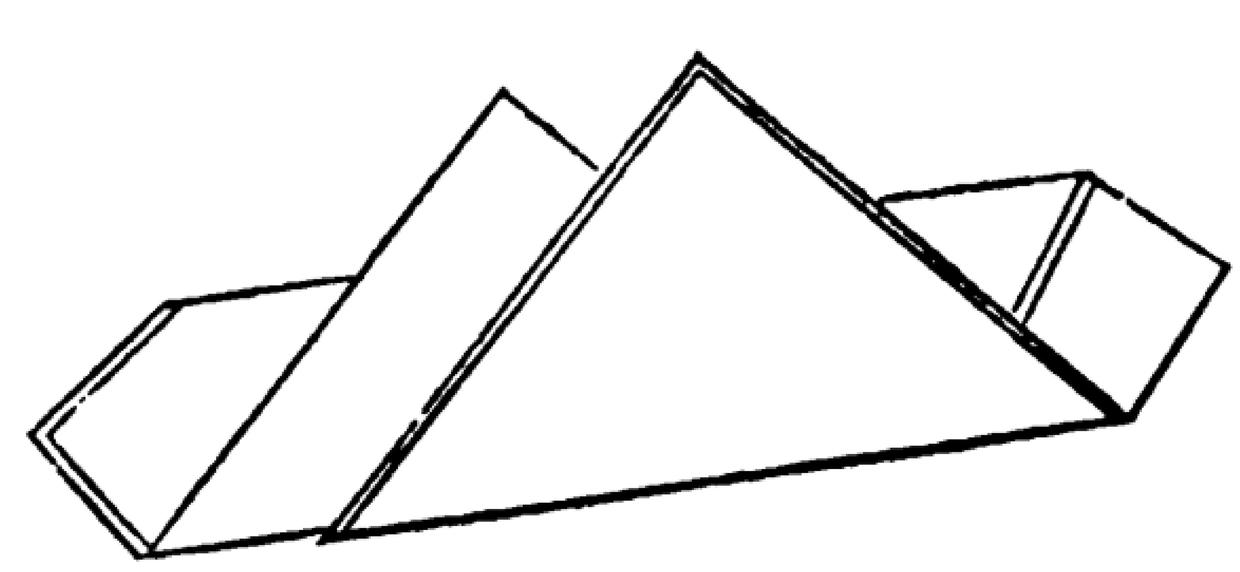


第四圖



包形

第一圖



茶の湯

茶禮初學

關葦雄

次に亭主は、間鍋盃を客の數程盃臺に載せ、脇

取盆に据ゑて持出、勝手口を明け（但し此時より勝手口明置なり）上客の前に進み、臺共に上客に對し、御取廻しを願ふと云ふべし。上客は次の客へ一禮して、上の盃を一ッ取、臺を次客へ廻すべし。亭主は上客へ酌をなすべし、客は一應御銚子を此方へ借用すべくと云ふべし。先々と辭して酌を取べし。二客は次へ御先へと禮儀をなして盃を取、臺を又次へ廻す、亭主次客へ酌をなすこと上客のごとし。段々如此末座に至るべし。一順繼たらば、銚子は酒數奇か、末座へ預け置、通ひ盆を持て入べし、末座は盃臺を預り、便宜の場所に置べし。衆客酒を好む人は遠慮なく自酌して呑べし、又相客互に酌を取合も妨げなし、間鍋酒竭たらば末座の方へ廻し、亭主出て持入易き處に置べし。次に亭主は飯繼を盆に載、蓋の上へ飯杓子を水に浸たる儘載て持出、上客の前に進み、杓子を飯繼の中へ入、盆を差出して飯の通ひをせん事を言べし。上客は謙遜して、御鉢を此方へ借用すべしと答ふ。左様ならば御自由にと飯繼を向へ振向て上客へ渡し、直に其通ひ盆にて、御汁を替ゆべしと盆を差出すべし。上客は次客へ會釋して汁椀を出すべし。上客ばかりは獨り別にすべし。（但し是は上客を尊むの敬禮なり）次に客方は、上客次客へ御先へと禮して、飯繼の蓋を取、次客へ廻し、二客三客と段々送り、末座に至り邪魔にならぬ處に置、飯繼廻り、飯掛終らば、此蓋を締むべし。（但し此飯繼に入たる飯は盛切を習とす、亭主方も其心して入置べし、先上客始飯の付方は、飯繼を左手の掌に載、右手にて杓子を持、片端より、飯繼の中亂れざる樣注意して掛け廻すべし。普通は椀を持飯繼を下に置付る事なれ共、茶道にては反對なり。椀は折敷の上に有故、飯粒翻しても疊に落ちず、見苦敷無き良法也。次に亭主は脇取盆を持出、二客

以下の汁椀を一時に載持入るべし。次に椀盛を、先上客丈は一個別に、通ひ盆に載。持出て進むべし。(但し是も上客を尊ての敬禮なり)直に入、脇取盆へ三人或は四人分一同に載持出、二客以下順次に進むべし、末座に至り飯繼明てあらば、此盆に載持入るべし。(但し此通ひ中精神の働を活發にして、氣轉を能くし、間鍋等明き居らば、持入り、酒を入足し、又時宜に寄りて陶磁器の酒繼を出すも無妨、又猪口も同様と心得べし、次に汁の盛替を持出る。是も上客は別、其外は一同なり。次に飯繼の再進を出すべし。此時は、飯は澤山に入るべし。(但し此時飯繼幷に杓子能洗ひ淨め、飯粒付居らざる樣注意すべし。前の如く持出、上客へ進め置べし、上客は又前の如く付廻すべし。二客以下も同斷(但し客方は此通ひの前後、間合見斗、向付の味、汁の加減、椀盛の鹽梅、宜敷御調理御上手、結構に藏く、杯を謹で挨拶するを茶禮の習とす。主方は何か一品差上度、實は色々心配も致候へ共本日は魚類も生憎拂底にて申譯無之、上り憎く御座るべし抔と云べし。主客互に世辭を言はよけれ共、餘り辨舌に任す時は、言葉多きは品すくなしと云俚諺もあれば、誠しやかに品行を謹むべし、其他の物語も俗談に不亘、夏は青緑子規、秋は菊花紅葉の咄、又は茶の咄に終るべし。席上寂寞ならざる樣すべし。是は主客茶道熟練の度合にて、次第になし得る事難にあらざるべし。偖又今一反汁を替ゆべし。(但し汁は一椀は是非替ゆるものなり、二椀目よりは隨意)次に燒物を出す、(但し是は尾鰭あるもの、或は切身、或は精進物其時々の臨氣に任かすと雖、何れも鉢に盛、盆に載、青竹の箸を添る)持出上客の前に進め、御取廻しを願と言ふべし、客方は美事なる御燒物、御叮寧にと挨拶すべし。此時亭主は間鍋、或は德利の空器あらば持下り、酒を足

すべし。飯繼も末座にわらだ改め見て飯を足すべし。客方は何も彼も十分也、最早御世話に及ばず、御亭主様も御相伴可被降と言べし。其時亭主は然らば御免を蒙り、御相伴仕るべし、御用も候はゞ御呼可被下など云て勝手口を締切べし。(續く

女禮

千鳥掛膳出し様

有住常子

これは、參らする人あまたの時に、膳を進ずる様なり。まづ客の人數によりて、一行に出で、進むるに、入亂るゝ事なく、立歸る時にも、ついでよく入違ふ事なきを以て、千鳥掛の出し様とはいふなり。

○客人十八左右に居たまふ時には、一行に出で參らする、配膳人、

一、三、五、七、九、の人は、左の客に据ゑ、二、四、六、八、十、の人は、右の客に据ゆるなり。

さて、引さがる時は、

十九八七六五四三二一と下座の方より、立ちて一行になりて立かへるなり。

膳を持出で、一行にあゆみゆきて、一番の人立止りて、右の足を、左足のさきの方へ横につけて、左足をそろへながら、左の方へ向ひて、

このとき二三四五六七八九十の人々も左右にむきたつべし。

すゝみて、左右を半足ひきて、跪きて、右膝をすこし引て居り、左膝をもすこし引て居りながら膳を下におきて、左右の手にて押すゝめて參らすべし。

このとき、二番の人は、左足を右足の爪先につけて、右に向ひたちて、すゝみて參らすべし。

三は左、四は右、五は左、六は右、七は左、八は右、九は左、十は右と同時に進むべし。おそきはやきあらんは見ぐるしきわざなれど、能々心すべき事な

り。
さて左右の手を引て、膝頭につけながら、右をすこし引てつまだち、左をすこし引てつまだち、またすこし右左と引て、前に立止りたりし所に至りて、下座の方
左の人は左の膝、下座なり。右の人は右の膝、下座なり。
の膝を少しうかめて、左にこしをひねりて、下座にめぐりて、一行になりて、
右の人は右の方へめぐる事と知るべし。
立歸りゆくなり。
これは、むづかしき事にはあらねど、多人數にて、そろひたるが、肝要なれど、よく〳〵ならふべき箇條なり。

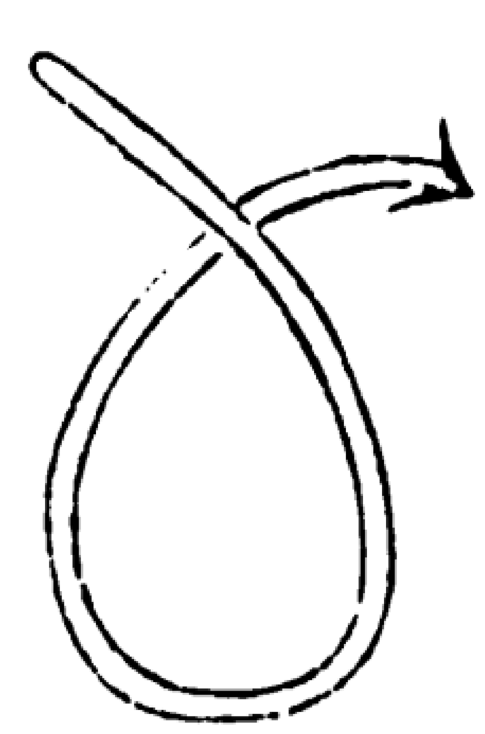


新撰 結物百種

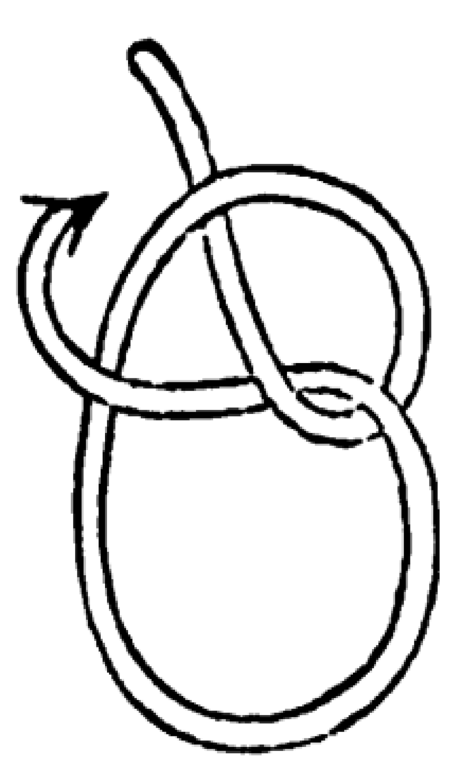
百草庵一無

つめ結12　是ははた結と同じく、機れる時、糸の切れたるを如圖して結びつくる也。當世縫物する時糸の尻を結ぶに至極便利なるを以て、こゝに掲ぐ。

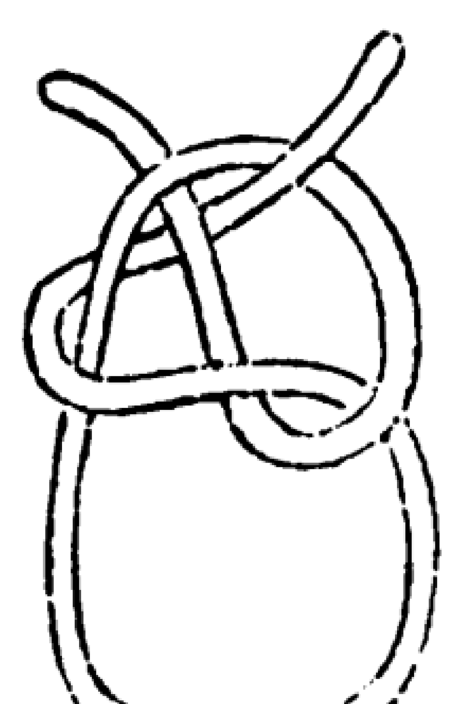
第一圖



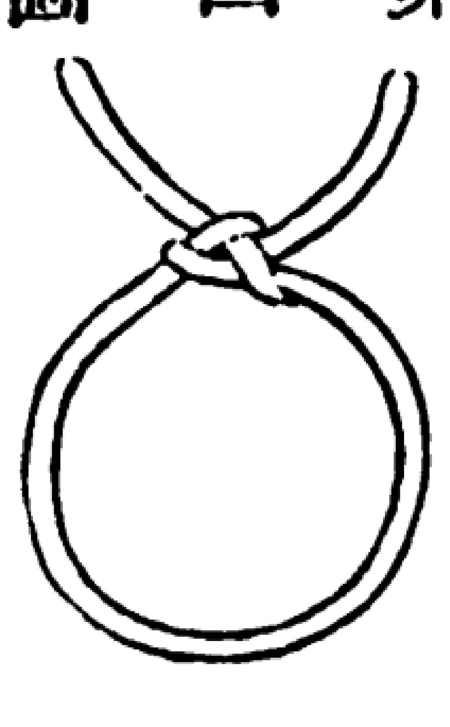
第二圖



第三圖



第四圖

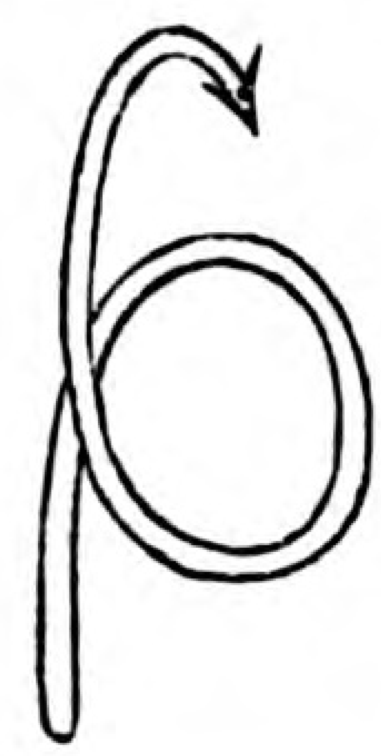


結び上り

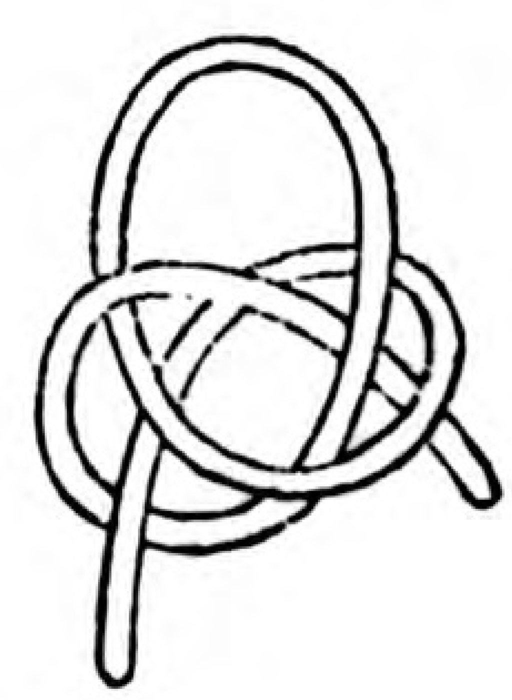
諸結13　もろわ、或は蜻蛉結の本名など云ふ事わ

れど、兩はしに力を付る紐には何に用ゐても苦しからず、又、片結、諸結、つめ結、こま結、思ひ結等は、結法の基源といふ說もあれど、是を並べあげんも故なきにあらざるべし。

第一圖



第二圖



第三圖



結び上り



たちぬひ

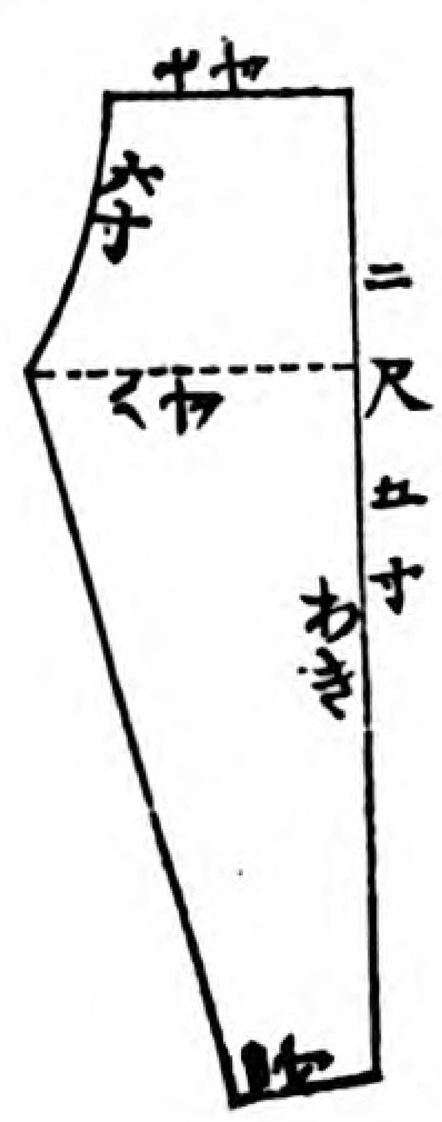
西山たい子

(九十七)　ズボン下

追ひ〳〵冷氣を感ずれど、ズボン下シャツ等の用意こそ肝要なれ。シャツは先きにものしたれど、此處はズボン下をものすなり。

そのたち方

まへ股



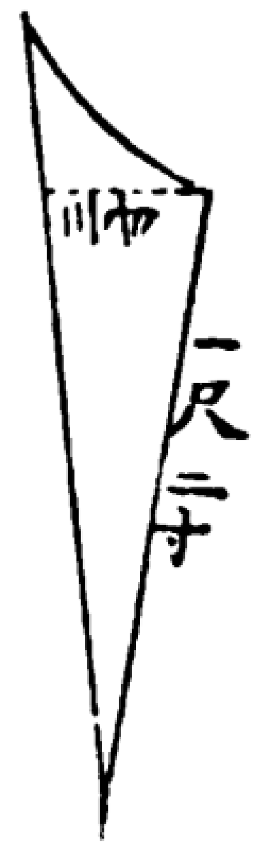
うしろ



腹まはり



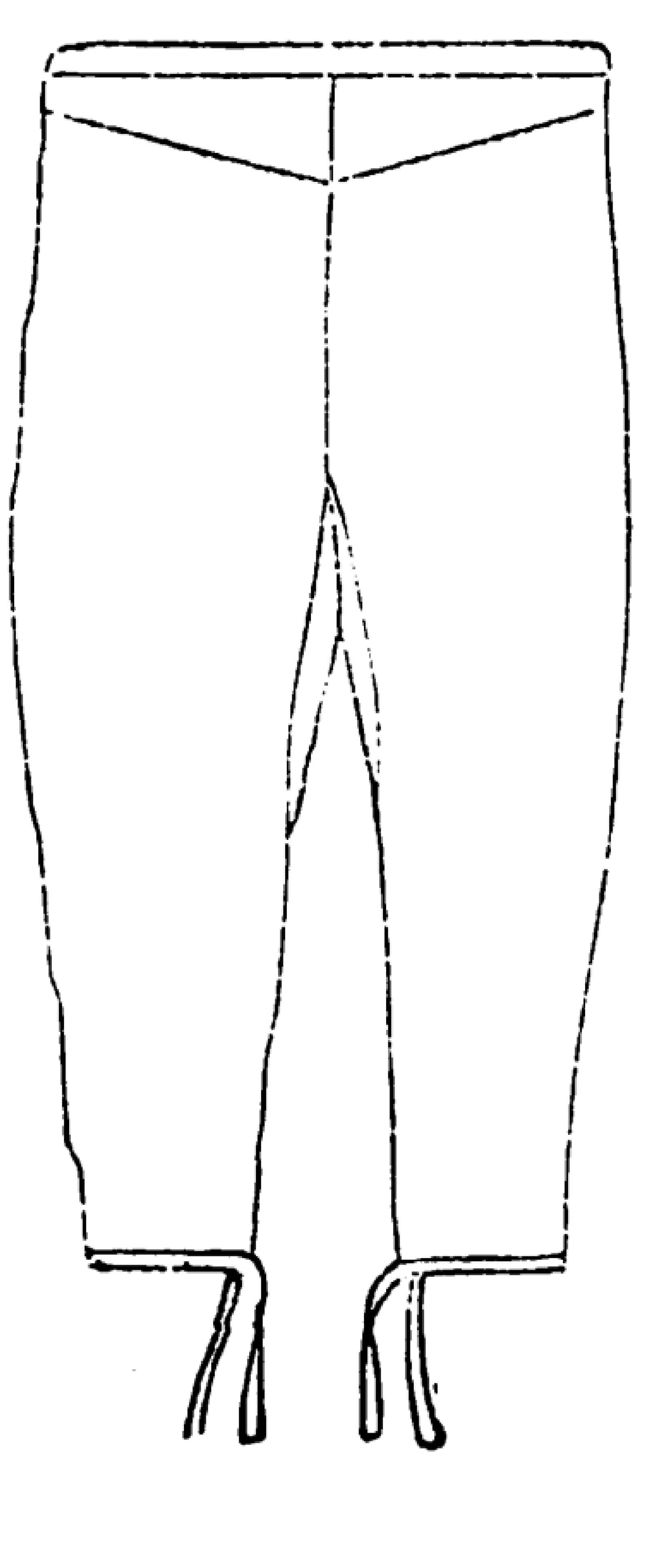
まち



これにては一足のものなれど、かやうの形のものを各〻二つづゝ裁つべし。其の他、幅一寸二三分、長さ五尺ばかりの紐切、長さ一尺五六寸の尤も細き紐切とを要す。

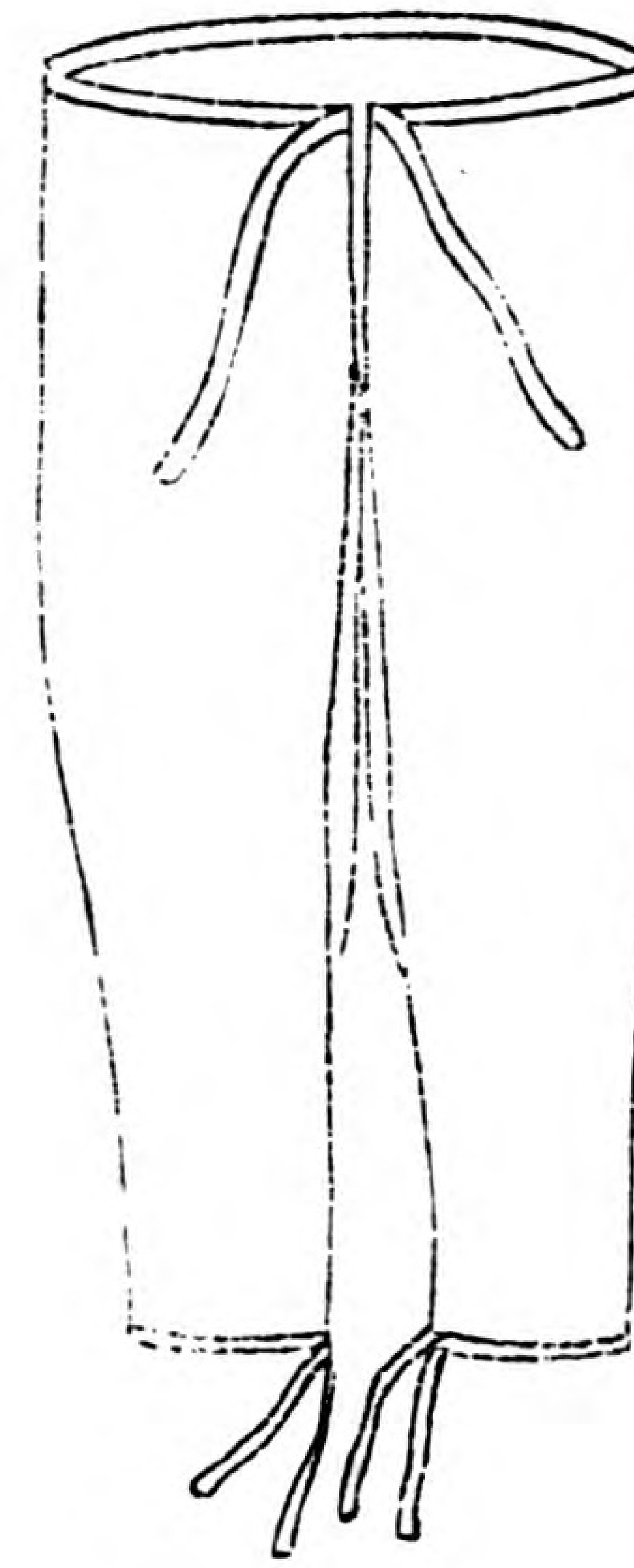
其の縫ひ方は、まづ、前の切の上に、腹まはりの切をみじかき方を脇の方になしてぬひつけ、後の切と合せて、脇を眞直にぬひ、(但し下より三分ばかり上りたる處を六分ばかりわけおくべし。それに紐通すなり)それより襠の切を取り、眞直ぐなる方を、幅廣き方を上にして、前の尤も幅廣き處より下にぬひつけ、斜めなる方を後の尤も幅廣き所より下に縫ひつけ、また襠下を、後前の切を合せてぬふべし。但しかゝとの方を三寸五分ばかりわけおき、其のわけある所を裏がはへ三折にかへして絎けつけ、又一尺五六寸の紐切を通して、下をも絎けるべし。さすれば、一本の足を入るべき袋となる、左樣に左右とも同じく縫ひおき、さて左右の切を合せ、うしろの方を六寸五分ばかりわけおきて、前より股下をぬひつけるべし。但し、はじめ、表よりぬひ、引かへして又ぬひ、例の袋ぬひとすべし。それより紐切を左の方を少し長くして、腹まはりの表側へくるりと縫ひつけ、裏にて絎るべし。

ズボン下前



その縫ひ上り

同うしろ



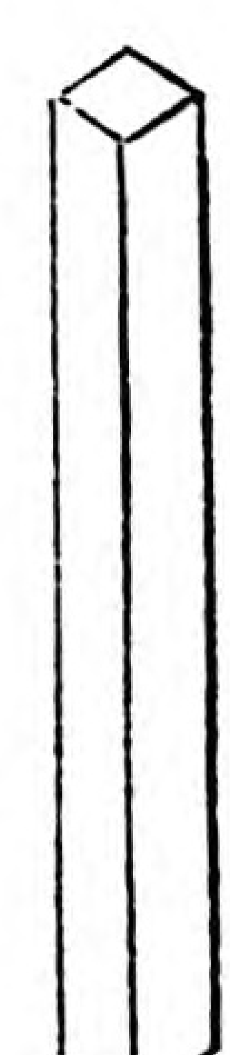
割烹

石井泰次郎

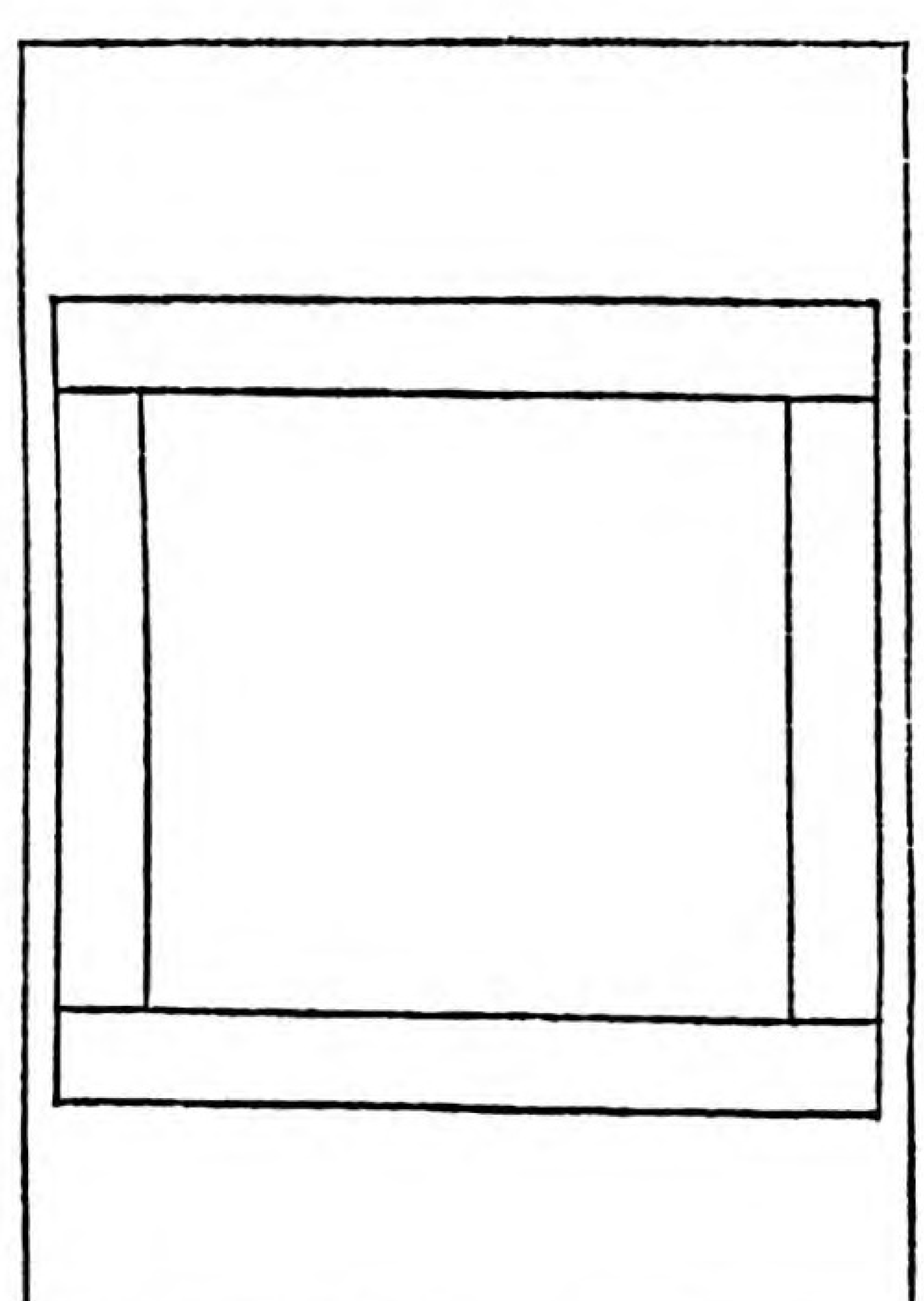
椀
- 白菊豆腐
- くるま海老
- 菠薐草
- 松葉柚子

白菊豆腐つくりかた

これをきく豆腐といふは、其形菊の花に似たればなり。つくるに、まづ三四寸程の幅の板の、長六七寸位なるに、大根を三四分の厚さに細長く角にきりて、板の幅に合せて、四寸ならば、向前と、左右とに角形に組み合せて載せおき、



大根きりたる圖

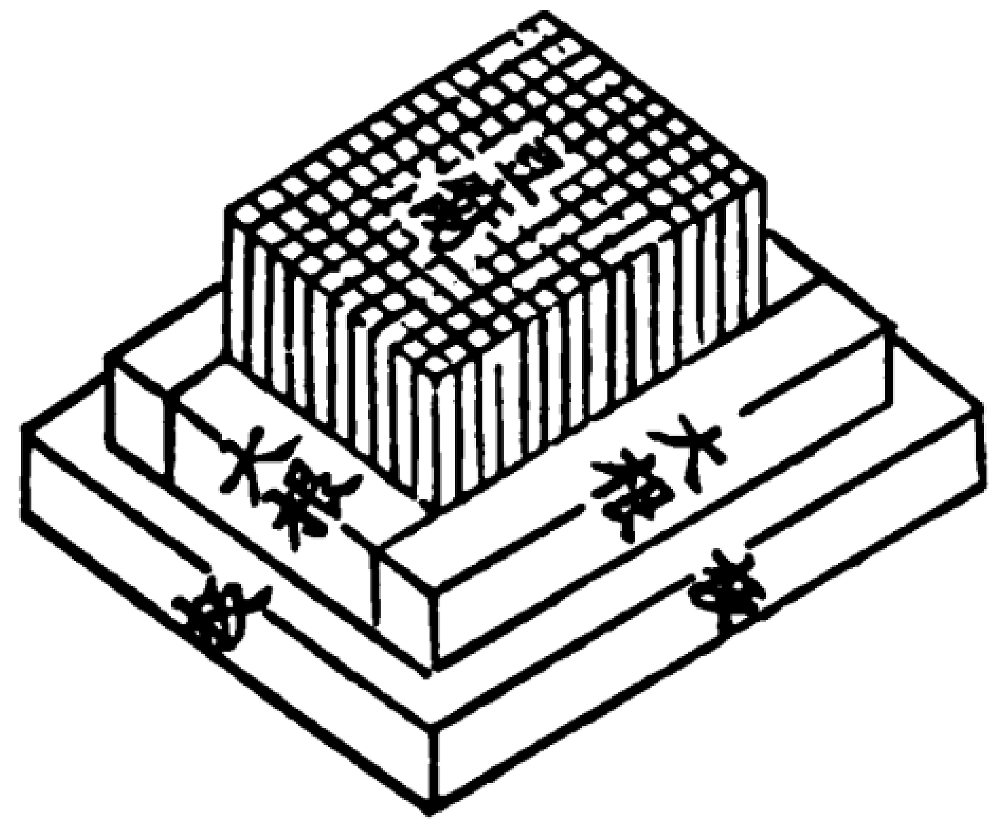


大根角形に組みて板に載せたる圖

大根、厚サ三四分、幅ハ豆腐の大小によりて五六分にもなすべし。

さて豆腐をよき程に切りて、薄刃庖丁刀にてすくひ、手をそへて、大根のわくの内へ入るなり。

わくに入れてきりかたなしたる圖



薄刃庖丁刄を持ちて、豆腐をそつとおさへて竪横に、細かく切目を、大根の上まで入るゝなり。

こをきる時、薄刃庖丁刀の刄に、酢をぬり〳〵して、きる事肝要なりとしるべし。

きりめつけ終らば、板共に、水を器に入置たるなかへ入れて、しづかに板をぬきとるべし。

板をぬきて、大根をとりあげて、右の手にて、切たる豆腐を下よりうけて、やは〳〵ともたげもたげして、うごかすべし、動かすに隨ひて、豆腐ひらきて眞に白菊の花の如くなるなり。

かくなし置きて、大鍋に湯をわかし、すこしわきかゝらんとする時、手を入るも入得る程の時に、豆腐をそつと取上て、其鍋に入れて、煮たゝするなり。

車海老

こはさいまき海老を用うるもよろし、車海老、洗ひて、ゆでゝ、からをとりて、脊わたをぬき、また二ッに、庖丁刀にてわりて用ゆるなり。

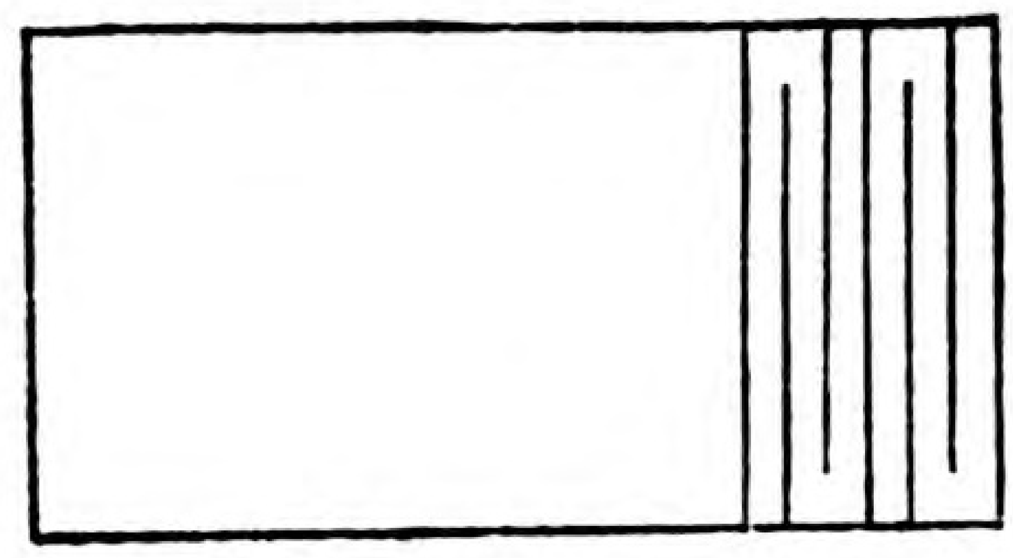
菠薐草

よく洗ひて、あしき葉を撰り捨て、よき程に束ねて、(束ぬる時、根元をそろへおくべし)ゆをにたて置たる鍋に入れて、ゆでゝ、ゆだりし時、鍋をおろし、菠薐草を水にとりて、ひやすべし。さてまた、束ねたる竹の皮をほどきて、ふたゝびそろへ、莖の元より、根をのぞきて、三ッに切りて、用うるなり。

松葉柚子

柚子を、洗ひて、色よきをえらみて、薄刃庖丁刀にて

廻りをくるりとむきて、上下を切落して、ウラの方を平にそぎとりて長をきめて、圖の如く切方すべし。





（黒き所は外皮にして、白きは皮の内部を示したるなり。）

右三種椀に仕立やう

かつをだし

かつをを洗ひて、上面をとりさりて、けづりて、湯をわかしたる鍋にいれて、すこし煮て、鍋を上て、だし漉にてこして用ふべし。鍋にいれて煎ずる時、浮びたる泡をとりさるべし。

にぎり

これは味醂酒をにかへし、につめて用ふるをいふ。

二人まへづゝ作り方

○だしを二寸口經ほどの小びさくにて二杯いれ、醤油をすこし入れ、にぎりをすこし入れ、食鹽をすこし入れ、煮たてゝ用ふべし。

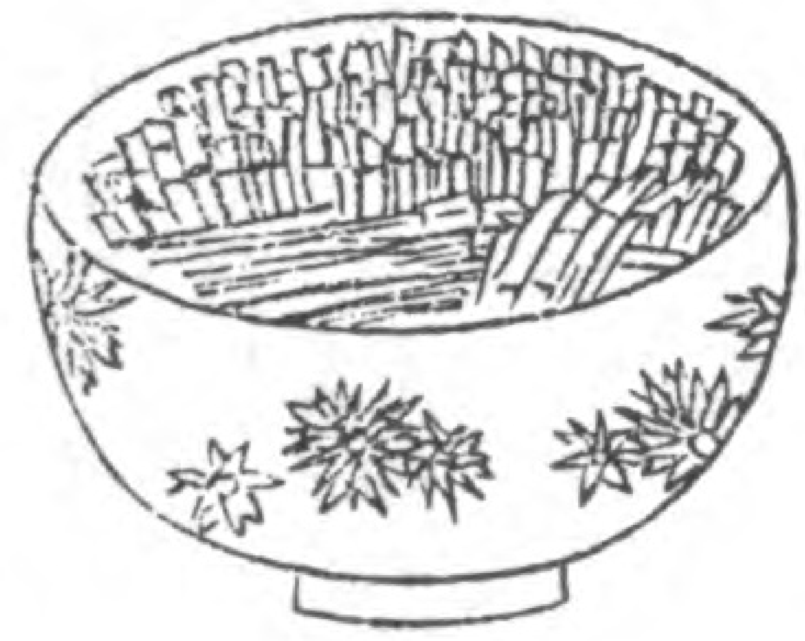
この入れたる分量は言葉にてはかきつけがたし、自らあぢはひて定むる物なればなり。

○また別に右よりすこし辛めなる露をつくりおくべし。是へ、今椀にもるべき、車海老、菠薐草を其かずづゝ漬おくなり。

さて菊豆腐を、網杓子にて、湯より取あげ、能々湯を切りて、別の露のあたゝめたるうちに杓子ごと入れて、又露を切りて、椀にもるべし。くづれざるやう注意してなすべし。

車海老を三巻ほどもりそへ、菠薐草を、一揃へもりそへて、松葉柚子を上におきて、つくりおきたる熱き露

を入れて、椀をとゝなふるなり。如左圖。



だいどころ

一煮物

蛸に、さと芋、うま煮○蛸のやはらか煮に、じねん薯、うま煮○鰹切身に、茄子のてり煮○川はせに、大根うま煮○いなだの酢煮に、ずゐきの煮しめ○鮎の煮びたしに、新くりの甘煮○あかいに、里芋、蓮根のうま煮○めいた鰈に、大根のうま煮○あなごに、くわい、牛蒡うま煮○蛤の時雨煮に、生姜。

一和物

里芋ゆでゝ、芥子の味噌あへ○蛤の剝身に、小松菜ゆでゝ芥子あへ○ずゐきに、枝豆、胡麻酢あへ○人參、こんにやく、味付て白あへ○人參に、大根、せんに切、もみて胡麻酢あへ○蓮根、やはらかにゆでゝ、胡麻味噌あへ○梨子をうすくへぎて、山葵あへ○百合の根ゆでゝ梅肉あへ。

一汁

初茸につまみな○里いものこ、生推茸○はらゝ子に豆腐○芝海老にうちわ茄子○松茸に冬瓜○燒はせに、銀杏、大根○むかごに、しらが牛蒡○しめじ茸に、茄子くし形○さつま薯の角切に、さやいんげん。



學園

秀歌集

鹽井正男

○

大井川岩波高しいかだしよ
　　岸の紅葉にあからめなせそ

○之は金葉集秋の部の歌にて、大納言經信が、宇治前大政大臣大井川にまかりけるともにまかりて、水邊紅葉と云へる事をよめるなり○大井川は山城の國にあるなり。いかだしよ。山より木を伐り、それを遠く出すに河などある處にては、其の伐りたる木を繩もてあみ、舟の如く河に浮べたるが筏にて、船の如く棹もて漕ぐものなれど、其漕ぐ人を筏師とは云ふなり。あからめなせそ。あからめは外目と云ふ事にて、なせそは、するなかれと云ふ意にて、外目に見るなかれ、よく岸の紅葉に目をとゞめて、油斷して筏をくつがへす故との意なり。

○一首の意は、大井川の岩波が大層高く起つことである。あはれ、筏師よ、さやうに波高くたつ故、いと危し。如何に紅葉が美はしけれども、それに見とれては大變也。後世、「井戸端の櫻あぶなし酒の醉」と云へるも、之と同工異曲にして、紅葉をおもひ、且つ人を思ふの情掬すべし。又紅葉、急湍に映じ、舟師瓢然としてその間を下る情景、目睹するが如く、いとめでたきうた也。

○

川霧の立ちこめつれど高瀨舟
　　分けゆく棹の音のみぞする

○之も同集同部に、藤原行家が、河ぎりをよめるなり。○霧に、煙の如きもの、たちのぼりて、行くさ

きも見えぬものを云ふ。川霧、山ぎり、朝ぎり、夕ぎり、皆同じ霧にて、川にたつを川霧、山に立つを山ぎり、朝立つを朝霧、夕にたつを夕ぎりに呼ぶなり。立ちこめたれど。すきまなく立ちたるなり。高瀬舟、少くして深き一種の舟、後世いふ高瀬舟は、又別也。分けゆく棹、漕ぎゆく棹と同じ意にて、漕ぐは水を分けゆくやう見ゆれど、分けゆくと云へるなり。

○一首の意は、川ぎりがすき間なく立ちこめたる故に、何處を漕ぎ行くか漕ぐ舟は見えずして漕ぎ行く棹の音ばかり聞ゆるとの意にて、川霧のたちこめたるさま深うもよみなしたる歌なり。

○

松が根に衣かたしき夜もすがら
　詠むる月を妹見るらんか

○之も同集同部に、月の前の旅宿と云へる事を修理大夫顯季がよみたる歌なり。之は古風萬葉の歌の体にて、杜子美月夜詩に、「今夜鄜州月閨中只獨看」などの意にれのづから通へり。閨中は妻を指したるにて、此の歌の、妹見るらんか、妹、即ち妻をさしたるなり。片しくは、一人にて臥する時に用ゆる語也。古は夫妻、その二人の衣をあはせて敷きたるものにて、後、朝の別れを衣々の別といふは、これより出でたる也。

○一首の意は、松の根に、衣を片しきて臥し、夜もすがら、いねもせず、空なる月にいよ／＼故郷のことを思ひ忍びて、かやうに詠め居る月を、故郷の妻も又此の月を見て居るだらうか、そして我も故郷を思ふ、彼もまた我が旅宿を思ひをるだらうか、れもひ居るだらうと想像せし歌にて、さらでも故郷思はるゝ旅宿に、月をながめ、いよ／＼忍ぶ心に、妻もまた此の月を見て我を思ふらんとながめたる、いとあはれに情あつき歌なり。

○

何事に秋果てながら小男鹿の
　思ひかへして妻をこふらむ

○之も同集冬の部に十月十日頃に鹿の鳴きけるを聞きて法印光清のよめる歌なり。「何事に」は「秋果てながら」の下に入れて見るべし。秋はてながら。九月までを秋とすれバ、之は十月十日なれバ、もはや秋も果てたものをに、鹿の中のあきはてたるとをひきかけよみし歌なり。

○一首の意は、最早、秋もはて鹿の中も秋はてて、つまなど呼びもすまじき今日此の頃になりて、何事に思ひかへして、小男鹿の妻を戀ひ呼ぶのだらうとの意にて、もはや妻鹿のつれなく、男鹿もあきはてぬるを、なほ思ひ切れず、思ひかへして呼ぶかと云ふ意をふくめたる、聞くまゝに何となう身にしみ露こぼるゝ心地せらる。

○

初霜もおきにけらしな今朝見れバ
　野べの淺茅も色づきにけり

○之は詞花集秋の部にて、大中臣能宣朝臣の初霜をよめるなり。○おきにけらしな、おいたらしいわいと想像歎息したるなり。色づきにけり、色が變つて見ゆるとの意なり。

○一首の意は、今朝見れバ、野べの淺茅も色が變つてきたが、此の色のかはりしにつけても、初霜も置たらしいわいと歎息せし歌にて、霜枯にならむとするさま見ゆるあはれの歌なり。

源氏物語講義（十四）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御つかひの行きかふ程もなきに、猶いぶせさをかぎりなくのたまはせつるを、夜中うち過ぐる

へせど、もとより歸り來べき人にもあらず、詮かた涙にかきくれて日を經るほどに、未だ年も若う、色香もうつろはぬを、早くひとり住ませむも悲しとて、子に迷ふ妻女が父母は、取り返してこと方へよめらせんと云ふを、妻はうけがはず、妾かつて傳へきゝ侍るに、貞女は兩夫にまみえずとかや、今、身、不幸にして夫にはなれ侍りたりとて、又よの人にとつがん事、軒のつばめに聞え侍るも耻かし、かぞいろの思召、御なさけ、嬉しさはかぞへつくすべくも侍らず、たゞこの上は妾をまことにし給へとて、石ならぬ心、又まろぶす能はず、父も母も其のまことに服して、遂に其こと云ひ止みたり。妻女はそれより紡績をつねの業として、晝夜いそしみ勵み、つゆ足を我門より外へふみ出さず、夫なき後は偏に、姑を夫とし、また我身を夫ともなし、先きだちし夫が不孝身ひとつに報いんものとて、旦夕こゝろをくだき、春のさわらび、秋のきの子、たゞもね出るまゝ、をかしきさまにすゝめ供して下くるしき色つゆ見せざりけり。さるに、ある時、姑の足に腫物出來て、いたむこと限なく、すでに玉の緒もあやふく見えけるに、嫁はいと悲しみ、心を碎きて介抱をなし、さまざまの療治を乞ひけれど、効見えぬに、いたく歎き、己が身にかへてもと神に祈り、醫師にも心の限りたのみけるに、醫師申すやう、このうみを人の口してすひとり、その跡に膏藥をつけなば愈えなむと云ふに、嫁いたくよろこび、さはいと容易きことなり、我が命、此のうみをすひて失ふとも、姑の病だに愈えなば、これこそうれしかるべけれとて飛び立ちよろこび、いさみて姑が腫物のうみを悉くすひつくし、さてかうやくをつけゝれば、忽ちにはれひき、いたみさり、日ならず平癒したりけるは、かの糞をなめて父が病をこゝろみし南齊の庾黔婁、また唐土の陳通が文帝の癰を吸ひけるよりも、はるかにまさりて覺え侍る。されば、姑も此の嫁を思ふ、慈母をしたふ如く、唐土の孫夫人が、嫁に抱かれて乳を吸ひけるもかくやと思ふばかりなり

けるとぞ。

布幾女

山本正周

肥前國長崎磨屋街に住める某の妻布幾といへるは、もと天草島の生れなりしが、家貧しきより、長崎に出で、或る家の婢となり居しを、後に縁ありて某に嫁ぎしなり。布幾女天資柔順にして克く舅姑に仕へ、夫に事へて又貞實なりしに、引違へて夫は兎角身持正しからず、果は其の地にも身を置きかね、或日何處ともなく出行きしまゝ又歸り來ず。迹に殘されし布幾女は、一時途方にかきくれたれども、赤心を取り直し、今は唯舅姑を安うし奉らんのみとて、其家業なる香塵を製することに心をこめ、晝は出でゝ榓柑の皮を買ひあつめ、夜は之を搗きて粉末に製し上ぐれば、舅は之を荷擔ひて市に賣り、以て糊口の資となせり。かくて又家にはいさゝかの田圃ありけれども、舅ははや年老いて、耕耘の勞に耐へざれば、布幾女は家業の片手に、自ら耒耜を執り、肥料等をも荷ひ行きて之を耕し、黍、麥など作りて糧食となせり。鄕里の親戚等、布幾女がこのありさまを聞きて、離緣して歸るべきよし勸めしかど、布幾女は、妾もし歸りなば舅姑は凍餒したまはんといひて遂にきかず。されば、此の事官に聞え、米拾苞銀十枚を賜ひて其の孝貞を賞したへりとなん。



包の記

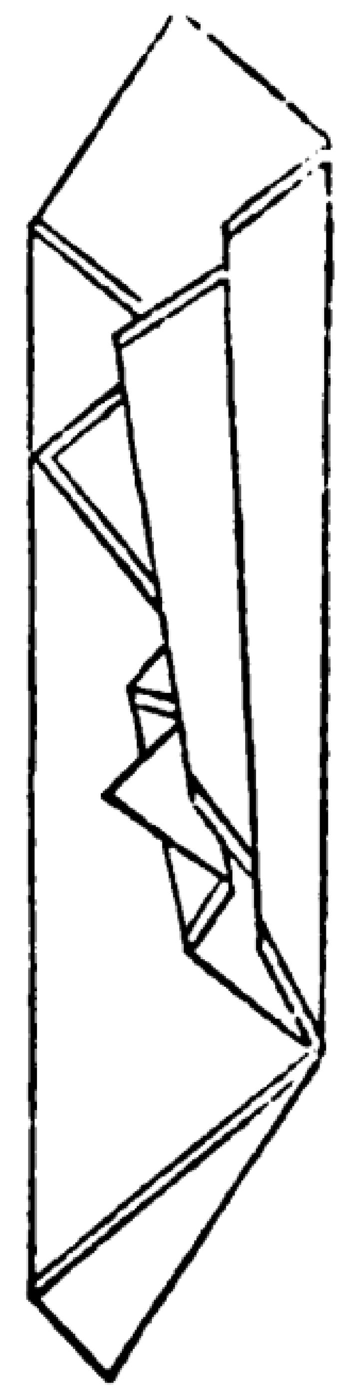
有住齊教授

門人なみ子 鏻子筆記

岩田帶包

これは懷妊五ヶ月の時の帶の包かたな

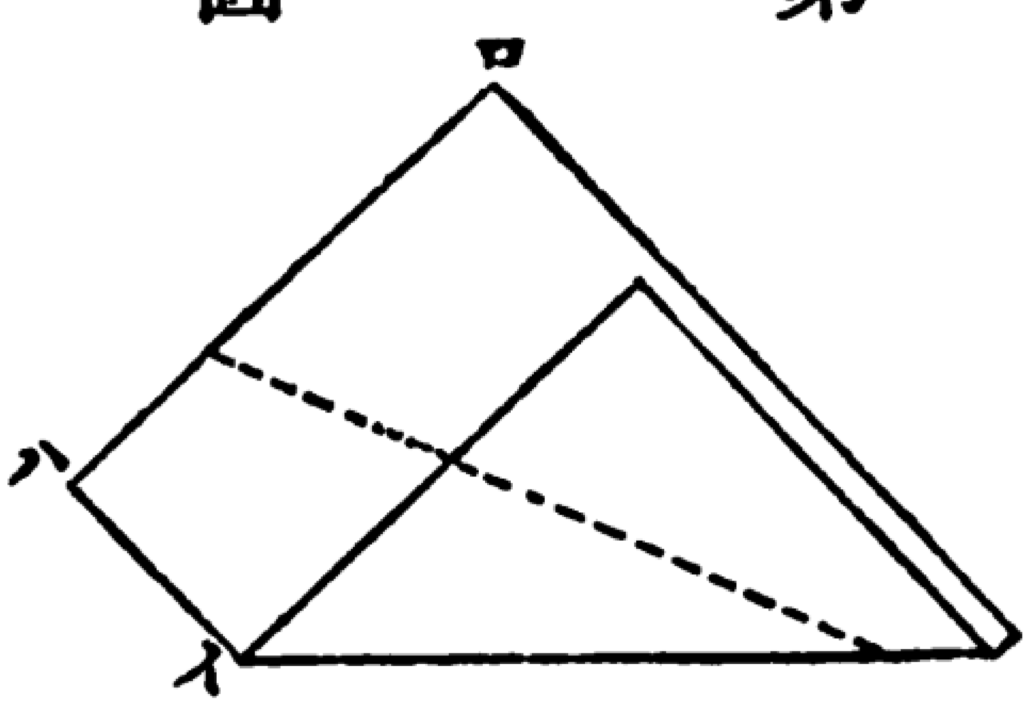
り。ゆひはだ帶の包なり。帶つかはす方よりの包様なり。



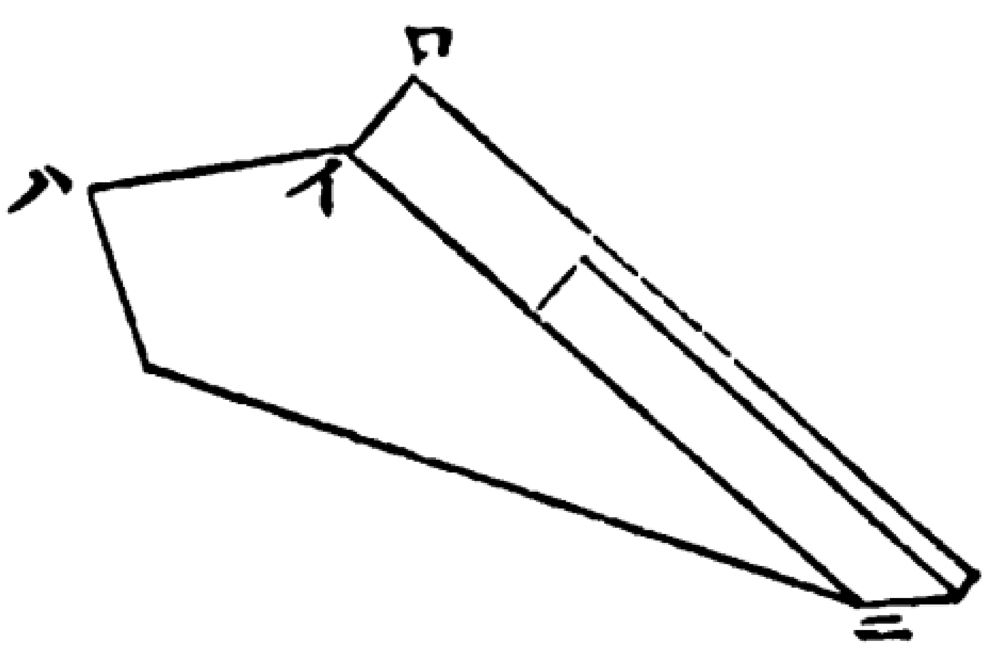
紙取は裏曲の法によりて取ること左圖の如し。先づ、奉書紙、其他何にても、第一圖の如く下端の一方を折り、是と同時に又其點線にて示せる通りに折りて、第二圖の如く「イ」點を「ロ」「ハ」の線中の或一所に合せ、斜めにならぬ様、「イ」と「ニ」とを見合せて折り、さて其余り、即ち「イ」「ニ」の線より外部を斷ち落せる折形の紙出來上るなり。

（裏曲の圖）

第一圖



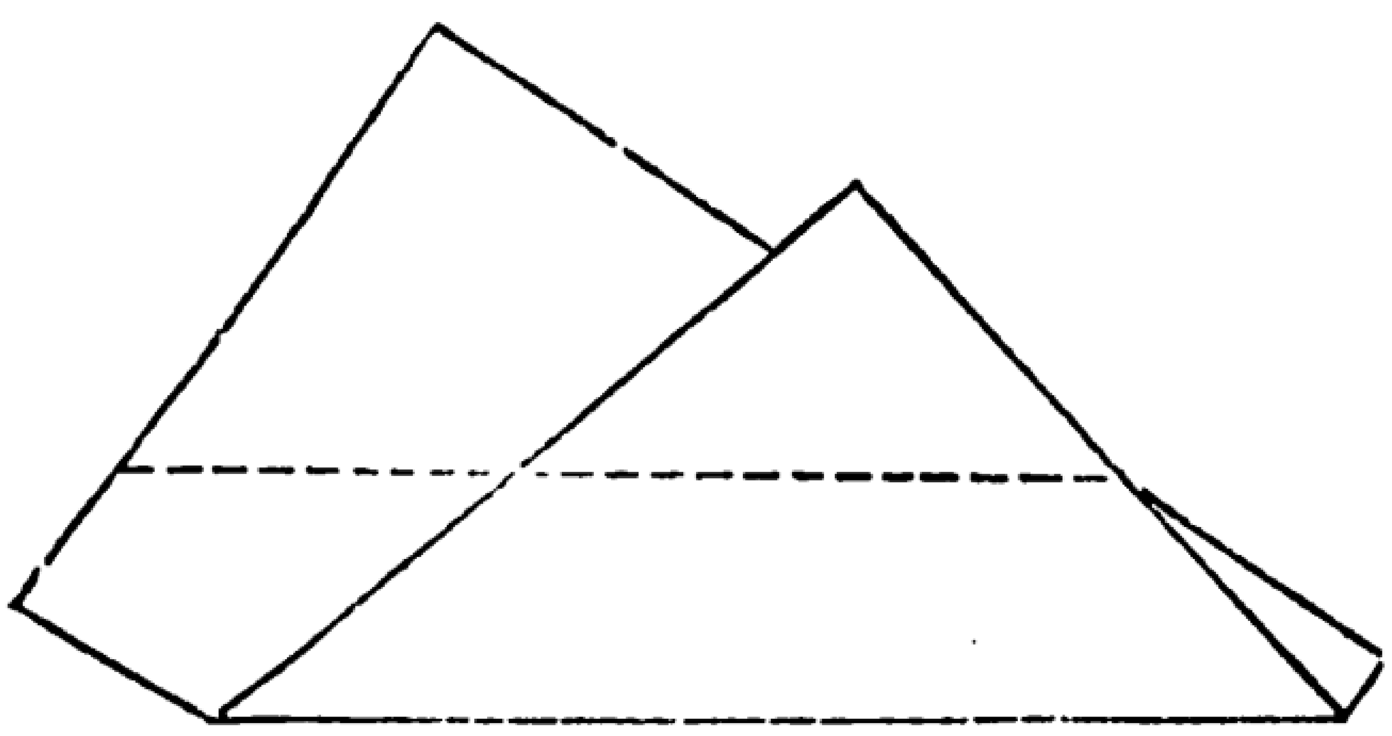
第二圖



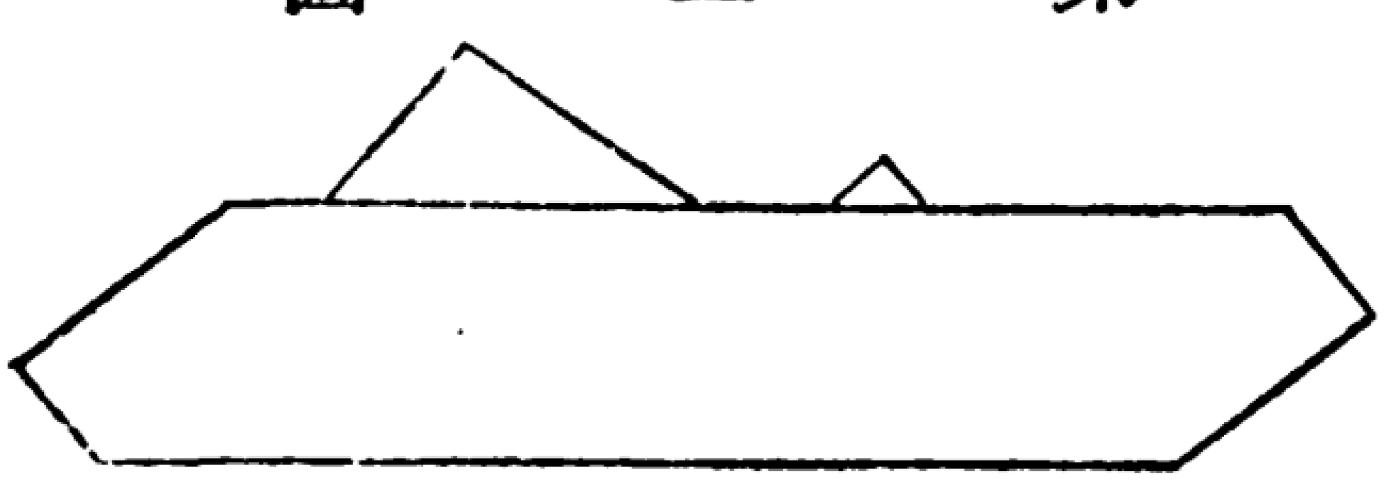
右の如く紙取をなしたる紙を以て次の如く形紙を折るべし。

さて、左に示せる第一圖の如く筋違に折りて、又其點線にて假に示せる程を手かげんにて折り第二圖の如くすべし。次に此の二圖を裏反して第三圖の如く折り、斯く折りなしたるを、開かざる前に、墨にて折目〳〵を、表のは表より、裏のは裏より線を引き、裏の線を表より見易からしめんがために、表の方へと錐にて標をうち出して、表の方に丸標を錐の穴の邊に付置べし。

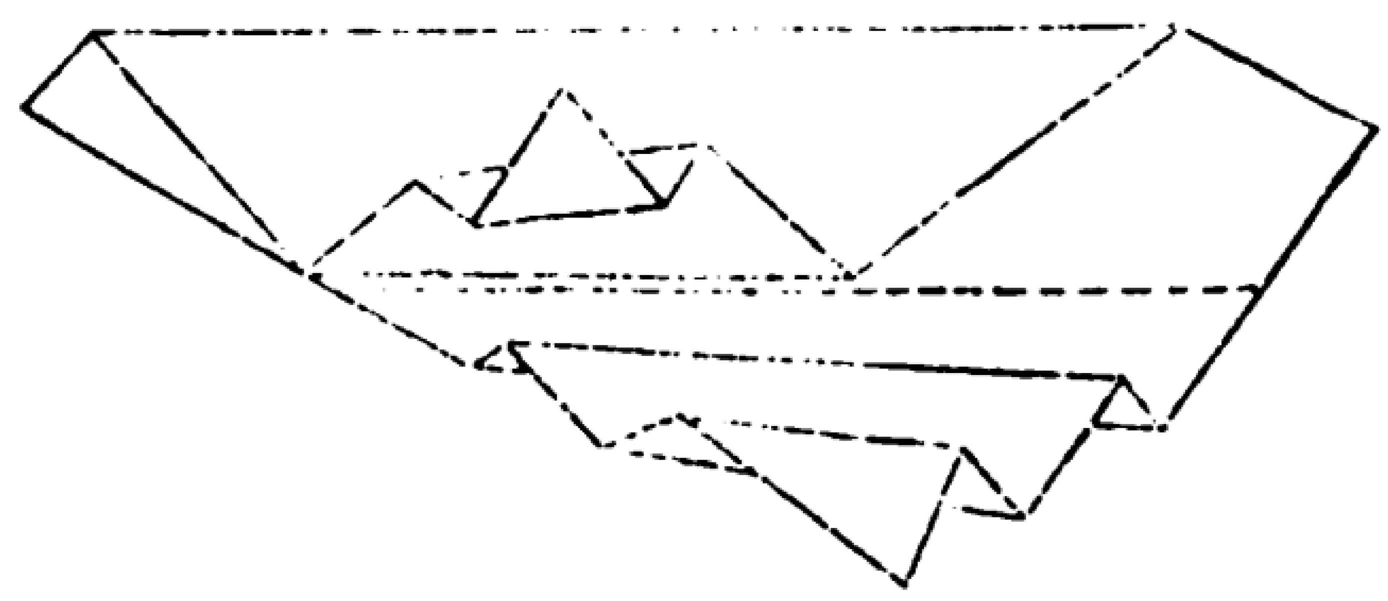
第一圖



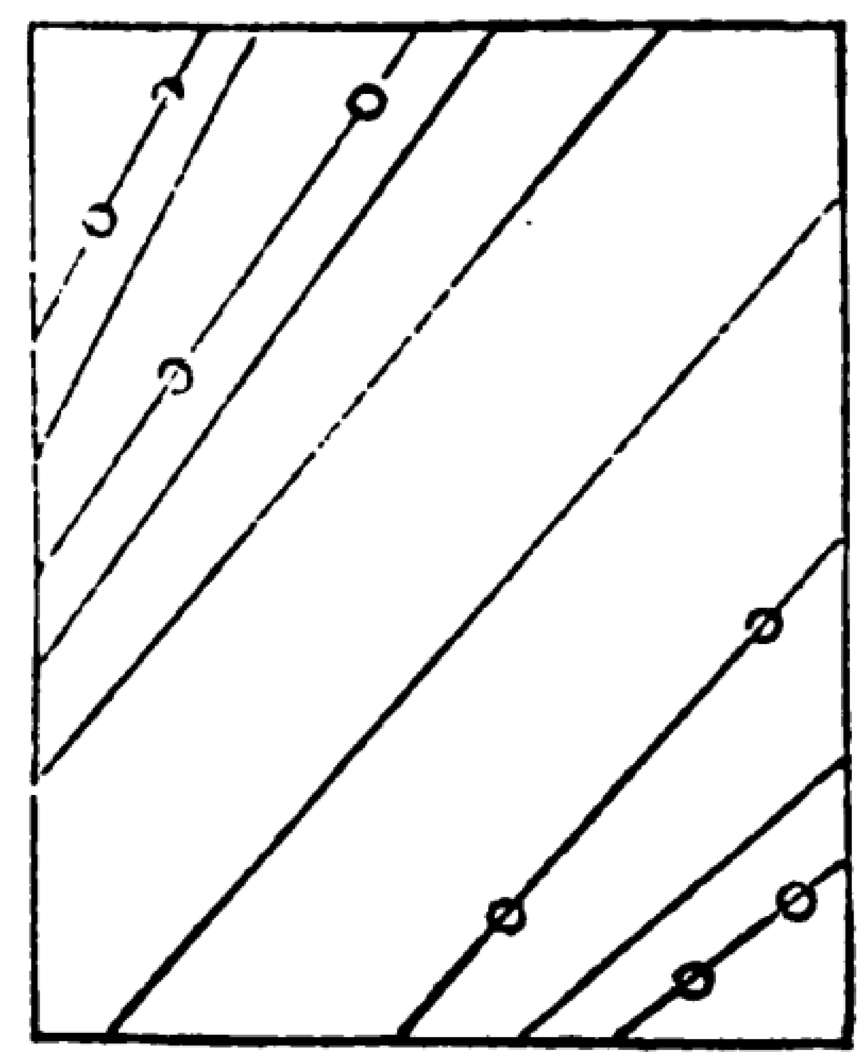
第二圖



第三圖



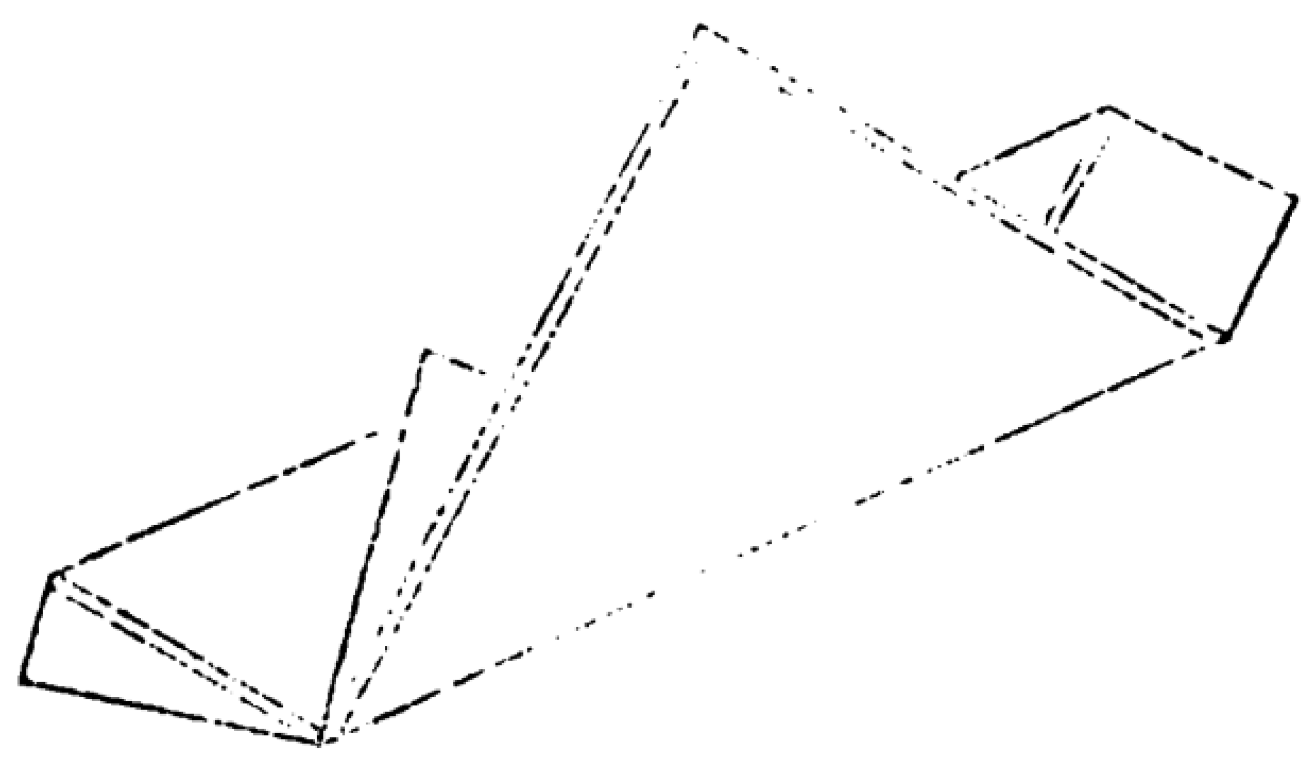
第四圖



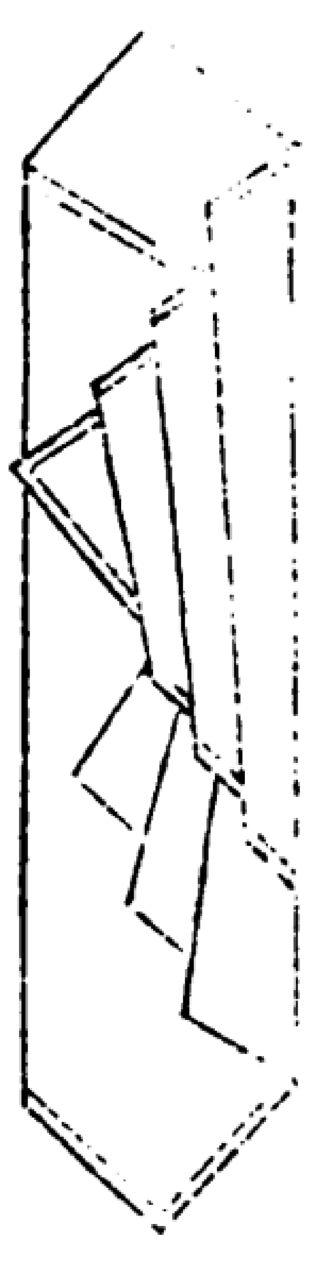
形紙出來上りて後、墨をかわかしおき、今用うべき紙をたち板の上におき、表に形紙をあて丶紙取を定め、次に裏になすべき紙を、たち板にのせて、今の紙と合せて、眞中をそつと糊にて止めおき、四方に五厘ほどづ丶匂ひをとりてたちおとし、

形紙を上よりあて、筋の上下上下へと、錐にて標をうちて、うらがへして、裏のかたより定木をあて、へらにて筋をつけて、箆と、左の手の指にてやは〳〵と折なしてつくるべし。

匂ひをとりて折りかけたる圖左の如し。

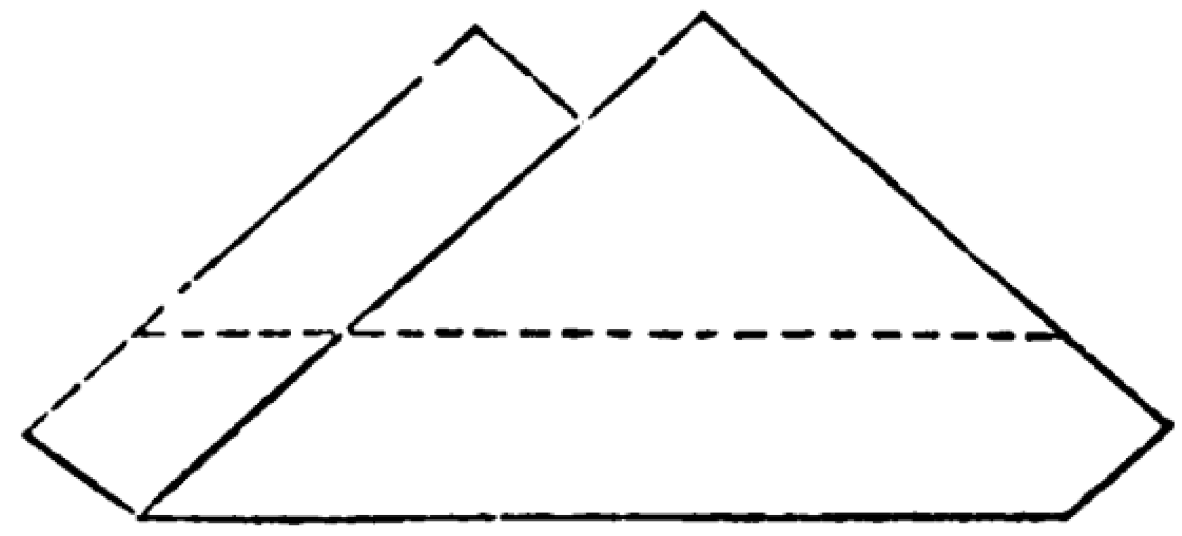


桑弓蓬矢包　こは年こしの祝に用うる包方なり。進物にもかく調へて用うるなり。

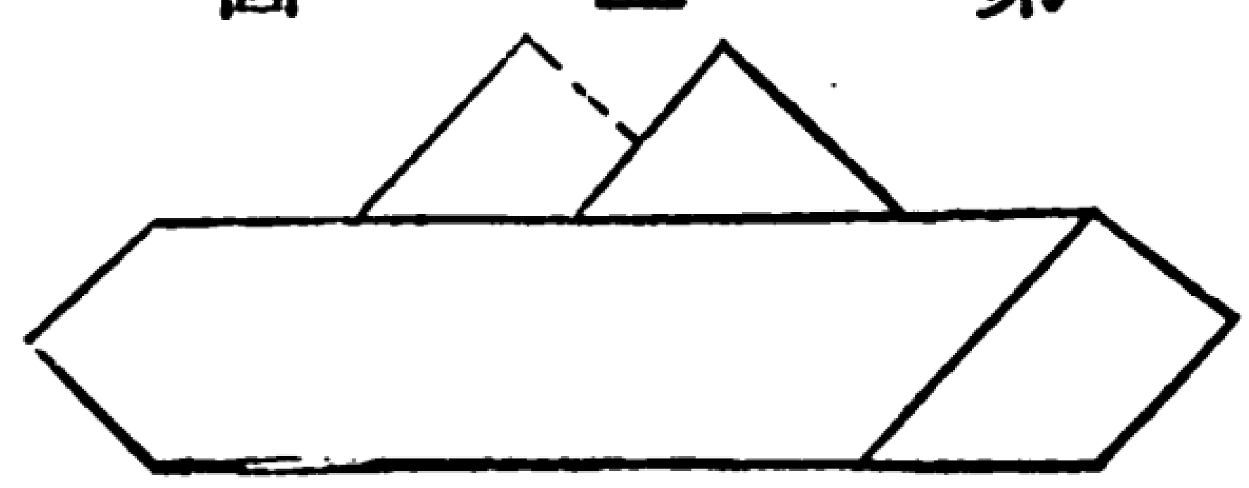


包方は前條の手順によりて考ふべし。紙とりも同じなれどはぶきてかゝげず。色紙を用うべし。

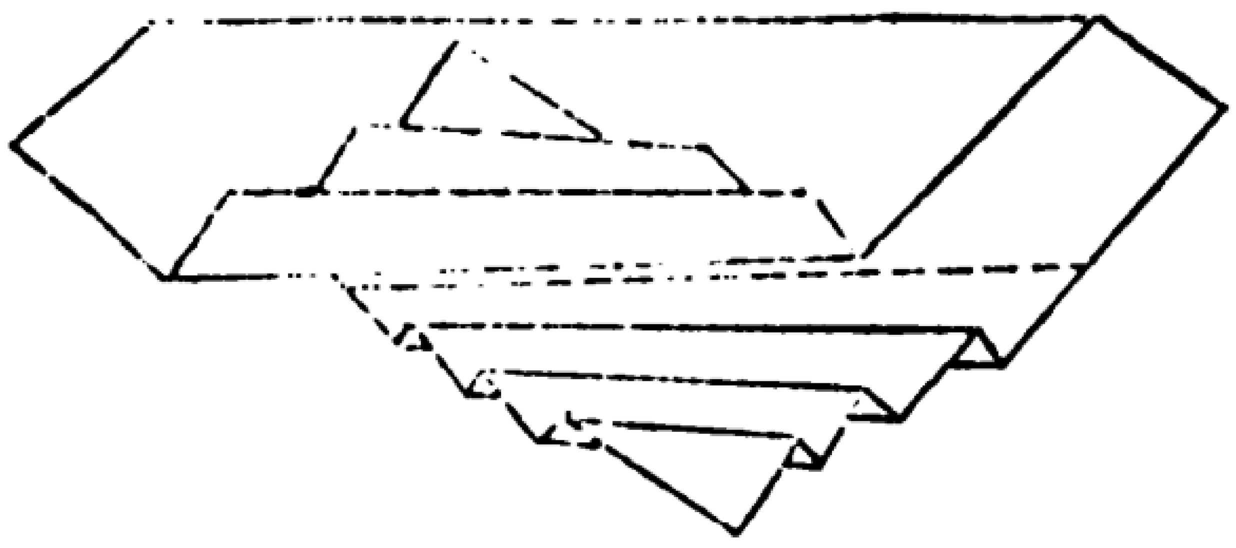
第一圖



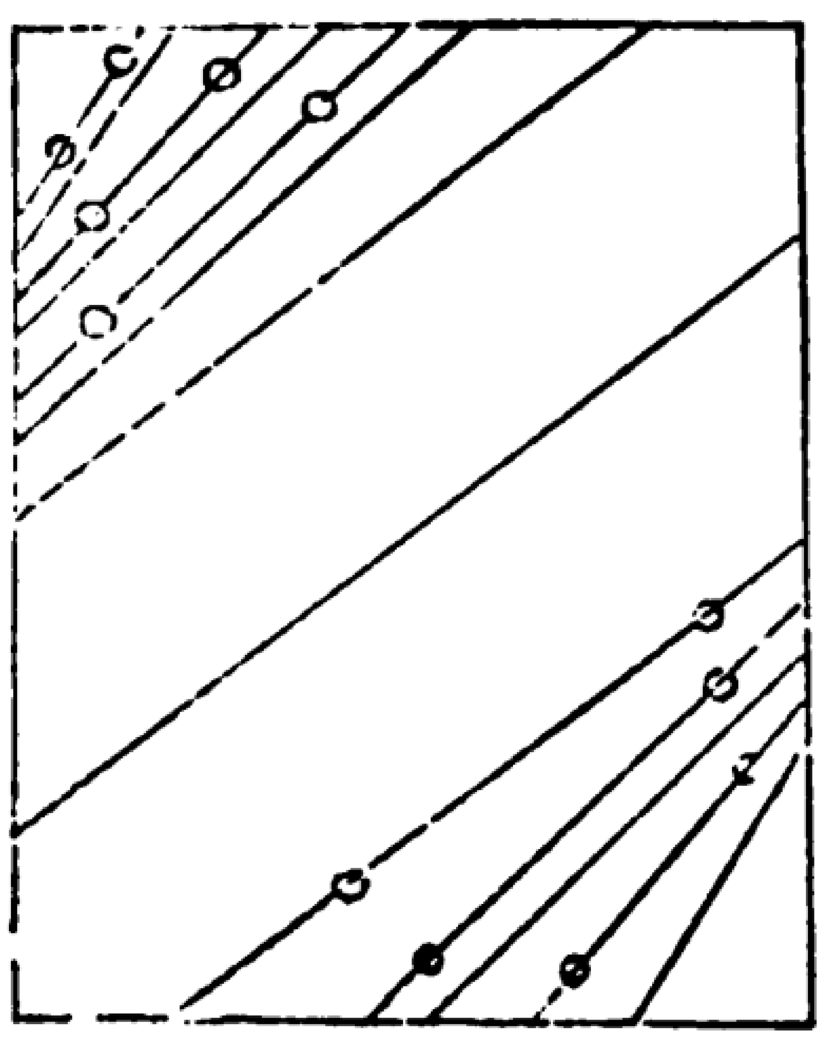
第二圖



第三圖

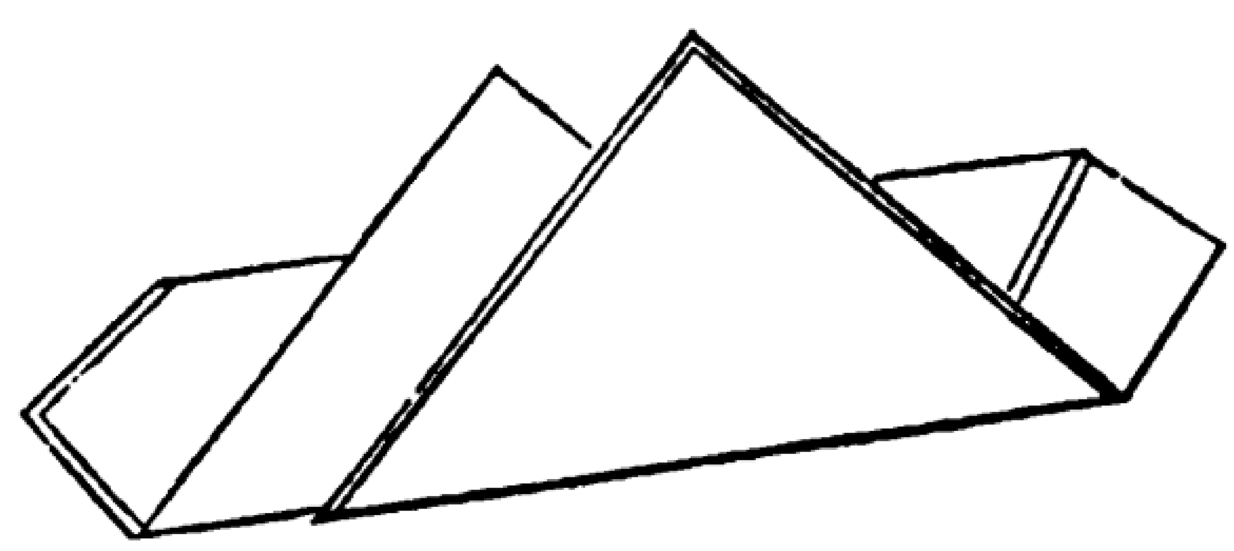


第四圖



包形

第一圖



茶の湯

茶禮初學

關　葦雄

次に亭主は、間鍋盃を客の數程盃臺に載せ脇

取盆に据ゑて持出、勝手口を明け（但し此時より勝手口明置なり）上　客の前に進み、臺共に上客に對し、御取廻しを願ふと云ふべし。上　客は次の客へ一禮して、上の盃を一ッ取、臺を次客へ廻すべし。亭主は上　客へ酌をなすべし、客は一應御銚子を此方へ借用すべくと云ふべし。先々と辭して酌を取べし。二客は次へ御先へと禮儀をなして盃を取、臺を又次へ廻す、亭主次客へ酌をなすこと上　客のごとし。段々如此末座に至るべし。一順繼たらば、銚子は酒數奇か、末座へ預け置、通ひ盆を持て入べし、末座は盃臺を預り、便宜の場所に置べし。衆客酒を好む人は遠慮なく自酌して呑べし、又相客互に酌を取合も妨げなし、間鍋酒竭たらば末座の方へ廻し、亭主出て持入易き處に置べし。次に亭主は飯繼を盆に載、蓋の上へ飯杓子を水に浸たる儘載て持出、上　客の前に進み、杓子を飯繼の中へ入、盆を差出して

飯の通ひをせん事を言べし。上　客は謙遜して、御鉢を此方へ借用すべしと答ふ。左様ならば御自由にと飯繼を向へ振向て上　客へ渡し、直に其通ひ盆にて、御汁を替ゆべしと盆を差出すべし。上　客は次客へ會釋して汁椀を出すべし。上　客とかりは獨り別にすべし。（但し是は上客を尊むの敬禮なり）次に客方は、上　客次客へ御先へと禮して、飯繼の蓋を取、次客へ廻し、二客三客と段々送り、末座に至り邪魔にならぬ處に置、飯繼廻り、飯掛終らば、此蓋を締むべし。（但し此飯繼に入たる飯は盛切を習とす、亭主方も其心して入置べし、先上　客始飯の付方は、飯繼を左手の掌に載、右手にて杓子を持、片端より、飯繼の中亂れざる樣注意して掛け廻すべし。普通は椀を持飯繼を下に置付る事なれ共、茶道にては反對なり。椀は折敷の上に有故、飯粒翻しても疊に落ちず、見苦敷無き良法也、次に亭主は脇取盆を持出、二客

以下の汁椀を一時に載持入るべし。次に椀盛を、先上客丈は一個別に、通ひ盆に載。持出て進むべし。(但し是も上客を尊ての敬禮なり)直に入、脇取盆へ三人或は四人分一同に載持出、二客以下順次に進むべし、末座に至り飯繼明てあらば、此盆に載持入るべし。(但し此通ひ中精神の働を活潑にして、氣轉を能くし、間鍋等明き居らば、持入り、酒を入足し、又時宜に寄りて陶磁器の酒繼を出すも無妨、又猪口も同様と心得べし、次に汁の盛替を持出る。是も上客は別、其外は一同なり。次に飯繼の再進を出すべし。此時は、飯は澤山に入るべし。(但し此時飯繼并に杓子能洗ひ淨め、飯粒付居らざる様注意すべし。前の如く持出、上客へ進め置べし、上客は又前の如く付廻すべし。二客以下も同斷(但し客方は此通ひの前後、間合見計、向付の味、汁の加減、椀盛の鹽梅、宜敷御調理御上手、結構に戴く、杯など謹で挨拶するを

茶禮の習とす。主方は何か一品差上度、實は色々心配も致候へ共本日は魚類も生憎拂底にて申譯無之、上り憎く御座るべし杯と云べし。主客互に世辭を言はよけれ共、餘り辨舌に任す時は、言葉多きは品すくなしと云俚諺もあれど、誠しやかに品行を謹むべし、其他の物語も俗談に不亘、夏は青綠子規、秋は菊花紅葉の咄、又は茶の咄に終るべし。席上寂寞ならざる様すべし。是は主客茶道熟練の度合にて、次第になし得る事難にあらざるべし。併又今一反汁を替ゆべし。(但し汁は一椀は是非替ゆるものなり、二椀目よりは隨意)次に燒物を出す、(但し是は尾鰭あるもの、或は切身、或は精進物其時々の臨氣に任かすと雖、何れも鉢に盛、盆に載、青竹の箸を添る)持出上客の前に進め、御取廻しを願ふと言ふべし、客方は美事なる御燒物、御叮寧になど挨拶すべし。此時亭主は間鍋、或は德利の空器あらば持下り、酒を足

すべし。飯繼も末座にわたり改め見て飲を足すべし。客方は何も彼も十分也、最早御世話に及ぜず、御亭主様も御相伴可被降と言べし。其時亭主は然らば御免を蒙り、御相伴仕るべし、御用も候はゞ御呼可被下と云て勝手口を締切べし。(續く

女禮

有住常子

千鳥掛膳出し様

これは、參らする人あまたの時に、膳を進むる様なり。まづ客の人數によりて、一行に出で、進むるに、入亂るゝ事なく、立歸る時にも、ついでよく入違ふ事なきを以て、千鳥掛の出し様とはいふなり。

○客人十八左右に居たまふ時には、一行に出で參らする、配膳人、

一、三、五、七、九、の人は、左の客に据ゑ、

二、四、六、八、十、の人は、右の客に据うるなり。

さて、引さがる時は、

十九八七六五四三二一と下座の方より、立ちて一行になりて立かへるなり。

膳を持出で、一行にあゆみゆきて、一番の人立止りて、右の足を、左足のさきの方へ横につけて、左足をそろへながら、左の方へ向ひて、

このとき二三四五六七八九十の人々も左右にむきたつべし。

すゝみて、左右を半足ひきて、跪きて、右膝をすこし引て居り、左膝をもすこし引て居りながら膳を下におきて、左右の手にて押すゝめて參らすべし。

このとき、二番の人は、左足を右足の爪先につけて、右に向ひたちて、すゝみて參らすべし。

三は左、四は右、五は左、六は右、七は左、八は右、九は左、十は右と同時に進むべし。おそきはやきあらんは見ぐるしききはみなれぞ、能々心すべき事な

り。

さて左右の手を引て、膝頭につけながら、右をすこし引てつまだち、左をすこし引てつまだち、またすこし右左と引て、前に立止りたりし所に至りて、下座の方左の人は左の膝、下座なり。右の人は右の膝、下座なり。

の膝を少しうかめて、左にこしをひねりて、下座にめぐりて、一行になりて、

右の人は右の方へめぐる事と知るべし。

立歸りゆくなり。

これは、むづかしき事にはわらねど、多人數にて、そろひたるが、肝要なれど、よく／＼ならふべき箇條なり。

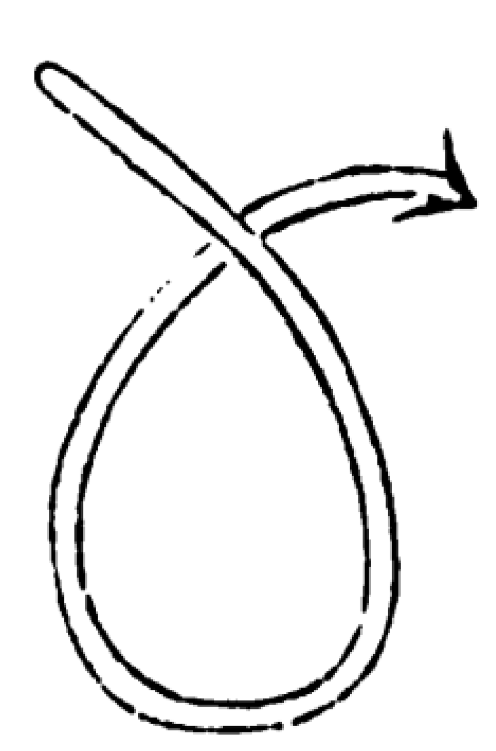


新撰 結物百種

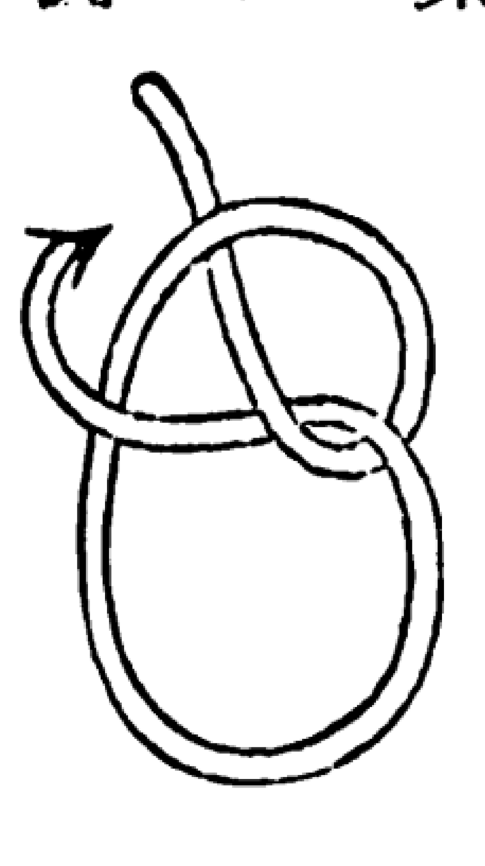
百草庵一無

つめ結12　是ははた結と同じく、機れる時、糸の切れたるを如圖して結びつくる也。當世縫物する時糸の尻を結ぶに至極便利なるを以て、こゝに掲ぐ。

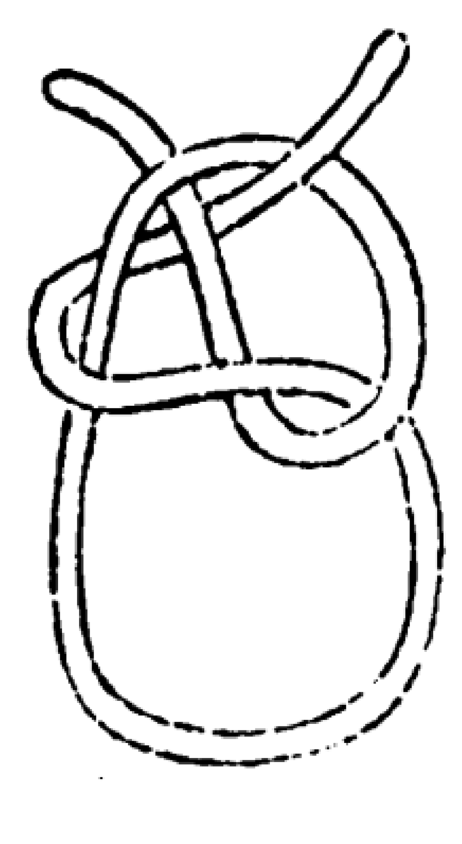
第一圖



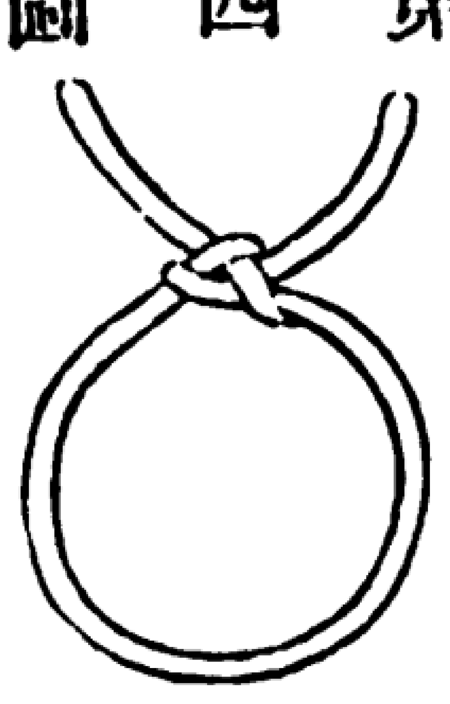
第二圖



第三圖



第四圖



結び上り

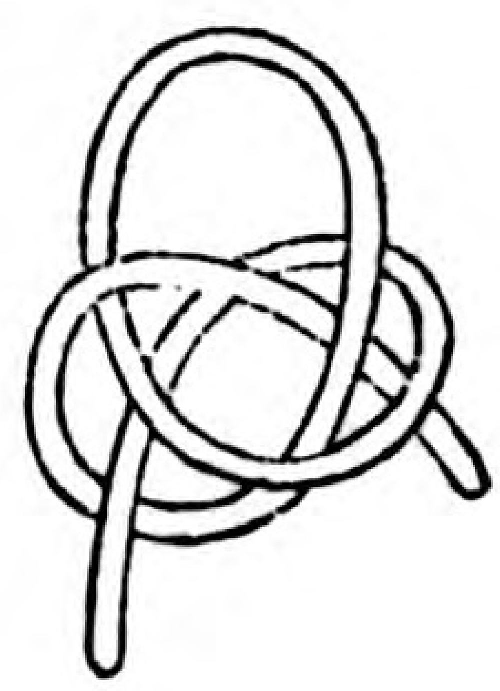
諸結13　もろわ、或は蜻蛉結の本名など云ふ事わ

れど、兩はしに力を付る紐には何に用ゐても苦しからず、又、片結、諸結、つめ結、こま結、思ひ結等は、結法の基源といふ説もあれど、是を並べわげんも故なきにあらざるべし。

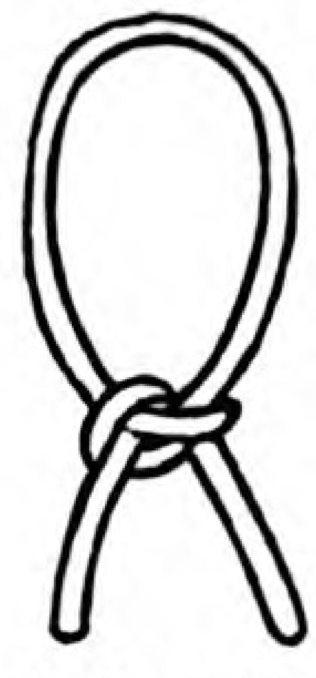
第一圖



第二圖



第三圖



結び上り



たちぬひ

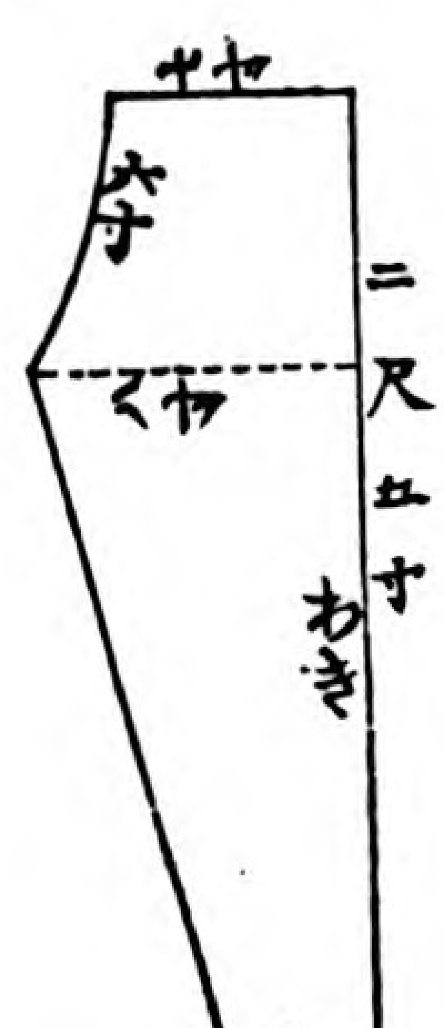
西山たい子

（九十七）　ズボン下

追ひ〳〵冷氣を感ずれど、ズボン下シャツ等の用意こそ肝要なれ。シャツは先きにものしたれど、此處はズボン下をものすなり。

そのたち方

まへ股



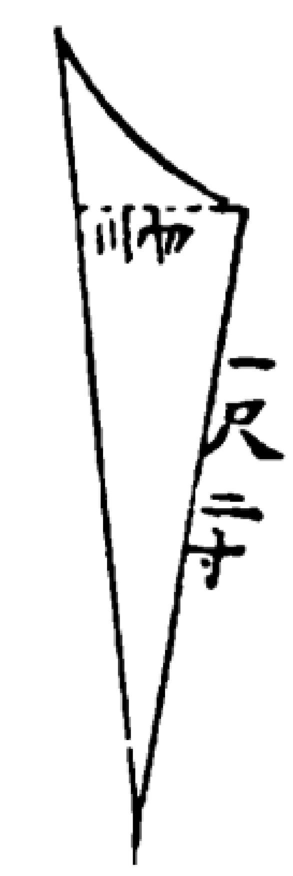
うしろ



腹まはり



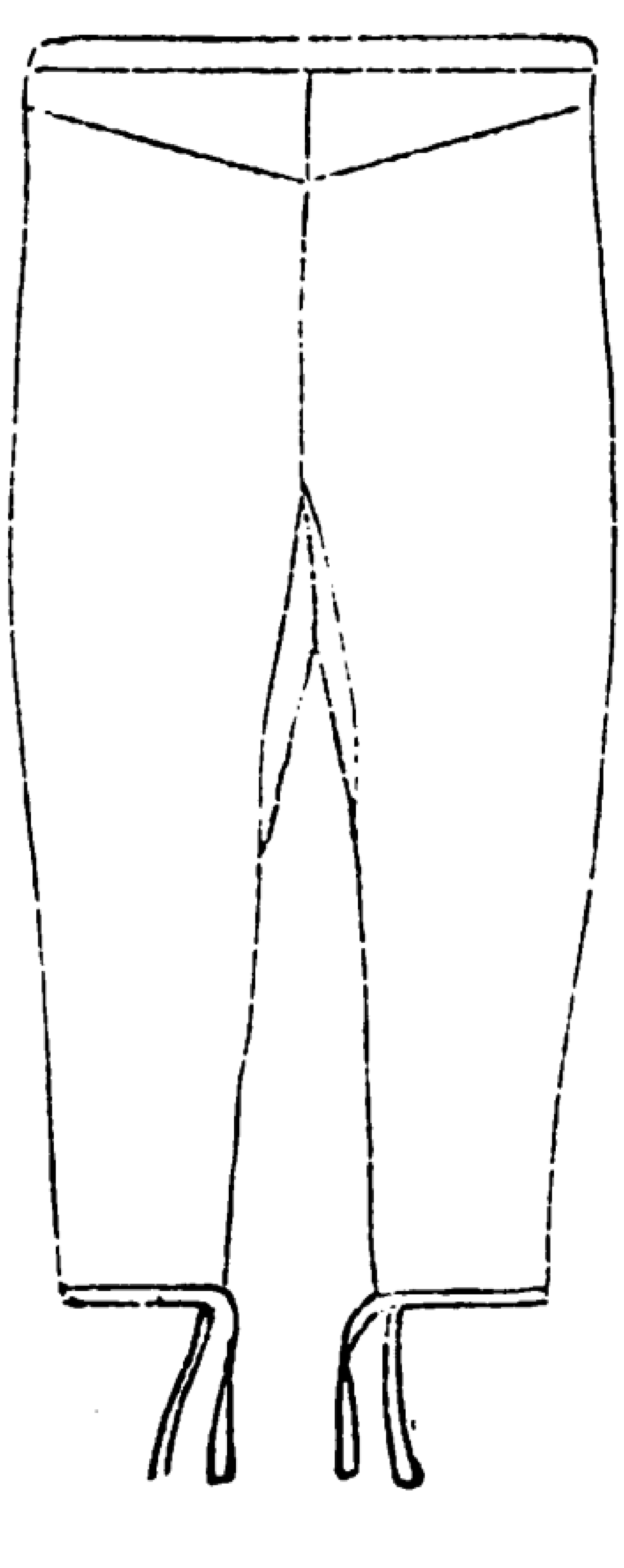
まち



これにては一足のものなれど、かやうの形のものを各二つづゝ裁つべし。其の他、幅一寸二三分、長さ五尺ばかりの紐切、長さ一尺五六寸の尤も細き紐切とを要す。

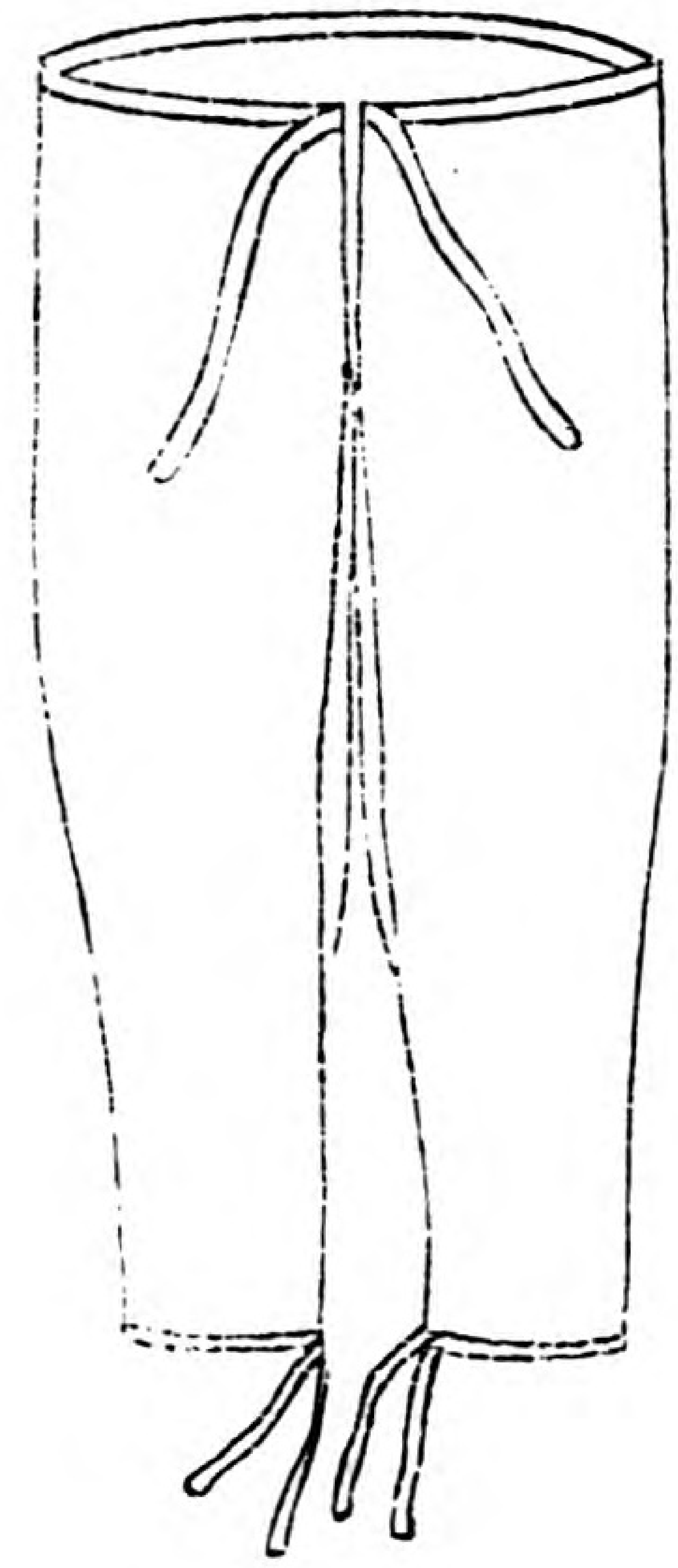
其の縫ひ方は、まづ、前の切の上に、腹まはりの切をみじかき方を脇の方になしてぬひつけ、後の切と合せて、脇を眞直にぬひ、(但し下より三分ばかり上りたる處を六分ばかりあけおくべし。それに紐通すなり)それより襠の切を取り、眞直ぐなる方を、幅廣き方を上にして、前の尤も幅廣き處より下にぬひつけ、斜めなる方を後の尤も幅廣き所より下に縫ひつけ、また襠下を、後前の切を合せてぬふべし。但しかゝとの方を三寸五分ばかりあけおき、其のあけある所を裏がはへ三折にかへして絎けつけ、又一尺五六寸の紐切を通して、下をも絎けるべし。さすれば、一本の足を入るべき袋となる、左樣に左右とも同じく縫ひおき、さて左右の切を合せ、うしろの方を六寸五分ばかりあけおきて、前より股下をぬひつけるべし。但し、はじめ、表よりぬひ、引かへして又ぬひ、例の袋ぬひとすべし。それより紐切を左の方を少し長くして、腹まはりの表側へくるりと縫ひつけ、裏にて絎るべし。

ズボン下前



そのぬひ上り

同うしろ



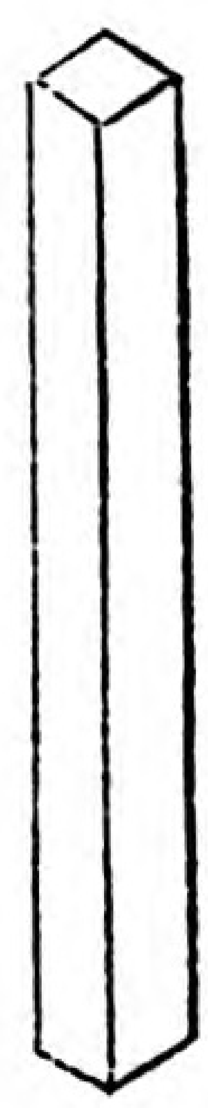
割烹

石井泰次郎

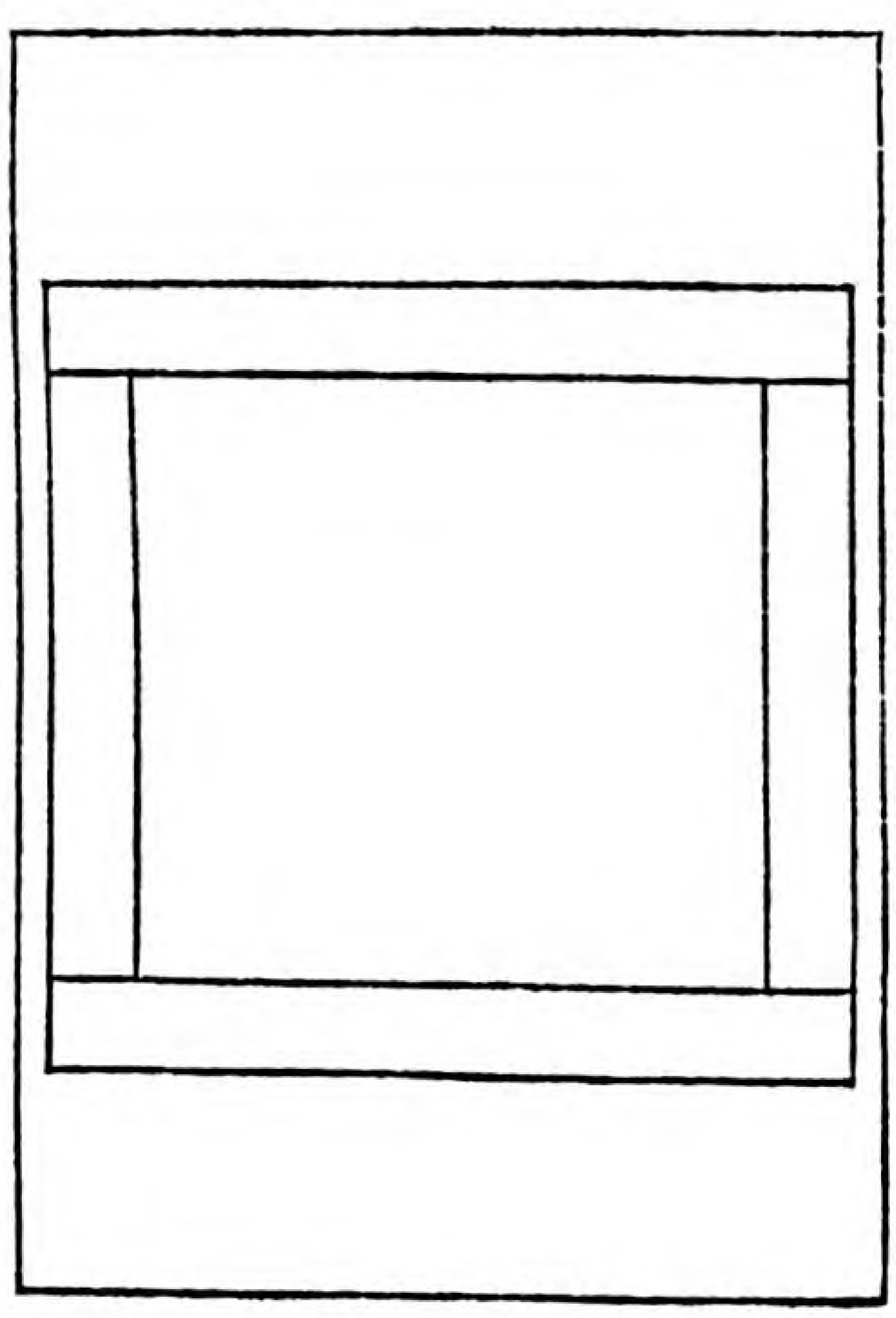
椀　白菊豆腐
　　くるま海老
　　菠薐草
　　松葉柚子

白菊豆腐つくりかた

これをきく豆腐といふは、其形菊の花に似たれはなり。つくるに、まづ三四寸程の幅の板の、長六七寸位なるに、大根を三四分の厚さに細長く角にきりて、板の幅に合せて、四寸ならべ、向前と、左右とに角形に組み合せて載せおき、



大根きりたる圖

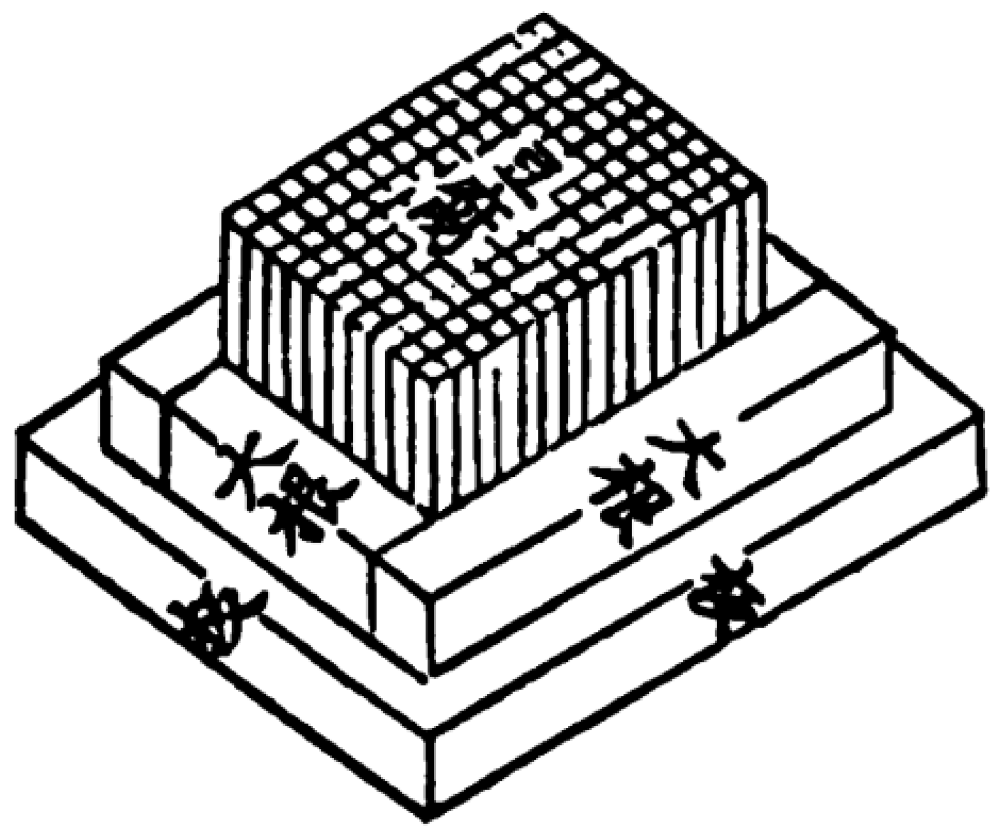


大根角形に組みて板に載せたる圖

大根、厚サ三四分、幅ハ豆腐の大小によりて五六分にもなすべし。

さて豆腐をよき程に切りて、薄刃庖丁刀にてすくひ、手をそへて、大根のわくの内へ入るなり。

わくに入れてきりかたなしたる圖



薄刃庖丁刄を持ちて、豆腐をそつとおさへて竪横に、細かく切目を、大根の上まで入るゝなり。

こをきる時、薄刃庖丁刀の刄に、酢をぬり〳〵して、きる事肝要なりとしるべし。

きりめつけ終らば、板共に、水を器に入置たるなかへ入れて、しづかに板をぬきとるべし。

板をぬきて、大根をとりわけて、右の手にて、切たる豆腐を下よりうけて、やは〳〵ともたげもたげして、うごかすべし、動かすに隨ひて、豆腐ひらきて眞に白粥の花の如くなるなり。

かくなし置きて、大鍋に湯をわかし、すこしわきかゝらんとする時、手を入るも入得る程の時に、豆腐をそつと取上て、其鍋に入れて、煮たゝするなり。

車海老

こはさいまき海老を用うるもよろし、車海老、洗ひて、ゆでゝ、からをとりて、脊わたをぬき、また二ッに、庖丁刀にてわりて用ゐるなり。

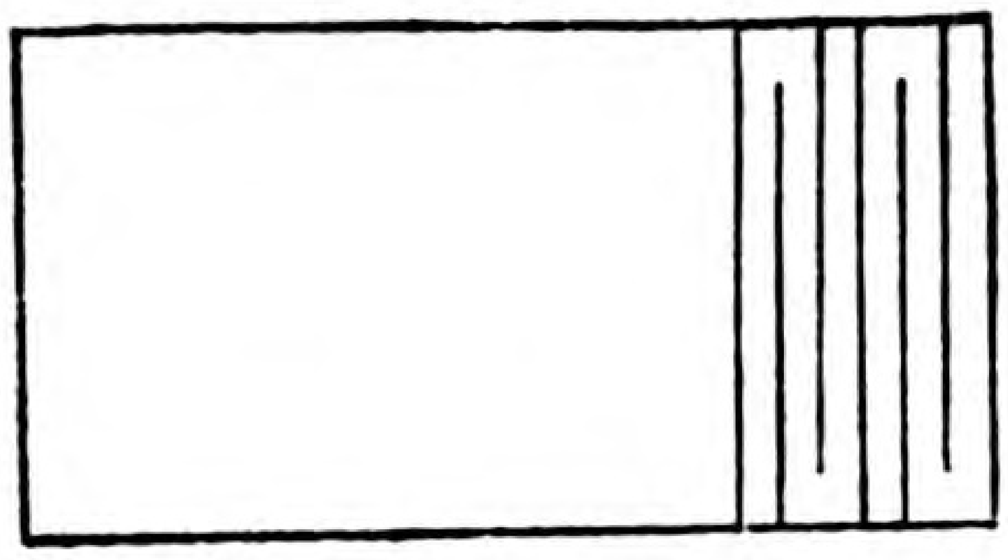
菠薐草

よく洗ひて、あしき葉を撰り捨て、よき程に束ねて、(束ぬる時、根元をそろへおくべし)ゆをにたて置たる鍋に入れて、ゆでゝ、ゆだりし時、鍋をおろし、菠薐草を水にとりて、ひやすべし。さてまた、束ねたる竹の皮をほどきて、ふたゝびそろへ、莖の元より、根をのぞきて、三ッに切りて、用うるなり。

松葉柚子

柚子を、洗ひて、色よきをえらみて、薄刃庖丁刀にて

廻りをくるりとむきて、上下を切落して、ウラの方を平にそぎとりて長をきめて、圖の如く切方すべし。





(黒き所は外皮にして、白きは皮の内部を示したるなり。)

右三種椀に仕立やう

かつをだし

かつをを洗ひて、上面をとりさりて、けづりて、湯をわかしたる鍋にいれて、すこし煮て、鍋を上て、だし漉にてこして用うべし。鍋にいれて煎ずる時、浮びたる泡をとりさるべし。

にぎり

これは味淋酒をにかへし、につめて用うるをいふ。

二人まへづゝ作り方

○だしを二寸口經ほどの小びさくにて二杯いれ、醤油をすこし入れ、にぎりをすこし入れ、食鹽をすこし入れ、煮たてゝ用うべし。

この入れたる分量は言葉にてはかきつけがたし、自らあぢはひて定むる物なればなり。

○また別に右よりすこし辛めなる露をつくりおくべし。是へ、今椀にもるべき、車海老、菠薐草を其かずづゝ漬おくなり。

さて菊豆腐を、網抄子にて、湯より取あけ、能々湯を切りて、別の露のあたゝめたるうちに抄子ごと入れて、又露を切りて、椀にもるべし。くづれさるやう注意してなすべし。

車海老を三卷ほどもりそへ、菠薐草を、一撮へもりそへて、松葉柚子を上におきて、つくりおきたる熱き露

を入れて、椀をとゝなふるなり。如左圖。



だいところ

一 煮物

蛸に、さと芋、うま煮○蛸のやはらか煮に、じねん薯、うま煮○鰹切身に、茄子のてり煮○川はぜに、大根うま煮○いなだの酢煮に、ずゐきの煮しめ○鮎の煮びたしに、新くりの甘煮○あかいに、里芋、蓮根のうま煮○めいた鰈に、大根のうま煮○あなごに、くわい、牛蒡うま煮○蛤の時雨煮に、生姜。

一 和物

里芋ゆでゝ、芥子の味噌あへ○蛤の剝身に、小松菜ゆでゝ芥子あへ○ずゐきに、枝豆、胡麻酢あへ○人參、こんにやく、味付て白あへ○人參に、大根、せんに切、もみて胡麻酢あへ○蓮根、やはらかにゆでゝ、胡麻味噌あへ○梨子をうすくへぎて、山葵あへ○百合の根ゆでゝ梅肉あへ。

一 汁

初茸につまみな○里いものこ、生推茸○はらゝ子に豆腐○芝海老にうちわ茄子○松茸に冬瓜○焼はせに、銀杏、大根○むかごに、しらが牛蒡○しめじ茸に、茄子くし形○さつま薯の角切に、さやいんげん。



學園

秀歌集

鹽井正男

○

大井川岩波高しいかだしよ
　岸の紅葉にあからめなせそ

○之は金葉集秋の部の歌にて、大納言經信が、宇治前大政大臣大井川にまかりけるともにまかりて、水邊紅葉と云へる事をよめるなり○大井川は山城の國にあるなり。いかだしよ。山より木を伐り、それを遠く出すに河などある處にては、其の伐りたる木を縄もてあみ、舟の如く河に浮べたるが筏にて、船の如く棹もて漕ぐものなれど、其漕ぐ人を筏師とは云ふなり。あからめなせそ。あからめは外目と云ふ事にて、なせそは、するなかれと云ふ意にて、外目に見るなかれ、よく岸の紅葉に目をとゞめて、油斷して筏をくつがへす故との意なり。

○一首の意は、大井川の岩波が大層高く起つことである。あはれ、筏師よ、さやうに波高くたつ故、いと危し。如何に紅葉が美はしけれどとて、それに見とれては大變也。後世、「井戸端の櫻あぶなし酒の醉」と云へるも、之と同工異曲にして、紅葉をおもひ、且つ人を思ふの情掬すべし。又紅葉、急湍に映じ、舟師瓢然としてその間を下る情景、目睹するが如く、いとめでたきうた也。

○

川霧の立ちこめつれど高瀬舟
　分けゆく棹の音のみぞする

○之も同集同部に、藤原行家が、河ぎりをよめるなり。○霧に、煙の如きもの、たちのぼりて、行くさ

きも見えぬものを云ふ。川霧、山ぎり、朝ぎり、夕ぎり、皆同じ霧にて、川にたつを川霧、山に立つを山ぎり、朝立つを朝霧、夕にたつを夕ぎりに呼ぶなり。立ちこめたれど。すきまなく立ちたるなり。高瀬舟、少くして深き一種の舟、後世いふ高瀬舟は、又別也。分けゆく棹、漕ぎゆく棹と同じ意にて、漕ぐは水を分けゆくやう見ゆれど、分けゆくと云へるなり。

○一首の意は、川ぎりがすき間なく立ちこめたる故に、何處を漕ぎ行くか漕ぐ舟は見えずして漕ぎ行く棹の音のかり聞ゆるとの意にて、川霧のたちこめたるさま深うもよみなしたる歌なり。

○

松が根に衣かたしき夜もすがら
　詠むる月を妹見るらんか

○之も同集同部に、月の前の旅宿と云へる事を修理大夫顯季がよみたる歌なり。之は古風萬葉の歌の体にて、杜子美月夜詩に「今夜鄜州月閨中只獨看」などの意におのづから通へり。閨中は妻を指したるにて、此の歌の、妹見るらんか、妹、即ち妻をさしたるなり。片しくは、一人にて臥する時に用ゆる語也。古は夫妻、その二人の衣をあはせて敷きたるものにて、後、朝の別れを衣々の別といふは、これより出でたる也。

○一首の意は、松の根に、衣を片しきて臥し、夜もすがら、いねもせず、空なる月にいよ〳〵故郷のことを思ひ忍びて、かやうに詠め居る月を、故郷の妻も又此の月を見て居るだらうか、そして我も故郷を思ふ、彼もまた我が旅宿を思ひをるだらうか、たれもひ居るだらうと想像せし歌にて、さらでも故郷思はるゝ旅宿に、月をながめ、いよ〳〵忍ぶ心に、妻もまた此の月を見て我を思ふらんとながめたる、いとあはれに情あつき歌なり。

○

何事に秋果てながら小男鹿の
　思ひかへして妻をこふらむ

○之も同集冬の部に十月十日頃に鹿の鳴きけるを聞きて法印光清のよめる歌なり。「何事に」は、「秋果てながら」の下に入れて見るべし。秋はてながら。九月までを秋とすれど、之は十月十日なれど、もはや秋も果てたものをに、鹿の中のあきはてたるとをひきかけよみし歌なり。

○一首の意は、最早、秋もはて鹿の中も秋はてて、つまなど呼びもすまじき今日此の頃になりて、何事に思ひかへして、小男鹿の妻を戀ひ呼ぶのだらうとの意にて、もはや妻鹿のつれなく、男鹿もあきはてぬるを、なほ思ひ切れず、思ひかへして呼ぶかと云ふ意をふくめたる、聞くまゝに何となう身にしみ露こぼるゝ心地せらる。

○

初霜もおきにけらしな今朝見れど
　野べの淺茅も色づきにけり

○之は詞花集秋の部にて、大中臣能宣朝臣の初霜をよめるなり。○おきにけらしな、おいたらしいわいと想像歎息したるなり。色づきにけり、色が變つて見ゆるとの意なり。

○一首の意は、今朝見れど、野べの淺茅も色が變つてきたが、此の色のかはりしにつけても、初霜も置たらしいわいと歎息せし歌にて、霜枯にならむとするさま見ゆるあはれの歌なり。

源氏物語講義（十四）

下田義天類講義
山川　鵜一筆記

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御つかひの行きかふ程もなきに、猶いぶせさをかぎりなくのたまはせつるを、夜中うち過ぐる

ほどになむ、たゞ果てたまひぬるとてなきさわげど、御使者もいとあへなくてかへり參りぬ。きこし召す御心まどひ、なに事もわかれず、こもりおはします。

是より話二つに分れて、宮中に御在します陛下のことゝ、二條の里亭へ引取りたまへる御息所のことゝを、交互に書きつらぬるなり。

○御胸のみつとふたがりて　御息所御退出の後、陛下には御悲嘆のあまり、御胸がはたとせかり塞りませるなり。

○つゆまどろまれず云々　夜の御殿に入らせられても一向に假睡もできたまはで、短き夏の夜をも明しわびて居らせられたりとなり。露はつゆばかりの畧語にて、少しばかりもの意なり。まどろむとは、しばしとろ〳〵と睡むるをいふ。

○御使のゆきかふほどもなきに　御使は病氣御見舞として差遣はさるゝ陛下の御勅使なり。ゆきかふはゆき通ふなり。たとへば第一の使者を立て、その復命もなき内に、更に第二の使者を立て、第三の使者を出立たすとやうに、使者が宮中と二條の里亭との間を往復する間もあらざるになり。

○猶いぶせさをかぎりなくのたまはせつるを　いぶせさは心の晴れやらぬこと、即不案心なるよしなり。斯樣に間斷なき御慰問の勅使を立てさせられても、それでも猶やはり心許なく不案心の由を、幾度といふ限りもなく仰せつゞけて御座つたのになり。

○夜中うちすぐるほどになむ云々　これは二條の里亭にての事なり。使者に勅命を奉じて、二條の里亭へ行きて見るに、御息所は夜半過ぐる頃終に事斷れて息を引取つたといひて附きそふ女房たちの泣きわめく故に、勅使は張合拔がして、手を空しくして宮中へ立戻つたとなり。あへなくは張合ぬけしたるをいふ。陛下の御懇命を傳へむとしたることも、そのかひなくなりたれど、張合ぬけのしたるなり。さて桐

壺御息所は、本篇中に在りては骨子たるべき人物なり。されど、その御臨終を叙するに當りては、今少しく詳密なる筆を要したき感あり。こゝに只夜中うちすぐるほどになむ絶え果てたまひぬるとて云々と、僅に客觀より叙し去りて筆を措きたるは、餘りに物足らぬ心地す。されど、深く思へど、これ大に理由の存ずる事にて、却りて筆力の凡ならぬものあるを覺ゆ。そはその臨終の樣は、草子の裏面にひめおきて、讀むものをして、其の現狀の光景は果して如何なりけむと、その想像の力を深からしめて、其の心中竊に暗涙にむせびしめむとする作者の下心なれぞなり。限りあらむ道にも、おくれさき立たじと契らせたまへる　陛下の御盟は、終にあだとなりて、獨りおくれ給へる御嘆を察し奉れど、この御息所をせめても引きとゞめまほしき同情の念慮は、心あるものゝ、忍び難き所なるべし。既に其の脚色のかゝる悲慘をきはめたる者なるが故に、其の臨終に至りては、限ある筆もてこれを叙述せむよりは、寧言はぬ所に無限の餘意を活動せしむるには若かず。式部は即こゝを思ふが故に、この用意をなせるなりけり見む人よくよく心を止むべし。

○聞し召す御心まどひ、何事もおぼしめしわかれず
斯くと聞しめして、陛下は一層の御心まどひであらせられて、何事の御分別もつきたまはぬなり。

○こもりおはします、御悲嘆のあまりに深く簾を垂れたまひて、政治なども御執りあそばされぬなり。

以上を括りて申せど、

御息所の御退出後、陛下は悲嘆の涙にかきくれて、御胸のみがはたと塞り給ひて、一寸の程もとろとろとの御假睡だにあそばされず。短き夏の夜一夜を明しかねさせて御座つた。其の間に立つ居つし給ひて叡慮を痛めさせられ、御使者の行きて歸る程もなきに其の間にも不安心だと仰せられて御座つたのを、其のかひもなく、二條の里亭にては、御息所は醫療其

の功を奏せず、夜中過ぎに遂に果敢なく息を引取られたといひて、看護の人々の泣き喧ぐ故、勅使も張合ぬけて、すご／＼宮中へ立戻つて、ありつることゞもを奏聞に及んだ。斯くと聞しめし給へる陛下は一層の御心まどひにあらせられて、何事も夢のやうにて、是非善惡の御分別もつきたまはず。奥深く御引籠りあそばされて、御政治向のことなども、トント御構ひあそばされぬことゝなられた。

皇子は、かくてもいと御らんぜまほしけれど、斯かる程に侍ひたまふ例なきことなれど、罷出たまひなむとす。何事かあらむともおもほしたらず、さぶらふ人々のなき惑ひ、上も御なみだのひまなく流れおはしますを、怪しとみたてまつりたまへるを、宜しきことにだに、かゝるわかれのかなしからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。

○皇子はかくても　かくてもは萬事を放擲し給ふ程御愁傷あらせらるゝ中にもなり。斯樣に世事を物憂しとしたまひても、御息所の忘片身なる光君をぞ御覧ぜまほしく思召すなり。

○かゝるほどに侍ひたまふ例なきことなれど　かゝるほどにとは光君の母の忌服にかゝりたる程のことをいふ、忌服令の制に、親の喪には五十日の忌、十三ケ月の服とあり、後世の制に、七歳未滿は忌服に預らずとあるを誤解して、七歳未滿の間は親の喪にも預らずといふ意に解したるより、舊註どもに、醍醐天皇前後の服忌令を云々せるは誤なり。こは七歳未滿のものゝ死には其の喪に預らずといふ意なり。人の其の父母兄姉の忌服に預るべきは、人倫の當に然るべき所なり。決して老弱を撰ぶべきにあらず。親亡くなりても、七歳未滿の小兒は其の喪に預らずといふは悖徳たるを免れざるべし。即源氏君は母の死に依りて喪に服したまふなり。故に宮中を退きて籠居したまふなり。陛下は、御息所の片身に、せめて光君を御側近く止めおきたくおぼしめせど、か

ゝる時、即忌服にかゝれる時、宮中に侍るは、古今其の類例のなきことなれど、力及ばず、母御息所の里亭二條へ退出せむとしたまふなり。

○何事かあらむともおもほしたらず　源氏の御有樣なり。君は當年三歲の御齡なり。僅に片言位をのたまふ程にて、まだ物の善惡も知りたまはぬ程なるべし生の母のなくなり給へりとて、人々の立さわぐを、何事のあることかとも思召されぬなり。

○侍ふ人々のなきまどひ、うへも御淚の隙なく流れたまふを、あやしとみたてまつりたまへるを　この一句少しきこえ難き所あり。小櫛の補遺に、＝を文字下に係る所なし。若くは衍字かといへり。新釋には脫文あるべしと疑はれたれども、脫文ありとしては補ふに困難なれど、こゝは補遺にいへるごとく＝を文字を衍字として削り去り「みたてまつりたまへり」と改むべし、近侍の人々や、陛下の嘆き給ふ狀を御覽じ給ひて、怪しとおぼしめし給ふよしなり。

御幼弱の御さま誠にしかあるべしと哀なり。評釋にあやしと見奉りて云々を、この語悲びの情を盡したり。うち讀むもの腸を斷たるゝこゝちすといへるはさることなり。

○よろしきことにだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを云々　よろしきことは、祝事悅事等の宜しきことなり。祝事悅事等に行くとて、小兒を出拔きて行くことあり。たとひさやうなる吉事の時にても、頑是なき小兒をれきざりにして行くことは哀しく無いことはない。隨分哀しきものである。然るを、ましてこれは、親子一世の御死別なれど、孤兒となりたまへる皇子の御樣が憫然の至りであるとなり。いふかひなしは俗にいふ言ひ樣がなく哀しきなり。詮方なきよしなり。

以上をとり總べていへど、陛下は今は世を物憂しと思召し、宮中深く籠りれはしましながらも、御息所の忘形身なる光君をむかく

ても御覽じたくればしめせど、親の服喪中に、其の子の宮中に侍候し給ふ事は、古今例のなきことなれど力及ばず、光君は母の里亭二條の住家へ退出の御用意をあそばさる。唯今はまだ三歳の御幼弱にわはしませど、親子一世のいまはに際しても、何事のあることゝも思召されず。御近昵の人々の悲嘆にくれ、陛下も御涙の乾きたまふ隙なく、泣きくづをれてわはしますを、却りて不思議想に見て御座る。親子の離別は、吉事の爲に一寸他行するにも悲しからぬことはなきものであるのに、まして只今は生死の長き離別なるに、母の顏をさへ知らぬ程なれど、御孤兒と御なりあそばす光君の御狀、誠に御不憫のいたりであるとなり。

漢文學講義（十四）

大林弘一郎

十二、百合傳（下）

賴襄

百合自是益自脩潔。一意撫養其女。子母煢煢相依爲命。女稍長。又有才情。名曰阿町。百合常謂之曰。汝父士人也。汝珍惜其女兒身。勿自輕視也。常欲爲得一佳婿無適意者。有池生又住葛原賣書畫爲活。貧不自給人皆易之。百合獨心奇之。終以女與之。女又習其夫所爲。頗解繪事。夫妻終日伸紙舐毫。以琴酒自娛。釜既生塵。晏如也。百合視而喜曰。吾事畢矣。無幾何病死。

第三段　此の段は、百合が、徳山某と別れし後の事とその女町子の事とを述べ、百合の節操と、その女の婿を撰びし眼識とをあらはしたるなり。前段にいへる如く、百合は、徳山某の好意を辭して、之に從はず、

京に留まりて、益、その身を愼み、自、行を潔くし修めて、たゞ一意に、その女を愛でいつくしみ養ひ、親子二人にて、煢々と、ものさびしく依り恃む所もなく、母子相互にたのみとして、年月を送りけるが、女子稍生長して、また、母に似て、才ありき。名を阿町といへり。百合は、之を愛して、常に、謂ひ聞かするやうは、「汝の父は士なれど、汝も、其の身を珍重にして、自、輕しめ侮り、其の身を汚し辱むることをなせそ。」とて、戒めけり。また、その爲に佳き婿を得んと思へども、心にかなへるものもなかりしに、その頃、同じ葛原に住へる池野秋平といふものあり、書畵をかきて之を賣り、生活をなしけれども、貧にして、常に、困窮して居たりしかど、人皆、之を侮りけり、百合は、獨、心の中に、秋平が行を奇と思ひ、他日、必、名をあらはす人ならんとて、終にその女をぞ秋平に妻はせたり。

かくて、阿町は、秋平の妻となりけるが、また、風流を好み、常にその夫の爲せることを見習ひて、繪をかき、夫婦ともに、終日、紙をのべ筆を採りて、書畵をかき琴を彈じ酒を酌みて娯みとなし、釜などに塵の積れることなどあるも、晏如として、平氣にてありき。百合この有樣を見て、喜びていふやう、「これにて吾が望もかなひぬ。思ひおくことなし。」と。いく程もなく病みて沒しぬ。

後數十年。有一士人。自關東來。問池生。置其僕從而入。會生他適。獨妻在。出應之門。士人問曰。夫人池君之室乎。妻曰。然。然則吾與夫人。爲同父異母兄弟。吾德山某之子也。吾欲與夫人相見久矣。山河阻絕。徒有神馳。今幸因公事來此。得遂宿志。請自今數相往來。以敍匪他之情耳。妻曰。妾亦聞此於亡母矣。然亡母誡妾。愼勿相通問。今雖荷厚意。不敢違遺命矣。士人失意而去。」第四段

此の段は、阿町の操行あることをあらはさんとて、德山の子との問答のさまを記したるなり。

百合歿して後、數十とせを經て、ある時、一の士あり、關東より來りて、池野秋平の宅を尋ね、その傔從、即、供の者を外に待たせ置きて入りて案内を乞へり。その時、たま〳〵秋平は他出してあらず、ひとり妻の阿町のみ家にありしかど、出で來りて、應對をなせり、士人問うていふやう「夫人は池君の奥方なるか。」と。妻こたへていはく「然り。」と。士人いはく「さらば吾が身と夫人とは、同父にして異母の兄弟なり。吾は江戸の德山某が子なり。吾、夫人と相見んと欲せしこと、年久しかりしも、遠く地を隔て、山河のへだて居る故に、たゞ空く神を馳するのみにして、心にかゝりしが、今は幸に公事の都合にて、此の地に來りしかた、こゝに、年來の宿志を遂ぐることを得たりしなり。請ふ、今日より、度々往來して、兄弟の好を通じ、敢て他意なき情を敘でをさめんことを。」と。阿町こたへていへるやう、「妾も、この事を、亡母より聞き侍りき。されど、母は妾をいましめて、かたく愼みて、音問を通はすことをなせぞといへりき。今日、君の厚き志をもて、好を修めんことを仰せらるとも、敢て、母の遺言には、違背いたすまじと思ひ定めぬ。」とて、遂に、その義を失はざりき。士人は、その意を果さずして去りきといふ。

德山氏が數年の間、思ひつゞけて、相見んとしたる情は、まことに、兄弟の緣あるを以てなり。阿町の之を辭して、相親しまざりしは、義に於いて、相通問すべからずと母の遺言せし所を、固くとりて背かざりしなり。世の常の女子ならんには、前後を忘れて、喜び親しむべかりしを、町女の固く義を守れるは、まことに、比なきことゝ云ふべし。これ、また、百合の性質の遺傳せしものには非ざるか。

池生後終以二書畫一成レ名。海内稱二大雅先生一。

先生之配玉闌。與レ之齋レ名。人比二之伯鸞之孟光一。實爲二百合所一レ生。百合有二遺集一。與二穀葉一並傳。余友奥道逸。獲二百合自書散稿一。其書灑落遒逸。猶二其人一云。第五段

此の段には、池野夫妻の、各を天下に得たる事をあげて、以て百合が眼識のなみ〳〵ならざりしを示したるなり。

秋平は、後終に、書畫の名家となり、海内、皆、大雅堂先生の名を稱せり。大雅の妻玉闌も、書を以て名を知られしかど、人は之を伯鸞の妻の孟光に比して稱揚しけりとなり。これ、實に、百合の子阿町なりしなり。

伯鸞は、唐の肅宗の頃の人、姓名を梁鴻といふ。伯鸞は字なり。孟光は、その妻にして、字を徳曜といへり。初、孟光、色黒くして肥ゑ、三十にもなりて嫁せざりき。梁鴻之を賢なりとして娶れり。孟光、よく、夫に事へて禮を盡し、布裙を着けて晏然たりきといふ。

百合の遺集は、穀の葉と並び存して世に傳はれり。山陽の友人奥道逸、百合が、自、書きし草稿の散じたるを獲たりしに、其の書風灑落にして、遒逸なること、その人の性行の如しといふ。遒逸は、のび〳〵して、力あるをいふなり。

傳の事實は、こゝにて盡きたり。以下は、評論なり。

外史氏曰。余數遊二東山一。東山僧月峯爲レ余語二百合一甚詳。余初知三百合爲二才藝女子一而已。焉知二其有レ識有一レ節。又具三知レ人之鑒一也。余視二今之富兒俗漢一。浮二慕大雅之名一。爭購二其筆墨一。使三此輩過二眞大雅一。當面錯過耳。誰如三百合之識二之於風塵中一也。如二百合一者。可レ不レ謂二奇女子一哉。余恐下後人以二百合一與中今之倚レ門賣レ笑者。同レ年而語上也。作二百合傳一。

この一段は、本傳の後論にして、前の論に於いて言

はざる所、即、百合女の評をなしたるものなり。
外史氏曰く、余、しば〲、東山に遊びしに、東山の僧に月峰といへるがありて、余が爲に、詳に、百合が事實を語り聞かせたりき。さて、余は、初は、百合が、才藝の人にすぐれた女子なることを知れるのみにて、いかでか、その見識あり、節操ありて、また、人を見分くる鑒識をも備へしことを知らん。と。かくいひて、暗に百合の人と爲りのなみ〲ならぬことを稱せしものなり。
また、余、今の富兒俗物等を視るに、皆、大雅堂の名を聞きて、たゞ、うはべにのみ、その名を慕ひ、其の書畫を爭ひ購へども、此の蹟をして眞の大雅に遇はしめしならむ、彼の蹟は、面のあたり大雅を見ても必ず錯り過さんのみ、とても、大雅の精神技倆を知ること能はざるべし。誰か百合が大雅の、猶、微賤にして困窮せし時に、即、風塵の中にうづもれてありしときに見込をつけて、その才を識り得たるに如くものあらん。と、かさねて稱賛し、さて、「百合の如きは、奇女子と謂はざるべけんや。と。二句にて、之をあやなしたり。さて、後に、余、後世の人の百合をもて、今の世の門に倚りて笑を賣れる、即、愛嬌を賣りて客をもとむる、茶屋女の類と、同樣に評せられんことを恐れて、こゝに、この傳を作れるなり。と結び了れり。この評論によりて、一層、百合の人物を見上げらるゝやうに思はる。これ、即、作者が注意せし所なるべし。
此の文によりて、短くかける文あり。たゞ、その事實を節畧して、やゝ、原文の語句を削りしものなり。練習の爲に、之を下にかゝげん。讀者、引き較べて、そのかきぶりを考察すべし。

百合　　菊地　純

純、字は子顯、三溪と號す。紀伊の人なり。初、東京に住し、後京都に住し、塾を開きて生徒を敎授せり。明治二十四年山陰道の地方を漫遊し、途中

にて病没せり。年七十三なりき。
三溪、詩文に巧にして、著せる所頗多し。國史略二篇、同三編は、岩垣松苗の著につぎて著述せしものなり。本朝虞初新誌、三溪文鈔、晴雪樓詩抄等あり。明治の初、文壇に於いて、大に名聲を揚げし人なり。花月新誌、新文詩などにも、其の作多く出でたり。

寶永中。有女子阿穀。作茶肆于京師祇園祠側。喜作國詩。以文墨自娯。阿穀養一女。曰百合。百合者。不知何許人也。或曰。江戸人。爲人明慧。既爲阿穀所養。習其母所爲。捧茗供客。尤喜吟詠。性不甚装飾。天姿妍秀。楚々動人。過者無不留連。時有徳山某者。爲幕府士人子。因事流寓都下。落魄不能自活。百合與之暱。爲餽衣食。傾竭心力。因得不乏。如斯者有年。有孕。生一女。情好益篤。會徳山氏宗家嗣絶。族人議取某繼之。乃使人齎書來迎。某乃欲與百合倶歸。百合辭曰。郎君晝錦。携婦人以旋。恐招人指目。當還良聘儷。以承奉宗祧也。路傍花柳。何堪攀折。郎君珍重。妾死生自此辭矣。幸勿復以妾爲念也。某不敢强。乃欲携所生女去。百合固辭弗聽。某遂舍女而去。百合自是脩潔。一意撫養其女。女稍長。又有才情。名曰阿町。百合常欲爲得一佳婿。無適意者。有池野秋平。又住葛原。賣書畵爲活。貧不自給。人皆易之。百合獨心奇之。終以女與之。即玉瀾也。玉瀾又習其夫所爲。百合視而喜曰。吾事畢矣。無幾何病死。百合有遺集。與養母歌集穀葉集並傳云。（國史畧三篇）



漫録

主從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

扨又若い衆に咄しがある。堪忍五郎稚な講釋にいわく、

主人傍輩の目を忍び、惡所場へ行人は最早宿なしのしたじなり。とあり。又世間に、人によりて、知羽折に百足打の紐を胸高に結び、常世風に見ゆれども、心ある人の目からはれてもと見ゆるなり。況や神佛の御目に於てをや。是も堪忍し辛抱すれども、深くはまらぬやうになり、保養にもなりてよかるべし、深くはまらむれても仲間入したと覺悟し給へとあり。歌に、

　似合ざるはでな姿を好むなよ
　　いつもすたらぬ風を見習へ

此の道理に相違なし。番頭手代衆を始め、皆々つゝしむべきの第一也。阿房の好む所也。あはうの仲間入をやめ給へ。それより家業を出精し安心の大道を通り給へ。福徳來る期あるべし、能々考へ給へ。闇路の提燈灯に問ていわく、私が悴は孝心に御座りますが、年來馴染だ傾城を內へ入たいと望みますが、一家共が不得心故、私がまゝにもなりませず、一人の悴の事故、無分別な事がござつては世間へもすみませぬと甚だ心勞いたします、かやうの事はどふ致しましたら道に叶ひませう、答曰、孝心なといわしやれど手前の望みが御座るゆへ、こなたの機嫌をとる惡智惠のある不孝者でござる。子の事を此樣にいひましたら心よふもござるまい、なれども道理を聞しやるゆへ眞實を申のじや。婚姻は萬世の本とござつて親々の差圖をうけ、媒なくては娶らずとは古人の敎へだ、甚だ輕からぬ事で御座る。いわんや親の氣にいらず、一家一門の不得心者を、親の苦勞になろふが、一家一門に見かぎらりやうが、かまはぬ心ざしで、孝行にあろふ樣がござらぬ、其上吾思ふ樣にならぬ時は、親一家を捨て身を失ふ樣なうろたへ者が、とふして永く家相續が出來ませうぞ。いかに子が不便なとて、いましめる事をいましめず、人に笑はるゝ事もかまはぬといふは、子を不便なといわしやれど、是ぞ出愛といふて憎むので御座る。こなたに限らず世間を見ますするに、たまたま學文抔を好み、內にむかり居まして萬事つゝまやかな人があると、若い

者のおのやうに氣をつめては病氣など出たらわるい迚親が手をまはし、傾城ぐるひを敎ゆるもあり。又は藝能など習はす迚、さまぐの道具を整へ、榮耀者に仕立、それぞれと備はる業を忘るるやふに敎ゆる親も有。生れながらそれぞり我儘な人もござらぬ、皆親々の心得違ひで、道をしらぬかたは者にするはあやまつた事で御座る、こうした道理でござる程に、こなたも子を愛し過て、望みの通りにしてやりたいと思ふ曲愛の心を堪忍して、其あやまりを改めて、是迄の事は是非もなし、此後横道に入ぬ樣に異見してやらつしやれ。それが親の道で御座るわいの、狂歌をよみませう、工夫さつしやれ、

贔屓過て引倒しつゝ怪我させて
生れもつかぬかたはにぞする

尼將軍（一）

安藤正次

石橋山に白旗ひらめきそめて、關八洲の草木は早くもその下風になびきふし、緋威の公子富士川の水禽におどろきたちて、やがて平家都落の衰狀はせまりぬ。廟堂に榮華をきはめし相國の一門は、驕るもの久しからずして脆くも秋のあはれを示し、蛭ヶ小島に沈淪せし源家の正嫡は、風雲に際會して終に池中のものならざりき。

範賴義經の二弟をたのみ、三浦、千葉、和田、土肥、北條等諸大族のたすけをかり、義仲を粟津の夕風に殪し、平家を西海の藻屑となしたる賴朝は、茲に大江廣元三善康信等を顧問として、府を鎌倉にひらき、從來常に爲政者の誘惑なりし攝關の虚名を措きて、之を公卿の爲すに任せ、おのれは六拾六國總追捕使といふ名の下に、天下兵馬の實權を掌握し、事は全く成効しぬ。かくて征夷大將軍の幕府は、隱然天下の政權を左右する

とことなり、空前の變化はわが政治史の上にわたへられたり。

人稱していはく、賴朝こゝにその三代の基を創めぬと、然り賴朝の偉業は纔に三代にして亡びぬ。然れども、賴朝の期せし所は豈たゞかくのみならむ。彼は實にその子孫の永く枕を高くしてねむりねむことを欲するが爲には、猜忌の刄にその連枝を芟鋤することをも敢てせしなり。然るに、其の結果は所期とは全く反して、彼のごとく果敢なかりき、而してとりて之に代り、幕府の執權として時めきしものは實にその外戚家たる北條氏なりき。

北條氏は、賴朝流竄の間より深く之と結托して、終始渝ることなく、外戚として常に府中に威をふるひたりしもの、實に時政の女政子は賴朝の婦にしてその所生は賴家なりしなり。されどその親近をねしも又宜なりといふべし。若夫たゞに故舊のものといはむか、猶三浦千葉の如き譜代たるのみならず、兵馬の力の如きに至りては、大に北條氏にまされるあり。北條氏の身、平氏にして、たゞに一朝の臣屬たるものとは比肩すべくもあらず、故に北條氏のたゞ賴めるは外戚としての親近にありき。實にこの點に於ては政子與りて大に力あり、其の後來執權たるべき素地をうるに至りしも、また之に據ること多し。而してこの政子こそ賴朝歿後みづから簾中の幕政を聽きて、尼將軍とよばれしなれ。

嗚呼この幕政の初期にあらはれたる彼は、その婦女子の身を以て、何等の行動をかなしたる。賴朝在世の間に於ては、彼はいかにしてその猜忌深き夫賴朝と北條氏とを接近せしめたりしか。その兒子在職の際に於ては、彼はいかにして相抗爭せる諸氏と北條氏との間にたてりしか。われは、常に裏面の史を好む性癖として之を閑却するあたはず。然も彼はまた一種の勝氣の女性としてみるも頗れもしろきものあるをや。

鎌倉山の星、月夜袖をつらねし諸士の邸宅、今は纔に斷礎遺跡を荒艸寒烟のうちにみとめうべきのみ。源家

三代、北條氏九代の興亡、茫としてそれ夢のごとし。ゆきて鎌倉にそのいにしへを訪へ、秋風身に沁む夕、苔むせる一片の墓表斷碣はいかにその風餐雨喰の慘を訴へ貞なるぞ。さらずもまた、秋夜孤燈の下、史書を繙きて幕府の簾中をうかゞへ、その面目のいかに髣髴として吾人の前にあらはれ來るぞ。

こゝに政子を主題として書きつゝけむとずる拙き草稿も、まことに秋夜讀史の餘録なり、感興のおこるにしたがひ、漫に秀筆を驅るもの。

巾箱小錄

赤松景福

古人の言に「父一而已。人盡夫也」といへることあり。今たやすくこれに因ていはゞ、我父は唯一人なれど、何處までも愛敬すべく、順從すべきものなれど、我夫は誰と限りなければ、一夫に事ふべきにはあらずといふ謬見もあらむ。既に明の謝肇淛等は、右の父一而已。人盡夫也といへるを格言として、その說にいへるやう、古は婦人の節操といふもの、さばかり貴重せざるものと見えて、辰嬴は國君の女にありながら、朝にはその兄に事へ、夕にはその弟に事へたり。又鶉奔狐綏の行ひ、大國の君にして、恬然として恥ともせざるなり。是は聖人禮を制するの本旨、人情に基づけるものにて、婦の夫に事ふることは、子の父に事へ、臣の君に事ふる類とは、相同じからずして、婦人女子に對しては、その責を輕くせしものとやうにいへり。

景福按するに、右父一而已。人盡夫也の義ある場合によりては、さもなきにしもあらねど、妄に私欲に引用しなど、道に於て大に害あるべきなり。婦女いまだ許嫁せざる前に、夫とすべき人を選ぶ時の如きは、人盡夫也の觀あれど、既に良人に從ふ後は、易に所謂婦人貞吉。從一而終也の意に遵ふこそよけれ。然かるに、猶人盡夫也を腦中に秘藏せど、

夫婦の相助け互に愛する眞情は、消失せ易きやうなるべし。又謝氏がいへる鶉奔狐綏の行ひ恬として耻ざる由、是は實にひが言なり。その淫行せし人のみは、耻ともせざりけむ。當時の衆人は決してよしとせざるものなれこそ、そを醜みそを歎きて詩に作りたりけれ。即ち其詩の詩經に入れるも、後世に訓戒を示せるものなるは明なり。故に古とて、婦女の節操を貴ばざることはあるまじきなり。

右謝氏が引ける鶉奔とは、衛の公子頑が、其君の母宣姜に通せし事を譏りたる詩なり。狐綏とは齊の襄公が、その妹文姜に奸けし事を譏りたる詩なり。かやうの穢しき事、支那古來の史傳に少からず。然るに、彼國には不娶同姓などいひて、婚姻の禮男女の別、それぐ嚴正なるものとのみ思へる人あるやうなれど、そは所謂表面の觀察にて、その實は大に穢しきものなり。御國人は自ら御國の美風を存して、淑女賢母さはに出來るを期せずもあるべからず。

千草の露

龍　孫　生

證明院殿の事

證明院殿とは、德川九代の將軍家重卿の御臺所なり。伏見兵部卿邦永親王の姫宮にて、比の宮と申し奉りしが、享保十六年五月七日江戸へ御入輿あり。將軍家の御臺所とはならせける。偖その明くる年の十一月、名にし負ふ隅田川の景色觀んとて成らせられしが、時めきし將軍家のことゝて、その行粧は善盡し美盡しけりとなん。この時、老中より、槖駝師伊奈半左衛門と云へるものに命を傳へ、御臺所の御なぐさみにとて、三廻の邊より堤のこゝかしこに、種々の摘草の類、數を盡して植置かしめぬ。されど仲冬の比とは云へ、隅田堤は春萠る若草に異ならざる種々の花麗はしく咲出でゝ、實に仙境もかくやと思ふばかりなり。御側の女中、御供の面々は皆一樣にこの趣向を褒めたゝへ、半左衛門が技を賞し合へりしとぞ。斯くてこの一日の御遊び

事異なう濟みしが、此の後家重卿の父君吉宗卿、隅田堤に時ならぬ花のいろ〳〵を植ゑて、御臺所の御覽に供へしてふ事を聞きたまひて、時の老中を召して言ひたまはく、すべて女儀は物事にうときものなれど、時ならぬ花を植ゑて見するは、珍らしくはあれど、隅田の堤はいつも斯くの如くならんと思はるゝなり。されど、自から物の道理に違ふことをも見習はるゝ樣になりゆきて、智識を廣むる術とはならず、さあらんよりは、其の時節に應じたる有の儘の冬枯の景色を見せてこそ十一月此の野外の狀をも悟り、身の保養ともなるものなれ。以來は四時の眞の趣に違ふ樣なる粧飾は、堅く無用にすべしと誡められしとぞ。　御臺所この隅田堤遊覽の折りに一首の詠あり。

おもひなき身にしあれども故鄕の
　名もなつかしきみやこどりかな

於喜世の方の事

お喜世の方は、徳川六代の將軍家宣卿の側室にて、七代將軍家繼卿の母なり、半藏門内吹上に在りし御守殿に住まはれしが、或る冬の日、御守殿物見の下を、非人躰の者裸躰にて最と寒げに慄ひつゝ通りけるを見て不便に思ひ、われに衣服を與へよと附隨の人に命じて非人に衣服一領を與へけり。非人は思ひもよらぬ事なれど難有く頂戴して退きしが、偖この事を傳へ聞きけん、其の後非人の者幾人となく赤裸にて日々物見の下に集り來りけり。お喜世の方、これを聞きて木綿の布子を數多く調へ置き、一々非人に與へしが、斯かる中に、初めに衣を得たる非人、又もや元の如く赤裸となりて出で來り、再度惠にあづからんと佇み立ちしを、お喜世の方熟と見て、偖て嘆ずらく、誠に非人ともなるほどの者は物を貪ることは能く知れども、恩も惠も心得ず。かゝる者には幾度施し與ふるとも、其の實意に感ぜねど、折角の慈悲も無益となれど、此の後は無用にすべしとて非人施與のことは止められけるとぞ。お喜世の方、名は輝子、後月光院と稱す。元加州の士

佐藤治郎左衛門の女にして和歌を好めり、其の詠草を集めたるを車玉集と云ふ。

時鳥の異名

猪苗代兼栽の撰びし時鳥の異名の中、珍しきものは
しつ鳥、　あみ鳥、　夜とこ鳥、　夜女鳥、　いも也鳥、　たそがれ鳥、　たまさか鳥、　れやなし鳥、　夏宵鳥、　田うた鳥、　あやめ鳥、　あさ葉鳥、　早苗鳥、　れもはへ鳥、　烏羽玉鳥、　うなゐ鳥子、　まふけ鳥、　都鳥、

序なれど兼栽の小傳を記さん、兼栽は奥州猪苗代小出方村の人なり。その村の長石部丹後守に一女子あり、狀貌極めて醜けれど、年頃を過ぐるも配偶なきにより、家系の絶ゑなんことを憂ひ、村の神廟に詣で之を祈りしに、或る夜異人あり、來りて梅花一朶を左の袖に投げ入れしと夢みて娠み、十三ヶ月を經て男子を擧げたり。これ即ち兼栽なりと。兼栽幼にして穎悟、後薙髮して自在院と云へる寺に入り、僧侶となれり。資性和歌を好みて住吉の神を信じ、屢々聯歌の會に臨み、秀句毎に多きより衆人に猜み忌まれけれど、兼栽奮激して京都に上り、宗祇の許に至りしに、宗祇は兼栽が博く經史に涉り、兼て聯歌を善くするを見、己れの業を繼がしめんと欲して氏族を問ひけれど、兼栽は更めて姓氏を蘆名盛舜に請ひ、猪苗代と稱して宗祇の讓りを受け、花下の稱を襲ふとも云ひ、又兼栽を以て宗祇の師なりと傳ふるもあり。何れが信なるか明かならず。兼栽又耕閑齋と號す。子孫世々其の業を繼ぎたりと云ふ。

平戸侯の舞曲

享和の頃、平戸侯(松浦家)は延年舞等の舞曲を好まれたるが、今、該舞曲につれたる唱歌の二三を記さむ、
夫れ如意寶珠と申すは所願圓滿の名珠なり、されどとよ、みがきあげたる初日影、霞む綠りの山まゆもひらけそめたる時なれや。
きさらぎの夕暮、朧月夜にしくものも、名殘多かる

契にて、とゝむる袖のうつり香に、春もふかくやなりぬらん。

時しもありて君にあふみの鏡山、猶いつまでか曇りなきかげみんことも、長橋の、渡りたえせぬちぎりとて、春立ちきぬる衣手は、櫻かさねに青柳の、緑の髮を櫛づり、なびく姿は誰ゆゑと、うら葉の波藤や。

大空は月も秋なり、下の葉の、照りそふ影にうたはして、よしありげなる舞人の、袖うちふりし心しりけり。

歸省雜錄

白松園主人

舊藩主、毛利公のおはしゝ、萩町は、おのれが村よりは十余里にすぎざれども、山道にてたよりいとわろかれば、幼きよりいまだ行かず。諸方を流浪して、異郷のそらに、旅を重ぬれども、ふるさとのかたは、却りて踈かり。さはれ、久しく防長二州の、主脳地として、世々の歴史に、富めるものを、いつまでかは、あだにすぐさむと、こたび閑散のついでをもて、草鞋の紐、ゆひかためてたち出でぬ。

汗にあえては、岩間の清水むすびあげて、咽をうるほし、歩み疲れては、みづえさす木のもとに、息を繼ぎなどして、山を越え、谷を渡りて、行くほどに、珍禽屢々茂林を漏れ、悲猿、遙に幽谷に叫けびぬるも、うらめづらしく、行きゆきて、大津郡深川といふ處に至りぬ。この處は、萩にゆくには、少しく迂路の嫌ひあれども、温泉ありて、山水はた清麗の地なれば、行人常に杖を止めて、一泊せざるものなし。殊に此村には、大寧寺といふ古刹あり。そも此寺は、中國七州の大守なりける、大内義隆卿が、最期の地にて、昔は宏大壯麗なる寺にて、末派の寺院甚だ多く、寺領なども、數多ありて、勢をさ〳〵國守を凌ぎぬ。され共、今はいたく廢頽して、昔時のかげを止めず、僅に大なる山

門を殘したり。此の山門は、昔し名工の作にて、莊嚴美麗を極め、上には、金身の十六羅漢を、案置したり大内氏の家臣冷泉判官といふ者此の樓門に上りて、入り來る敵を支へて、拒ぎ矢射けるが、矢種もすでに盡きけてけれど、腹十文字に搔き切つて、腸を摑み出し、天井に投げつけつゝ、刎ねて倒れぬ。その投げたりし腸、天井に附着して、血痕久しく失せず、近き頃までありきとぞ。然るに寺領減じ、末寺なくなりてよりね、此寺甚だ衰へて、修繕をだに加へざりけれど、此の山門さへ、いぬる頃の暴風雨に、惜むべし、屋根を吹き剝がされて、今は柱梁のみぞ、かたぞかり殘りたる、後の山には、義隆卿を始め、內室、姬君、及び家臣の古墳あり。近き頃、毛利公、新たに墓標を建てられたり。

あはれ、刈菰の亂れたる世に、兵を講じ、武を練ることを忘れ、墮落の沙門、配流の公卿と、いはるゝをも悟らず、鴻城の花の朝には、蹴鞠詠歌の遊に、暮るゝを知らず、南樓の月のゆふべには、吹笛琴曲の催に、明るを覺えず、翠帳江閨のうちに、埴生のこやのいぶせさを、思ひやる果敢なしぞと。春行き秋來り、花咲き草枯るゝを見ては、老の速かならんことを悲び露をあはれび、虫を戀ひて、仇なる風流に心をいれ。胡蝶の夢、更にさめざりけれど、逆臣忽地其身を襲ひて、刄のもとに命を隕し、松吹く嵐に、秋すさまじく夜半のさむしろ、虫のね繁げし。祖先の祀こゝに絕えて、武威再び擧らず。青塚苔深うして、空しく、千年の雨に朽ちぬるも、狐狼戰國に、處するを忘れし、心づからの、果とやいはまし。

深川の溫泉に浴すること、二日にして、萩に至りぬ。先づ舊城趾をと、尋ぬるに、思ひしよりもまさりて、あさましう、荒れたる樣かな。家臣がもとの邸宅なるべし、長やかなる土塀は、半ば崩壞れて、死碎け、苔青み、八重葎生ひ茂りて、湖の風にそよげるさま、沙羅雙樹の花にもまして、榮枯のことわり、あはれふか

く、破れ朽ちたる、門のうちを、覗き見るに、かたむかりの家だになく、大方は、畑にすかれたるが中にも前栽などの、名殘にやとおぼしく、老松獨り存じて、昔の月に枝をかざし、細鱗躍りけむ泉水は、水涸れて草離々たり、去つて舊城に向へど、城櫓外廓影を止めず、見渡す限り、畠となり、空しく、黍稷萋々、南瓜累々たるを見るのみ。堀は蒹葭彌や高くて鳧鷗眠るに處なく、入手の城門なりしところは、老婆が茶屋の葦簾、昔忍ぶの草生ひたり。あはれ、指月山の、雲に聳えし天主閣は、今何くにかある。梟鳥古木に啼き、孤猿空山に叫ぶ聲、ものとはなしに、人の涙を催はす晨に南浦の雲を望み、暮に西山の雨に對え、二州の士民を撫育せし、此れの城主は、英靈すでに、黄泉の土と化えぬ。之れを思ひ、彼れをおもへど、茶嫗が煮る湯の音さへ、瑜伽振鈴の響きかと、悲し。

維新前の志士として、防長二州の先輩として、有名なる、吉田松陰先生の生地たる、萩松本なる、松下村塾の舊跡を訪ひて、其祠に詣でぬ。松陰先生の實兄、杉民治翁、懇に、其の遺物を見せられけれど、一つ〳〵見もて行くに彼の最後に、送られしといふ書簡あり、襟を正して、披き見るに、縱横、一尺五寸ばかりなる紙面に、さゝやかなる文字に、記されたり。こは、世人のよく知れる處の文にて、即ち、

平生之學問淺薄にして、至誠天地を感格すること出來不申、非常の變に、立至り申候、嘸々御愁傷も、可被遊拜察仕候。

親おもふこゝろにまさる親心
　けふのおとづれ何ときくらむ

乍去、去年十一月六日、差上候書、得と御覽被遊候はゞ、左迄御愁傷にも、及不申と、奉存候。中畧
幕府正議は、丸に御取用無之、夷狄は、縱横自在に、御府内を致跋扈候へ共、神國未だ地に墜不申、上に　聖天子あり、下に忠魂義魄、充々致候へど、天下之事も、餘り御力御落無之樣、奉願

候。随分、御氣分御大切に、被遊、御長壽を、御保可被成候。以上

十月廿日認置　寅次郎再拜

家大人膝下
玉大人膝下
家大兄坐下

言々肺腑より出で、誠忠誠意、人をして覺えず、悽然慘然たらしむ。特に其「親思ふ」の詠歌に至りては、誠にこれ、親子の情、幾たび誦するとも、すゞろに人の袖をうるをはむしむ、是に至りて、始めて和歌も、鬼神を動かしむといふべし。

初め松陰先生檻致せられて、萩の境を出づるとて、路傍の松を顧み、悽然として和歌を詠ず、

かへらじと思ひ定めし旅なれば
ひとしはぬるゝなみだ松かな

普天かきくらし、率土露えげし、これをきゝぬる我袂も、すべて涙なり。此の松、遂に枯れにけりとぞ、非情の松樹も、憂國の志士を、悲みけるにや。（をはり）

筑紫の旅

親々書屋主人

長月の末つかたに、又、九州に向ひて旅立す。余は先に、陸奥に遊びて、重き病を得、東都にかへり、病を、房相山水の間に養ひ、一年餘にして、漸く癒たり。今、又、九州某中學校の招きに應じて、三百里外の他境にさまよへり。南船北馬といはんか、絮跡萍蹤といはんか、陸奥岩手山上、千歳の雪を噛みし客、今は、阿蘇山の雲烟を弄して、耶馬溪を賞し、山陽の足跡に繼がんとす。こたびは、一人の老母を伴ひ、富峯を東海道の車窓に仰ぎ、古き都の舊蹟を尋ね。宮島の奇勝、須磨明石の仙境を過りて、母子二人は、樂しき旅路を經たり。官遊、母を奉して、千里の外に遊ぶを得るは、實に、太平の恩澤にぞありける。新橋を發する時、蜂腰

一首あり。

はゝそのかげに添ふてふ旅なれは
さびしき秋もなにか憂からん

と、更に、余が一身の境遇を吟して、

千里紅山詩可題。征途勝景笑黄倪。未消北雪鴻爪跡。又趁秋風向鎮西。

二首、拙は拙なれども、余が、實境を詠せしもの、いさゝか書して、證となすに足らんか。余は、遊を好み、遊べど、必らず記あり。記して、讀者諸子の覧に供す。陸奥の遊記、房相の養痾記あり。今また、筑紫の旅日記あり。贈りて、諸子が臥遊の友となさんとす。文の拙なるは、ゆるし給ひてよ。

九月廿一日、午后六時、新橋に至りて滊車に乘れり。朋友知人來りて、遠行を送り、行程の恙なからんことを祝せり。滊笛發車を報ずる頃、日、既に暮れて、滿街の燈光、燦として星の如し。車は、轟々として馳せ、地回りて林轉じ、四百餘里の長程、是より幾多の短亭長驛を過ぎん。車窓を開きて望めど、唯夜色蒼茫として、林藪の中に秋を啣つ虫聲を聞くのみ。

去る六日の夜、暴風雨の爲に、東海道の鉄路は、多く破壞せられ、馬入川の如き、鉄橋、全く流れ失せて、一基を存するなし。僅かに假橋を架して、車、其の上を徐行す。俯し臨めど、流水矢の如く、岩角を嚙んで激し、聲雷の如し。危險の處、役夫松火を焚きて、夜を守る。車上の客、此間を過ぐる者、殆んど、皆、顔色なく、戰慄して、一言を發せず。此の如きもの幾處なるを知らず。夜深うして、細雨車窓を射て、夜望更に昏黑、驛夫御殿場と呼ぶ。窓を排して、望むも、富峯の片面をも仰くべからず。尙、帷幕の裡に美人の嬌聲を聞きて、其面を見ざるに比すべし。函根山下を過ぐ。鉄路の破るゝ處、更に甚し。炬火點々として、路を戒め、車窓俯て瞰へど、鉄路破れて、礎石水の爲に河中に飛散す。車上たゞ水流の激怒を聞き、滊車一たび誤れど、千百の客は、數仭の谷底に轉せんのみ。夜

ても御覽じたくればしめせと、親の服喪中に、其の子の宮中に侍候し給ふ事は、古今例のなきことなれど力及ばず、光君は母の里亭二條の住家へ退出の御用意をあそばさる。唯今はまだ三歳の御幼弱にしれはしませど、親子一世のいまはに際しても、何事のあることゝも思召されず。御近昵の人々の悲嘆にくれ、陛下も御涙の乾きたまふ隙なく、泣きくづをれてれはしますを、却りて不思議想に見て御座る。親子の離別は、吉事の爲に一寸他行するにも悲しからぬことはなきものであるのに、まして只今は生死の長き離別なるに、母の顏をさへ知らぬ程なれど、御孤兒と御なりあそばす光君の御狀、誠に御不憫のいたりであるとなり。

漢文學講義（十四）

大林弘一郎

十二、百合傳（下）

賴襄

百合自レ是益自脩潔。一意撫二養其女一。子母煢煢相依爲レ命。女稍長。又有二才情一。名曰二阿町一。百合常謂レ之曰。汝父士人也。汝珍二惜其身一。勿二自輕視一也。常欲下爲得二一佳婿一無中適レ意者上。有二池生一又住二葛原一。賣二書畫一爲レ活。貧不二自給一。人皆易レ之。百合獨心奇レ之。終以レ女與レ之。女又習二其夫所一レ爲。頗解二繪事一。夫妻終日伸レ紙舐レ墨。以二琴酒一自娛。釜甑生レ塵。晏如也。百合視而喜曰。吾事畢矣。無二幾何一病死。

第三段

此の段は、百合が、徳山某と別れし後の事とその女町子の事とを述べ、百合の節操と、その女の婿を撰びし眼識とをあらはしたるなり。前段にいへる如く、百合は、徳山某の好意を辭して、之に從はず、

京に留まりて、益、その身を愼み、自、行を潔くし修めて、たゞ一意に、その女を愛でいつくしみ養ひ、親子二人にて、煢々と、ものさびしく依り恃む所もなく、母子相互にたのみとして、年月を送りけるが、女子稍生長して、また、母に似て、才ありき。名を阿町といへり。百合は、之を愛して、常に、謂ひ聞かするやうは「汝の父は士なれど、汝も、其の身を珍重にして、自、輕しめ侮り、其の身を汚し辱むることをなせそ。」とて、戒めけり。また、その爲に佳き婿を得んと思へども、心にかなへるものもなかりしに、その頃、同じ葛原に住へる池野秋平といふものあり、書畫をかきて之を賣り、生活をなしけれども、貧にして、常に、困窮して居たりしかど、人皆、之を侮りけり、百合は、獨、心の中に、秋平が行を奇と思ひ、他日、必、名をあらはす人ならんとて、終にその女をぞ秋平に妻はせたり。

かくて、阿町は、秋平の妻となりけるが、また、風流を好み、常にその夫の爲せることを見習ひて、繪をかき、夫婦ともに、終日、紙をのべ筆を採りて、書畫をかき琴を彈じ酒を酌みて娯みとなし、釜などに塵の積れることなどあるも、晏如として、平氣にてありき。百合この有樣を見て、喜びていふやう、「これにて吾が望もかなひぬ。思ひおくことなし。」と。いく程もなく病みて沒しぬ。

後數十年。有二一士人一。自二關東一來。問二池生一。置二其傔從一而入。會生他適。獨妻在。出應二之門一。士人問曰。夫人池君之室乎。妻曰。然。然則吾與二夫人一。爲二同父異母兄弟一。吾德山某之子也。吾欲下與二夫人一相見上久矣。山河阻絕。徒有二神馳一。今幸因二公事一來レ此。得レ遂二宿志一。請自レ今數相往來。以敍二匪レ他之情一耳。妻曰。妾亦聞二此於亡母一矣。然亡母誡レ妾。愼勿二相通問一。今雖レ荷二厚意一。不三敢違二遺命一矣。士人失レ意而去。」第四段

此の段は、阿町の操行あることをあらはさんとて、德山の子との問答のさまを記したるなり。

百合歿して後、數十とせを經て、ある時、一の士あり、關東より來りて、池野秋平の宅を尋ね、その傔從、即、供の者を外に待たせ置きて入りて案内を乞へり。その時、たま／＼秋平は他出してあらず、ひとり妻の阿町のみ家にありしかど、出で來りて、應對をなせり、士人問うていふやう「夫人は池君の奥方なるか。」と。妻こたへていはく「然り。」と。士人いはく「さらば吾が身と夫人とは、同父にして異母の兄弟なり。吾は江戸の德山某が子なり。吾、夫人と相見んと欲せしこと、年久しかりしも、遠く地を隔て、山河のへだて居る故に、たゞ空く神を馳するのみにして、心にかゝりしが、今は幸に公事の都合にて、此の地に來りしかた、こゝに、年來の宿志を遂ぐることを得たりしなり。請ふ、今日より、度々往來して、兄弟の好を通じ、敢て他意なき情を叙でをさめんことを。」と。阿町こたへていへるやう、「妾も、この事を、亡母より聞き侍りき。されど、母は妾をいましめて、かたく愼みて、音問を通はすことをなせぞといへりき。今日、君の厚き志をもて、好を修めんことを仰せらるとも、敢て、母の遺言には、違背いたすまじと思ひ定めぬ。」とて、遂に、その義を失はざりき。士人は、その意を果さずして去りきといふ。

德山氏が數年の間、思ひつゞけて、相見んとしたる情は、まことに、兄弟の緣あるを以てなり。阿町の之を辭して、相親しまざりしは、義に於いて、相通問すべからずと母の遺言せし所を、固くとりて背かざりしなり。世の常の女子ならんには、前後を忘れて、喜び親しむべかりしを、町女の固く義を守れるは、まことに、比なきことゝ云ふべし。これ、また、百合の性質の遺傳せしものには非ざるか。

池生後終以二書畫一成レ名。海内稱二大雅先生一。

先生之配玉蘭。與レ之齊レ名。人比二之伯鸞之孟光一。實爲二百合所一レ生。百合有二遺集一。與二穀葉一並傳。余友奥道逸。獲二百合自書散稿一。其書灑落遒逸。猶二其人一云。（第五段）

此の段には、池野夫妻の、各名を天下に得たる事をあげて、以て百合が眼識のなみ〳〵ならざりしを示したるなり。

秋平は、後終に、書畫の名家となり、海内、皆、大雅堂先生の名を稱せり。大雅の妻玉蘭も、畫を以て名を知られしかど、人は之を伯鸞の妻の孟光に比して稱揚しけりとなり。これ、實に、百合の子阿町なりしなり。

伯鸞は、唐の肅宗の頃の人、姓名を梁鴻といふ。伯鸞は字なり。孟光は、その妻にして、字を德曜といへり。初、孟光、色黒くして肥え、三十にもなりて嫁せざりき。梁鴻之を賢なりとして娶れり。孟光、よく、夫に事へて禮を盡し、布裙を着けて晏然たりきといふ。

百合の遺集は、穀の葉と並び存して世に傳はれり。山陽の友人奥道逸、百合が、自、書きし草稿の散じたるを獲たりしに、其の書風灑落にして、遒逸なること、その人の性行の如しといふ。遒逸は、のび〳〵して、力あるをいふなり。

傳の事實は、こゝにて盡きたり。以下は、評論なり。

外史氏曰。余數遊二東山一。東山僧月峯爲レ余語二百合一甚詳。余初知三百合爲二才藝女子一而已。焉知三其有レ識有レ節。又具二知レ人之鑑一也。余視二今之富兒俗漢浮二慕大雅之名一。爭購二其筆墨一。使三此輩遇二眞大雅一。當面錯過耳。誰如三百合之識二之於風塵中一也。如二百合一者。可レ不レ謂二奇女子一哉。余恐下後人以二百合一。與二今之倚レ門賣レ笑者一。同レ年而語上也。作二百合傳一。

この一段は、本傳の後論にして、前の論に於いて言

はざる所、即、百合女の評をなしたるものなり。
外史氏曰く、余、さはぐ、東山に遊びしに、東山の僧に月峰といへるがありて、余が爲に、詳に、百合が事實を語り聞かせたりき。さて、余は、初は、百合が、才藝の人にすぐれた女子なることを知れるのみにて、いかでか、その見識あり、節操ありて、また、人を見分くる鑒識をも備へしことを知らん。と。かくいひて、暗に百合の人と爲りのなみ〳〵ならぬことを稱せしものなり。
また、余、今の富兒俗物等を視るに、皆、大雅堂の名を聞きて、たゞ、うはべにのみ、その名を慕ひ、其の書畫を爭ひ購へども、此の輩をして眞の大雅に遇はしめしならむ、彼の輩は、面のあたり大雅を見ても必ず錯り過さんのみ、とても、大雅の精神技倆を知ること能はざるべし。誰か百合が大雅の、猶、微賤にして困窮せし時に、即、風塵の中にうづもれてありしときに見込をつけて、その才を識り得たるに如くものあらん。と、かさねて稱賛し、さて、「百合の如きは、奇女子と謂はざるべけんや。と。二句にて、之をあやなしたり。さて、後に、余、後世の人の百合をもて、今の世の門に倚りて笑を賣れる、即、愛嬌を賣りて客をもとむる、茶屋女の類と、同樣に評せられんことを恐れて、こゝに、この傳を作れるなり。と結び了れり。この評論によりて、一層、百合の人物を見上げらるゝやうに思はる。これ、即、作者が注意せし所なるべし。
此の文によりて、短くかける文あり。たゞ、その事實を節畧して、やゝ、原文の語句を削りしものなり。練習の爲に、之を下にかゝげん。讀者、引き較べて、そのかきぶりを考察すべし。

百合　　菊地　純

純、字は子顯、三溪と號す。紀伊の人なり。初、東京に住し、後京都に住し、塾を開きて生徒を教授せり。明治二十四年山陰道の地方を漫遊し、途中

にて病沒せり。年七十三なりき。
三溪、詩文に巧にして、著せる所頗多し。國史略二篇、同三編は、岩垣松苗の著につぎて著述せしものなり。本朝虞初新誌、三溪文鈔、晴雪樓詩抄等あり。明治の初、文壇に於いて、大に名聲を揚げし人なり。花月新誌、新文詩などにも、其の作多く出でたり。

寶永中。有女子阿穀。作茶肆于京師祇園祠側。喜作國詩。以文墨自娛。阿穀養一女。曰百合。百合者。不知何許人也。或曰。江戶人。爲人明慧。旣爲阿穀所養。習其母所爲。捧茗供客。尤喜吟詠。性不甚裝飾。天姿妍秀。楚々動人。過者無不留連。時有德山某者。爲幕府士人子。因事流寓都下。落魄不能自活。百合與之暱。爲傀衣食。傾竭心力。因得不乏。如斯者有年。有孕。生一女。情好益篤。會德山氏宗家嗣絕。族人議取某繼之。乃使人齎書來迎。某乃欲與百合俱歸。百合辭曰。郎君晝錦。攜婦人以旋。恐招人指目。當選良聘儷。以承奉宗祧也。路傍花柳。何堪攀折。郎君珍重。妾死生自此辭矣。幸勿復以妾爲念也。某不敢强。乃欲携所生女去。百合固辭弗聽。某遂舍女而去。百合自是脩潔。一意撫養其女。女稍長。又有才情。名曰阿町。百合常欲爲得一佳婿。無適意者。有池野秋平。又住葛原。賣書畫爲活。貧不自給。人皆易之。百合獨心奇之。終以女與之。即玉瀾也。玉瀾又習其夫所爲。百合視而喜曰。吾事畢矣。無幾何病死。百合有遺集。與養母歌集穀葉集並傳云。(國史略三篇)



漫錄

主從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

扨又若い衆に咄しがある。堪忍五郎稚な講釋にいわく、

主人傍輩の目を忍び、惡所場へ行人は最早宿なしのしたじなり。とあり。又世間に、人によりて、翅羽折に百足打の紐を胸高に結び、當世風に見ゆれども、心ある人の目からはれこもと見ゆるなり。況や神佛の御目に於てをや。是も堪忍し辛抱すれども、深くはまらぬやうになり、保養にもなりてよかるべし、深くはまらむれこもの仲間入したと覺悟し給へとあり。歌に、

似合ざるはでな姿を好むなよ
いつもすたらぬ風を見習へ

此の道理に相違なし。番頭手代衆を始め、皆々つゝしむべきの第一也。阿房の好む所也。あはうの仲間入をやめ給へ。それより家業を出精し安心の大道を通り給へ。福徳來る期あるべし、能々考へ給へ。闇路の提燈灯に問ていわく、私が悴は孝心に御座りますが、年來馴染だ傾城を内へ入たいと望みますが、一家共が不得心故、私がまゝにもなりませず、一人の悴の事故、無分別な事がござつては世間へもすみませぬと甚だ心勞いたしますかやうの事はどふ致しましたら道に叶ひませう、答曰、孝心なといわしやれど手前の望みが御座るゆへ、こなたの機嫌をとる惡智恵のある不孝者でござる。子の事を此樣にいひましたら心よふもござるまい、なれども道理を聞しやるゆへ眞實を申のじや婚姻は萬世の本とござつて親々の差圖をうけ、媒なくては娶らずとは古人の教へだ、甚だ輕からぬ事で御座る。いわんや親の氣にいらず、一家一門の不得心者を、親の苦勞になろふが、一家一門に見かぎらりやうが、かまはぬ心ざしで、孝行にあろふ樣がござらぬ、其上吾思ふ樣にならぬ時は、親一家を捨て身を失ふ樣なうろたへ者が、とふして永く家相續が出來ませうぞ。いかに子が不便なとて、いましめる事をいましめず、人に笑はるゝ事もかまはぬといふは、子を不便なといわしやれど、是を溺愛といふて憎むので御座る。こなたに限らず世間を見まするに、たまたま學文抔を好み、内にむかり居まして萬事つゝまやかな人があると、若い

者のあのやうに氣をつめては病氣など出たらわるい迚、親が手をまはし、傾城ぐるひを敎ゆるもあり。又は藝能など習はす迚、さま〴〵の道具を整へ、榮耀者に仕立、おのれと備はる業を忘るるやふに敎ゆる親も有。生れながらおごり我儘な人もござらぬ、皆親々の心得違ひで、道をしらぬかたは者にするはあやまつた事で御座る、こうした道理でござる程に、こなたも子を愛し過て、望みの通りにしてやりたいと思ふ曲愛の心を堪忍して、其あやまりを改めて、是迄の事は是非もなし、此後横道に入ぬ樣に異見してやらつしやれ。それが親の道で御座るわいの、狂歌をよみませう、工夫さつしやれ、

贔屓過て引倒しつゝ怪我させて
生れもつかぬかたはにぞする

尼將軍（一）

安藤正次

石橋山に白旗ひらめきそめて、關八洲の草木は早くもその下風になびきふし、緋威の公子富士川の水禽におどろきたちて、やがて平家都落の衰狀はせまりぬ。廟堂に榮華をきはめし相國の一門は、驕るもの久しからずして脆くも秋のあはれを示し、蛭ケ小島に沈淪せし源家の正嫡は、風雲に際會して終に池中のものならざりき。

範賴義經の二弟をたのみ、三浦、千葉、和田、土肥、北條等諸大族のたすけをかり、義仲を粟津の夕風に殪し、平家を西海の藻屑となしたる賴朝は、茲に大江廣元三善康信等を顧問として、府を鎌倉にひらき、從來常に爲政者の誘惑なりし攝關の虛名を措きて、之を公卿の爲すに任せ、おのれは六拾六國總追捕使といふ名の下に、天下兵馬の實權を掌握し、事は全く成効しぬ。かくて征夷大將軍の幕府は、隱然天下の政權を左右する

とことなり、空前の變化はわが政治史の上にあたへられたり。

人稱していはく、頼朝こゝにその三代の基を創めぬと、然り頼朝の偉業は纔に三代にして亡びぬ。然れども、頼朝の期せし所は豈たゞかくのみならむ。彼は實にその子孫の永く枕を高くしてねむりゐむことを欲するが爲には、猜忌の刄にその連枝を斬鋤することをも敢てせしなり。然るに、其の結果は所期とは全く反して、彼のごとく果敢なかりき、而してとりて之に代り、幕府の執權として時めきしものは實にその外戚家たる北條氏なりき。

北條氏は、頼朝流竄の間より深く之と結托して、終始渝ることなく、外戚として常に府中に威をふるひたりしもの、實に時政の女政子は頼朝の婦にしてその所生は頼家なりしなり。されどその親近をゐしも又宜なりといふべし。若夫たゞに故舊のものといはむか、猶三浦千葉の如き譜代たるのみならず、兵馬の力の如きに至りては、大に北條氏にまされるあり。北條氏の身、平氏にして、たゞに一朝の臣屬たるものとは比肩すべくもあらず、故に北條氏のたゞ頼めるは外戚としての親近にありき。實にこの點に於ては政子與りて大に力あり、其の後來執權たるべき素地をうるに至りしも、また之に據ること多し。而してこの政子こそ頼朝歿後みづから簾中の幕政を聽きて、尼將軍とよばれしなれ。嗚呼この幕政の初期にあらはれたる彼は、その婦女子の身を以て、何等の行動をかなしたる。頼朝在世の間に於ては、彼はいかにしてその猜忌深き夫頼朝と北條氏とを接近せしめたりしか。その兒子在職の際に於ては、彼はいかにして相抗爭せる諸氏と北條氏との間にたてりしか。われは、常に裏面の史を好む性癖として之を閑却するあたはず。然も彼はまた一種の勝氣の女性としてみるも頗れもしろきものあるをや。

鎌倉山の星、月夜袖をつらねし諸士の邸宅、今は纔に斷礎遺跡を荒艸寒烟のうちにみとめうべきのみ。源家

三代、北條氏九代の興亡、茫としてそれ夢のごとし。ゆきて鎌倉にそのいにしへを訪へ、秋風身に泌む夕、苔むせる一片の墓表斷碣はいかにその風餐雨喰の慘を訴へ貝なるぞ。さらずもまた、秋夜孤燈の下、史書を繙きて幕府の簾中をうかゞへ、その面目のいかに髣髴として吾人の前にあらはれ來るぞ。

こゝに政子を主題として書きつゝけむとずる拙き草稿も、まことに秋夜讀史の餘錄なり、感興のれこるにしたがひ、漫に秀筆を驅るもの。

巾箱小錄

赤松景福

古人の言に「父一而已。人盡夫也」といへることあり。今たやすくこれに因ていはゞ、我父は唯一人なれど、何處までも愛敬すべく、順從すべきものなれど、我夫は誰と限りなけれど、一夫に事ふべきにはあらずといふ謬見もあらむ。既に明の謝肇淛等は、右の父一而已。人盡夫也といへるを格言として、その説にいへるやう、古は婦人の節操といふもの、さむかり貴重せざるものと見えて、辰嬴は國君の女にありながら、朝にはその兄に事へ、夕にはその弟に事へたり。又鶉奔狐綏の行ひ、大國の君にして、恬然として耻ともせざるなり。是は聖人禮を制するの本旨、人情に基づけるものにて、婦の夫に事ふることは、子の父に事へ、臣の君に事ふる類とは、相同じからずして、婦人女子に對しては、その責を輕くせしものとやうにいへり。

景福按するに、右父一而已。人盡夫也の義ある塲合によりては、さもなきにしもあらねど、妄に私欲に引用しなど、道に於て大に害あるべきなり。婦女いまだ許嫁せざる前に、夫とすべき人を選ぶ時の如きは、人盡夫也の觀あれど、既に良人に從ふ後は、易に所謂婦人貞吉。從一而終也の意に遵ふてこそよけれ。去かるに、猶人盡夫也を腦中に秘藏せど、

夫婦の相助け互に愛する眞情は、消失せ易きやうなるべし。又謝氏がいへる鶉奔狐綏の行ひ恬として耻ざる由、是は實にひが言なり。その淫行せし人のみは、耻ともせざりけむ。當時の衆人は決してよしとせざるものなれどこそ、そを醜みそを歎きて詩に作りたりけれ。即ち其詩の詩經に入れるも、後世に訓戒を示せるものなるは明なり。故に古とて、婦女の節操を貴まざることとはあるまじきなり。

右謝氏が引ける鶉奔とは、衞の公子頑が、其君の母宣姜に通せし事を譏りたる詩なり。狐綏とは齊の襄公が、その妹文姜に奸けし事を譏りたる詩なり。かやうの穢しき事、支那古來の史傳に少からず。然るに、彼國には不娶同姓などいひて、婚姻の禮男女の別、それ〴〵嚴正なるものとのみ思へる人あるやうなれど、そは所謂表面の觀察にて、その實は大に穢しきものなり。御國人は自ら御國の美風を存して、淑女賢母さはに出來るを期せずばあるべからず。

千草の露

證明院殿の事

龍孫生

證明院殿とは、德川九代の將軍家重卿の御臺所なり。伏見兵部卿邦永親王の姫宮にて、比の宮と申し奉りしが、享保十六年五月七日江戸へ御入輿あり。將軍家の御臺所とはならせける。偖その明くる年の十一月、名にし負ふ隅田川の景色觀んとて成らせられしが、時めきし將軍家のことゝて。その行粧は善盡し美盡しけりとなん。この時、老中より、橐駝師伊奈半左衞門と云へるものに命を傳へ、御臺所の御なぐさみにとて、三廻の邊より堤のこゝかしこに、種々の摘草の類、數を盡して植置かしめぬ。されど仲冬の比とは云へ、隅田堤は春萠る若草に異ならざる種々の花麗はしく咲出でゝ、實に仙境もかくやと思ふばかりなり。御側の女中御供の面々は皆一樣にこの趣向を褒めたゝへ、半左衞門が技を賞し合へりしとぞ。斯くてこの一日の御遊び

殊異なる濟みしが、此の後家重卿の父君吉宗卿、隅田堤に時ならぬ花のいろ〳〵を植ゑて、御臺所の御覽に供へしてふ事を聞きたまひて、時の老中を召して言ひたまはく、すべて女儀は物事にうときものなれど、時ならぬ花を植ゑて見するは、珍らしくはあれど、隅田の堤はいつも斯くの如くならんと思はるゝなり。されど、自から物の道理に違ふことをも見習はるゝ樣になりゆきて、智識を廣むる術とはならず、さあらんよりは、其の時節に應じたる有の儘の冬枯の景色を見せてこそ十一月比の野外の狀をも悟り、身の保養ともなるものなれ。以來は四時の眞の趣に違ふ樣なる粧飾は、堅く無用にすべしと誡められしとぞ。御臺所この隅田堤遊覽の折りに一首の詠あり。

おもひなき身にしあれども故鄕の
　　名もなつかしきみやこどりかな

於喜世の方の事

お喜世の方は、徳川六代の將軍家宣卿の側室にて、七代將軍家繼卿の母なり、半藏門内吹上に在りし御守殿に住まはれしが、或る冬の日、御守殿物見の下を、非人躰の者裸躰にて最と寒げに慄ひつゝ通りけるを見て不便に思ひ、あれに衣服を與へよと附隨の人に命じて非人に衣服一領を與へけり。非人は思ひもよらぬ事なれど難有く頂戴して退きしが、偖この事を傳へ聞きけん、其の後非人の者幾人となく赤裸にて日々物見の下に集り來りけり。お喜世の方、これを聞きて木綿の布子を數多く調へ置き、一々非人に與へしが、斯かる中に、初めに衣を得たる非人、又もや元の如く赤裸となりて出で來り、再度惠にあづからんと佇み立ちしを、お喜世の方熟と見て、偖て嘆ずらく、誠に非人ともなるほどの者は物を貪ることは能く知れども、恩も惠も心得ず。かゝる者には幾度施し與ふるとも、其の實意に感ぜねば、折角の慈悲も無益となれば、此の後は無用にすべしとて非人施與のことは止められけるとぞ。於喜世の方、名は輝子、後月光院と稱す。元加州の士

佐藤治郎左衛門の女にして和歌を好めり、其の詠草を集めたるを車玉集と云ふ。

時鳥の異名

猪苗代兼栽の撰びし時鳥の異名の中、珍しきものはしつ鳥、　あみ鳥、　夜とこ鳥、　夜女鳥、　いも也鳥、　たそがれ鳥、　たまさか鳥、　れやなし鳥、　夏宵鳥、　田うた鳥、　あやめ鳥、　あさ葉鳥、　早苗鳥、　れもはへ鳥、　鳥羽玉鳥、　うなゐ鳥子、　まふけ鳥、　都鳥、

序なれど兼栽の小傳を記さん、兼栽は奥州猪苗代小出方村の人なり。その村の長石部丹後守に一女子あり、狀貌極めて醜けれど、年頃を過ぐるも配偶なきにより、家系の絕ゑなんことを憂ひ、村の神廟に詣で　之を祈りしに、或る夜異人あり、來りて梅花一朶を左の袖に投げ入れしと夢みて娠み、十三ケ月を經て男子を擧げたり。これ即ち兼栽なりと。兼栽幼にして穎悟、後薙髮して自在院と云へる寺に入り、僧侶となれり。資性和歌を好みて住吉の神を信じ、屢々聯歌の會に臨み、秀句每に多きより衆人に猜み忌まれけれど、兼栽奮激して京都に上り、宗祇の許に至りしに、宗祇は兼栽が博く經史に涉り、兼て聯歌を善くするを見、己れの業を繼がしめんと欲して氏族を問ひけれど、兼栽は更めて姓氏を蘆名盛舜に請ひ、猪苗代と稱して宗祇の讓りを受け、花下の稱を襲ふとも云ひ、又兼栽を以て宗祇の師なりと傳ふるもあり。何れが信なるか明かならず。兼栽又耕閑齋と號す。子孫世々其の業を繼ぎたりと云ふ。

平戶侯の舞曲

享和の頃、平戶侯(松浦家)は延年舞等の舞曲を好まれたるが、今、該舞曲につれたる唱歌の二三を記さん、

夫れ如意寶珠と申すは所願圓滿の名珠なり、されどとよ、みがきあげたる初日影、霞む綠りの山まゆもひらけそめたる時なれや。

きさらぎの夕暮、朧月夜にしくものも、名殘多かる

契にて、とゞむる袖のうつり香に、春もふかくやなりぬらん。

時しもありて君にあふみの鏡山、猶いつまでか曇りなきかげみんことも、長橋の、渡りたえせぬちぎりとて、春立ちきぬる衣手は、櫻かさねに青柳の、緑の髪を櫛づり、なびく姿は誰ゆゑと、うら葉の波藤や。

大空は月も秋なり、下の葉の、照りそふ影にうたはして、よしありげなる舞人の、袖うちふりし心しりけり。

歸省雜錄

白松園主人

舊藩主、毛利公のおはしゝ萩町は、おのれが村よりは十余里にすぎざれども、山道にてたよりいとわろかれど、幼きよりいまだ行かず。諸方を流浪して、異鄉のそらに、旅を重ぬれども、ふるさとのかたは、却りて疎かり。さばれ、久しく防長二州の、主脳地として、世々の歴史に、富めるものを、いつまでかは、あたにすぐさむと、こたび閑散のついでをもて、草鞋の紐、ゆひかためてたち出でぬ。

汗におゑては、岩間の清水むすびあげて、咽をうるほし、歩み疲れては、みづゑさす木のもとに、息を繼ぎなどして、山を越ゑ、谷を渡りて、行くほどに、羇禽屢々茂林を漏れ、悲猿、遙に幽谷に叫びぬるも、うらめづらしく、行きゆきて、大津郡深川といふ處に至りぬ。この處は、萩にゆくには、少しく迂路の嫌ひあれども、温泉ありて、山水はた清麗の地なれば、行人常に杖を止めて、一泊せざるものなし。殊に此村には、大寧寺といふ古刹あり。そも此寺は、中國七州の大守なりける、大内義隆卿が、最期の地にて、昔は宏大壯麗なる寺にて、末派の寺院甚だ多く、寺領なども、數多ありて、勢をさ〳〵國守を凌ぎぬ。され共、今はいたく廢頽して、昔時のかけを止めず、僅に大なる山

門を毀したり。此の山門は、昔し名工の作にて、莊嚴美麗を極め、上には、金身の十六羅漢を、案置したり。大内氏の家臣冷泉判官といふ者此の樓門に上りて、入り來る敵を支へて、拒ぎ矢射けるが、矢種もすでに盡きけてけれど、腹十文字に搔き切つて、腸を摑み出し、天井に投げつけつゝ、刎ねて倒れぬ。その投げたりし腸、天井に附着して、血痕久しく失せず、近き頃までありきとぞ。然るに寺領減じ、末寺なくなりてよりは、此寺甚だ衰へて、修繕をだに加へざりければ、此の山門さへ、いぬる頃の暴風雨に、惜むべし、屋根を吹き剝がされて、今は柱梁のみぞ、かたばかり殘りたる、後の山には、義隆卿を始め、內室、姬君、及び家臣の古墳あり。近き頃、毛利公、新たに墓標を建てられたり。

あはれ、刈菰の亂れたる世に、兵を講じ、武を練ることを忘れ、墮落の沙門、配流の公卿と、いはるゝをも悟らず、鴻城の花の朝には、蹴鞠詠歌の遊に、暮るゝを知らず、南樓の月のゆふべには、吹笛琴曲の催に、明るを覺えず、翠帳江閨のうちに、埴生のこやのいぶせさを、思ひやる果敢なしごと。春行き秋來り、花咲き草枯るゝを見ては、老の速かならんことを悲び露をあはれび、虫を愍ひて、仇なる風流に心をいれ。胡蝶の夢、更にさめざりければ、逆臣忽地其身を襲ひて、刃のもとに命を隕し、松吹く嵐に、秋すさまじく夜半のさむしろ、虫のねしげし。祖先の祀こゝに絕ゑて、武威再び擧らず。青塚苔深うして、空しく、千年の雨に朽ちぬるも、狐狼戰國に、處するを忘れし、心づからの、果とやいはまし。

深川の温泉に浴すること、二日にして、萩に至りぬ。先づ舊城趾をと、尋ぬるに、思ひしよりもまさりて、あさましう、荒れたる樣かな。家臣がもとの邸宅なるべし、長やかなる土塀は、半ば崩壞れて、瓦砕け、苔青み、八重葎生ひ茂りて、湖の風にそよげるさま、沙羅雙樹の花にもまして、榮枯のことわり、あはれふか

く、破れ朽ちたる、門のうちを、覗き見るに、かたむかりの家だになく、大方は、畑にすかれたるが中にも前栽などの、名殘にやとればしく、老松獨り存じて、昔の月に枝をかざし、細鱗躍りけむ泉水は、水涸れて草離々たり、去つて舊城に向へど、城櫓外廓影を止めず、見渡す限り、畠となり、空しく、黍稷萋々、南瓜累々たるを見るのみ。堀は蒹葭彌高くて鳧鷗眠るに處なく、大手の城門なりしところは、老婆が茶屋の葦簾、昔忍ぶの草生ひたり。あはれ、指月山の、雲に聳えし天主閣は、今何くにかある。梟鳥古木に啼き、孤猿空山に叫ぶ聲、ものとはなしに、人の涙を催ほす晨に南浦の雲を望み、暮に西山の雨に對ゐ、二州の士民を撫育せし、此れの城主は、英靈すでに、黄泉の土と化ゐぬ。之れを思ひ、彼れをおもへど、茶嫗が煮る湯の音さへ、瑜伽振鈴の響きかと、悲し。

維新前の志士として、防長二州の先鞭として、有名なる、吉田松陰先生の生地たる、萩松本なる、松下村塾の舊跡を訪ひて、其祠に詣でぬ。松陰先生の實兄、杉民治翁、懇に、其の遺物を見せられけれど、一つ〳〵見もて行くに彼の最後に、送られしといふ書簡あり、襟を正して、披き見るに、縱横、一尺五寸ばかりなる紙面に、さゝやかなる文字に、記されたり。こは、世人のよく知れる處の文にて、即ち、

平生之學問淺薄にして、至誠天地を感格すること出來不申、非常の變に、立至り申候、嘸々御愁傷も、可被遊拜察仕候。

親おもふこゝろにまさる親心
　　けふのおとづれ何ときくらむ

乍去、去年十一月六日、差上候書、得と御覽被遊候はゞ、左迄御愁傷にも、及不申と、奉存候。中畧
幕府正議は、丸に御取用無之、夷狄は、縱横自在に、御府内を致跋扈候へ共、神國未だ地に墜不申、上に　聖天子あり、下に忠魂義魄、充々致候へど、天下之事も、餘り御力御落無之樣、奉願

候。隨分、御氣分御大切に、被遊、御長壽を、御保可被成候。以上

十月廿日認置　寅次郎再拜

家大人膝下

玉大人膝下

家大兄坐下

言々肺腑より出で、誠忠誠意、人をして覺えず、悽然慘然たらしむ。特に其「親思ふ」の詠歌に至りては、誠にこれ、親子の情、幾たび誦するとも、すゞろに人の袖をうるをはむしむ、是に至りて、始めて和歌も、鬼神を動かしむといふべし。

初め松蔭先生檻致せられて、萩の境を出づるとて、路傍の松を顧み、悽然として和歌を詠ず、

かへらじと思ひ定めし旅なれば
　　ひとしほぬるゝなみだ松かな

普天かきくらし、率土露志げし、これをきゝぬる我袂も、すべて涙なり。此の松、遂に枯れにけりとぞ、非情の松樹も、憂國の志士を、悲みけるにや。（をはり）

筑紫の旅

親々書屋主人

長月の末つかたに、又、九州に向ひて旅立す。余は先に、陸奥に遊びて、重き病を得、東都にかへり、病を、房相山水の間に養ひ、一年餘にして、漸く癒たり。今、又、九州某中學校の招きに應じて、三百里外の他境にさまよへり。南船北馬といはんか、絮跡萍蹤といはんか、陸奥岩手山上、千歲の雪を嚙みし客、今は、阿蘇山の雲烟を弄して、耶馬溪を賞し、山陽の足跡に繼がんとす。こたびは、一人の老母を伴ひ、富峯を東海道の車窓に仰ぎ、古き都の舊蹟を尋ね。宮島の奇勝、須磨明石の仙境を過りて、母子二人は、樂しき旅路を經たり。官遊、母を奉して、千里の外に遊ぶを得るは、實に、太平の恩澤にぞありける。新橋を發する時、蜂腰

一首あり。

はゝそのかげに添ふてふ旅なれは
さびしき秋もなにか憂からん

と、更に、余が一身の境遇を吟して、

千里紅山詩可題。征途勝景笑黄倪。未消北雪
鴻爪跡。又趁秋風向鎮西。

二首、拙は拙なれども、余が、實境を詠せしもの、いさゝか書して、證となすに足らんか。余は、遊を好み、遊べど、必らず記あり。記して、讀者諸子の覧に供す。陸奥の遊記、房相の養痾記あり。今また、筑紫の旅日記あり。贈りて、諸子が臥遊の友となさんとす。文の拙なるは、ゆるし給ひてよ。

九月廿一日、午后六時、新橋に至りて滊車に乘れり。朋友知人來りて、遠行を送り、行程の恙なからんことを祝せり。滊笛發車を報する頃、日、既に暮れて、滿街の燈光、燦として星の如し。車は、轟々として馳せ、地回りて林轉じ、四百餘里の長程、是より幾多の短亭長驛を過ぎん。車窓を開きて望めど、唯夜色蒼茫として、林藪の中に秋を啣つ虫聲を聞くのみ。

去る六日の夜、暴風雨の爲に、東海道の鉄路は、多く破壞せられ、馬入川の如き、鉄橋、全く流れ失せて、一基を存するなし。僅かに假橋を架して、車、其の上を徐行す。俯し臨めど、流水矢の如く、岩角を嚙んで激し、聲雷の如し。危険の處、役夫松火を焚きて、夜を守る。車上の客、此間を過ぐる者、殆んど、皆、顔色なく、戰慄して、一言を發せず。此の如きもの幾處なるを知らず。夜深うして、細雨車窓を射て、夜望更に昏黑、驛夫御殿場と呼ぶ。窓を排して、望むも、富峯の片面をも仰くべからず。尙、帷幕の裡に美人の嬌聲を聞きて、其面を見ざるに比すべし。函根山下を過ぐ。鉄路の破るゝ處、更に甚し。炬火點々として、路を戒め、車窓俯て瞰へど、鉄路破れて、礎石水の爲に河中に飛散す。車上たゞ水流の激怒を聞き、滊車一たび誤れど、千百の客は、數仭の谷底に轉せんのみ。夜

色、空濛の間、蒼々茫々として、空影の如きものは函嶺なり。古來稱して、絶險奇岨として名ある函山も、今は、滊車に乘じて、遙に山腰を廻り、旅人を誰呵する關門もなし。函根山を過ぎて、夜三更に近く、車は、愈々馳せて、車中の旅客は眠り正に酣に、寂として笑語を聞かず。轆々として渉るものは、天龍川か、大井川、夢中に過ぎ、蔦の細道、今は地下昏黒の隧道を行く。川又川、橋又橋、更に名を記せず。唯、停車塲驛夫の驛名を呼んで、客に報ずるのみ。車中の客、互に、曉天の明を待ち、滊車の尙徐行を恨むのみ。名古屋に達する前一驛、東天漸く白く、人物辨すべし。氣始めて蘇す。雨全く霽れて、一天藍の如く稻田十里、眼界際なく、風朝露を拂ひて、車窓涼氣を送る。快甚し。名古屋に至る。方に大睡、朝餐を購ひて食ふ。轍夜の車行、飢ること甚し。是に於て、腹始めて便々たり。汽車快馳の中、車窓仰で名古屋城、金鯱の朝暾に閃粲たるを望む。是に至て、東都を去ること、既に、一百里餘。參尾の間は、織豐德川氏が、崛起せし地、鷲津、丸根、袋井驛を聞けど、家康が苦戰を想ひ、淸洲と呼ぶに信長の盛時を想ひ、歷史を瞑想して、往時を回顧す。車上余と感を同うする人、果して幾人かある。婦人は、其の境を越ゑずと云ひし慈母も、兒が車窓の下に指點して、來路の古跡、名勝を談ずれど、首肯して笑ひ、三十年前、五十三驛の行路難を話し、文明の恩澤を感ず。車窓の下、一母一子、載て天涯に漂遊す。承歡の餘、惡詩あり。曰く、

富嶽之壯嚴島奇。官遊奉母此間馳。承歡千
里資淸賞。餘愛分來入我詩。

と、車愈々馳せて、熱田に達す。車上、遙に熱田神宮を拜して去る。是より尙幾百程、筆を載て、官遊の客、何れの處にか宿せん。

（未完）

才くらべ

蓬生屋女史

ある兒、鎌倉にいたり、ある僧の弟子となりてわけく
れ經文を修業なし居りしが、何事にか僧侶を深くうら
み、他の僧坊へ住みかへ、机書物さては諸の物具足等
みな持ち行きけるに、なほ詞花集を忘れたり。師の坊之
を見出し、彼の兒に送り遣はすとて、

如何にして詞の花の殘りけむ
　うつろひはてし人の心に

とやさしき詞の花さへそへて送り屆けけるに、うらみし兒此の歌を見、大にめでゝ、先師に謝し、再び本の寺へ歸りけりとなり。

○

又ある藏人なる人の子を山へ登せたりける、眉目形いとうつくしう玉をあざむくばかりの子なりけるが、里へ下りける序でに、三井寺なる寺法師其の子をすかし取つて己が寺へ置きけり。山僧此の事を聞き大に怒り吾が山こそ他寺の兒をさへ取るべきに寺法師にしも、とられぬ事口惜しとて、大衆の僧ども憤り罵り、かの寺法師にけしからぬ事云ひたてゝいきまけど、寺法師は知らぬがほにて、兒ども里に久しく候事はならひなれど、はや、里へや候らん、三井寺へ候らん事つや〳〵候はずと取りも上げぬに、是非なくそのまゝにして歸り、法師の僧に此の事をのべ如何せんと計りけれど、先づ文を遣はして見候はんとて、

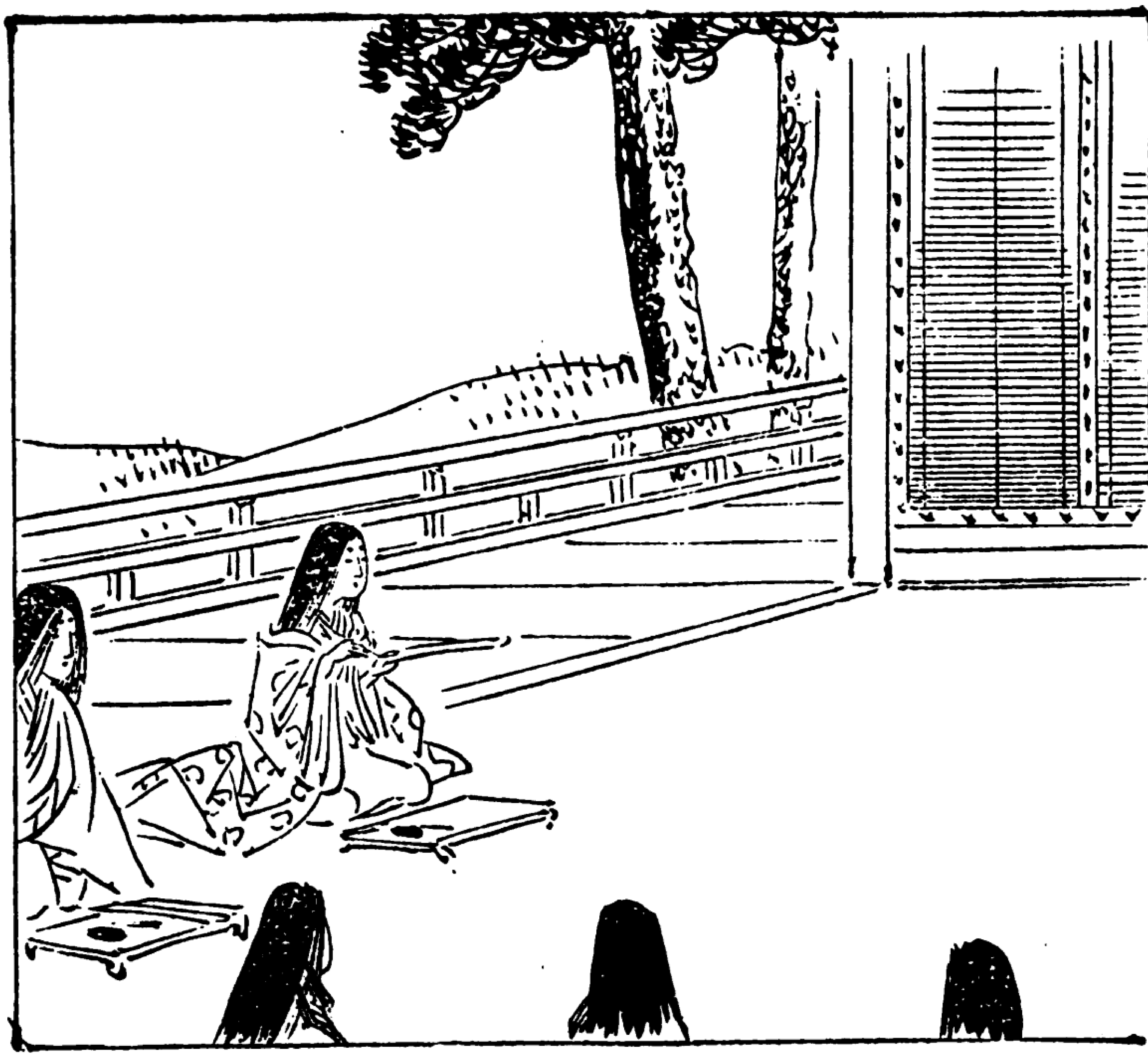
山の端に待をぞ知らで月影の
　まことや三井の水に住むとは

とさら〳〵と書き、さてして、寺法師の許へ送りけるに寺法師之を見、大に感じ、秀歌に返すことなければぞとて、其の兒を出して送り戻しけりとなり。有りがたきは敷しまの道にてぞ。

○

亭子の帝、鳥養の院にて御遊びありけるに、鳥かひと

云ふ事を人々によませけるに、大方ならざりけり。折



りふし遊女白女と云ふを召出され、そも汝は如何なるもの丶子ぞと問はせ給ふに、白女かしこみて、妾は丹波の守大江玉淵が女なりと申しぬ。帝聞こし召ひ玉ひて、玉淵は詩歌に工みなるものなり、其の子ならむ又歌よまむに、今此の鳥かひと云ふことよむべし、然らむ玉淵が女とこそは思し召べけれと仰せらる丶御言葉の下に

あさみどりかひある春にあふときは
霞ならねど立ちのぼりけり

とはやもよみ出でけるに、さてこそ玉淵にもまさりたる女よとていたく感じ譽めさせ給ひて祿あまた給ひたりとなり。持たまほしきは才にこそ。

一休和尚のはなし（五）

草の屋主人

あ丶又貴さまは姑と喧嘩せしか、アーもううるさい、云ふて呉れな、姑のざんそうなど丶父親の叱言に、女は涙を袖に拭ひて、さりても父さま、あまりに姑がいぢ

わろく。エーだまれ、また姑をののしる、不孝娘め、はやく歸れ、れかぬ、歸れど、鞭うたぬばかりの父のいきまきに、母親は傍らより、我女よ、姑とやつ口のあひたるためしは昔よりなしとたとへられしはどなれど、無理なる事も御道理として、かしづき仕へよとやさしき母の言葉にあまへてか、女はいとゞ涙のかずをそへ、さるにてもあまりのむづかしさ、堪忍ぶくろの緒も切れますとくやしげなるを、又おのれ、姑をのゝしるな、父ももう堪忍ならぬとて、娘が襟かみつかみて外へ追ひ出せど、さりてはあまりと母親のとゞむるをかまふな、かまひをれど其方もともに家には入れぬぞとのいきまきあらゝかに門の戸締め、妻をも内へおひやり入るに、女は亂れ髮かき〱、情なき父さま、何れも〱年老いしものは情なしとばかり衣のすな拂ひて歸りにたる。あと、あれには實にこまつたものとなげ首するは下立邊堀川邊にすむ道意と呼ぶものなり。其後、あるとき、一休を齋に申し入れさま〲の

話したる末、和尚に向ひ、某は娘一人をもたりて、去んぬる春、隣り町にかしづかせ候ひしに、やゝもすれば、姑とあらがひて歸りては姑をあしざまに申し、親の身に候へば、誠に迷惑に存じ、さま〲異見しても馬の耳に念佛、詮方なく、手あらくしては追ひやり申候事度々に及び候。和尚さまはかねて聞きおよびたる智者にてましませば、おもしろき因縁をなし候はゞそと御物語きかせ給はれ、よく覺えきて娘の諫言のため申聞せなば少しはきゝ入る事も侍らんと云ふを和尚きゝ給ひて、愚僧、一年修業の砌り、下野にてのことなりしが、姑久しくやみなやみけるに、其の子深くなげき、醫師を呼び、療治し、介抱怠らざるも驗しはつゆ見えざりけるが、或時醫者申すやう、此の病には豚肝を煮て與へなば本腹すべしとあるに、息子よろこびて、直ちに買ひとゝのへ、之をよく〱煮て母にすすめよとて妻にくれ〲托し、さて、其の身は、他へ出でたり。然るに、其の妻は夫と心ひとしからず、常

に姑を憎み、邪魔になし、年老いて死するに何の惜しきことやあらむ、要なき薬ぐひなりと思ひける折りふし、其の妻、子を孕み居りしが、やがて子を生みけれど、其の兒のゑなを密かに取りて、よく煮て豚の肝なりとて、姑にすゝめ、肝はかくして已が薬喰ひにぞなしにりける。程なく赤色なる蛇、何處より來りけん、かの鬼嫁の口へ飛び入りけるが、尾四五寸ほど口より外へ殘り居りぬ。その嫁なきさけび、もだゑぬる事云ふもかりなし、誠にふしぎのことなれど、皆きゝ傳へて之を見物の人多くあつまり、老いたる人の見るときは、尾を動かさず、若きもの丶見けるときは此の蛇尾を左右上下へ動かし、女の顔を叩きけることおそろしけれ。ある人、釘抜もて、蛇をはさみ引きぬかんとしけれど、固き事黒がねの如くにて奥へは入れども、少しも口へは出でず、かやうにしてなやむこと三日、つひに其の嫁空しくなりにけり、之と云ふもつねづね姑にあしくあたり、姑の口へ入れまじき胎衣をすゝめ、我口へ入れまじき豚の肝を盗み喰ひける惡逆によつてかくの如く口へ入れまじき蛇の飛び入りける事天罰なり、形に影の從ふが如くおそろしき事なりけりと、自ら舌を振ひて語りつくれど、夫婦ともにたゞかしこみおそるゝばかりなり。やがて道意また和尚に向ひ、誠におそろしき因縁、早速娘に語りて後を戒め侍らん、さて、此頃娘が方へ送り申心得にて枕屏風を調し候が何にても和尚様一筆あそばし下されと申すに、一休やすき事なりとて、筆とり寄せ、

萬一人事一口ひやく、惣て壁に耳、岩に口、姑　夫
唯主おやと仰ぐのみ。
我男げに太切に思ひなそ
　　なぞしうとめのみにくかるべき
むねの火のもゑたつ時のあるならむ
　　こゝろの水をせきとめてけせ

と直ちにものしけるに、道意いたく感じあまたたび謝しけりとなり。

わらひ草

萩園主人

今は昔、片田舍の人ふたりつれだちて江戸の町に出たりけるに、めづらしき所のおほかれど、とざまかうざまありきめぐりけり。とある所に紙はりにて、鏡のかたちを作り、女のかほをゑがきて、其傍に「れんかゝみどころ」とかな文字にてかきたる看版あるをみて、一人がかしらかたぶけて、此のところは腰をかゞめて通るべきにやあらんといへど、又一人が、いな〳〵此の家の嫁が此の畫の如くうつくしければ、よりてかゝるをみよといふことならんといふ。さりけり〳〵とて二人のものは入りて見るに、折ふし店先に物ぬひて居れる女のあるをつく〴〵打見て、さても此の家のあるじはよきかゝをもたれけりなどいひつゝ、やがて出でゝ、田舍にはかゝる事やある、めづらしかりつる物見かなと、ゑみまけて、さてなん我が住む里には歸りける。

あくる年又要ありて江戸に出たりけるに、かのうつくしかりつるかゝ見むとて、心あての所を求めけれども、つひに見あたらで、其あたりとればしき家に大きなる看板かゝげたるを見て立どまり、からうじて其のもじをよめど「ことしやみせんしなん」（琴三味線指南）とあり、田舍人いたく力おとして今ひとりに向ひ、ことしやは（今作）みせんぬ（見せ）とあれども、せんかたなし、たゞししなん（不死）とあれども、又折を得てみむ事もあるべかりけりといひけるとぞ。

梅の下風（十二）

白魚女史

やよ嫁女、酒もて來れ、婆どん、何か肴の用意せよと、いつも菓子一つ、茶一つ出せし事なき馮司のもてなさむとするは、邪魔もの拂ふ已が心のよろこびのみてるなるべし。否それにはと傳吉はあくまで叔父と仰ぎ、

庄屋と頂きて、人よき頭を下げつゝ後事頼み聞ゑへかへり、やがて家をも地をも人に頼み、野尻宿近江屋方へ至れど、之も質朴の與惣次、いたくよろこび、わが子の如く世話すれど、傳吉夫婦もまた他人の家とせず、家の事より、下男下女の取扱ひまで萬事力をそへ與惣次を恩人とも主人とも親ともしてかしづけど、俄かに孝行子を持ちし如何なる天の賜と與惣次も涙を流してよろこべど、夫婦はたゞ勿体なしとばかり、あとは互みに親々を思ひ、忍び泣きするもあはれなり。高田の村にては、皆傳吉が里がへせしをよき人のをらずなりしとかこちをしむもの多かるに引きかへ、ひとり馮司一家のみは大よろこび、何事も傳吉あるほどは目の上のこぶ、おのづから頭上らず、莊屋大へい權も傳吉に何となられさへ付けられ目もつぶるやう覺ゑし其こぶの療治もせぬにとれたるはもつけの幸、之も家のお狐さんの御利益とて、俄かに裏の稲荷におみきを供へ、油揚を供しさては、祝の盃、獎しやくせよ、嫁女も來れ、さは昌次郎、そちもな嫁女つげよと、昨日もよろこび酒、今日も目出たい魚かへ、また酒よと毎日酒食にふけれど、さのみなき小金水もたまらず遣ひはたしけるに、さては村のお心よしを語らひて、傳吉が預け置きし田地を抵當に入れ金子借りるにも、彼れは誠に親孝行、實直らしくよそほへど、とうより宿屋の女とでき居り、今も彼の地ではぶれ飲み喰におはれて、我方をだまして金子を出させしが、返すことならねど、地所を抵當にしていくらにても拵へおき呉れよとの事、何、江戸へ行きてためしなど云ふはうその皮あれも、村の者をだまさん爲めに何處よりか借りこし金子、己がとこの婆に送りし半分も實はな、實はな、己れも取るではなかりしかど、先々よりの貸金、なか〳〵あれでは濟ぬなれどなど、居らぬものに口なしと嘘言の八百ならべたてゝそしるも憎くけれど、フンさやうかと驚きて聞くものもおろかなり。何事も心よき村人、はては馬鹿にして村の持山を村人に相談もせず、



樹木を伐り、金三十兩に賣り代ろなし、そを横領して又や人知らぬ金子入りしとよろこぶあさましさ、流石の心よき村人もいたく怒りたち、もう堪忍なり難しと高田の役所へ訴へ出でたるに役所にても捨て置れず、だん／＼取調べの末、名主役を召し上げ、横領金償ふことゝなされたるに、今はまた僞る能はず、殘る金の半分を入れて是れにてすましてと、村人に頭下ぐるも淺ましう、やがて、所をも拂はれたり。さて後の役は誰にせんと、村人協議の末、傳吉にしくものなしと、議とゝのひ、やがて組頭五六人野尻に至り、傳吉に右の始末を語り、村へ歸りて、彼の役をつぐやう云ひ聞ゆるに、傳吉は大におどろき、さはいたき間違ひ、村の怒りはさることながら何分古く庄屋役を勤し馮司なれば、たゞ隱便に事を計らひ、向後を戒しめて、なほ彼の人を職に居らしめられよ、若し許し難くば、誰れにても村人の内より老成の御方をこそ撰ませ給へ、我は幼より衣食に追はれ、學問の心得もなく、殊に若きより江戸へ出で今なほ村にはあらず、何事も未熟の身いかで村の長たるを得む、折角の思召有り難くは候へどゝ、一も二もなく辭すれど、村の評議皆傳吉に歸し、たとへ學問のわきまへなしとて、それは謙遜、傳吉未熟として村に誰れもの知る者あらん、兎にも角にも傳吉を莊屋にせむと組頭再三來り強ふれど災の元と夫婦共におもひて、さまゞ／＼辭み、與惣次もいつくしき子やらじと共に謝れど、村人いつかな聞かざるに、流石の傳吉もいなみ兼ね、さらばとて澁々承けひけば、村人は大によろこび、傳吉がもと住みし宅、此の儘にてはと、はやくゆがみし柱をなほし、屋を葺き、さては間さへ建て出して、其の至るを待ちぬ。

馮司は傳吉が已が職を繼ぎしことを聞き、已が惡事を悔いもせず、兎角これをくやしく恨めしく思ひ、如何にもして其職を取かへさんものと地面屋敷賣り代なして上役に賄賂し、さまゞ／＼傳吉をおとしそしれど、中々に元に復されず、やがては金子もつき、賣るべき地

所もあらねど、そのまゝ過し、いつか其の年も暮れ、春も半ばとなりぬ。馮司は如何にもして傳吉おとし巳れもとの職に立ち直らんと烏の泣く音の如く、一日も思はぬ日はなかりけるが、上にも先役代りて新らしき來りぬ。馮司之を聞き、舊事を知らぬ新役へまひなひ遣ひて、傳吉をおとしめんと工めど何にせよ先きに立つ金子のあらぬに困じ、果ては悴夫婦を江戸表へ出し、何處へか奉公へ住みこませ、其の身の代をもて上役共へ賄賂せんものとて、昌次郎に語れど、之も又外に思案なく、忽ち談しまとまり、あくる日の黄昏夫婦仕度して、出で立ち、猿島河原まで來りしに、手元の暗けれど、松明を燈さむとて昌次郎火打道具を見るに、何事も取り揃はぬ旅火打石見ねず、さては取急ぎぬるあまりにうち忘れたり、御身は其處に待たれよ、我れ、一走り立ち歸りて石をも取りこんとて、お花を河原にまたせ、其の身は取つてかへしけり。

またゝく間にも待つ身には千代ふる心地、たそがれもやう〳〵暗さまさるに何やらん驚きて水鳥のさつと立つとたん、吹く風さつとお花がみにしみ、思はずふるへつゝ、我が背はまだかと見亘す後ろに、ざんぶ〳〵と膝丈けの水を潜り、一人の雲助、若き女を背負ひて渡り來り、河原にどつさりとおろし、やい女、もうこうなれど百年目、巳れが云ふこと聞きて、此の巳れを兄と云へ、妹として女郎に賣るなれど、いやのなんのとぢくねると其の分にはおかぬぞと、はりものだらけのはだをぬぎて、女あららかに云ひ聞かするに、それどかりは許して、どうぞゆるして下され、我しが夫は源次郎と云ふもの、お金子がほしくど其の人より進ぜむほどに、もうゆるして、どうぞ其の人のあとにて尋ねんに、あはしてよどおろ〳〵涙ながら手を合せ賴むを、まだ強情をぬかすか、巳れの云ふ事すなはに聞かぬとならども う百年目、覺期せよと云ひさま腰なる白刄さつと拔き放ちおどしかくる事をおつと玉ぎる女の聲、此方にもおどろくお花思はず聲を立つるを、巳れ聞く人あり

たるか、どいつもゆるさぬぞとて、わなゝくれ花を引掴み切りつけんとするに、わはや人殺し〳〵と聲立てゝ逃げ迷ふ危き所へ、馮司、聞きつけ、走せ來りて、やは、嫁女かと、呼ぶねに、父さまか、人殺し助けてとすがる間もあらせず、男は白刄を振りめかし、馮司に切てかゝるを、馮司も共に刄をぬきて一刀二刀爭ひしが、遂に押し倒され膝にかはれて今や眞二つ切らんとする處へ昌次郎來り此のさまを見るより雲助が肩先をずつと切りしに、雲助れどろき飛びしさつて、わなゝき居る女を楯に戰へど、何かは堪へん女わつとたまぎる聲の下に女はたふれたり。昌次郎なほも雲助めがけてめつた切に切り廻れど是れもまたうんとぞかり仆れたり。

文林



秋晴　東久世通禧

みやこには茸とる山はなけれども
わたら日和をいざ出てみん

秋雨　鍋島直大

吹かせにさくらの紅葉かつちりて
ゆふぐれ寒きわめのれとかな

菊　前田利嗣

さまざまの種にや有覽ませの内に
色をくらべてさきにほふきく

月下海　津輕承昭

かりのこす垣ねのすゝき露れきて
月のやどるもさびしかりけり

海上厂　前田利鬯

わた中にうかぶ島やまよこぎりて
一つらわたるあきのかりがね

野露　諏訪忠元

八千草の花野のすゑをわけゆけど
れきあまりても見ゆる露かな

朝秋風　宮地嚴夫

空すみて吹としもなきあきかぜの
みにしむ秋になりにけるかな

岡紅葉　阪正臣

岡のへのもみぢのひまに見ゆる哉
をさなかりふくいこひ所も

夜虫　植松有經

此ころは夜ながく成て鳴むしの
聲にねさめぬあかつきもなし

月前祝　大口鯛二

きみが世の秋のたのしさ久かたの
月にうたはぬひとなかりけり

月為友　岩崎勝從

酒のみてふかしつるかな今宵また
つきより外のともゝなけれど

前田次郎の妻君をかなしみて　大畑弘國

夕ぎりの立まどひたるいまはより
なきあとしのぶ袖ぞつゆけき

白き萩の花を見て　三浦千春

白きこそゆかしかりけれ少女子が
はぎとひとつの花の名なれど

秋晴　三輪義方

朝霧にまよひいでぬるみちとしも
れもはれぬまで晴れしそら哉

雁來　赤松景福

をしねくふこともわすれて我待し
あきたかりかね今ぞきにける

里鶏　草野隆道

きぬだうつ音にはなれて垣根にも
うづらなくなりればはらの里　島　宮　太　郎

草花
いぶせしと夏はれもひし八千種に
花もさきけりつゆもれきけり　足　立　正　枝

海邊初冬
住吉のはまのまつむらふくかせの
れともしぐれて冬は來にけり　木　庭　芳　香

秋旅
行く雁に言や傳てましあふさかを
しぐれに濡てけふはこゆぬと　伊　東　祐　賢

水車
さそひつゝめぐる車のたゆみなく
みづのこゝろに人もならはむ　安　齋　篤　敬

時雨
ふりはへてとふ人もなき柴の戸を
しむしれとなふむらしぐれ哉

曉露
朝良はまたいきたなく見ゆれども
ひとりれきたるあかつきの露　蜂　須　賀　随　子

雨中虫
きゝなれし柴の垣ねのきり〴〵す
今よひのあめに聲よわりけり　西　四　辻　茂　子

孟母
三度まで移しかへたるませの内に
いろこそまされなでしこの花　柳　原　愛　子

菊をかざして
幾あきか菊をかざして來つれども
なほも少女のこゝちこそすれ　南　郷　柳　子

秋木
れくやまのいてふの梢いろつきて
秋のふかさも志られぬるかな　松　平　健　子

雨後紅葉
村雨のなごりのつゆにてりそひて　佐　藤　艶　子

ゆふ日までゆきをかの紅葉

孤雁　坂田泰子

狩びとのつゝの音にやみだれけん
つらをはなれてわたる雁がね

曉紅葉　原田蒼生子

あさ日かげまたさしいでぬ曉の
霧のわかきはもみぢなりけり

秋山路　鶴久子

茸がりに昨日もけふもふみなれて
やまぢは霧もたどらざりけり

庭秋草　河村重子

此ころの野分にあれしけしきさへ
見どころ多きにはの八千くさ

暮秋鹿　安東菊子

さそひくる松のあらしに暮てゆく
秋ををしかのこゑきこゆなり

社頭月　土岐幾子

ふくろふの聲もの凄し小夜更けて
宮居をてらすつきのさやけさ

一行斜雁　尾立三尾子

雲はらふゆふべの風にこゑたてゝ
れつるも寒しかりのひとつら

名所擣衣　清水靜子

まきかへす賤がきぬたの音さえて
よしのゝさとにすめる月かな

潮噴岩をみて思ふことをよめる長歌　下田義天類

寄る波のあら井の崎の、沖遠くさし出づる山に、人の世を見るに足るべき、くすはしき巖ぞ立てる、その岩は千さか五百尺、奥深くうつろになりて、うつ浪の外はすぶ〳〵　入る潮の内はほら〳〵、いひも得ず奇しき姿、姿はしとまれかくまれ、其の岩のうつろの内に汐ひれて風をみたしめ、汐みては浪をのましめ、汐の、

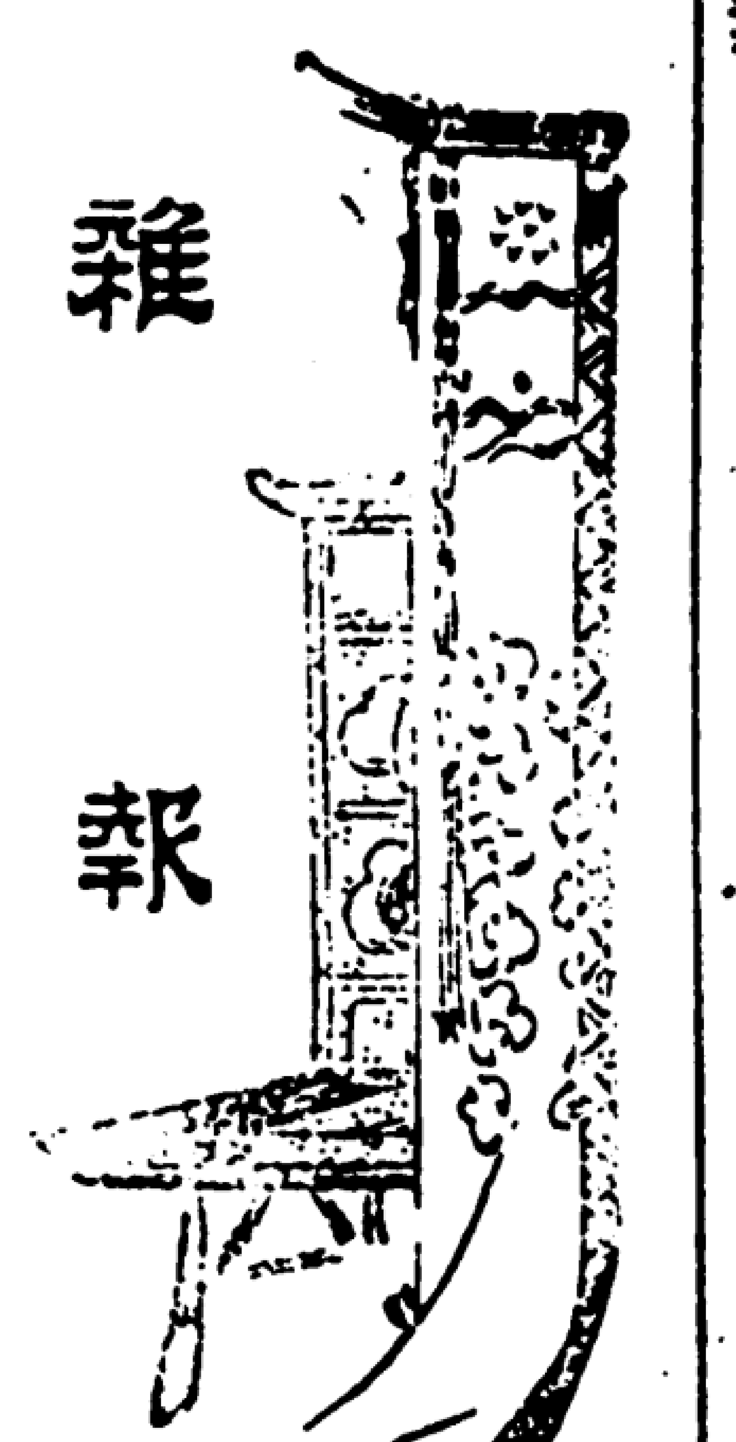
むたかゆきかく去り、浪風行きかふはしに、思はえぬたけびを起し、おのづから汐氣ふきたて、大空にみなぎらしけり、そこをしもあやにともしみ、其の磯のみぎりに立ちて、つく〴〵と吾か見しをれは、寄る浪のよするまに〳〵、おく深く入りゆく汐の、磯山をゆするひゞきは、荒れわたるさくいかつちの、千引石くだくがごとく、大地を底にとよもし、口すほくいて來る風の、あら汐をいぶくいぶきは、汐氣ふく百ひろ鯨、波のほに浮かべるなして、水けぶり空にふきたて、ある時は八尺の雪を、つむじふきいまくが如く、或時は千五百の玉をこき散らしまろむすなして、さま〴〵に見る目かはらひ、おのづから生けるがごとく、海山のはたらくさきぞ、あはれあはれ遠き神代ゆ、たまちはふ神の心と、世の中はかくのみなるらし、此の岩のうつろの風は、吾が國の神世の手風、そこにして出でいる浪は、他國のしひたる手風、人國のあたしてぶりを、より〳〵に入れつ出しつ、或時は風をいからせ、或時は波をくるはせ、おもはえぬさやぎも起し、雪のごと亂るとすれど、思はえぬはげみも起し、玉のごとかつはみがきて、世をうつし時をもかはらせ、國民をあらたにしつゝ、をやみなくはげますからに、このいはのうつろの風の、とことはにあらたなること、人心腐れざりけり、こゝもへむよごとまがごと、折々にゆきかはりつゝ、神ながらすゝみゆく世を、この岩に見よとなるらし、この崎に知れとなるらし、そこもへむ動きてやまぬ人の世のすがたを見せて、くすはしくたてるいはかも、まくはしくなれる崎かも、寄る波のあらゐの崎の汐噴岩あはれ。

おもひつゞけて　　　　おきつどり

夕陽はあかねの色をのみ山の端にとゞめて、空しきけふも暮れかゝりぬ。隈なく澄みわたりたる空に列ねたるは雁にやあるらむ。やうやう小さくなりて、何所ともなく消え行きぬ。目も放たで守り居たる吾は、更に

薄暗き大路の人のあし音ばかりあわたゞしきを見かへりつゝ、つと寄せかけたる肱をもたげて窓をさしつ。大路を隔てゝ寂照寺といふ古刹のある方へと歩みゆく。胸には憂愁の雲やたちふたがり、口には太息の霧やたちこむる。運ぶ足いと物うく、懐の手れき所もなし。廣からぬ寺の敷石、彼方こなた、ふたかへり三かへりばかりゆき戻りきて、更に堂ともおぼしき小高き處に歩み行き、ひと本立てる松の物舊りて、うとましげなる根方に、やをら身を寄せつ。寂寞たる黄昏の色寝入りたらむばかり物靜なるに、かなたに聳え立てる群山は、朦朧としてみる〳〵暗のひとやにぞ籠めらるゝ。俄に哀しさもせまり來るやうに覺えてうつ臥せば、暗は何時の間に手を擴げけむ。吾がわたりなもたちこめたり。もたれたる松の梢は物さびしく音なひそめて、さと掠め行く風身にしみて覺ゆるに、思はず仰ぎみやれば、九日ばかりの月は半弦の影ひやゝかに堂のいらかよりさし出でぬ。思ひもかけねば暫時まもりつめたり。日も滿幅の同情を寄せて吾が上を照すかと思へば、戀しさ哀しさ心細さは、せまき心に浪のごと行きかへる。さしぐみたる涙を袖もておしぬぐへば、月は何時しか袖にも忍び來て慰め顔なるに、吾しらず洩れいでたる太息は、嬉しき故か哀しき故か、吾は得辨へず。噫月よ。千古絶えて面がはりせぬと聞く月よ。その姿は、今宵はまして中々若やぎためり。此の若やぎたる月は、今この吾が面を照す如く、又戀しき吾が故郷をも照すらむ。吾が故郷を照す月は、同じく吾が悲しき母のまします御墓のわたりをも照すらむ。旅にある身は遂に母には得まみえ奉らずなり果てぬ。まして母が野邊の御おくりは、覺束なくも思ひやるばかりの幸なきみなし子とはなりにけり。母がみまかられつる後の吾が家は、いかばかり夜毎の露しげく、母が世を去り給へる後の吾が同胞は、いかばかり涙の袖重かるべき。よし夜毎の露はいかにしげくとも、吾は家に在りたらば、そのしとゞなる露のかゝるも、せめて身にとりて

は嬉しからましを。涙の袖いかに重くとも、はらからの吾にも其を分けましかば、朽つるばかりの袖も、なかく／＼に慰めならましを。あはれ吾は一世ばかりの縁ときける母には、見もだにあひ奉らず。空しき涙をこゝに人しれず月に灑ぐも、月のみは吾が袖に宿りて、吾が哀しみを分つに似たり。寂寞たる黄昏の色は、吾を哀しみの淵にみちびきたりと思ひしは、あらずしてなつかしき月にあはしめむとてなりけるよ。さらば同じくは猶吾をともなひて、かの月のすめる許にまで行かしめよ。月の許にあらば、吾はその月と共に、故郷のなつかしき母の御墓をも見奉らましものをとて、再ながめやれば、月は早く湧きいでたる雲にかくれて、暗は全く、吾をも天地と共に同じ夜のひとやにれしてめつ。月にさへ捨てられし心地して、一しほまさりたる心細さに、吾はればつかなくもかへり路をたどれば、寂照寺の鐘の音は、淡暗き圓窓をもれて、讀經の聲と共にひゞきぬ。



雜報

●大御いでまし　皇后陛下は、去し廿八日、東京上野公園なる博物館にをよばしたりし、日本赤十字社第九回總會に行啓せさせ給ひ、更に、府下北豐島郡王子村にいでまして、近衛師團の假設敵演習、及、衛生隊、日本赤十字社救護員の演習をめ、みそなはし給へり。又、今日五日は、靖國神社に、征清役に忠死せし人たちの靈を合祀し、且、大祭をも行はせ給ふべきにて、天皇、皇后兩陛下には、こゝに、いでまさせ給ふべしとぞ。

●天長節　十一月三日は、かしこき、我大君のみあれましゝよき日なれば、もゝしきの都は、更にもいはず、あまさかる鄙も、なしなべて、上が上、下が下まで、旭の御旗ひらめかして、たゞ大君の御いのちなが

ゝれど、いはひことほぎ奉れり。ことに、有爵、有位の人たちは、大宮内にまゐり上りて、ことほぎ奉り、大御酒をたまはれり。げに、よき日のうまし日よな。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

●宮中御兼題

去月五日の詠進は左の如し。

きりはてたるあした

なこりなく朝きりはれてもゝへ山頂なる限りみねわたる哉　正風
天つ風ふきはらひたる朝露のたゆたふそらに雁わたるみゆ　建通
野も山もさやかにみねて出る日のくもる旦は立つ霧もなし　利嗣
朝霧のゆくへにしはしきねまりし月もうすれてよは明に鳬　豐穎
袖の上に露をのこしてはれに鳬深しさみゝるけさの朝きり　資紀
もみちはの染し色よりみねそめてあさきりはるゝ足柄の山　承昭
淀川や八はた山ねききりはれて水の行末さほしろきかな　詮
秋のゝのふけゆくまゝにきりはれてさやかに殘る有明の月　通善
きりはれてさやけき秋の山の色はけさ珍しくみねわたる哉　顯允
けさまては雨にやならんと思ひしを晴て跡なき野邊の秋霧　光昭
浮雲はあさなくはれて山松のこすゑにのこるあさつく夜哉　利豐
心地よく富士もつくはもみゆるまて霧はれ渡る朝ほらけ哉　忠敬
朝風によきりあさなく晴にけり昨日はみねぬ山もみねつゝ　濟
なにはかた明ゆくそらのきり晴てさやかにみゆる淡路島山　美稻
山のはの朝日さやかに昇るなり隔てしきりははれ渡りつゝ　通治
山松の梢ほか〳〵みねそめて秋のあさきりはれわたりけり　雅之
大ひねの高ねのさきりけさはれて一本杉もみねわたるかな　量弘
日枝のねに登てみれはあさきりの晴たる海の廣くもある哉　隆元
朝日さす軒端の松のぬれたるははれにし霧のなこりなる覽　愛子
遠のへの尾花か袖のつゆちりてよきりあさなく晴わたり鳬　任子
あさきりはいまか晴らん山松の梢はるかにみねそめにけり　文子
名殘なく夜きりははれて花やかにさし登りたるあさ日影哉　貞子
きりはれて朝風涼しますらをは小鷹狩にやおもひたつらん　敦子
薄らくさみるまにはれて秋きりの名殘の露に朝日さすなり　道子
朝風にすゝきなひきてこゝちよくきり晴わたる秋の野邊哉　綠子
秋風にきりはれわたり朝日さすかけさやかにも見ゆる空哉　好子
秋風にあさきりはれて遠方の山のもみちもみねそめにけり　銈子
函根山あさ霧はれて蘆の海にうつれるふしの影のさやけさ　三枝
あさきりはあとなくはれて村烏梢はなるゝ數もみねけり　愛
なく雁の影もさやかに空すみてきりのはれたる朝ほらけ哉　殿夫
秋きりはあくるまに〳〵はれにけり尾花か上に露を殘して　正臣
終夜たちわたりたるきりはれてつゆの玉しくあさちふの庭　直緻
朝霧のなこり匂ひていつる日にむさへこそはれわたりけれ　秋香
名殘なくはれたるみれは朝曇降し小雨はきりにそありける　榮
霧はれて空はさやかにあけたれさまた虫の音の殘る野へ哉　有經
山川も更にいてまし心地してきりはれわたるあさほらけ哉　殿雄
たちこめし朝きり晴てこの朝けさやかに高し雪のふしのね　檀郁
朝きりのはれにし方に風みねてをのゝしの原露そみたるゝ　有義
水無瀨川きりはれそめて男山昇るあさ日のかけのさやけさ　行久
こゝちよくあさきりはれて淺茅原目覺るはかりみゆる露哉　綱二
きりはれしのきはの松のつゆちりて朝風さむし秋の山さと　正夫
更によのあけたる如し朝きりのたつさみつるはたゝ暫にて　胤明
けさたちし鹿のさきもみゆるかなきりはれわたる秋の山道　英一
さふ雁の數みねそめてあけ方の山際よりそきりはれにける　義濟
あさ日さす松のぬれ色さやかにも雫殘してきりはれにけり　久子

●孝

忠孝もと一にして二義なし。誰も皆、これを

離るべからず。近江の國、東淺井郡、大里村に、西川ゆき女とて、今年廿七歳になれる人あり。家いと貧しきに、かてゝ、父忠兵衛、中風症にかゝれるを、みづから、人にやとはれて、下婢となり、其の料をもて、弟妹三人までをも養ひたて、且、其のいとまには、父を看護すること至れりとて、近鄕ほめたゝへぬはなしとぞ。

●又　讃岐の國、丸龜に、齋藤友三郎とて、十五歳になれる少年あり。これも、いと貧しく、常に、わが弟と共に、飮料の水をひさぐをすぎはひとし、父は、年も老い、且、病みて、ふしどにあり。二人、心を一にして、其が口にかなへるものを、買ひて進めるなどして、看護れろそかならずとぞ。縣知事きゝて、金六圓を賜ひて、褒賞せりとなむ。

●又　富山縣、高岡中學校生徒、高井治一といへるは、八年さきに父を失ひしが、慕ひ戀ふる心やみがたくて、ありしすがたをゑがきて、朝夕これに、酒饌をそなへ、かつ出るにも、入るにも、必、告ぐるなど、さながら、ありし昔にかはらず。又、母病みて、家政にたへねど、みどりながら、家計をつかさどり、勤儉を旨として、六千餘圓の産を興せりとぞ。近鄕みな、ほめたゝへぬはなく、このほど、そこの學校にては、式をもよほして、賞品を授與せりといふ。よく、子たる道をふめりといふべし。

●悌　も亦、孝の一なり。兄弟もと、父母より分れたれど、親しむべきは、いふも更なり。かく相親しみなむ、亦、父母の心をよろこびしむべけれどなり。宮城縣、登米郡、南方村に、玉乃とて、十五歳なるがあり、兄の某、脚氣病を煩ひて、腰もたゝぬを、そこより十里あまりを隔たる川渡温泉に到りて、ゆあみせしめんとて、みづから車をつくり、兄をのせて、引きつゝ、五日がほどに、川渡に到れりとぞ。聞くだに、涙ぐまるゝことなり。

●受賞　下文を見よ。

岡山縣備前國津高郡上田村　石井忠義

資性溫厚鄕望一鄕に隆く夙に子弟教育の忽にすべからざるを說示し教師を聘して力を學事に致し明治五年學制發布以後益々振作を努むる山間の村落良師に乏しきを慨き生徒を選擇誘勵して私立學校に入らしめ以て教員を養成し且つ校舍の造築を規畫し群議を排し衆紛を解き苦心經營竣工を告げたるもの一にして足らず今や學事進步高等小學科を修むるもの昔日に倍徙するに至る其他民家の婦女を勸誘して裁縫術の發達を圖り險路を開鑿して人馬の來往貨物の運搬を便ならしむる等爲めに盡す所亦尠なからず洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●人を恃まぬ心、　げに感ずるに堪へたり。

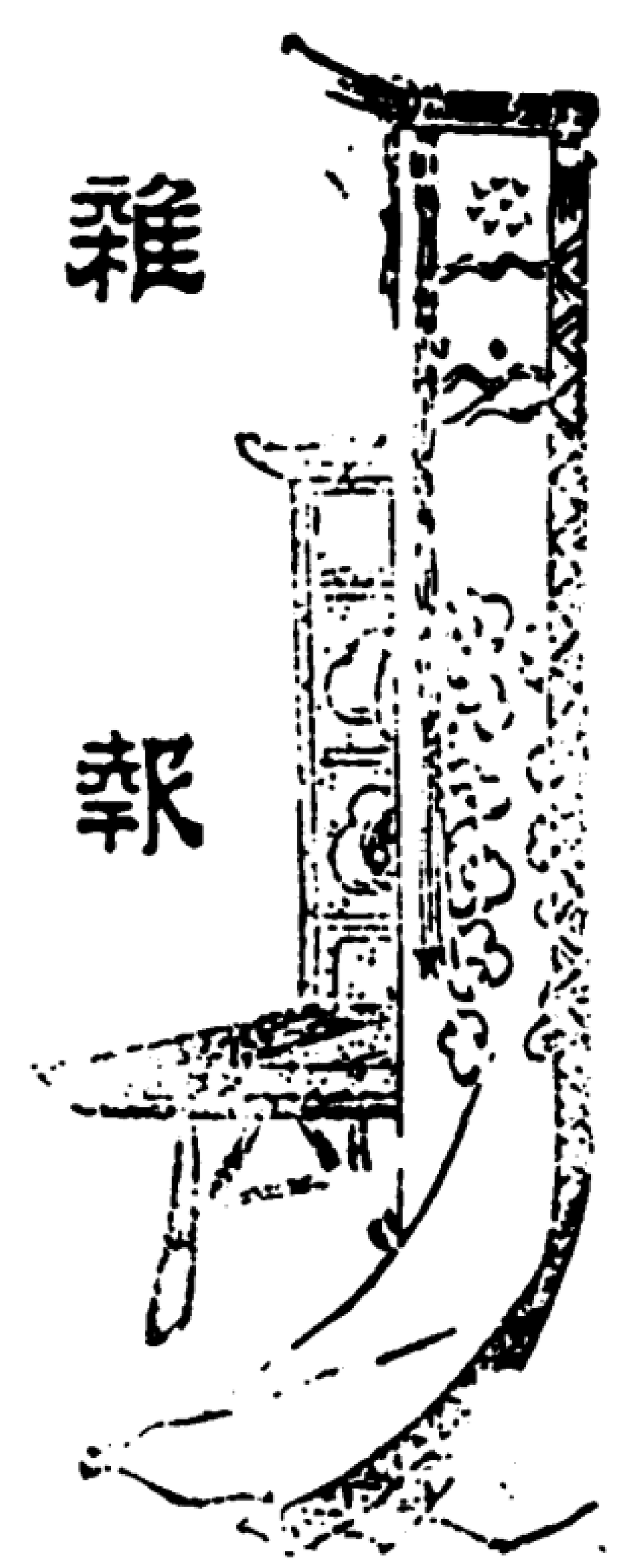
信州、諏訪町とのみ聞きて名をもらしつ。今年、十二歲になれる少年あり。そこに、貧民救助會ありて、その會員、この某の家にいきて、金を贈れるに、父母よろこびて受けんとす。某いさめていへらく、今家は、まづしかれども、幸にして、病者なし。めぐまるゝ御心は、謝するに餘あれども、人の救助を受くるは恥なり、家擧りてはげみつとめなば、今日をすごされじとにもあらじ。はた、遂に、いつまでも、貧しからんとて、れしとゞめければ、會員も愧ぢて、立去れりとぞ。

●特志　福岡縣、山家村に住める山田芳策といへる翁は、年七十五歲なり。この翁深く心を、學事に盡し、年は老いたれども、身すこやかなれば、常にみづから働きて、其の料をば、悉く、學校基本財產に寄附しつゝ、其の增殖の事を、こよなき老後の樂とすといふ。特志の翁といふべし。

●勤勉　世には、わが親より、强ひても、學資を受けながら、學校には、缺席がちにて、遊にのみふけるものも多かるをかゝるは、いと稀なり。山梨縣、中巨摩郡南湖村に、矢野市次郎といへる少年あり。甲府市、有朋義塾の生徒なり。新聞配達を、わが職とし、夜每に、十二時といへども、必、臥床を離れて、往復七里半ばかりの處を、夜の明くるまでに、配達し終へて、さて、朝食たうべては、袴をうがち、帽を戴きて、通學するを常とすとぞ。されば觀るものみな感せざるはなしといふ。

●又　これは、伊豫の國、明治村なる目黑小學校

は嬉しからましを。涙の袖いかに重くとも、はらからの吾にも其を分けましかば、朽つるばかりの袖も、なかなかに慰めならましを。あはれ吾は一世ばかりの縁ときける母には、見もだにあひ奉らず。空しき涙をこゝに人しれず月に灑ぐも、月のみは吾が袖に宿りて、吾が哀しみを分つに似たり。寂寞たる黄昏の色は、吾を哀しみの淵にみちびきたりと思ひしは、あらずしてなつかしき月にあはしめむとてなりけるよ。さらば同じくは猶吾をともなひて、かの月のすめる許にまで行かしめよ。月の許にあらば、吾はその月と共に、故郷のなつかしき母の御墓をも見奉らましものをとて、再ながめやれば、月は早く湧きいでたる雲にかくれて、暗は全く、吾をも天地と共に同じ夜のひとやにおしこめつ。月にさへ捨てられし心地して、一しほまさりたる心細さに、吾はおぼつかなくもかへり路をたどれば、寂照寺の鐘の音は、淡暗き圓窓をもれて、讀經の聲と共にひゞきぬ。



雜報

●大御いでまし　皇后陛下は、去し廿八日、東京上野公園なる博物館にもよほしたりし、日本赤十字社第九回總會に行啓せさせ給ひ、更に、府下北豐島郡王子村にいでまして、近衞師團の假設敵演習、及、衞生隊、日本赤十字社救護員の演習をも、みそなはし給へり。又、今日五日は、靖國神社に、征淸役に忠死せし人たちの靈を合祀し、且、大祭をも行はせ給ふべきにて、天皇、皇后兩陛下には、こゝに、いでまさせ給ふべしとぞ。

●天長節　十一月三日は、かしこき、我大君のみあれましゝよき日なれば、もゝしきの都は、更にもいはず、あまさかる鄙も、おしなべて、上が上、下が下まで、旭の御旗ひらめかして、たゞ大君の御いのちなが

ゝれど、いはひことほぎ奉れり。ことに、有爵、有位の人たちは、大宮内にまゐり上りて、ことほぎ奉り、大御酒をたまはれり。げに、よき日のうまし日よな。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

● 宮中御兼題

去月五日の詠進は左の如し。

きりはてたるあした

なこりなく朝きりはれてもゝへ山頂なる限りみゐわたる哉　正風
天つ風ふきはらひたる朝露のたゆたふそらに雁わたるみゆ　延通
朝霧のゆくへにしはしきゐまりし月もうすれてよは明に兇　利嗣
袖の上に露をのこしてはれに兇深しさみりるけさの朝きり　豐訓
もみちはの染し色よりみゐそめてあさきりはるゝ足柄の山　貞徇
淀川や八はた山さききりはれて水の行末さほしろきかな　承昭
秋の〻のふけゆくまゝにきりはれてさやかに殘る有明の月　詮
きりはれてさやけき秋の山の色はけさ珍しくみゐわたる哉　通善
けさまては雨にやならんと思ひしを晴て跡なき野邊の秋霧　顯允
浮雲はあさなくはれて山松のこすゑにのこるあさつく夜哉　光昭
心地よく富士もつくはもみゆるまで霧はれ渡る朝ほらけ哉　利璽
朝風によきりあさなく晴にけり昨日はみゐぬ山もみゐつゝ　忠敬
山のはの朝日さやかに昇るなり隔てしきりははれ渡りつゝ　済
なにはかた明ゆくそらのきり晴てさやかにみゆる淡路島山　美稻
山松の梢ほかくみゐそめて秋のあさきりはれわたりけり　通治
大ひゐの高ねのさきりけさはれて一本杉もみゐわたるかな　雅之
日枝のれに登てみれはあさきりの晴たる海の廣くもある哉　量弘
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　隆元

朝日さす軒端の松のぬれたるははれにし霧のなこりなる蘭　愛子
道のへの尾花か袖のつゆちりてさきりあさなく晴わたり兇　任子
あさきりはいまか晴らん山松の梢はるかにみゐそめにけり　文子
名殘なく夜きりははれて花やかにさし登りたるあさ日影哉　貝子
きりはれて朝風凉しますらをは小鷹狩にやおもひたつらん　敦子
薄らくさみるまにはれて秋ぎりの名殘の露に朝日さすなり　道子
朝風にすゝきなひきてこゝちよくきり晴わたる秋の野邊哉　竦子
秋風にきりはれわたり朝日さすかけさやかにも見ゆる空哉　好子
秋風にあさきりはれて遠方の山のもみちもみゐそめにけり　鈺子
函根山あさ霧はれて蘆の海にうつれるふしの影のさやけさ　三枝
あさきりはあとなくはれて村烏梢はなるゝ數もみゐけり　愛
なく雁の影もさやかに空すみてきりのはれたる朝ほらけ哉　殿夫
秋きりはあくるまにくはれにけり尾花か上に露を殘して　正臣
終夜たちわたりたるきりはれてつゆの玉しくあさちふの庭　重嶺
朝霧のなこり匂ひていつる日にむさへこそはれわたりけれ　秋香
名殘なくはれたるみれは朝曇降し小雨はきりにそありける　榮
霧はれて空はさやかにあけたれとさまた虫の音の殘る野へ哉　有經
山川に更にいてまし心地してきりはれわたるあさほらけ哉　殿雄
たちこめし朝きり晴てこの朝けさやかに高し雪のふしのれ　樞郁
朝きりのはれにし方に風みゐてをのゝしの原露そみたるゝ　有義
水無瀨川きりはれそめて男山昇るあさ日のかけのさやけさ　行久
こゝちよくあさきりはれて淺茅原目覺るはかりみゆる露哉　綱二
きりはれしのきはの松のつゆちりて朝風さむし秋の山さと　正夫
更によのあけたる如し朝きりのたつさみつるはたゝ暫にて　胤明
けさたちし霧のさきもみゆるかなきりはれわたる秋の山道　英一
さふ雁の數みゐそめてあけ方の山際よりそきりはれにける　義濟
ある日さす松のぬれ色さやかにも雫殘してきりはれにけり　久子

● 孝

忠孝もと一にして二義なし。誰も皆、これを

離るべからず。近江の國、東淺井郡、大里村に、西川ゆき女とて、今年廿七歳になれる人あり。家いと貧しきに、かてゝ、父忠兵衞、中風症にかゝれるを、みづから、人にやとはれて、下婢となり、其の料をもて、弟妹三人までをも養ひたて、且、其のいとまには、父を看護すること至れりとて、近郷ほめたゝへぬはなしとぞ。

●又　讃岐の國、丸龜に、齋藤友三郎とて、十五歳になれる少年あり。これも、いと貧しく、常に、わが弟と共に、飲料の水をひさぐをすぎはひとし、父は、年も老い、且、病みて、ふしどにあり。二人、心を一にして、其が口にかなへるものを、買ひて進めるなどして、看護おろそかならずとぞ。縣知事きゝて、金六圓を賜ひて、褒賞せりとなむ。

●又　富山縣、高岡中學校生徒、高井治一といへるは、八年さきに父を失ひしが、慕ひ戀ふる心やみがたくて、ありしすがたをゑがきて、朝夕これに、酒饌をそなへ、かつ出るにも、入るにも、必、告ぐるなど、さながら、ありし昔にかはらず。又、母病みて、家政にたへねど、みどりながら、家計をつかさどり、勤儉を旨として、六千餘圓の產を興せりとぞ。近郷みな、ほめたゝへぬはなく、このほど、そこの學校にては、式をもよほして、賞品を授與せりといふ。よく、子たる道をふめりといふべし。

●悌　も亦、孝の一なり。兄弟もと、父母より分れたれど、親しむべきは、いふも更なり。かく相親しみなむ、亦、父母の心をよろこばしむべけれどなり。宮城縣、登米郡、南方村に、玉乃とて、十五歳なるがあり、兄の某、脚氣病を煩ひて、腰もたゝぬを、そこより十里あまりを隔たる川渡温泉に到りて、ゆあみせしめんとて、みづから車をつくり、兄をのせて、引きつゝ、五日がほどに、川渡に到れりとぞ。聞くだに、淚ぐまるゝことなり。

●受賞　下文を見よ。

岡山縣備前國津高郡上田村　石井忠義

資性温厚郷望一郷に隆く夙に子弟教育の忽にすべからざるを說示し教師を聘して力を學事に致し明治五年學制發布以後益々振作を努むるも山間の村落良師に乏しきを慨き生徒を選擇誘勵して私立學校に入らしめ以て教員を養成し且つ校舍の造築を規畫し群議を排し衆紛を解き苦心經營竣工を告げたるもの一にして足らず今や學事進歩高等小學科を修むるもの昔日に倍從するに至る其他民家の婦女を勸誘して裁縫術の發達を圖り險路を開鑿して人馬の來往貨物の運搬を便ならしむる等爲めに益する所亦尠なからず洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●人を恃まぬ心、げに感ずるに堪へたり。信州、諏訪町とのみ聞きて名をもらしつ。今年、十二歳になれる少年あり。そこに、貧民救助會ありて、その會員、この某の家にいきて、金を贈れるに、父母よろこびて受けんとす。某いさめていへらく、今家は、まづしかれども、幸にして、病者なし。めぐまるゝ御心は、謝するに餘あれども、人の救助を受くるは恥なり、家擧りてはげみつとめなば、今日をすごされじとにもあらじ。はた、遂に、いつまでも、貧しからんとて、れしとゞめければ、會員も愧ぢて、立去れりとぞ。

●特志　福岡縣、山家村に住める山田芳策といへる翁は、年七十五歲なり。この翁深く心を、學事に盡し、年は老いたれども、身すこやかなれば、常にみづから働きて、其の料をば、悉く、學校基本財産に寄附しつゝ、其の增殖の事を、こよなき老後の樂とすといふ。特志の翁といふべし。

●勤勉　世には、わが親より、强ひても、學資を受けながら、學校には、缺席がちにて、遊にのみふけるものも多かるをかゝるは、いと稀なり。山梨縣、中巨摩郡南湖村に、矢野市次郎といへる少年あり。甲府市、有朋義塾の生徒なり。新聞配達を、わが職とし、夜每に、十二時といへども、必、臥床を離れて、往復七里半ばかりの處を、夜の明くるまでに、配達し終へて、さて、朝食たうべては、袴をうがち、帽を戴きて、通學するを常とすとぞ。されば觀るものみな感ぜざるはなしといふ。

●又　これは、伊豫の國、明治村なる目黑小學校

生徒に、(二年生)淺田右内、岡部佳久次、渡邊萬太郎、岡本武雄といへるあり、學校より、一里半を離てたる地に住めども、四人は、皆、入學してこのかた、未、一度も缺席せしことなく、また、遲刻せしこともなしとぞ。

●華族女學校　にて、生徒の身体檢査を行ひしに、一百五十名が中、健全なるは、わづかに五名のみなりきと聞く。いたむべきなり。

●大阪市内の高等小學校　にては、生徒のかける色紙短冊を、　天覽に供へ奉らんとすと聞く。もとよりよきことなるべけれども、小學生徒のものとしては、他にあたれる考案もなきにはあるまじきを。

●興風女學校長山田時章氏みうせぬ　いとも〳〵、いたましき限なり。氏はもと、青蓮院宮の世臣なり。天保、五年十月四日、京都、粟田口に生れ、名を勘解由といへり。幼より氣慨ありしかど、幕府の忌憚に觸れて、獄につながれしこともありき。かの安政六年、とらはれて、江戸に押送せられ、吳服橋内なる白洲に出し時、ふと厠にて、梅田雲濱とあひしに、雲濱耳語していへるやう、「子は齡なほわかし。よく、おろかものゝさまをよそほひ眞似て、法廷を弄び、免れ得て、再、王政維新の長計を畫せよ。我は、既に、老い、且、尊攘黨の大本地と見らるれば、せんもなし。」といはれしに、氏、いたく、感奮して、其の言の如くして、刑罰を免れたりしこともありきとぞ。後、雲濱の姪なる富女を娶れるに、富女はやく、雲濱が許に居て、薫陶を受けたりけれど、烈女の資ありて、内助の効すくなからず。島津久光等と謀りて、青蓮院宮の御爲に、畫策し、なほ、王政維新に與りて、力ありきといふ。維新の後、明治二年、堺縣大參事となり、大に治績あり、更に、大政官の諸局に歷仕せりき。かくて、又、大政類典、大政提要等、三千餘卷の著述ありしが、明治六年、火の災に、悉く、燒け失せて、年ごろの辛苦もたゞ一片の煙とたちのぼりしかど、いたく心に

感ずるふしありて、これよりは、官を辭して、復仕へず、東京、神田、駿河臺に、興風女學校を設けて、專ら女子の教育に身を委ねられたり。明治廿五年、正六位に敍せられ、今年、更に、正五位に敍せられたりしが、去し廿一日、病みて、終にみうせられたり。なきがらは、染井の墓域に葬れりとぞ。こゝに、品川子爵の吊詞は、氏が行實の梗概を知るに足るべし。其の吊詞

西風落葉の時節に當り。予は微恙の犯す所なりて九段の樓上に困臥す。偶、山田の勸解由時章君の逝けるを聞き。愕然として悲み黯然として悼む。寔に懷舊の感に堪へさるものあり。

予は君と一面の識なし。然れとも予か同志二三の親友。嘗て君か門に入り深く恩眷を蒙るもの皆國難に殉したり

回顧すれば三十餘年の前。君か慷慨世を憂ひ。最も勤王の志篤く。百方斡旋の勞を執られし事を傳聞し。今尚記臆に存り。

嗚呼人生の常なき。榮辱昇沈と。其幸不幸とは。果して何に在る乎。

哲人は日に遠し。獨り彼蒼を仰き觀るのみ。

君は青蓮院宮の世臣。嘉永安政中。青年の頃より父時亮翁か勤王の素志を承け。夙に法親王に昵近し。備前の人花房厳雄に兵學を受けたりと。是此花房は尤も勤王の率先者にして。日々君を教へて皇居に至り。陽明門の前に禮拜せしむ。即ち君か勤王の志を堅固にする原因なりと聞く

又君は梅田雲濱に就き經學を受く當時梅田花房の交際は。君之を紹介し。勤王の密談を凝らす事。日夜頻繁なり。兩士屢法親王に謁し。王政復古の事を勸告するも。皆君か媒酌に出つると云ふ。

戊午の大獄起るに及て。梅田と共に捕はれ江戸に檻致せらる。始め梅田か水戸に赴き。又長州に下る等。皆君の與りて密議する所也と云ふ。而して君は宮家の近侍なるを以て。幸にして赦され。京都に返る。而して屛居三年に渉れりと云ふ

此頃大和十津川郷士等を竊かに呼寄せ。花房厳雄之を訓練し。青蓮院宮をして錦旗先鋒の大任に當らせらるべきの企ありしも空しく障碍ありて蹉跎したりとかや。是藤本眞金松本奎堂等十津川郷士を率り事を擧けたる原因にして。君は藤本眞金と格別の交際深く。粟田口の御學坊に於て。花房梅田藤本との四人の集會は。其幾度なるかを數ふべからすと云ふ。

安政五年の秋梅田と江戸に送らるゝに際し君は粟田口主王の門を過ぐる時。歌を詠じ

けふいでゝいつかは君に逢坂の
せきとめあへぬ我涙かな

と指を嚙み切り血汐にて懷紙に書き。網乘駕籠の中より投げ出たりしを。知人丹山なるもの之を拾ふと云へり。

君は青蓮院宮殿下に簪髮を勸め。宮をして音樂會に專符せ。深夜天顏に咫尺して國事を奏上し給ふ順序を周旋し。三條實美公の法親王に親近し給ふの事に於て。君が小松帶刀宍戸九郎兵衛等と。內議奔走の勞其苦心實に思ふべきあり。

君は法親王の冤を解くに汲々たり。法親王の冤たる。全く讒者の中傷するものにして女犯の事ありと羅織せるもの。幕府の反間を放て終に此に至れるのみとは君の專ら明言するところなりときく。

法親王は固より君が補佐し奉り。還俗の事より天顏咫尺のことを觀皆梅田花房藤本等の說を納れ給ふて勤王の事なるも。浮雲明月を蔽ひ。花時風雨多きの譬にて。君が赤心を盡して解雪に苦むも。亦推察するに堪へたり。

君は當時幸に生きて還り。梅田の姪宮子を娶とす。此女梅田の家に生長し其薰陶により頗る時事を解す。其當時公卿方の往復は。婦女

子に非らざるよりけ嫌疑の爲め事情通ぜす。故に大高又次郎日下乙瑞入江丸一等。此女に托して原卿と事情を通せし事度々なりと。君の此女を迎ふるは固より梅田の讃意に基き。且國事の關係の便利を兼て迎へたりときく。

王政維新の後君は暫く大病に罹りて青雲に上らず。明治二年堺縣大參事となり。大に水利を治め農業を勵ます。其後修史の任に當り。太政類典を修む。已にして退官再び出てす。是時世に感あり望を青雲に斷つと云ふ。

駿河臺袋町に純風女學校を設け。良家の女子を教育し專ら婉娩聽從を主とし。淑良の德性を養はしむ。華胄名族の嬢に。往々卒業して淑德ある婦人を見るに至る。嗚呼君の如きは夙に精忠苦節。隱然國家に盡すの功德極めて多し。人或は知らざるの逸事も亦多らん。但し其志の潔白なるに至りては光風霽月も啻ならず。識者は則ち之を知る。異日青蓮院宮の事績を記述するものある時は。君の精忠苦慮計謀する所の事實は。昭々乎として後世に明らかなるべし。聊か逸事を記して祭文に代ふ尙くは饗けよ嗚呼悲い哉

●女學校設立の奏請　こは、淸國にてのことなり。さいつころ、數百人の婦女子は、慶運宮前に、まゐ出て、疏文を上りて、國立女學校を設立せられんことを奏請せしに、優渥なる批旨を賜はれりと聞く。其の疏文なりといふは

伏して以るに學校なるものは人材を培養し智識を擴張する所の者なり是故に古へ國に學あり黨に序あり家に塾ある者獨り男子を教育するのみにあらすと爲す然して女類も亦教導の方あり内は則ち閨範等の先訓具備せるあるも欧米各國に就て之を觀れば女學校を設立して各習の才藝を學習し開明の歩の域に至れり即ち奚んぞ獨り我國のみ女學校なかるべけんや惟るに我大皇帝陛下中興の運に膺り獨立の基礎を建て百度維新せらる聖澤治深官私立學校を設け英材を培養せらる盛なりといふべし凡そ人材なるものは學問にあり學問なるものは教育にあり近日獨立協會の目的を聞くに忠君愛國の心を以て公平正直の義を秉り疏を大陛に上り聖聰を輔佐し國綱を扶持せんとすと凡そ陛下の臣民たる者孰れか欽感せざらむや甚しきは柴商果商に至る迄各々義金を醵して愛國の誠を表せんとす臣等の如き粉黛の一類と雖も豈に秉彝の心なかるべけんや然かも或は誹謗の論議又は排斥の言に非なしとせず故に聽聞愈々惑ひ未だ忠逆を辨せざる者多し此れ他らばず男子と雖も本と學識なく時宜に徒ふを主意とするが故なり然文字則ち反て學問なきの女子に如かず此を以て之を推せば女子と雖も忠愛の心文明の學亦力を用るに如かざる也是を以て臣妾等が賛養なるものを設始し忠愛の二字を以て國中より一國に興旺ならしめんと欲するも學校にあらざれば聰慧の女子と雖も培養の道なし故に敢學部て畏越を避けず裏陽を實察し齊聲天陛に仰訴す伏して乞ふ深燭勅をに下し女學校を特設し芳年妙齢の女兒等をして學業を修め東洋の文明國と爲り各國平等の待遇を得せしめられんことを臣妾等屛營祈懇の至りに任ふるなし謹て昧死以聞す

●日本赤十字社第九回總會　を、去し廿八日東京博物館構内にて、もよほせり。會するもの四萬三千八百餘名にして、内、女子社員は、凡、千名ばかりなりき。さて、さきにも、記しつるが如く、皇后陛下臨御し給ひて、左の令旨を賜へるに、赤十字社總裁小松宮殿下は、左の詞をもて、奉答せられたり。さて又、王子村

演習地にては、兵站病院、野戰病院等にて、看護婦數名、これ、亦、よく、任務を盡せり。

令旨

本日赤十字社第九回の總會に臨み茲に各員を見るを喜ぶ尚將來本社の事業益盛大ならんことを望む

總裁宮の奉答詞

茲に日本赤十字社第九回總會を開くに方り皇后陛下親臨優渥の令旨を賜ふ誠に本社無上の光榮なり本社は　帝室特殊の恩榮を蒙むり社員感奮益社業の擴張に勉め第八回總會の日に比すれば僅々二年間にして二倍餘の社員と資力とを増加し戰時準備の計畫も亦着々其歩を進むるを得たり　陛下慈仁の盛德を仰ぐにあらずんば何ぞ遽に斯の如き隆昌を見るべけんや自今一層力を協せ速に本社の目的を達し以て　陛下の殊遇に報い奉らんと五十有餘萬社員の期する所なり謹で答詞を上る

因にいふ。日本赤十字社社員は、總數五十三萬六千六百九十三人にして、我が國、人口、四千四百〇七萬二千二百三十三の上より見れば、人口は十五にして、一人の社員ある割合なり。

●東西婦人のしなさだめ　近く、我が國に渡れる米國人いへらく、歐米の婦人は、たゞ、身のまはりを飾り、うまきを食ひ、遊びにふけりて、さながら、日本の藝妓に似たり。されども、獨逸の婦女のみは、ひとり、これに異り、今、日本の婦人を見れば、よくつとめ、よく働くこと、獨逸の婦女子にもまされり。これ日本婦人の美德なりといへり。かくいへども、これたゞ、一わたり表面をのみ見たる言なるべし、當否はとにもかくにも、深く、きはめたる言とも聞えず。いまだ、更に、勝れたる所までは、目の及ばぬなるべし。

●國籍喪失　につれて、たとへば、外國人と、日本婦人との間に生れたる子女の處分は、國籍法いまだ定らぬに、戸籍法のみ、しき行はれたれば、其の處決に疑ありて、久しく決せざりしを、今、横濱市長より、司法大臣に伺出たる伺書と指令書とは左の如し。

一日本人たる子が外國人に認知せられ其認知に依りて外國の國籍を取得すべき旨を以て戸籍法第百六十條に依り國籍喪失の屆出を爲したるものあり國籍喪失に關しては何等依據すべき法文なきも右は法文を待て始めて國籍を喪失すべき者に無之に付戸籍法第百六十條の規定有之上は右國籍喪失屆出は受理致し差支無之哉

（指令）父の本國法に從ひ認知に依りて外國の國籍を取得すべき旨を以て國籍喪失の屆出を爲したるときは之を受理すべきものとす

一前項見解の如く取扱差支なしとすれば總て婚姻離婚養子縁組等に依りて國籍を失ふべき旨戸籍法第百六十條に依り屆出たる場合は受理

すべき義と心得可然哉

（指令）御見解の通り

●神戸在留の清國人　は、廿七八年戰役の後、一しは、其の數まさりて、今は、ほと〳〵千三百名にも及べりとぞ。さて、其の本國より家族を伴ひ來れるは、いとまれにして、ことに、年わかきは、日本の婦女を、妻とも、妾ともなせるが多く、家庭のありさまも、歐米の人とは、いたくかはれり。例せば、歐米人は、多くは、商店をば市中におき、住居を山手のわたりに構ふるを常とし。清國人は、みな、市中の商店中に、居住し、下婢をやとひて、家事を助けしむるが多し。かくて、又、清國人と、わが國婦人との間に產れたる混血兒は、清國語よりは、寧、日本語を用ゐ、中には、辮髮ながら、日本風の衣服を着け、或は、清服を着けながら、下駄をうがてるもあり。かく、風俗習慣等多くは、母方になびけるなど、歐米人とは、全く、其の趣を異にせり、さて又、女兒生るれば、必、三宮の神祠生田の社等にまゐ出で、其の健康と、冥福とをいのる風あれども、家庭、學業等は、却りて、心にもとめずと聞く。

●義捐　陸前の國、登米郡は、さいつころの水の災に、いたく害を蒙り、豐里、吉田の里々は、ことに甚しかりしかば、有志の人々相はかりて、義捐金を募れりしに、之に應ずるもの多かりしが、中にも、同郡なる、狼河原尋常高等小學校にては、尋常科第四年生より上の生徒をして、栗の實を拾はせ、一石七斗を獲て、之をうり拂ひ、金五圓を得たれば、悉く、こを義捐せりとぞ。いとよき事をせられたりや。

●又　横濱慈善會は、さきごろ、開會せしが、其の入場料をば、北海道の水災救助費等に、寄附すべしといふ。

●又　こは、外國人のなり。横濱に居留せる外國人は、去し廿八日、そこの山手居留地、パブリックホールにて、慈善會をもよほし、演說、唱歌、音樂などありしが、其の收入金をば、これ又、北海道の水災民、救

助費に義捐すといふ。

●寄書　左の一篇は、山形縣、酒田港の人、藤塚熊太郎といへる人より寄せられたるなり。篇中の主旨は、世、既に定論あり。東京府下をはじめて、他の二三の府縣にても、公にこれを行へり。されども、かくて、洽しとにもあらねど、かゝげて、その末、こゝに及はざらん所々のもよほしの資とするになむ。

女生徒の奢侈を戒むべし

藤塚熊太郎

女生徒は後日人の妻となり、人の母となるもの、今より宜しく温良倹徳の美風を養ひ、眞に良妻賢母たる實を全うせんことを心懸く可きなり。然るに、今の女生徒を見るに、往々華美に流れ、驕奢を競ふ。教師懇に、之を諭し、之れを戒め、父兄、亦、其の華美驕奢の慎む可きを教へざるにあらざるべけれども、如何せん、其の愛に引かれ、多くは、知らず識らずの間に、放任して、子女が言ふまゝに之を許し、又、顧みざるに似たり。家庭の教育嚴正なる家は、しはら〳〵おきていはず。凡十中の八九は、概してこの弊風に感染しつゝあるもの、如し。嗚呼女子の常に虚飾濫冗を事とするは、人生蓋し、女子の特性として、免かれざる所なる乎。固より華美を好まざるべしといへども、而かも、今の女生徒に至りては、予は、餘りに飾りに過ぐるにはあらずやを疑ふもの也。而して、この弊害や、啻に、一二に止まらずして、是が爲めに、或は、女子教育の發達を阻害するものなきを保せず。彼の貧家の婦女が、往々學校に入る能はざるは、固より、其の家計の困難上、止むを得ざることに基くべけれども、職として、女生徒奢侈の原因に歸せずんばあらず。例せば、書籍、筆墨、等の外、某家の某女は、華美なる衣類を纏へり、我が家の娘も、爾かせざる可からずとす。糊口にだも豊ならざるもの、いかでか、これに堪ふべき餘裕あらん。其の子女を教育すべきことの極めて必要缺く可からざるを知れども、荏苒空しく、其の好機を逸し、可惜學齢の子女を驅りて勞役に從事せしめ、或は、家事の助手たらしむ。是れ、實に、今日、未就學女子の統計上、非常に多きを示す原因にあらずして何ぞや。顧ふに、女生徒の奢侈は、一方には、斯る弊竇を與へ、一方には、徒らに、華奢濫冗を増大せしめ、延て、兒童教育上に、影響を及ぼすこと實に尠少にあらざるを信ず。若、夫、華奢濫冗は、女子の特性なりとして、顧みざらん乎、國家將來の隆運は、果して如何。左りとて、之を一時、假に、矯正せん乎、之れ、亦、策の得たるものにあらじ。たとへは、牛の角の曲れるを矯めんとて、却りて、牛を殺すに至れる譏を免かれざるべし。故に、先づ、漸次、質素の美風を流布し、節倹勤直を重せしめ、世人の所謂、『女學生は生意氣なり』といへる惡風を矯正し、

女子教育は、決して男子の教育に讓らざるものたる感想を起さしめ。男子の教育、女子の教育、相共に并び進み、兩々相待ちて、始めて、國運の隆昌をも期することを得べし。かくの如くして、都鄙到る所、女子教育の發達を計り、盛に良風美俗を作り、忌む可く嫌ふ可き、今日或る部分に行はるゝ墜落の汚俗を排除し、女生徒をして、他日良妻賢母たる眞正の美徳を備へしむるは、實に、今日の急務たるを確信す。乞ふ、他日良妻賢母となり、家庭の半面を掌る可き女生徒諸子、幸に、考一考する所あらむ、即、可なり。予輩、未、年少、不才、其の任にあらずといへども、希くは、諸子と共に、再之を論究せんことを期す。

●新刊書しなさだめ

○女學新報　第一號明治卅一年十月發行　東京　女學新報社

名に負へるが如く、女子の師友ともすべき一小雜誌なり。さきには、女子のとも世に出で、今、又、この文生る。實によろこびしきかぎりなり。社告とて、左の四ヶ條をあげたり。

(一)女學新報　は女子社會の主唱者となり女學社會の機關となり公私女學校の案内者となり女學生諸子の參考となり家庭整理の材料となり誠實に熱心に女子社會の發達を圖るべし

(二)女學新報　は女子社會の裨益となり又摸範たるべき女子の操行は勿論其肖像をも掲載して善を賞し德を盛んにするの實を擧ぐべし

(三)女學新報　は全國女學校　位置、組織、學科目、學費及び講師等、一々明細に掲載して女學生及び其父兄の參考に供すべし

(四)女學新報　は遠く地方に在りて就學し能はざるもの若くは父母の許を離れ難きもの其他種々の事情により直接女學校に入學し能はざるもの丶爲めには善良の教科書たるべし

發行の趣旨、亦、この四をのべたるに外ならず、其の一篇のこゝろは、兎まれかくまれ、文中「一夫れ、國の基は家にあり。家の本は主婦にあり」といへる語あり。これ、轉倒のこゝろなきにしもあらず。いさゝか、とり出でゝ、編者の反省をうながすなり。さて、論說、訪問、學術、家庭、女德、詞苑、小說、官公私立女學校紀要、雜報等の數欄に分れり。この新報よ、いよ〳〵みがきて、たゆまさらましかば、世の女子を益すること、けだし、ます〳〵大なるべし。

○名女傳(完)　瀨川さわ子著　東陽堂支店發行

顯貴門、賢母門、幸女門、貞婦門、名媛門、才藻門、烈女門、の七門に分ちて、本朝古來勝れたる婦女子の傳をとりあつめ、更に、漢土名媛、泰西女傑の二

欄を設けて、彼の地のをもかきつめたり。さて、書中、所々に繪畫をもはさみたれど、婦女子の見るべきにかなへり。たゞをしきは、筆のあとのあれたるなり。今の世のならひとて、責むべきには、あらざれども、くちをしく心ゆかぬわざなり。むかし人のかけるものを見よ。語をねり、筆をつゝしめるさまいとも、よく見えたるぞ。むかしと今のけぢめこそあれ、同じ女に、何のことなることかあらん。たゞ、みかくとみかゝぬと　よるなり。成れるものは、今、更にせめず。筆者、心あらで、くじけずして、更に、大にみがけ、見ん人も、また心して見てよ。かくいへども、一へにこをれとすにはあらず。かゝる著作の、いよ／＼すゝめかしと思へばなり。はた、明治の女流著作者の筆になれるが、今の世は、更にもいはず、後の世にまで、つたはりて、いまだしと思はれんが、あたらしければなり。ゆめ／＼。

○土佐日記燈　故 富士谷御杖著　國光社發行

こは、もと、文化年間の著述にして、土佐日記の註釋書なり。出版の由來は、廣告欄に見えたり。書中、表裏の二に分ちて、表よりは、言詞、文辭等を、いとつまびらかにときなし、裏よりは、貫之ぬしの深き底の心がまへと、當時の世のありさまとを、ときあかせり。實に、當世には、得がたき好著述といふべし。本書、八巻なるを、上中下の三冊とせり。製版の際、深く、文字の校正をつゝしみたりといへど、誤脱なきこと又、おほかたのたぐひにあらざるべし。

○國のほまれ ひとやの花　紅塵庵俗禪譯纂　國光社發兌

こは、飜譯小説なり。原書は、佛蘭西共和國學士會院長亞歷山篤爾儒魔氏が著したる「黑爵金香」なり。書中の事實、もと、彼の國にての事なれど、我が國の人の眼よりは、如何と見ゆるふしなきにしもあらず。これ國体の自、異ればなり。たゞ、見ん人は、彼の國の人情風俗のありかたちは、かくありけりと思ふ心を失はずして、其高潔節操の深かりし事實を

玩味せむ、蓋し得る處鮮少ならざるべし。文中、所々、文辭、ふり假名等の杜撰なるふし〳〵の見ゆるは、本書のもとも遺憾とする處なり。口畵、及、さし畵は、永の洗筆にて、口畵の彩色刷ことにいとうつくし。

○小學校農業科　教授及實施方法　山形市横町　山形教育社發兌

本書は、山形縣妙見寺農業補習學校訓導大場尙尊氏の編述せしにて、全縣師範學校敎諭靑木佐市氏の校閱にかゝる。緖言に曰く

農業教育の必要は今更余の賛辯を俟たず既に教育者諸氏の知了する處ならん然れども其教授の方法は未た他學科の如く整備せざるの傾あり是れ余輩の遺憾とする所なり幸に本年六月本縣師範學校内に於て農業科甲種講習會を開設せられ小學校農業科に關する教授法を講習せしめ以て實業の準備をなさしめたり即ち該書は講習の結果により靑木講師の口授したる材料を蒐集し傍ら余が多年實驗の事項を挿入して一部の小册子を編したるものなり今や本邦初等農業教育實施の必要の眼前に迫るに際し只該書を筐中に藏するも誠に遺憾と思ひ玆に廣く刊行して以て教授者の參考に資せんとす

明治三十一年十月　編者識

と。庶幾くは農業教育の發達に資する處あらんか。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

……………………
……………………
……………………

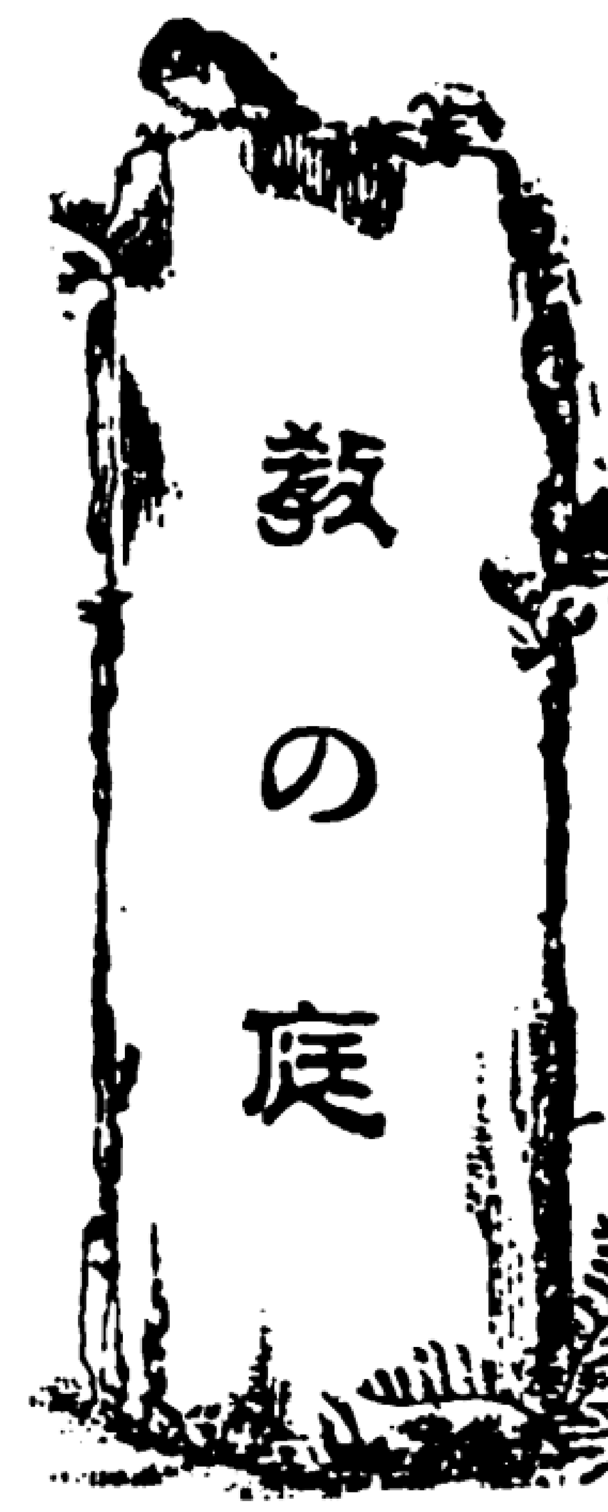
用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……。……
……、……、……、……。
……、……、……、……。
……、……、……。
……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。



十一月五日兼題　深夜鹿

天

よひのまは遂にきこえし鹿のね の
　ま近になりぬ夜やふけぬらむ
北海道石狩國石狩郡若生町　畠山百合子

地

小夜嵐ふきたゆむまにきこゆなり
　とほさとを野のさをしかの聲
常陸國稲敷郡　鳩崎　關口美津子

人

ぬる玉のゆめ野の鹿のそれならで
　つまとふ夜半の聲ぞかなしき
肥後國菊地郡　城北村　佐々小琴子

秀逸（五首）

ともしびの影はそりゆく小夜中に
　哀れさそへてをしかなくなり
肥後　田代艶子

心なきさつをもいかにしのぶらん
　ふけゆく夜半のさをしかの聲
栃木　青木たま子

小夜ふかみ松のあらしの音たえて
　尾の上に殘るさをしかのこゑ
下總　足立富子

さらぬだに夜半の寢覺の淋しきに
　かなしさそふさをしかの聲
日吉あさ子

月影もさえてさびしきさよなかに
　あはれさそふるしかのこゑ哉
長崎　長澤いゑ子

（以下原稿到着順）

さなしかの聲もはるかにきこゆなり
　夜ふくるまゝにつまやこふらん
瀧口貞子

山田もるかりいほまびしさよふけて
　つまこふしかのこゑもきこえて
石井盟子

さよふけて妻こふしかのこゑきけば
　あきのあはれもいやまさるなり
江口華子

秋のよにいははしわたるしかのねも
　ふけ行くまゝにあはれまされり
山内かず子

小夜ふけてひとりねる身の悲しさに
　つま戀ふしかのこゑきこゆなり
久米貞子

さよふけてをのへはるかになく鹿の
　こゑもあらしにさもなはれけり
橋本さよ子

秋やまにひとりなかこつさなしかや
　夜ふくるままになきしきるらん
井口業子

さよふけて露けきこゑのきこゆるは
　つままきかれしなしかなるらん
佐々有鄰子

さよふかみねやのともし火影消えて
　まくらにのこるさなしかのこゑ
根岸豐子

さよふけてあはれ男鹿のこゑすなり
　ねざめのさここにつまやこふらん
濵井登子

女子教育は、決して男子の教育に讓らざるものたる感想を起さしめ。男子の教育、女子の教育、相共に并び進み、兩々相待ちて、始めて、國運の隆昌をも期することを得べし。かくの如くして、都鄙到る所、女子教育の發達を計り、盛に良風美俗を作り、忌む可く嫌ふ可き、今日、或る部分に行はるゝ、墮落の汚俗を排除し、女生徒をして、他日良妻賢母たる眞正の美徳を備へしむるは、實に、今日の急務たるを確信す。乞ふ、他日良妻賢母となり、家庭の半面を掌る可き女生徒諸子、幸に、考一考する所あらむ、即、可なり。予輩、未、年少、不才、其の任にあらずといへども、希くは、諸子と共に、再之を論究せんことを期す。

●新刊書しなさだめ

○女學新報　第一號明治卅一年十月發行　東京　女學新報社

名に負へるが如く、女子の師友ともすべき一小雜誌なり。さきには、女子のとも世に出で、今、又、この文生る。實によろこびしきかぎりなり。社告とて、左の四ヶ條をあげたり。

（一）女學新報　は女子社會の主唱者となり女學社會、機關となり公私女學校の案内者となり女學生諸子の參考となり家庭整理の材料となり誠實に熱心に女子社會の發達を圖るべし

（二）女學新報　は女子社會の利益となり又摸範たるべき女子の操行は勿論其肖像をも掲載して善を賞し德を盛んにするの實を擧ぐべし

（三）女學新報　は全國女學校　位置、組織、學科目、學費及び講師等、一々明細に掲載して女學生及び其父兄の參考に供すべし

（四）女學新報　は遠く地方に在りて就學し能はざるもの若くは父母の許を離れ難きもの其他種々の事情により直接女學校に入學し能はざるものゝ爲めには善良の教科書たるべし

發行の趣旨、亦、この四をのべたるに外ならず、其の一篇のところは、兎まれかくまれ、文中「夫れ、國の基は家にあり。家の本は主婦にあり」。といへる語あり。これ、轉倒のところなきにしもあらず。いさゝか、とり出で、編者の反省をうながすなり。さて、論說、訪問、學術、家庭、女德、詞苑、小說、官公私立女學校紀要、雜報等の數欄に分れり。この新報よ、いよ〳〵みがきて、たゆまさらましかば、世の女子を益することも、けだし、ます〳〵大なるべし。

○名女傳（完）　瀨川さわ子著　東陽堂支店發行

顯貴門、賢母門、幸女門、貞婦門、名媛門、才藻門、烈女門、の七門に分ちて、本朝古來勝れたる婦女子の傳をとりあつめ、更に、漢土名媛、泰西女傑の二

欄を設けて、彼の地のをもかきつめたり。さて、書中、所々に繪畫をもはさみたれど、婦女子の見るべきにかなへり。たゞをしきは、筆のあとのあれたるなり。今の世のならひとて、責むべきには、あらざれども、くちをしく心ゆかぬわざなり。むかし人のかけるものを見よ。語をねり、筆をつゝしめるさまいとも、よく見ゑたるを。むかしと今のけじめこそあれ、同じ女に、何のことなることかあらん。たゞ、みかくとみかゝぬと　よるなり。成れるものは、今、更にせめず。筆者、心あらで、くじけずして、更に、大にみがけ、見ん人も、また心して見てよ。かくいへども、一へにこをれどすにはあらず。かゝる著作の、いよ〳〵すゝめかしと思へばなり。はた、明治の女流著作者の筆になれるが、今の世は、更にもいはず、後の世にまで、つたはりて、いまだしと思はれんが、あたらしげれどなり。ゆめ〳〵。

○土佐日記燈　　故 富士谷御杖著　國光社發行

こは、もと、文化年間の著述にして、土佐日記の註釋書なり。出版の由來は、廣告欄に見ゑたり。書中、表裏の二に分ちて、表よりは、言詞、文辭等を、いとつぞらかにときなし、裏よりは、貫之ぬしの深き底の心がまへと、當時の世のありさまとを、ときあかせり。實に、當世には、得がたき好著述といふべし。本書、八卷なるを、上中下の三冊とせり。製版の際、深く、文字の校正をつゝしみたりといへど、誤脫なきことと又、れはかたのたぐひにあらざるべし。

○國のほまれ　ひとやの花　　紅塵庵俗禪譯纂　國光社發兌

こは、飜譯小說なり。原書は、佛蘭西共和國學士會院長亞歷山篤爾儒魔氏が著したる「黑爵金香」なり。書中の事實、もと、彼の國にての事なれど、我が國の人の眼よりは、如何と見ゆるふしなきにしもあらず。これ國体の自、異れぞなり。たゞ、見ん人は、彼の國の人情風俗のありかたちは、かくありけりと思ふ心を失はずして、其高潔節操の深かりし事實を

玩味せぜ、蓋し得る處鮮少ならざるべし。文中、所々、文辭、ふり假名等の杜撰なるふしぐの見ゆるは、本書のもとも遺憾とする處なり。口畫、及、さし畫は、永の洗筆にて、口畫の彩色刷ことにいとうつくし。

○小學校農業科 教授及實施方法　山形市横町　山形教育社發兌

本書は、山形縣妙見寺農業補習學校訓導大場倘尊氏の編述せしにて、全縣師範學校教諭青木佐市氏の校閲にかゝる。緒言に曰く

農業教育の必要は今更余の贅辯を俟たず既に教育者諸氏の知了する處ならん然れども其教授の方法は未だ他學科の如く整備せざるの傾あり是れ余輩の遺憾とする所なり曩に本年六月本縣師範學校内に於て農業科甲種講習會を開設せられ小學校農業科に關する教授法を講習せしめ以て實業の準備をなさしめたりき即ち該書は講習の結果により青木講師の口授したる材料を蒐集し傍ら余が多年實驗の事項を挿入して一部の小冊子を編したるものなり今や本邦初等農業教育實施の必要の眼前に迫るに際し只該書を篋中に藏するも誠に遺憾と思ひ玆に廣く刊行して以て教授者の參考に資せんとす

明治三十一年十月　編者識

と。庶幾くは農業教育の發達に資する處わらんか。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　住所　姓名
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　　住所　姓名
……、……、……。………
……、……、……。………
……。……、……、……、
……、……、……、……
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。



十一月五日兼題　深夜鹿

天　北海道石狩國石狩郡若生町　畠山百合子

よひのまは峯にきこえし鹿のねの
　ま近になりぬ夜やふけぬらむ

地　常陸國稲敷郡旭崎　關口美津子

小夜嵐ふきたゆむまにきこゆなり
　とほさとを野のさをしかの聲

人　肥後國菊地郡城北村　佐々小琴子

ぬば玉のゆめ野の鹿のそれならで
　つまとふ夜半の聲ぞかなしき

秀逸（五首）

ともしびの影はそりゆく小夜中に
　哀れさそへてをしかなくなり　肥後　田代艶子

心なきさつをもいかにしのぶらん
　ふけゆく夜半のさをしかの聲　栃木　青木たま子

小夜ふかみ松のあらしの音たえて
　尾の上に殘るさをしかのこゑ　下總　足立富子

さらぬだに夜半の寢覺の淋しきに
　かなしささそふさをしかの聲　日吉あさ子

月影もさえてさびしきさよなかに
　あはれさそふるしかのこゑ哉　長崎　長澤いゑ子

（以下原稿到着順）

さなしかの聲もはるかにきこゆなり
　夜ふくるまゝにつまやこふらん　濱口貞子

山田もるかりいほさびしさよふけて
　つまこふしかのこゑもきこえて　石井豐子

さよふけて妻こふしかのこゑきけば
　あきのあはれもいやまさるなり　江口華子

秋のよにいははしわたるしかのねも
　ふけ行くまゝにあはれまされり　山內かず子

小夜ふけてひとりねる身の悲しきに
　つま戀ふしかのこゑきこゆなり　久米貞子

さよふけてをのへはるかになく鹿の
　こゑもあらしにともなはれけり　橋本さよ子

秋やまにひとりなかこつさをしかや
　夜ふくるまゝになきしきるらん　井口菜子

さよふけて露けきこゑのきこゆるは
　つままきかねしをしかなるらん　佐々有鄰子

さよふかみねやのともし火影消えて
　まくらにのこるさをしかのこゑ　根岸豐子

さよふけてあはれ男鹿のこゑすなり
　ねざめのきゝにつまやこふらん　浦井豊子

さよふけていづこなるらん哀れにも
　つまこふしかのこゑきこゆなり　西村芳子

さよふけてあはれみにしむ鹿のねに
　たびのやどりのゆめもむすばず　皆山みち子

秋のよのふけゆくまゝにたびやかた
　つまこふしかのこゑあはれなり　長島寶子

吹く風にあはれをそへてきこゆなり
　いづこのみねのしかのなくらん　皆山花子

月さゆるよはのねざめにきゆるは
　あはれをそふるさをしかのこゑ　楠　精子

小男鹿のこゑにあはれはまさりけり
　なれてさびしきたびのやどりに　島田好子

つきみつゝふくるもしらで遊ふみを
　あはれもよほすさをしかのこゑ　野田千代子

近くなりまたとほざかるしかのねに
　たびのまくらぞねられざりける　秋園菊子

いる月をなほやまふかくたづぬらん
　さよふくるまでさをしかのなく　松原常子

さよふけてきくも淋しきたびやかた
　さだかにわかぬさをしかのこゑ　町田つる子

山ふかくつまやとふらんさよふけて
　きくだにあはれさをしかのこゑ　濱口信子

旅まくらゆめもむすばぬよもすがら
　かすかにきこゆさをしかのこゑ　濱口直子

草まくらねざめてきけばふくるよに
　しかのなくねぞものあはれなる　西村虎子

妻こひにいもねざるらんふかきよに
　かすかにしかのこゑきこゆなり　神田樂子

さほやまのふもとの里にかりねして　木村銀子

　ふけゆくよはにしかのこゑきく

うきあきを思ひわびてやふかき夜に
　なり〱きこゆさをしかのこゑ　近藤秀子

月にだにねられぬあきのよもすがら
　いづこのさとぞさをしかのなく　細井糸子

たくひくる峰のあらしはすみながら
　ふけゆくよはにさをしかのこゑ　白井玉子

さをしかの聲はいづことわかれども
　ふけゆくよはにしかのなくなり　吉川良子

なかつきの長きよすがらいととほく
　ふけゆくまゝにしかのこゑする　水島艮子

さよふけて夜寒のかぜのみにしみて
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　成田延子

さらでだにねさめがちなる手枕に
　きくもあはれにしかのなくなり　小川兪子

なか〱にねざめの友となりにけり
　さよふくるまでしかのこゑして　根岸英子

さよ深く小倉のやまになくしかぞ
　たびねのゆめをさましはつらむ　山本つる子

秋ふけて夜さむのさとにさをしかの
　こゑきくときぞ身にしみわたる　眞島千鶴子

鹿の音もかたむくつきにすみわたり
　あはれつゆけきあきのよはかな　竹村竹呈子

松かぜのおとさへたねしまよなかに
　あはれをそふるさをしかのこゑ　江口華子

さらでだに淋しきものを小夜ふけて
　つゆにつまとふさをしかのこゑ　中山とみ子

さよふけてさびしきしかの聲きけば
　そゞろに落つるわがなみだかな　高井孟子

ふけゆけはこゝに哀れもますものを　さひしさつけてしかそなくなる　田代綾子

ふけてゆくよはのねさめのた枕に　あはれ身にしむさをしかのこゑ　羽田三緒子

ものゝ音もたえてふけゆく秋のよに　をのへにたかきさをしかのこゑ　河田ふく子

さよふけて小野の草ふしつゆしけく　ぬれてなくらんさをしかのこゑ　河田いし子

山かせもふきしづまりてふくるよに　をしかなくなりしからきのさと　淺井靜子

きく人そたもとはしめるふくる夜の　をしかやなにゝぬれてなくらむ　畠山雪子

小夜ふけて賤がきぬたもうちやみぬ　つまこふしかのこゑのみはして　畠山千代子

ふくる夜の松のあらしにたぐへくる　こゑすみのぼるみねのさをしか　大谷友子

さよふかきまくらにきけはひとしほに　あはれますなりさをしかのこゑ　住山織子

ま萩咲く野をなつかしみよもすがら　つゆにぬれてもしかやなくらん　住山靜子

さをしかのこゑほのかにも聞ゆなり　ひとり寢さむる夜半のまくらに　我孫子かづ子

きゝ馴れし身にも悲しくおほゆるは　ふけゆく夜半のさをしかのこゑ　福原蓋子

月になくをしかのこゑもきこゆなり　ねさめがちなる夜半のまくらに　生駒ふれ子

いまよひのくまなくてらす山さとに　なにをこふらんしかの鳴くなる　所佐以子

にし山のたかねさやかにつきふけて　あはれをそふるさをしかのこゑ　山口千枝子

秋の夜のなかきゆめぢもさめはてゝ　とほくきこゆるさをしかのこゑ　高島鶴子

さよ更けてをしかなくなり妻こひに　ねられぬわれやひとりきくらん　横山柳子

さ夜ふけていとゞさひしき山さとに　あはれ身にしむさをしかのこゑ　吹田たけ子

いもせ山つまやこふらんさよふけて　きくもさひしきさをしかのこゑ　坪内晴子

とほやまになく鹿のねもきこえきて　ふけしづまれるあきの夜半かな　長松かれ子

物おもひ暮られぬ夜半はことさらに　あはれと聞くやさをしかのこゑ　赤羽もと子

萩のはなちりてあとなきかすか野の　かたふくつきにをしかなくなり　林治子

なれてすらきけばあはれと覺ゆるは　さよふけてなくをしかなりけり　早川信惠子

更けてゆく夜半のあらしや寒からん　みやまがくれにをしかなくなり　遠藤亘久子

夜もすがらうき世をかこつ我そでに　つゆたきそふるさをしかのこゑ　石川頼子

さなきだに秋はかなしきものなるを　よふかくきなくさをしかのこゑ　石川樂子

ふけ行けはなほ淋しさの身にしみて　つまこふしかのこゑあはれなり　石川南江子

かれもまた妻やこふらむ物おもふ　まくらにちかきさをしかのこゑ　石川久子

なく鹿のこゑもあはれにきこゆなり　つきかけさゆるあきのまよなか　間宮道子

こと更にあはれもふかし小夜ふけて
　ものにまぎれぬさをしかのこゑ　鈴木金子

おほかたの物のまぎれもなかりけり
　ふけ行く夜中のさをしかのこゑ　鈴木鉱子

あきかぜもふけて夜寒のさびしきに
　こゑぞ身にしむみねのさをしか　曾根壽子

小夜ふけてなぎの葉風もみにしむを
　なくねかなしきさをしかのこゑ　高橋輝子

ふくるまでつまこひわびて北さかの
　おくもさびしきさをしかのこゑ　萩原華子

更けゆけばさとのきぬたもうちやみて
　たかねおろしのさをしかのこゑ　上杉光子

すきもりてさす月かけの手まくらに
　ゆめおどろかすさをしかのこゑ　野見節子

小夜ふけて妻こふしかのこゑきけば
　あきのあはれのなほまさるかな　安村歌子

さをしかのなくねさびしき眞夜中は
　いとゞあはれの身にぞしみける　木村きく子

さよふけていほりまぢかく鳴く鹿の
　こゑあはれにもすみわたるかな　栗生きく子

きゝなれし我たにかなしさ夜ふけて
　をしかなく音にゆめもさめつゝ　辻本ひさ子

小夜更けて身のうさ思ふ折しもあれ
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　大塚儀子

紅葉ちるかぜのたえまにきこゆなり
　つきすむみねになくしかのこゑ　黒木信子

遠くなるをしかのこゑにしられけり
　こよひもいたくさよふけぬとは　玉井隆子

さよふけてともし火くらき眞夜中に
　こゑもかすかにさをしかのなく　西村ひろ子

さよふけて妻やこふらんたえ〴〵に
　ねさめかなしきさをしかのこゑ　竹村貞子

遠かたのみねのあなたになくしかも
　ふくれはちかくなもほゆるかな　川上喜代子

ふけゆけはきぬたの音も打たえて
　しかのこゑのみひゞくころかな　川上博子

夜もすがらなく聲かなしさをしかの
　さやまのさとにつまやこふらむ　六鹿ひろ子

小男鹿のこゑかすかにもなりにけり
　つまこひわびて夜やふけぬらむ　無名

かすか山ふもとをかよふをしかの
　こゑもさびしきあきのよはかな　遠藤まん子

小倉やまみねのまつかぜ夜をふかみ
　まくらにちかき小男しかのこゑ　幡谷よう子

小夜ふかくさびしき風にさそはれて
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　澤田ます子

くるゝより忍ひたりけんさをしかの
　ふけたるつきにこゑたてゝなく　山田瓊子

くれ竹のまとにうつろふかげきえて
　なほすみまさるしかのこゑかな　武田豊子

さびしさを何にたとへんさをしかの
　なくねもふくるあきのやまさと　遠藤さくの子

さよ更けてみ山のおくになくしかを
　ねざめにきくぞあはれなりける　高橋つた子

小夜ふけてそこはかとなく鳴く鹿は
　つままきかれてさそふなるらん　最上志げ子

月かけのふけゆくたにもあるゝのを
　あはれをそふるさをしかのこゑ　高橋りつ子

秋の夜のふくればいとゞさびしさに
　みやまをいでゝしかも啼くらん　上遠野愛子

紅葉ちるおささへあるをしかなく
　こゑもかなしきあきのよはかな　菊盛さき子

小夜ふけてなくさを鹿のこゑきけば
　あきのあはれのなほまさりけり　池谷富子

つまこひにふけてさびしきさを鹿の
　こゑをねさめのとこにきくかな　館脇ます子

秋といへばさらでも袖のつゆけきを
　そへて夜ふかにしかぞなくなる　諸井久良子

よそにさへあはれときけど妻こひに
　ふくるよすがらしかのなくらむ　吾妻たち子

かすがやまふもとの里にねさめして
　よふかきしかのこゑをきくかな　中桐杏子

さをしかのつまどひわびてなく聲を
　よふかきねやにひとりきくかな　戸塚てつ子

小よふけてまくらの山になくしかの
　こゑはなれてもかなしかりけり　谷口てつ子

あきかぜの音もさびしきよ半なるに
　しはの戸ちかくしかぞ鳴くなる　谷口さだ子

吹きまさる松のあらしにたぐひきて
　しかの音たかしよやふけぬらん　谷口ふさ子

しぐれふるかたやまざとはよを深み
　のきばまぢかにしかぞなくなる　河原よし子

さらぬだに淋しきものを小よふけて
　つまかこふらんさをしかのこゑ　吉江いく子

よふけぬと紅葉ちる野のをかのべに
　こゑあらゝげてさをしかのなく　栗林みゆき子

小夜ふけて寢れざりけりひとり居の
　まどにさをしかのこゑのきこえて　戸髙すゞゑ子

いくたびかねさめがちなる秋のよに
　おもひやおなしさをしかのこゑ　椎野ぬき子

つまこふるさをしかの聲のきこゆなり
　あらしもれむる夜半のまくらに　八木沼里子

秋の夜もあかつきちかくなりぬらし
　つまこふしかのこゑのかれゆく　田中しげ子

さはるべき物のひゞきもなき夜半に
　つまをこひてかしかのなくらん　藪内ひろ子

きよふけてあはれ妻こふさをしかの
　こゑさへすめるあきぞかなしき　藪内つぎ子

山ざとに住みなれしみもかなしきは
　つきにふけゆくさをしかのこゑ　澁谷いく子

小夜ふけてめぐる嵐にいつらさも
　わかぬ男しかのこゑぞかなしき　澁谷[illegible]子

吹きすさぶ松の夜あらしおさふけて
　とほくなりゆくさをしかのこゑ　吉岡歌子

ゆめさめてひとりもの思ふ小夜中に
　あはれをそへてしかのなくなり　綿野りき子

あらし吹くよさむの床のさむしきに
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　四[illegible]子

もみぢ散るあらしの山につきふけて
　ねさめさびしくしかぞなくなる　三好つれ子

ゆふつきは野すゑの松にかけきえて
　そともの小田にさをしかの鳴く　田中豐子

月さゆるみねのはぎはら小夜ふけて
　つま戀ふしかのなくこゑぞする　目黒佐喜子

つゆふかきたかやまもとの小萩はら
　ふけゆくつきにをしかなくなり　都水波留子

さよふけてしかのね遠くなりにけり
みねのまつかぜふきよわりけん　足立ます子

なにとなく人のこひしきよなかに
あはれをそふる小男しかの聲　足立まつ子

まとろめばのきばの松につきふけて
尾のへにたかくをしかなくなり　足立宗子

きぬたうつ音かすかなる小夜なかに
あはれをそへてをしかなくなり　千石素子

妻こふるこゝろもあはれふかきよの
まくらにちかきさをしかのこゑ　鵜濃喜代子

遠くなりちかくきこゆる小男しかの
つまとふこゑに夜はふけにけり　大寺涙速子

小くらやまふけゆく月になくしかは
そのまくら戸のむかしこふらん　笹子茂子

目さめてもかたらふ人のなき夜中は
しかのなくねそわびしかりける　笹子欧子

さを鹿もうかれいでけんふくるまで
さやけき野邊のつきになくなり　河村君子

みどり子に夢さまされてさよなかに
おもはすきゝつさをしかのこゑ　羽室象子

たびねしておもひも深きさよなかに
つまこふしかのこゑきこゆなり　樺屋美子

つききよみ松もねむれるま夜なかに
あはれ妻こふさをしかのこゑ　志鎌たか子

まとほにもきゝしきぬたの音たえて
ふくるまくらにさをしかのなく　篠崎ふさ子

風さむみふけゆく夜中のあはれをは
たれに聞けとかしかのなくらむ　名取よし子

をしかなく聲聞くまゝに小夜ころも
かたしく袖のぬれまさるなり　名取正代子

ながき夜のふくるもしらで妻こひに
なくさをしかのこゑあはれなり　坂田きみ子

もみぢ散るあらしの山のおくふかく
夜中もつまこふしかのこゑかな　佐藤喜代子

すきまもる月もいつしかかげふけて
ねやにちかよるさをしかのこゑ　白石藤子

やさしくもわかづま思ふねやの月に
ふけてちかよるさをしかのこゑ　白石さき子

夜はいまかふけわたるらん選かたの
しかのなく音もきこえきにけり　無名

さよふけてなく音悲しきさをしかは
たづぬるつまやつれなかるらん　仁保しま子

虫もねをつきにゆづりてふくるよに
ひとりさやけきさをしかのこゑ　並木春子

秋のよのいもがきぬたのおと絶えて
つきにのこれるさをしかのこゑ　尾形さみ子

夜を深みはぎのうはかぜふきやみて
ひときはたかきさをしかのこゑ　渡井嘉子

さよふけてそこともわかずさを鹿の
千々のあはれをつとへてぞなく　十川いま子

あはれさもいやまさりけり小夜更て
かたむくつきにしかのなくころ　沼越むら子

月おちておくしもしろきさよなかに
やましたどよみしかのなくかな　藤井さかね子

さをしかの聲もかすかにきこゆなり
ふけゆくつきになにしのぶらむ　木下つれ子

月ふけてつまこふしかのこゑきけば
わが身もともにそでのつゆけさ　木下千代子

やまさとにひとよかりねの草まくら
ふけてさびしくさをしかのなく　田中虎子

むしの音のよわりもゆけばまはぎ原
しかのこゑのみさゆる夜半かな　長尾都子

さよ深みさびしさまさるひとりねの
まくらにひゞくさをしかのこゑ　高屋はきの子

さよふけて心もいとゞさびしきに
つまよふしかのこゑあはれなり　絹川ますゑ子

こゝろなき我さへそてをしぼるかな
ふけゆくつきぞなくしかのこゑ　美濃君子

さよふかく老のねざめをなぐさむと
なくかのきはのさをしかのこゑ　永井さい子

ぬば玉のよふかくきくぞあはれなる
ゆめ野のしかのつまこふるこゑ　金原吉子

もみぢちる音羽のさとになくしかの
こゑも更けゆくあきのよ半かな　進藤敏子

さよ更けていとゞ身にしむあき風に
をしかなくなり小野のやまさと　進藤遊喜子

秋のよのふけゆくまゝにつきさえて
しかのねたかく澄みわたるかな　進藤美子

そよ〳〵と萩ふくかぜのおとさえて
ふけゆくつきにしかぞなくなる　田中静子

つきかげも軒端のやまにかたぶきて
つまこふしかのこゑぞふけゆく　田中登子

ふくかぜの音にひゞきてよもすがら
ゆめ野のしかのこゑぞきこゆる　川瀬はな子

小よふけてきけばぞいとゞ身にはしむ
まくらのやまのさをしかのこゑ　川田孝子

ふくるまにかたむく秋のつきかげを
とゞめまほしとしかのなくらむ　紀内清子

やまさとはふけゆくまゝに賤が家の
瀬戸にちかくもしかの鳴くかな　青木毅字

ふくかぜのおとだに秋はさびしきを
よふけしつきにさをしかのなく　磯野ことゝ

さまされし夢のまくらにふしぬれば
あらしにつるゝさをしかのこゑ　加藤さく子

さなきだにさびしきものを旅ねして
ふけゆくつきにさをしかのこゑ　佐久間八重子

月かげもふけてさびしきさよなかに
つまこふしかのこゑのきこゆる　降田満喜子

ころもうつ音もふけてはたゆるよに
いつまでしかのうきになくらむ　仲田榮子

ふくるまでこなたかなたになく鹿は
いくよつれなきつまやこふらん　林久米子

松かぜのたゆ行くまゝにさよふけて
をやまのつきにさをしかのなく　小林久子

ねざめして見はてぬ夢のはかなきに
またあはれとやしかのなくなり　野中あさ子

小よふかくねざめて聞ぞあはれなる
つまこひかねてしかのなくねを　森こと子

ともし火のかげもふけゆく小よ中に
さびしさぞふるさをしかのこゑ　白石梅子

よし野やまみねのあらしに月更けて
ふもとのさゝにをしかなくなり　高砂菊代子

更け行くやかけひのみつの音すみて
わがのきちかくさをしかのなく　高砂き代子

月かげのふけゆくよ中にいねもせて
たにをかなしみしかはなくらん　寺尾まさ子

さよふけて聲もあはれになくしかは
こよひもつまやつれなかるらむ
山根久子

ふくかぜも身にしむ秋のさよふけて
つまこふしかのこゑあはれなり
野口三子

さよふけて鹿のなく音におさろけば
むすひしゆめのあさぞわひしき
濱田直子

さよふけてかたふくつきの小倉なる
みねにつまこふしかぞ鳴くなる
齋藤せん子

秋の野につままちわびてさなしかの
小よ更けてなくこゑぞさびしき
林琴子

秋かぜの身にしむよ半はいねがてに
しかのなく音もわびしかりけり
林瑟子

妹やまのみねのつきかけふけゆけば
背やまに高しさなしかのこゑ
平小路子

あふ坂やせきのあきかぜさよふけて
つまこふしかのこゑきこゆなり
竹腰婦美子

まきの戸もさゝてふけゆく月見れは
こゑもしめりてなしかなくなり
竹腰隆子

よもすがらまどゐうれしき我いほも
しかのさほれにさひしかりけり
原田雪子

小よふけて鹿の音さほくきこゆなり
よさむわぶらんつまやこふらん
丸山いく子

背よりはなくこゑちかくきこゆなり
ふけてなしかはいつち行くらむ
村尾郁子

たへかねて妹やさふらんふけゆけは
つれてきこゆるさなしかのこゑ
尾立英子

さらてたにかなしき秋なしのふやま
しのふるつきにしかそなくなる
尾立富子

いさすゞきいさしわひしきさよ中に
村上てい子

月かげなしたひてなくかさよふけて
つまなふしかのこゑそきこゆる
西内ため子

小鹿なくこゑこそうけれさよふけて
なちになりゆくさなしかのこゑ
出口ねひら子

秋のよのふけ行くまゝにさなしかの
ものおもふころはこゝさらにこそ
山崎しつ子

ふるさとの空なつかしきさよなかに
こゑはいよいよすみわたりけり
山崎つき子

ちきりおきし友もこぬよの小よ中に
つまよふしかのこゑなきくかな
魚住愛子

あき風もふけゆくよ半のさよなかに
ねさめうれしきさなしかのむれ
北原季子

月ふけてみねのあらしにふきまやふ
さびしさそへてしかのなくなり
遠山よし江子

山さとのふけ行くよ半のしかのねは
さなしかのこゑあはれなりけり
遠山唯子

ねさむれは鹿のねさほくきこゆなり
あきのあはれのかきりなりけり
高橋かれ子

ふくるまゝ我いほちかく成りにけり
ふけたるつきにつまやこふらん
安田ふし子

ふけ渡るつきなかなしみさなしかの
あらしにたぐふさなしかのこゑ
森村すゝ子

山すみのなれし身にさへかなしきは
なくねもそらにすみわたるかな
畠山香代子

てる月もなはなかそてにかけふけて
ふけゆくよ半のさなしかのこゑ
長島英子

よさもに月さへにしにかけふけて
やまもさほくなしかなくなり
荻原濱子

なのへにたかしさなしかのこゑ

ゆめうつゝうつゝにあらぬ夢の中に　さひしくきゝし志かのはつこゑ　大友つき子

まよふけて鹿のれさむくきこゆなり　なれもながよをあかしかねらん　服部かつみ子

さよふけて露わけまよひなくしかは　はぎのおちばにさこもさむらん　中村きさ子

つまこふさかすがの山にまよふけて　なくれさむしきさをしかのこゑ　野田郁子

月かげのふけゆくまゝにをしかの　つまこふこゑもすみまさりけり　大村須賀子

秋ごとになくものなからさよふけて　きくはさひしきさをしかのこゑ　梨本信子

ひさり寝の身にしむ風もたへぬ夜を　つまこふしかのこゑそ洩れ來る　玉井ふく子

かり人のふはなゝ絶にてつきかげの　かたふくやまにしかのなくなり　飯塚むつ子

さを志かのなく音もあはれをくら山　よふけてひさりつまやこふらん　高石登代子

小夜ふけてつまこふしかの聲きけさ　あきのあはれはみにそしむなる　佐藤多磨子

れさむれははやよもふけてさを鹿の　なくこゑすなりみれのまつばら　佐藤多嘉子

十一月五日兼題　長壽を祝ふ

天　羽後國西馬音内町　飯塚むつ子

あまたの春秋を送りむかへて、世の中の移り變りをまのあたりに見、あるは人のため國のため、をゝしき事をなして、かくはしき功を立て、あるは自ら學び、人にも問ひて、よろづの事にも暗からぬは、老いたる人なりけり。命ながきを耻づるは佛家のひか事にして、老いたるを捨つるは野蠻のならはしなり。今もし老いたる人のなかりせば、いかにしてか世のうつり變りを知るべき。いかにしてか心得られぬふしを辨ふべき。去れた、唐國にても、齡をた尊きもの丶一にかぞへ、我國にても七曲の故事さへぞ侍る。げにや命ながきたかり、世にありがたく尊きものはあらじかし。今某翁の七十の賀にあたり、此よしを述べて、祝辭に代ふるになん。

地　備前國和氣郡閑谷　西艶子

黄金にもかへ難く、位に因りても得難きは、長壽にこそあなれ。我が友某の君の祖父に當らせらる丶は、いと健やかに、古稀の祝賀も、幾年の昔に過ぐさせ給ひて、早くも八十年の齡を、迎へ給はんとす。された來ん年の二月を待ちて、いと盛なる、賀宴をあげさせ給ふに、先だちて、翁が、日頃好みませるまに〳〵、廣く歌文を募り給ふよし、はるかに告げこされぬ。あな目出たき事にもある哉、世の事業をのがれて、唯月花を友とし、數多の子孫が、榮行くさまを見つ丶、かゝるめでたき大御代の惠の露に浴して、心靜けく、老を

養ひ給へる、翁が幸福、たとへまつらんものも、侍らずかし。よもの雅人も、さこそは、松にことほぎ、竹にたとへて、とりどりに、めでたき詞の華を寄せて、かぎり無き翁が壽をぞ、祝ぎまつるべき。我が身、かゝる道には、一層つたなく、名木の中にまじれる何とやらん、いと、恥かしき極みなれど、嬉しさのあまりに、一言かくなん。

人

磐城國白河町　八木沼里子

明らかに治まる御代の、三十とせあまり一とせの神無月、五日といふ日。山田いさ子刀自の、ことし七十のよはひたらひ給ひけるをことほかんとて、うみの子達のはかり給ひて、このにぎはしきまとゐを開かれぬ。妾は幼きより、わきて刀自のみなさけうけつる身にしあれど、いとゞうれしさに堪へぬまゝ、拙き言の葉をもかへりみず、一とふしのはぎことをまゐらするになん。そも、刀自の君は、いにしへよりまれなるよはひに至り給ひながら、しかもいとすこやかに、日夕業を執りて、安逸に身を置き給はず、婦女子の業としては、欠くることなければ、裁縫の道には、わきて秀でさせ給ひぬれど、こゝかしこの婦女、皆其門に入りて、教へを乞ひぬるを、いとねもころに導き給ひて、なほ點茶、活花、禮法、且つは婦女子の世に處する道まで、教へて倦まず、説きて厭かず、幾年月一日の如くはこくみ給へる教へ子は、師ともあふぎ、母ともかしづきてぞなつかしみ慕ひける。まして、妾は幼きより家居近く住みなしければ、朝な夕なに行きかひて、出でゝは手をぞ携へられ、居てはみひざにまつはりて、はかなきたはぶれも、刀自を友として親しみしこと、今も昔もかはらねど、刀自の御身にさち多かれといのる心も、亦一としはまさりてなん、されどけふのむしろをことほくと共に、なほこの末は、千代に八千代に榮えまして、數多かる教へ子や、馴れ慕へる妾等が、世の大海に棹さし出でんうしろ見し給ひてよと、乞ひまつるになん。

（以下原稿到着順）

中山さみ子

日毎に、寒さもいみじう候を、御揃ひみけしきうるはしうておはしますこゝこよなう御目出度御事と、祝ひまつるになん、扨御祖母樣には、八十あまり八とせに、渡らせ給ふよし、さても御目出度事にこそ。かゝる高齢はねぎても、中〳〵にもむづかしきに、猶御不自由のこころもなく、御すこやかにおはしますは、いとも稀なる御事にて、御祖母樣も、定めし御滿足に、御思召され、御一同樣も嘸かし御よろこび給ふらん、こなたにも、かげながらうれしうなん、げに申す迄もなき事ながら、次第に寒もまさり侍べれば、猶一しほ、御氣をつけられ、此上幾千させもこへ給んことを祈りまつるになん。さて此品、粗末には侍れど、御祝ひの印迄に御目にかけまゐらせ候、先は失禮ながら、文もて御祝ひ申上ぐるになん、あなかしこ。

生駒ふれ子

七十なしも、古稀の賀と、申すなるを、祖母君には、今年八十路にならせ玉ふよ　にて、近き内に、擧げさせ玉ふ、御祝ひのまとゐに、

招き賜はり忝なく侍り、當日は、早くより、まゐのぼりて、千代にあやかり申したく今より樂しみ居り候、御家は、いや榮ゐに榮ゐ給ふ上に、御老人は、別て御健勝に、ましませば、定めて、御盛典の御事と存じ奉り候、古銅の鶴龜、八十路の後も、なほ千代萬代と、かはりなく、八十宇治川の、流れも、澁させぬ樣にと、御祝申上げ候、いづれ御目たまはり候ふ上、萬づ御喜び申上ぐべく候。先は目度かしこ。

佐々有鄰子

筑紫の道のくちの國嘉穗の郡飯塚の町に歷代すみませる老翁在しけり。氏は木村名は二叟となも稱へたまひける。今年は、八十歲の上なひとつふたつ超ゐたまひて、いとすこやかに在しけるが、年ごろ口中の齒落ちて不便におもひたまひしかば、入齒をなしたまはんと齒醫にあつらへたまひ、すでに入れまさんとなしけるに、おもひきや八十老翁の、おく齒の生ひいでんとは、その老翁の、消息を妾におくりこしたまひぬ、そのはしつかたに歌かきそへられたり。

老はてしふるははおちてまたさらに
かれいろみせぬにひはもゐけり

とあり。いとめづらしき、長壽の老翁。あなめでたきためしの大人。これみづみづしきみづはの生ひいづるそ千秋の長五百秋にうるし[illegible]の、米ながく、よはひかされますしるしなるらんと、ほぎことと奉る、かしこ。

谷口ふさ子

我がなぢや、古も稀なるといふ年より十年をも過しきて、今年は白傳ふ八十とはなりにけり。されど腰もかゞまらず、手足もなゐず、老いて益々すこやかなるぞ、いとめづらかなるや。さて我なぢには、人をめぐみいつくしむ心のいと深くて、貧しき人ともに、衣を與へ、米麥をめぐまれぬること、數知らず、殊に昨年は稀なる凶作にして殆と、道に饑ゑ死にたる人を見んばかりなりければ、或は價をひくゝして米麥を賣り、買ひ得ぬ者にはそれをめくみ、又粥なにてたうべさせなどして、細き玉の緒をつなぎとめられけるも、はた多かりけり。これまたよにめづらかなることいふべからん。古語に善を積む家には必ず餘慶あり、又陰德ある者は、必ず陽報ありとこそうけたまはれ。なぢの此のよろこびのあるは必ずさるゆゑならんかし。このたび八十のよろこびの式をものし給はんとすとたまはりて、嬉しさにおさへがたくて、かたなりなるかたことをも恥ぢずかくなん。

河原芳子

千早振神路の山のいやさかゐにさかゐ、五十鈴の川の千世かけて清きながれのたゐせざらんごとく、古よりまれなりといへる七十も、十とせのまへに經て、ことしは八十の祝ひのむしろを開き給ふとて、妾をもまねき給ひたれば、そのめでたさには堪へず、つたなき筆もて、君の齡のすぐれたまへるをことほぎまつるになむ、

もゝちかき八十路のさかも越ゐてきし
君や千とせの松にいこはん

藪内つき子

桐の一葉落ちそめしより、朝夕は一きは肌寒く、木々の梢も色に出て、虫の音も夜々によわりゆき、籬のもとの菊のみ、人待がほにさきにほひ、やうやう秋ふかう相成候折ふし、御全家樣御揃ひ、御きげんよう御すこし遊ばされ候御事、まことにうれしう存上げ候、扨て御祖父樣事、御高年に渡らせられ候よし、かねて承り居候ひしゝ今年は米壽の齡にならせ給ふよしにて、近き程に、その祝の宴をひらかんとて、數ならぬ私まで御招き下され、有がたく御禮申上候、あなた樣方は、御家族も多く榮ゐ給ひ、御親族もあまたあらせらるゝ事に候へば、定めて御賑はしき御事にて、御老人樣御始め、御一家樣、さぞさぞ御よろこび遊はされ候はんと、只今より察せられ、私共までうれしう存居り候、殊に御祖父樣には、御高年に渡らせ給ひても、御身体すこやかに、髮の白くならせ給ひしのみにて、いといと御達者のよし、松のみどりのいや深く、かめの齡の萬代までゝ、さかゐまさむことを祈り上げ候、ついては、古銅の鶴一雙、樂燒のかめ二つ、千代萬代にあやからせ給はんやうにと、御祝ひの志

るしまでに差上げ候間、御床飾になし下され候はゞ、妾の嬉しさ、此上もこれなく候、御當日には、かならず伺ひ奉りて、くさ〴〵の祝言申上げ度、今より待ち居り候、先つは御招きの御禮まで、申述ぶるになむ、あなかしこ。

湊谷いく子

世には長壽の人も多かめれど、この某翁の如きは、實に稀なるべし、また世には壯健の人も多かめれど、某翁の如きは、實に珍しかるべし、翁はいとわかゝりし程より、養生の道をよくまもり、日ごとにあさは早くおきてよきほどに運動し、又さけをも飲まず、煙草をも嗜み給はずとか、さる故にや、今年は八十歳になりぬれど、ありくにも杖を力とせず、居るにもおしまづきをたのまず、常にあさは星をいたゞきて、出てゝ下男どものなすわざを掟て、夕は月をふみて歸るも、いさゝかもつかれたるさまも見え給はず、實に珍しといひつべく、世に稀なりといひつべし、かくては、

いとやすく千年の坂もすぎ行きて
八千代のつはき君ばたならん

吉岡歌子

かしこまりて承りぬ、御祖母の君には、今年六十の御齢を重ねたまふとて、そが御祝のむしろを開かせ給ふとか、御自らの御よろこびは云ふも更なり、常に御慈み深き、かぞいろの君、さてはあなた樣の御心の中、さぞかしと推しはかり奉る、誠や、童顔鶴髪とか申し昔より、齢久しき人の例に引き出で侍るものゝ、こゝはまた御髪さへ黑々しう物し給へば、更に左樣の御年とも思ほえぬまで若やかに見えさせ給ふは、まさしく千代の御齢を重ねたまふ御徴にて、全く日頃御いつくしみの御心ふかく、物したまふ御むくいにこそ、たのしき御行末なりや、祝ひ奉る志の程、何にしらせん由もなけれど、猶も常磐堅磐の御榮を祈りて、松竹梅の三幅參る、あなかしこや。

綿野りき子

年月は過ぎやすくて、はやも七十の御よはひにみたせ給ひぬとか、さるに、露よわらせたまひしみけしきなく、まめやかによろつの業にいそしみ給ふ、かくも御めでたき御事の侍るを、誰も皆御うらやみまつるにこそ。尚千代に八千代の坂をこえさせられ、之にましたる御喜びを重ね給はんこと、御手植の庭の松にも知られ侍り、此赤白の品、いと粗末にははべれど、いさゝか御ことほぎのしるしまでにまゐらするなん、あなかしこ。

河村君子

なにがしの翁、ことし七十の春を迎へ給ひぬ。されど耳もよくきこえ、目もよく見え給ふなり。七十路のよはひを保つ世に例すくなからざれど、かく若人にかはらぬ人こそ、世にまれなれ。さてそが祝ひのむしろに、己れもまねかれたり。そのむしろにて、つたなき一首をうたひいでたるは、神路山の麓、五十鈴川のほとりにすむ河村の君子、

度川會の川水は
流れて千代も絶えじかし
君がこゆべき年波も
此の川水に異ならじ

名取正代子

御そばの君、ことし八そぢの春秋をかされたまひぬとて、來ん天長節の佳き日をえらみ給ひて、御祝の宴せさせ給ふとかや、よりて數ならぬわらはにも御席のかたはしをけがしまゐらすべきやうにいひおこし給へるなん、いともうれしうよろこび聞え侍る、さてもよのつねに、七十八そぢをば、高き齢とまをし聞ゆる物から、日ごろまめやかにおはし給ふ君にしあれば、八十路はかりのやすらかにこえ給ふは、更にもいはず、今より千とせの山路のぼらせ給はんには、いまだはるかにて、やう〳〵ふもとにやおはさんかし。されば、この後、ますます御すこやかにものし給ひて、行く末は尾上の松に、將、岩が根にすむらむ鶴龜のよはひにも、立ちまさりたまふべくこそ、いはひあげまゐらするになん。さて此酒肴、いさゝか御祝のしるしまでに、御らんぜさす、いかでをさめたまひてよ、あまりはまゐのぼりて、よろづよろこび聞えあぐ

べくこそあなめでた。

佐藤喜代子

千代八千代かはらぬ御代にきほひつゝ、空飛ぶつるを、友となし、幾萬代も色かへぬ、松のみどりを手いけとなし、日頃うみつむぎのわざにもたけたまひて。多くのみまごの君たちにも、こと〴〵のわざをねもころにをしへさせ給ひつゝ、いつも〳〵、春の日ののどやかにすごし來て、今ははや、八十八の御いはひもいとおごそかになけさせられ、といと〳〵にすゝみ行く世をあふぎつゝ、いとおもしろく、いつも〳〵御すこやかにましますとの、あはれ芽出たく又うれしさゝはみになれは、いと拙くはべれども、此五葉のまつは、妾が年頃朝に夕に手入れなしつゝおひ立てぬるものにはべれは、すゑ永くあやからまほしと、根こしてまゐらするになむ、あなかしこ。

無名

すべて、人と生れたらんには、よはひ長からんことをねがはぬ者やはある、されどまことに志を得ぬるは、百人が中に、二人一人もおぼつかなきばかりになるを、御祖父の君には、米の御よはひ重ねさせ給ひしをもて、來ん菜の日に、御祝のむしろひらかせ給はんことの嬉しさよ、いまよりは、千代八千代にかぎりなく、いよゝ榮えさせ給ふらん、あな嬉し、あなめでたと、操返し〳〵ことほぎまつる、實や御自らはもとより、うからやからの君たちの御悦ひ、いかにか、御坐らん。時しも秋の末つかたに侍れど、御翁のみは春の心地して、ゑみつどひ給へるかた〳〵の御有さまを見まゐらせなば、高砂の尾上の松に、ま年經つるも、羨やみなんと、たゞ其日のみぞまたれ侍る、何れ對面たはりて、つきぬ御祝は聞え上ぐべけれど、嬉しさのあまりにいそぎ一筆かくなん。

日吉あさ子

あなうれしやな。我師の君には、和歌の浦波重ねつゝ、稀なりといふ、御齢をさへ。四年の前にすぎ玉ひ、日々數へ子等を導き玉ふ、御すこやかさ、老てふ事も、白菊の、千代の下露、くみやし玉ひけん、千うた八千歌かぎりなき御言葉の花、たかき御齢と共に匂ひて、八千代の末もうつらふ時はなかるべし、けふしも、菊がされの節會にあたれば、古しへの仙人のためしさへ思ひ出で、心にあまる、よろこびを、かくなん述べ侍る。

美濃君子

七そぢだに、むかしより稀なりと云ふなるを、御老母様には、今年八十路をいと安く御越しなされ、實によろこびの極にて、芽出たくたんことほき申納め候、さて、來ん廿五日は、御誕生日に當るを以て、祝の席を御開き成され候。私も故郷にあらむには、親しく御祝ひ申上げ、且つは、御餘滋をも頂戴して、御長壽をあやからむものをと、他國にさすらふ身は、只これのみ殘念に存じ候、別封老松遊龜の畫軸は、いと拙き品には候へ共、古歌をちなみて、此松と龜とに千歳をまかせおきて、八百歳の御齢をは重ねさせ給はん事を祈る心のしるし迄に、呈上致し候。何卒御納め下され候ひて、當日宴席の御裝飾の料ともならば、幸福に存じ候、先は御祝詞まで、あなかしこ。

佐久間八重子

たれか、鶴の年龜の齡を願はざらむ、然はあれども、之を得るには道あり。常磐の松の操を守らざらば、あだなる道にふみまひて、命を縮むることあらむ。よし、行ひ常にたゞしくも、吳竹の節のごと、身を縱はざらば、ゆくりなう、玉の緒を絶つことあらむ。よし、又行ひ正しく、命永くとも、もの學び、いそしみごとに、いくそばくの艱苦を堪へ忍び、能く勵みて、譽れを世に擧ぐることと、松の笠にすてふ、梅の霜雪寒風にめげで、いと美しき花を開き、最芳ばしき香を發つ如くならずば、世に生ひ出でし甲斐やなからむかし。御祖父の大人には、今年米字の齡を迎へさせ給ひて、腰に未だ弓も張り給はず、眼に未だ玉の光りもかり給はず、頭に雪は頂かせらるゝも、未だ最みづ〳〵しうて、いと健かに渡らせられ、殊に、世の人の覺えは、益よく、譽れの聞えは、愈々、たかう響きわたれり。これ他なし、皆日頃行ひ正しく、辛苦を嘗め、勤勉の功を積ませ給ひし結果にやあらむ。い

とゝ稀にめづらしうなむ。よて、今日そのことほぎの筵を張らせらるとか、いとゝめでたうなむ。それに付き、御招きに預りいと忝なうなむ。わらは如きは、其の行ひ其の功しは、迚も似るべうもあられども、其の露だにだぐへとの、厚き志にや侍らむ。いとうれしうなむ。さればやがて、必まゐで侍りて、御壽ぎを聞えあげ、尙、長へに榮えさせ給はむことを、祈り上げ、御盃の雫をも頂かなむ。此鯛海老取交ぜ一籠、[illegible]くは侍れど、今日の祝ひの驗迄に、參らせ侍るになむ。速に御取收め給はらば最忝なうなむ。あなかしこ。

降田滿起子

無常の嵐の、吹すさぶ世に、六十路七十路、生くるは、古よりいと稀なりと云ひ傳へ侍るに、君が祖父君には、今年八十のよはひを重ねさせ給ひて、いとゞすこやかにおはし給ふぞよ　いと〳〵珍らしく、目出度限になん。御子御孫達、數多おはしませば、朝な夕な御そばに事へ給ひて面白う樂しう、日を過し給ふらん、そがとり〴〵に榮え行きま給ふを見たまひては、如何ばかり、嬉しう思召すらん　げに幸多き御身の上、いとも御うらやましう、いかであやかりなんと　こそ思ひ給ふれ、なほ千代に八千代に、萬代までもながらへ給へと祈り奉るになん、

事もなく、八十路を越し君なれば、
千年の坂もものゝ數かは

日頃植木など好ませ給ふよし承り侍れば、此松一鉢御長壽を祝ふしるしにと、送りまゐらするを、御慰みの料にもなし給はゞ、いと嬉しうこそ、

みもとにと送るときはの姫小松
君ともにも千代をふるらん

何も〳〵君よりもよきやうに取りなし給ひてよ　あなかしこ。

丸山郁子

御祖父の君には、古來稀なりといふなる七十路の阪をあとに見なひて、今年は米の字の御齢に當らせ玉ふとか、いとも〳〵御目出たき事に存じ侍り、殊に御家の礎は、ときはにかたう据ゑさせられ、猶御うからやからも榮え玉へば、實に人生の樂しさを御集め遊ばされ候御身と、重ね〳〵も御よろこび申上げ參らせ候、かゝる御高齢におはしまし候ひても、いよ〳〵御健かにて、壯者も及ばぬ迄におはすと承り候は、やがて百年の阪も安々と越えさせられて、千代萬代も榮えまさく御志るしと存じ上げ候、古より、仁者は命長しとこそは申し候へ、日頃御情深くましまして、御慈しみは草木にも及ぶと承り侍れば、其の御仁徳の御餘澤にて、かゝる御長壽は自然の理と、失禮乍ら存じ上げ參らせ候、さて、明日は其の御祝ひの御宴を張らせ玉ふ由にて、妾までも御案内下され、實に身に餘る光榮と、御よろこび申候、菊の下露それならで、御盃の雫を頂き候ひて、御長命にあやかり候はゞ、いかにか嬉しからましと存じ候、此の石龜は、昨日弟の總七川原に參り候ひて、苔むしたる巖の上に遊べるを、携へ歸りしものに侍り、是こそ御翁にさゝげまつりて、御ほぎの志るしにせよとの奇瑞なるらめと存ぜられ候まゝ、やがて御目にかけ參らせ候、願はくは、御池に放ち玉ひて、御祖父樣萬代の友とさせれらんことを、あなかしこ。

大友つぎ子

四方の峰々には、紅葉色を爭ひて春の花よりもと打誦すべく、庭の黃菊は、いと艷に匂ひて香はしく、霜の中なる梅よりはと稱へつべし、かゝるよき時のよき日をえらひて、茶道の師の君若松の翁の、八十の祝ひのむしろを、常磐の緣したいる千代の松原にひらかれしこそうれしけれ。千年の鶴は空にまひ、萬代の龜も汀に遊ふゆたけさ、翁のうからやからはさらなり、多くの弟子たちも打集ひ、[illegible]の常磐の、いつまでも榮えませとほぎ祈り、うちあげ遊ぶこそうれしきわざなれ。此のひ、千代の吳竹もて、あまたの茶杓つくらせ給ひ、授けらるゝぞ、いと目出たきことなりけると、拙き筆もて思ふ旨をかいつゝりて、ほき言の一くさとはするなり。

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

定價金廿五錢
郵稅金六錢

全壹册

金銀摺彩色表紙
大和綴最優美

本邦固有の道徳に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

第一章 總論●風俗の變遷●今日の情態●本著の目的●人の人たる所以●女子本來の面目●日本女子と西洋女子と●維新前の女訓●西洋女子の才能●折衷

第二章 女德●節操●孝行●和合●慈悲●節婉と靜止と●恭謹と勤勞と●自重と忍耐と●女德の基源

第三章 女子特別の身分●妻道●婚嫁の主義●早婚の弊害●夫婦とは如何●從順●補佐●誠實●母道●胎教●育兒●慈愛●教戒●母の責任●繼母の道

第四章 女子藝業●女藝の本領●例證●松苗先生と紅閨女史との言●實用の藝●裁縫●料理●經濟●衛生及生理●家內の整理●良人と后藝●優美の藝●和歌●音樂●活花●茶道●書●專門の藝●文學●美術●教師●醫業●西洋の女業●貴女の職分

第五章 女子の容裝●人類と禽獸と異なる點●動作●靜淑●天眞●恭敬●裝飾●實用●禮儀●雅致●高尚●風禮●結髮●服制●佳人の資格

第六章 女子の人に接する道●交際●女子の交際●交際の効德●懇切●愛嬌及世辭●自遜と他愛と●禮節●恒敬●交際上の責任●秘訣●心得●女禮●進退●事宜●自然●習慣●婢僕を御する法●寛容●範例●奬勵●採用

第七章 女子の生活及人物●生活●幸福●快樂●高尚●質實●安心●脫塵●中庸●女子に適する學派●人物と養生と●天眞●性癖●多能●達才●富貴●美貌●好人物の本相●上流●中流●下流●應報

第八章 結論●公道●女卑の原因●反動●御國の道●女權に就いて●恩報

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 (電話本局八八) 國光社

女子教育は、決して男子の教育に讓らざるものたる感想を起さしめ。男子の教育、女子の教育、相共に並び進み、兩々相待ちて、始めて、國運の隆昌をも期することを得べし。かくの如くして、都鄙到る所、女子教育の發達を計り、盛に良風美俗を作り、忌む可く嫌ふ可き、今日、或る部分に行はるゝ墜落の汚俗を排除し、女生徒をして、他日良妻賢母たる眞正の美德を備へしむるは、實に、今日の急務たるを確信す。乞ふ、他日良妻賢母となり、家庭の半面を掌る可き女生徒諸子、幸に、考一考する所あらむ、即、可なり。予輩、未、年少、不才、其の任にあらずといへども、希くは、諸子と共に、再之を論究せんことを期す。

●新刊書しなさだめ

○女學新報　第一號明治卅一年十月發行　東京　女學新報社

名に負へるが如く、女子の師友ともすべき一小雜誌なり。さきには、女子のとも世に出で、今、又、この文生る。實によろこむしきかぎりなり。社告とて、左の四ヶ條をあげたり。

(一)女學新報　は女子社會の主導者となり女學社會ゝ機關となり公私女學校の案內者となり女學生諸子の參考となり家庭整理の材料となり誠實に熱心に女子社會の發達を圖るべし

(二)女學新報　は女子社會の裨益となり又模範たるべき女子の操行は勿論其肖像をも掲載して善を賞し德を盛んにするの實を擧ぐべし

(三)女學新報　は全國女學校　位置、組織、學科目、學費及び講師等、一々明細に掲載して女學生及び其父兄の參考に供すべし

(四)女學新報　は遠く地方に在りて就學し能はざるもの若くは父母の許を離れ難きもの其他種々の事情により直接女學校に入學し能はざるもの〻爲めには善良の教科書たるべし

發行の趣旨、亦、この四をのべたるに外ならず、其の一篇のこゝろは、兎まれかくまれ、文中、「一夫れ、國の基は家にあり。家の本は主婦にあり」といへる語あり。これ、轉倒のこゝろなきにしもあらず。いさゝか、とり出でゝ、編者の反省をうながすなり。さて、論說、訪問、學術、家庭、女德、詞苑、小說、官公私立女學校紀要、雜報等の數欄に分れり。この新報よ、いよ〳〵みがきて、たゆまさらましかむ、世の女子を益することと、けだし、ます〳〵大なるべし。

○名女傳(完)　瀨川さわ子著　東陽堂支店發行

顯貴門、賢母門、幸女門、貞婦門、名媛門、才藻門、烈女門、の七門に分ちて、本朝古來勝れたる婦女子の傳をとりあつめ、更に、漢土名媛、泰西女傑の二

欄を設けて、彼の地のをもかきつめたり。さて、書中、所々に繪畫をもはさみたれば、婦女子の見るべきにかなへり。たゞをしきは、筆のあとのあれたるなり。今の世のならひとて、責むべきには、あらざれども、くちをしく心ゆかぬわざなり。むかし人のかけるものを見よ。語をねり、筆をつゝしめるさまいとも、よく見ゆるぞ。むかしと今のけじめこそあれ、同じ女に、何のことなることかあらん。たゞ、みかくとみかゝぬと　よるなり。成れるものは、今、更にせめず。筆者、心あらば、くじけずして、更に、大にみがけ、見ん人も、また心して見てよ。かくいへども、一へにこをれとすにはあらず。かゝる著作の、いよ／＼すゝめかしと思へばなり。はた、明治の女流著作者の筆になれるが、今の世は、更にもいはず、後の世にまで、つたはりて、いまだしと思はれんが、あたらしげればなり。ゆめ／＼。

○土佐日記燈

故富士谷御杖著
國光社發行

こは、もと、文化年間の著述にして、土佐日記の註釋書なり。出版の由來は、廣告欄に見えたり。書中、表裏の二に分ちて、表よりは、言詞、文辭等を、いとつばらかにときなし、裏よりは、貫之ぬしの深き底の心がまへと、當時の世のありさまとを、ときあかせり。實に、當世には、得がたき好著述といふべし。本書、八卷なるを、上中下の三冊とせり。製版の際、深く、文字の校正をつゝしみたりといへば、誤脱なきこと又、れはかたのたぐひにあらざるべし。

○國のほまれ　ひとやの花

紅塵庵俗禪譯纂
國光社發兌

こは、飜譯小説なり。原書は、佛蘭西共和國學士會院長亞歷山篤爾儒魔氏が著したる「黒爵金香」なり。書中の事實、もと、彼の國にての事なれば、我が國の人の眼よりは、如何と見ゆるふしなきにしもあらず。これ國体の自、異ればなり。たゞ、見ん人は、彼の國の人情風俗のありかたちは、かくありけりと思ふ心を失はずして、其高潔節操の深かりし事實を

玩味せむ、蓋し得る處鮮少ならざるべし。文中、所々、文辭、ふり假名等の杜撰なるふし〳〵の見ゆるは、本書のもとも遺憾とする處なり。口畫、及、さし畫は、永の洗筆にて、口畫の彩色刷ことにいとうつくし。

○小學校農業科 教授及實施方法　山形市横町　山形教育社發兌

本書は、山形縣妙見寺農業補習學校訓導大場倘尊氏の編述せしにて、仝縣師範學校教諭青木佐市氏の校閲にかゝる。緒言に曰く

農業教育の必要は今更余の贅辯を俟たず旣に教育者諸氏の知了する處ならん然れども其教授の方法は未た他學科の如く整備せざるの傾あり是れ余儕の遺憾とする所なり幸に本年六月本縣師範學校内に於て農業科甲種講習會を開設せられ小學校農業科に關する教授法を講習せしめ以て實業の準備をなさしめたりき即ち該書は講習の結果により青木講師の口授したる材料を蒐集し傍ら余が多年實驗の事項を挿入して一部の小冊子を編したるものなり今や本邦初等農業教育實施の必要の眼前に迫るに際し只該書を篋中に藏するも誠に遺憾と思ひ茲に廣く刊行して以て教授者の參考に資せんとす

明治三十一年十月　編者識

と。庶幾くは農業教育の發達に資する處あらんか。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

……………………

……………………

……………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……、……。……、……、……。……、……、……、……。……、……、……、……。……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。

教の庭

十一月五日兼題　深夜鹿

天

よひのまは峯にきこえし鹿のねの
　ま近になりぬ夜やふけぬらむ　北海道石狩國石狩郡若生町　畠山百合子

地

小夜嵐ふきたゆむまにきこゆなり
　とほさとを野のさをしかの聲　常陸國稲敷郡鳩崎　關口美津子

人

ぬば玉のゆめ野の鹿のそれならで
　つまとふ夜半の聲ぞかなしき　肥後國菊地郡城北村　佐々小琴子

秀逸（五首）

ともしびの影はそりゆく小夜中に
　哀れさそへてをしかなくなり　肥後　田代艶子

心なきさつをもいかにしのぶらん
　ふけゆく夜半のさをしかの聲　栃木　青木たま子

小夜ふかみ松のあらしの音たえて
　尾の上に殘るさをしかのこゑ　下總　足立富子

さらぬだに夜半の寢覺の淋しきに
　かなしささそふさをしかの聲　日吉あさ子

月影もさえてさびしきさよなかに
　あはれさそふるしかのこゑ哉　長崎　長澤いゑ子

（以下原稿到着順）

さをしかの聲もはるかにきこゆなり
　夜ふくるまゝにつまやこふらん　濱口貞子

山田もるかりいほさびしさよふけて
　つまこふしかのこゑもきこえて　石井盟子

さよふけて妻こふしかのこゑきけば
　あきのあはれもいやまさるなり　江口華子

秋のよにいははしわたるしかのねも
　ふけ行くまゝにあはれまされり　山内かず子

小夜ふけてひとりねる身の悲しさに
　つま戀ふしかのこゑきこゆなり　久米貞子

さよふけてをのへはるかになく鹿の
　こゑもあらしにともなはれけり　橋本さよ子

秋やまにひとりながこつさをしかや
　夜ふくるままになきしきるらん　井口菜子

さよふけて露けきこゑのきこゆるは
　つままちかねしをしかなるらん　佐々有都子

さよふかみねやのともし火影消えて
　まくらにのこるさをしかのこゑ　根岸豐子

さよふけてあはれ男鹿のこゑすなり
　ねざめのとこにつまやこふらん　浦井登子

さよふけていづこなるらん哀れにも
つまこふしかのこゑきこゆなり
西村芳子

さよふけてあはれみにしむ鹿のねに
たびのやどりのゆめもむすばず
曽山みち子

秋のよのふけゆくまゝにたびやかた
つまこふしかのこゑあはれなり
長島寶子

吹く風にあはれをそへてきこゆなり
いづこのみねのしかのなくらん
曽山花子

月さゆるよはのねざめにきゆるは
あはれをそふるさをしかのこゑ
楠　精子

小男鹿のこゑにあはれはまさりけり
なれてさびしきたびのやどりに
島田好子

つきみつゝふくろもしらで遊ふみを
あはれもよほすさをしかのこゑ
野田千代子

近くなりまたとほざかるしかのねに
たびのまくらぞねられざりける
秋園菊子

いる月をなほやまふかくたづぬらん
さよふくるまでさをしかのなく
松原常子

さよふけてきくも淋しきたびやかた
さだかにわかぬさをしかのこゑ
町田つる子

山ふかくつまやこふらんさよふけて
きくだにあはれさをしかのこゑ
溝口信子

旅まくらゆめもむすばぬよもすがら
かすかにきこゆさをしかのこゑ
溝口直子

草まくらねざめてきけばふくるよに
しかのなくねぞものあはれなる
西村虎子

妻こひにいもねざるらんふかきよに
かすかにしかのこゑきこゆなり
神田樂子

とほやまのふもとの里にかりねして
ふけゆくよはにしかのこゑきく
木村衆子

うきあきを思ひわびてやふかき夜に
なり〳〵きこゆさをしかのこゑ
近藤秀子

月にだにねられぬあきのよもすがら
いづこのさとぞさをしかのなく
細井糸子

たくひくろ峰のあらしはすみながら
ふけゆくよはにさをしかのこゑ
白井玉子

さをしかの聲はいづこさわかれども
ふけゆくよはにしかのなくなり
吉川良子

なかつきの長きよすがらいさとほく
ふけゆくまゝにしかのこゑする
水島艮子

さよふけて夜寒のかぜのみにしみて
つまこふしかのこゑぞきこゆる
成田延子

さらでだにねさめがちなる手枕に
きくもあはれにしかのなくなり
小川鈴子

なか〳〵にねざめの友となりにけり
さよふくるまでしかのこゑして
根岸英子

さよ深く小倉のやまになくしかぞ
たびねのゆめをさましはつらむ
山本つる子

秋ふけて夜さむのさとにさをしかの
こゑきくときぞ身にしみわたる
眞島千鶴子

鹿の音もかたむくつきにすみわたり
あはれつゆけきあきのよはかな
竹村竹呈子

松がぜのおとさへたえしまよなかに
あはれをそふるさをしかのこゑ
江口華子

さらでだに淋しきものを小夜ふけて
つゆにつまとふさをしかのこゑ
中山さみ子

さよふけてさびしきしかの聲きけば
そゞろに落つるわがなみだかな
高井孟子

ふけゆけはここに哀れもますものを
さひしさつけてしかそなくなる　田代綾子

ふけてゆくよはのねさめのた枕に
あはれ身にしむさをしかのこゑ　羽田三諸子

ものゝ音もたえてふけゆく秋のよに
をのへにたかきさをしかのこゑ　河田ふく子

さよふけて小野の草ふしつゆしけく
ぬれてなくらんさをしかのこゑ　河田いし子

山かせもふきしづまりてふくるよに
をしかなくなりしからきのささ　淺井靜子

きく人そたもとはしめるふくる夜の
をしかやなにゝぬれてなくらむ　畠山雪子

小夜ふけて賤がきぬたもうちやみぬ
つまこふしかのこゑのみはして　畠山千代子

ふくる夜の松のあらしにたぐへくる
こゑすみのぼるみねのさをしか　大谷友子

さよふかきまくらにきけはひさしほに
あはれますなりさをしかのこゑ　住山幾子

ま萩咲く野をなつかしみよもすから
つゆにぬれてもしかやなくらん　住山靜子

さをしかのこゑほのかにも聞ゆなり
ひとり寝さむる夜半のまくらに　佐孫子かづ子

きゝ馴れし身にも悲しくおほゆるは
ふけゆく夜半のさをしかのこゑ　福原蓋子

月になくをしかのこゑもきこゆなり
ねさめがちなる夜半のまくらに　生駒ふれ子

いるよひのくまなくてらす山さとに
なにをこふらんしかの鳴くなる　所佐以子

にし山のたかねさやかにつきふけて　山口千枝子

あはれをそふるさをしかのこゑ

秋の夜のなかきゆめぢもさめはてゝ
とほくきこゆるさをしかのこゑ　高島蕗子

さよ更けてをしかなくなり妻こひに
ねられぬわれやひとりきくらん　横山柳子

さ夜ふけていさゝさひしき山さとに
あはれ身にしむさをしかのこゑ　吹田たけ子

いもせ山つまやこふらんさよふけて
きくもさひしきさをしかのこゑ　坪内晴子

とほやまになく鹿のねもきこゑきて
ふけしつまれるあきの夜半かな　長松かれ子

物おもひ寐られぬ夜半はことさらに
あはれさ聞くやさをしかのこゑ　赤羽もと子

萩のはなちりてあさなきかすか野の
かたふくつきにをしかなくなり　林治子

なれてすらきけはあはれさ覺ゆるは
さよふけてなくをしかなりけり　早川信惠子

更けてゆく夜半のあらしや寒からん
みやまがくれにをしかなくなり　遠藤良久子

夜もすからうき世をかこつ我そでに
つゆたきそふるさをしかのこゑ　石川類子

さなきだに秋はかなしきものなるを
よふかくきなくさをしかのこゑ　石川樂子

ふけ行けはなほ淋しさの身にしみて
つまこふしかのこゑあはれなり　石川南江子

かれもまた妻やこふらむ物おもふ
まくらにちかきさをしかのこゑ　石川久子

なく鹿のこゑもあはれにきこゆなり
つきかけさゆるあきのまよなか　間宮道子

こと更にあはれもふかし小夜ふけて
ものにまぎれぬさをしかのこゑ　鈴木金子

おほかたの物のまぎれもなかりけり
ふけ行く夜中のさをしかのこゑ　鈴木絲子

あきかぜもふけて夜寒のさびしきに
こゑぞ身にしむみねのさをしか　曾根雪子

小夜ふけてなぎの葉風もみにしむを
なくねかなしきさをしかのこゑ　高橋輝子

ふくるまでつまこひわびて北さがの
おくもさびしきさをしかのこゑ　萩原準子

更けゆけばませのきぬたもうちやみて
たかねおろしのさをしかのこゑ　上杉光子

すきもりてさす月かげの手まくらに
ゆめおどろかすさをしかのこゑ　野見節子

小夜ふけて峯こふしかのこゑきけば
あきのあはれのなほまさるかな　安村歌子

さをしかのなくねさびしき眞夜中は
いとゞあはれの身にぞしみける　木村きく子

さよふけていほりまぢかく鳴く鹿の
こゑあはれにもすみわたるかな　栗生きく子

きゝなれし我たにかなしき夜ふけて
をしかなく音にゆめもさめつゝ　辻本ひさ子

小夜更けて身のうき思ふ折しもあれ
つまこふしかのこゑぞきこゆる　大塚儀子

紅葉ちるかぜのたえまにきこゆなり
つきすむみねになくしかのこゑ　黒木信子

遠くなるをしかのこゑにしられけり
こよひもいたくさよふけぬとは　玉井陸子

さよふけてともし火くらき眞夜中に　西村ひろ子

こゑもかすかにさをしかのなく

さよふけて妻やこふらんたゐくに
ねさめかなしきさをしかのこゑ　竹村貞子

遠かたのみねのあなたになくしかも
ふくればちかくをもほゆるかな　川上喜代子

ふけゆけはきぬたの音も打たえて
しかのこゑのみひゞくころかな　川上博子

夜もすがらなく聲かなしさをしかの
とやまのまさにつまやこふらむ　六鹿ひろ子

小男鹿のこゑかすかにもなりにけり
つまこひわびて夜やふけぬらむ　無名

かすが山ふもとをかよふさをしかの
こゑもさびしきあきのよはかな　遠藤まん子

小倉やまみねのまつかぜ夜をふかみ
まくらにちかき小男しかのこゑ　幡谷よう子

小夜ふかくさびしき風にさそはれて
つまこふしかのこゑぞきこゆる　澤田まさ子

くろゝより忍ひたりけんさをしかの
ふけたるつきにこゑたてゝなく　山田瑋子

くれ竹のまどにうつろふかげきえて
なほすみまさるしかのこゑかな　武田登子

さびしさを何にたとへんさをしかの
なくねもふくるあきのやまざと　遠藤さくの子

さよ更けてみ山のたくになくしかを
ねざめにきくぞあはれなりける　高橋つた子

小夜ふけてそこはかとなく鳴く鹿は
つまゝきかれてまとふなるらん　最上志げ子

月かげのふけゆくたにもあるゝのを
あはれをそふるさをしかのこゑ　高橋りつ子

秋の夜のふくればいとゞさびしきに
　　みやまをいでゝしかも啼くらん　　上遠野愛子

紅葉ちるおとさへあるををしかなく
　　こゑもかなしきあきのよはかな　　菊盛さき子

小夜ふけてなくさを鹿のこゑきけば
　　あきのあはれのなほまさりけり　　池谷富子

つまこひにふけてさびしきさを鹿の
　　こゑをねさめのとこにきくかな　　舘脇ます子

秋といへばさらでも袖のつゆけきを
　　そへて夜ふかにしかぞなくなる　　櫛井久眞子

よそにさへあはれときけど妻こひに
　　ふくるよすがらしかのなくらむ　　吾妻たち子

かすがやまふもとの里にねさめして
　　よふかきしかのこゑをきくかな　　中桐杏子

さをしかのつまとひわびてなく聲を
　　よふかきねやにひとりきくかな　　戸塚てつ子

小よふけてまくらの山になくしかの
　　こゑはなれてもかなしかりけり　　谷口てつ子

あきかぜの音もさびしき夜半なるを
　　しはの戸ちかくしかぞ鳴くなる　　谷口さだ子

吹きまさる松のあらしにたぐひきて
　　しかの音たかしよやふけぬらん　　谷口ふさ子

しぐれふるかたやまざとはよを深み
　　のきばまぢかにしかぞなくなる　　河原よし子

さらぬだに淋しきものを小夜ふけて
　　つまゞこふらんさをしかのこゑ　　吉江いく子

よふけぬと紅葉ちる野のなかのべに
　　こゑあらゝげてさをしかのなく　　栗林みゆき子

小夜ふけて寐れざりけりひとり居の　　戸髙すゞゑ子

　　まどにをしかのこゑのきこえて

いくたびかねさめがちなる秋のよに
　　おもひやおなじさをしかのこゑ　　椎野ぬき子

つまこふるをしかの聲のきこゆなり
　　あらしもれむる夜半のまくらに　　八木沼里子

秋の夜もあかつきちかくなりぬらし
　　つまとふしかのこゑのかれゆく　　田中しげ子

さはるべき物のひゞきもなき夜半に
　　つまをこひてかしかのなくらん　　薮内ひろ子

さよふけてあはれ妻とふさをしかの
　　こゑさへすめるあきぞかなしき　　薮内つぎ子

山ざとに住みなれしみもかなしきは
　　つきにふけゆくさをしかのこゑ　　澁谷いく子

小夜ふけてめぐる嵐にいつらさも
　　わかぬ男しかのこゑぞかなしき　　澁谷豩子

吹きすさぶ松の夜あらしおとふけて
　　とほくなりゆくさをしかのこゑ　　吉岡歆子

ゆめさめてひとりもの思ふ小夜中に
　　あはれをそへてしかのなくなり　　綿野りき子

あらし吹くよさむの床のさむしきに
　　つまこふしかのこゑぞきこゆる　　四[illegible]子

もみぢ散るあらしの山につきふけて
　　ねさめさびしくしかぞなくなる　　三好つれ子

ゆふづきは野すゑの松にかけきえて
　　そともの小田にさをしかの鳴く　　田中豐子

月さゆるみねのはぎはら小夜ふけて
　　つま戀ふしかのなくこゑぞする　　目黒佐喜子

つゆふかきかやまもとの小萩はら
　　ふけゆくつきにをしかなくなり　　都水波留子

さよふけてしかのね遠くなりにけり
　みねのまつかぜふきよわりけん　　足立ます子

なにとなく人のこひしきよなかに
　あはれなるそふる小男しかの聲　　足立まつ子

まどろめばのきばの松につきふけて
　尾のへにたかくをしかなくなり　　足立宗子

きぬたうつ音かすかなる小夜なかに
　あはれをそへてをしかなくなり　　千石粲子

妻こふるこゝろもあはれふかきよの
　まくらにちかききさをしかのこゑ　　鵜濃喜代子

遠くなりちかくきこゆる小男しかの
　つまとふこゑに夜はふけにけり　　大寺浪速子

小くらやまふけゆく月になくしかは
　そのまくら戸のむかしこふらん　　笹子茂子

目さめてもかたらふ人のなき夜半は
　しかのなくねそわひしかりける　　笹子歌子

さを鹿もうかれいでけんふくるまで
　さやけき野邊のつきになくなり　　河村君子

みどり子に夢さまされてさよなかに
　おもはずきゝつさをしかのこゑ　　羽室象子

たびねしておもひも深きさよなかに
　つまこふしかのこゑきこゆなり　　樺屋美子

つききよみ松もねむれるま夜なかに
　あはれ妻こふさをしかのこゑ　　志鎌たか子

まどほにもきゝしきぬたの音たえて
　ふくるまくらにさをしかのなく　　篠崎ふさ子

風さむみふけゆく夜半のあはれをば
　たれに聞けとかしかのなくらむ　　名取よし子

をしかなく聲聞くまゝに小夜ころも
　かたしく袖のぬれまさるなり　　名取正代子

なかき夜のふくるもしらで妻こひに
　なくさをしかのこゑあはれなり　　坂田きみ子

もみぢ散るあらしの山のおくふかく
　夜半もつまこふしかのこゑかな　　佐藤喜代子

すみまさる月もいつしかかげふけて
　ねやにちかよるさをしかのこゑ　　白石藤子

やさしくもわかつま思ふねやの月に
　ふけてちかよるさをしかのこゑ　　白石さき子

夜はいまかふけわたるらん遥かたの
　しかのなく音もきこえきにけり　　無名

さよふけてなく音悲しきさをしかは
　たづぬるつまやつれなかるらん　　仁保しま子

虫もねをつきにゆづりてふくるよに
　ひとりさやけきさをしかのこゑ　　並木春子

秋のよのいもがきぬたのおと絶えて
　つきにのこれるさをしかのこゑ　　尾形さみ子

夜を深みはぎのうはかぜふきやみて
　ひときはたかきさをしかのこゑ　　渡井葛子

さよふけてそこともわかずさを鹿の
　千々のあはれをつとへてそなく　　十川いま子

あはれさもいやまさりけり小夜更て
　かたむくつきにしかのなくころ　　沼越むら子

月おちておくしもしろききよなかに
　やましたどよみしかのなくかな　　藤井さかね子

さをしかの聲もかすかにきこゆなり
　ふけゆくつきになにしのふらむ　　木下つれ子

月ふけてつまこふしかのこゑきけは
　わか身もともにそでのつゆけさ　　木下千代子

やまさとにひとよかりねの草まくら
ふけてさびしくさをしかのなく　田中虔子

むしの音のよわりもゆけはまはゝ原
しかのこゑのみきゆる夜半かな　長尾都子

さよ深みさびしさまさるひとりねの
まくらにひゞくさをしかのこゑ　高屋はきの子

さよふけて心もいさゞさびしきに
つまよぶしかのこゑあはれなり　絹川ますゑ子

こゝろなき我さへそてをしぼるかな
ふけゆくつきぞなくしかのこゑ　美濃君子

さよふかく老のねさめをなくさむと
なくかのきはのさをしかのこゑ　永井るい子

ぬば玉のよふかくきくそあはれなる
ゆめ野のしかのつまこふるこゑ　金原吉子

もみぢちる音羽のさとになくしかの
こゑも更けゆくあきのよ半かな　進藤敏子

さよ更けていさゝ身にしむあき風に
をしかなくなり小野のやまさと　進藤遊喜子

秋のよのふけゆくまゝにつきさえて
しかのねたかく澄みわたるかな　進藤美子

そよ〳〵と萩ふくかぜのおとさえて
ふけゆくつきにしかぞなくなる　田中静子

つきかげも軒端のやまにかたふきて
つまこふしかのこゑぞふけゆく　田中登子

ふくかぜの音にひゞきてよもすから
ゆめ野のしかのこゑぞきこゆる　川添はな子

小よふけてきけばそいさゝ身にはしむ
まくらのやまのさをしかのこゑ　川田孝子

ふくるまにかたむく秋のつきかげな　紀内清子

さゞめまほしさしかのなくらむ
やまさとはふけゆくまゝに賤が家の
瀬戸にちかくもしかの鳴くかな　青木幾字

ふくかぜのおとだに秋はさびしきを
よふけしつきにさをしかのなく　磯野こさ子

さまされし夢のまくらにふしぬれば
あらしにつるゝさをしかのこゑ　加藤さく子

さなきたにさびしきものを旅ねして
ふけゆくつきにさをしかのこゑ　佐久間八重子

月かげもふけてさびしきさよなかに
つまこふしかのこゑのきこゆる　降田満喜子

ころもうつ音もふけてはたゆるよに
いつまでしかのうきになくらむ　仲田榮子

ふくるまでこなたかなたになく鹿は
いくよつれなきつまやこふらん　林久米子

松かぜのたえ行くまゝにさよふけて
をやまのつきにさをしかのなく　小林久子

ねざめして見はてぬ夢のはかなきに
またあはれさやしかのなくなり　野中あさ子

小よふかくねざめて聞ぞあはれなる
つまこひかねてしかのなくねを　森こさ子

ともし火のかげもふけゆく小よ中に
さびしさそふるさをしかのこゑ　白石楓子

よし野やまみねのあらしに月更けて
ふもとのさとにをしかなくなり　高砂菊代子

更け行くやかけひのみつの音すみて
わかのきちかくさをしかのなく　高砂き代子

月かげのふけゆくよ半にいれらせて
たになかなしみしかはなくらん　寺尾まさ子

さよふけて聲もあはれになくしかは
こよひもつまやつれなかるらむ
山根久子

ふくかぜも身にしむ秋のさよふけて
つまこふしかのこゑあはれなり
野口三子

さよふけて鹿のなく音におとろけば
むすひしゆめのあさぞわひしき
濱田直子

さよふけてかたふくつきの小倉なる
みねにつまこふしかぞ鳴くなる
齋藤せん子

秋の野につままちわびてさをしかの
小よ更けてなくこゑぞさびしき
林琴子

秋かぜの身にしむよ半はいねがてに
しかのなく音もわびしかりけり
林瑟子

妹やまのみねのつきかけふけゆけば
背やまに高しさをしかのこゑ
平小路子

あふ坂やせきのあきかぜさよふけて
つまこふしかのこゑきこゆなり
竹腰婦美子

まきの戸もさゝてふけゆく月見れは
こゑもしめりてをしかなくなり
竹腰隆子

よもすがらまどゐうれしき我いほも
しかのとほねにさひしかりけり
原田雪子

小よふけて鹿の音とほくきこゆなり
よさむわぶらんつまやこふらん
丸山いく子

背よりはなくこゑちかくきこゆなり
ふけてをしかはいつち行くらむ
村尾郁子

たへかねて妹やとふらんふけゆけは
つれてきこゆるさをしかのこゑ
尾立英子

さらでたにかなしき秋をしのふやま
しのふるつきにしかぞなくなる
尾立富子

いさすゞきいさしわひしきさよ中に
つまをふしかのこゑぞきこゆる
村上てい子

月かげをしたひてなくかさよふけて
をちになりゆくさをしかのこゑ
西内ため子

小鹿なくこゑこそうけれさよふけて
ものもふこゝろはことさらにこそ
出口はひら子

秋のよのふけ行くまゝにさをしかの
こゑはいよ〳〵すみわたりけり
山崎しつ子

ふるさとの空なつかしきさよなかに
つまよふしかのこゑをきくかな
山崎つき子

ちきりおきし友もこぬよの小よ中に
ねさめうれしきさをしかのむれ
魚住愛子

あき風もふけゆくよ半のさよなかに
さびしさそへてしかのなくなり
北原季子

月ふけてみねのあらしにふきまやふ
さをしかのこゑあはれなりけり
遠山よし江子

山さとのふけ行くよ半のしかのねは
あきのあはれのかきりなりけり
遠山唯子

ねさむれは鹿のねとほくきこゆなり
ふけたるつきにつまやこふらん
高橋かれ子

ふくるまゝ我いほちかく成りにけり
あらしにたぐふさをしかのこゑ
安田ふし子

ふけ渡るつきをかなしみさをしかの
なくねもそらにすみわたるかな
森村すゝ子

山すみのなれし身にさへかなしきは
ふけゆくよ半のさをしかのこゑ
畠山香代子

てる月もをはなかそでにかけふけて
やまもさゝほくをしかなくなり
長島英子

よさともに月さへにしにかけふけて
をのへにたかしさをしかのこゑ
荻原濱子

ゆめうつゝうつゝにあらぬ夢の中にさひしくきゝし志かのはつこゑ　　大友つき子

さよふけて鹿のねさむくきこゆなりなれもなかよをあかしかねらん　　服部かつみ子

さよふけて露わけまよひなくしかははぎのおちばにさこもさむらん　　中村きさ子

つまこふるかすがの山にさよふけてなくねさむしきさをしかのこゑ　　野田郁子

月かげのふけゆくまゝにさをしかのつまこふこゑもすみまさりけり　　大村須賀子

秋ごとになくものながらさよふけてきくはさひしきさをしかのこゑ　　梨本信子

ひとり寝の身にしむ風もたへぬ夜をつまこふしかのこゑぞ洩れ來る　　玉井ふく子

かり人のふになし絶にてつきかけのかたふくやまにしかのなくなり　　飯塚むつ子

さを志かのなく音もあはれをくら山よふけてひとりつまやこふらん　　高石登代子

小夜ふけてつまこふしかの聲きけはあきのあはれはみにそしむなる　　佐藤多磨子

ねさむれははやよもふけてさを鹿のなくこゑすなりみねのまつばら　　佐藤多嘉子

十一月五日兼題　長壽を祝ふ

天　　羽後國西馬音内町　飯塚むつ子

あまたの春秋を送りむかへて、世の中の移り變りをまのあたりに見、あるは人のため國のため、をゝしき事をなして、かくはしき功を立て、あるは自ら學び、人にも問ひて、よろづの事にも暗からぬは、老いたる人なりけり。命ながきを耻づるは佛家のひが事にして、老いたるを捨つるは野蠻のならはしなり。今もし老いたる人のれはしまさゞりしかば、いかにしてか世のうつり變りを知るべき。いかにしてか此世を安らかに送らるべき。いかにしてか心得られぬふしを辨ふべき。去れば、唐國にても、齢をぞ尊きもの丶一にかぞへ、我國にても七曲の故事さへぞ侍る。げにや命ながきばかり、世にありがたく尊きものはあらじかし。今某翁の七十の賀にあたり、此よしを述べて、祝辭に代ふるになん。

地　　備前國和氣郡閑谷　西　艶子

黄金にもかへ難く、位に因りても得難きは、長壽にこそあなれ。我が友某の君の祖父に當らせらるゝは、いと健やかに、古稀の祝賀も、幾年の昔に過ぐさせ給ひて、早くも八十年の齢を、迎へ給はんとす。されば來ん年の二月を待ちて、いと盛なる、賀宴をあげさせ給ふに、先だちて、翁が、日頃好みませるまに〳〵、廣く歌文を募り給ふよし、はるかに告げこされぬ。あな目出たき事にもある哉、世の事業をのがれて、唯月花を友とし、數多の子孫が、榮行くさまを見つゝ、かゝるめでたき大御代の惠の露に浴して、心靜けく、老を

養ひ給へる、翁が幸福、たとへまつらんものも、侍らずかし。よもの雅人も、さこそは、松にことほぎ、竹にたとへて、とりどりに、めでたき詞の華を寄せて、かぎり無き翁が壽をぞ、祝ぎまつるべき。我が身、かゝる道には、一層つたなく、名木の中にまじれる何とやらん、いと、恥かしき極みなれど、嬉しさのあまりに、一言かくなん。

人

磐城國白河町　八木沼里子

明らかに治まる御代の、三十とせあまり一とせの神無月、五日といふ日。山田いさ子刀自の、ことし七十のよはひたらひ給ひけるをことほかんとて、うみの子達のはかり給ひて、このにぎはしきまとゐを開かれぬ。妾は幼きより、わきて刀自のみなさけうけつる身にしあれど、いとゞうれしさに堪へぬまゝ、拙き言の葉をもかへりみず、一とふしのほぎことをまゐらするになん。そも、刀自の君は、いにしへよりまれなるよはひに至り給ひながら、しかもいとすこやかに、日夕業を執りて、安逸に身を置き給はず、婦女子の業としては、欠くることなければ、裁縫の道には、わきて秀でさせ給ひぬれど、こゝかしこの婦女、皆其門に入りて、教へを乞ひぬるを、いとねもころに導き給ひて、なほ點茶、活花、禮法、且つは婦女子の世に處する道まで、教へて倦まず、説きて厭かず、幾年月一日の如くはごくみ給へど教へ子は、師ともあふぎ、母ともかしづきてぞなつかしみ慕ひける。まして、妾は幼きより家居近く住みなしければ、朝な夕なに行きかひて、出でゝは手をぞ携へられ、居てはみひざにまつはりて、はかなきたはぶれも、刀自を友として親しみしこと、今も昔もかはらねど、刀自の御身にさち多かれといのる心も、亦一としはまさりてなん、されどけふのむしろをことほくと共に、なほこの末は、千代に八千代に榮えまして、數多かる教へ子や、馴れ慕へる妾等が、世の大海に棹さし出でんうしろ見し給ひてよと、乞ひまつるになん。

（以下原稿到着順）

中山さみ子

日毎に、寒さもいみじう候に、御揃ひみけしきうるはしうておはします こここよなう御目出度御事と、祝ひまつるになん、扨御祖母様には、八十あまり八とせに、渡らせ給ふよし、さても御目出度事にこそ。かゝる高齢はわきても、中々にもづかしきに、猶御不自由のところもなく、御すこやかにおはしますは、いとも稀なる御事にて、御祖母様も、定めし御滿足に、御思召され、御一同様も嘸かし御よろこび給ふらん、こなたにも、かげながらうれしうなん、げに申す迄もなき事ながら、次第に寒もまさり侍べれば、猶一しほ、御氣をつけられ、此上幾千とせもこへ給んことを祈りまつるになん。さて此品、粗末には侍れど、御祝ひの印迄に御目にかけまゐらせ候、先は失禮ながら、文もて御祝ひ申上ぐるになん、あなかしこ。

生駒ふれ子

七十なしも、古稀の賀と、申すなるか、祖母君には、今年八十路にならせ玉ふよ　にて、近き内に、擧げさせ玉ふ、御祝ひのまとゐに、

招き賜はり忝なく侍り、當日は、早くより、まゐのぼりて、千代にあやかり申したく今より樂しみ居り候、御家は、いや榮ゐに榮ゐ給ふ上に、御老人は、別て御健勝に、ましませば、定めて、御盛典の御事と存じ奉り候、古銅の鶴龜、八十路の後も、なほ千代萬代と、かはりなく、八十宇治川の、流れも、澁させぬ樣にと、御祝申上げ候、いづれ御目たまはり候ふ上、萬づ御喜び申上ぐべく候。先は目度かしこ。

佐々有鄰子

筑紫の道のくちの國嘉穗の郡飯塚の町に歷代すみませる老翁在しけり。氏は木村名は二見となも稱へたまひける。今年は、八十歳の上なほひとつふたつ超ゐたまひて、いとすこやかに在しけるが、年ごろ口中の齒落ちて不便におもひたまひしかば、入齒をなしたまはんと齒醫にあつらへたまひ、すでに入れまさんとなしけるに、おもひきや八十老翁の、おく齒の生ひいでんとは、その老翁の、消息を妾におくりこしたまひぬ、そのはしつかたに歌かきそへられたり。

老はてしふるははおちてまたさらに
かれいろみせぬにひはもゐけり

とあり。いとめづらしき、長壽の老翁。あなめでたきためしの大人。これみづみづしきみづはの生ひいづるぞ千秋の長五百秋にうるし浴の、末ながくゝよはひかされますしるしなるらんと、ほぎことゝ奉る、かしこ。

谷口ふさ子

我がおぢや、古も稀なるといふ年より十年なも過しきて、今年は白傅ふ八十とはなりにけり。されど腰もかゞまらず、手足もなゐず、老いて益々すこやかなるぞ、いとめづらかなるや。さて我おぢには、人をめぐみいつくしむ心のいと深くて、貧しき人ともに、衣を與へ、米麥をめぐまれぬること、數知らず、殊に昨年は稀なる凶作にして殆と、道に餓ゑ死にたる人を見んばかりなりければ、或は價をひくゝして米麥を賣り、買ひ得ぬ者にはそれをめぐみ、又粥なにてたうべさせなどして、細き玉の緒をつなぎとめられけるも、はた多かりけり。これまたよにめづらかなる人といふべからん。古語に善を積む家には必ず餘慶あり、又陰徳ある者は、必ず陽報ありとこそうけたまはれ。おぢの此のよろこびのあるは必ずさるゆゑならんかし。このたび八十のよろこびの式をものし給はんとすとたまはりて、嬉しさにおさへがたくて、へたなりなるかたことをも恥ぢずかくなん。

河原芳子

千早振神路の山のいやさかゐにさかゐ、五十鈴の川の千世かけて清きながれのたゐせざらんごとく、古よりまれなりといへる七十も、十とせのまへに經て、ことしは八十の祝ひのむしろを開き給ふとて、妾をもまねき給ひたれば、そのめでたさには堪へず、つたなき筆もて、君の齢のすぐれたまへるをことほぎまつるになむ、

もゝちかき八十路のさかも越ゐてきし
君や千とせの松にいこはん

藪内つき子

桐の一葉落ちそめしより、朝夕は一きは肌寒く、木々の梢も色に出て、虫の音も夜々によわりゆき、籬のもとの菊のみ、人待がほにさきにほひ、やう〱秋ふかう相成候折から、御全家樣御揃ひ、御きげんよう御すごし遊ばされ候御事、まことにうれしう存上げ候、扨て御祖父樣事、御高年に渡らせられ候よし、かねて承り居候ひしゝ今年は米壽の齢にならせ給ふよしにて、近き程に、その祝の宴をひらかんとて、數ならぬ私まで御招き下され、有がたく御禮申上候、あなた樣方は、御家族も多く榮ゐ給ひ、御親族もあまたあらせらるゝ事に候へば、定めて御賑はしき御事にて、御老人樣御始め、御一家樣、さぞ〱御よろこび遊ばされ候はんと、只今より察せられ、私共までうれしう存居り候、殊に御祖父樣には、御高年に渡らせ給ひても、御身体すこやかに、髮の白くならせ給ひしのみにて、いと〱御達者のよし、松のみどりのいや深く、かめの齢の萬代までも、さかゐまさむことを祈り上げ候、ついては、古銅の鶴一雙、樂燒のかめ二つ、千代萬代にあやからせ給はんやうにと、御祝ひのしる

るしまでに差上げ候間、御床飾になし下され候はゞ、妾の嬉しさ、此上もこれなく候、御當日には、かならず伺ひ奉りて、くさ〴〵の祝言申上げ度、今より待ち居り候、先つは御招きの御禮まで、申述ぶるになむ、あなかしこ。

湊谷いく子

世には長壽の人も多かめれど、この某翁の如きは、實に稀なるべし、また世には壯健の人も多かめれど、某翁の如きは、實に珍しかるべし、翁はいさわかゝりし程より、養生の道をよくまもり、日ごさにあさは早くおきてよきほどに運動し、又さけをも飲ます、煙草をも嗜み給はずさか、さる故にや、今年は八十歳になりぬれど、ありくにも杖を力させす、居るにもおしまづきをたのます、常にあさは星をいたゞきて、出てゝ下男さものなすわざを掟て、夕は月をふみて歸るも、いさゝかもつかれたるさまも見ね給はず、實に珍しさいひつべく、世に稀なりさいひつべし、かくては、

いさやすく千年の坂もすぎ行きて
八千代のつはき君ばたならん

吉岡歌子

かしこまりて承りぬ、御祖母の君には、今年六十の御齢を重れたまふさて、そが御祝のむしろを開かせ給ふさか、御自らの御よろこびは云ふも更なり、常に御孝心深き、かぞいろの君、さてはあなた樣の御心の中、さぞかしさ推しはかり奉る、誠や、童顔鶴髮さか申し昔より、齢久しき人の例に引き出で侍るものゝ、こはまた御髮さへ黑々しう物し給へば、更に左樣の御年さも思ほはぬまで若やかに見ねさせ給ふは、まさしく千代の御齢を重れたまふ御徴にて、全く日頃御いつくしみの御心ふかく、物したまふ御むくいにこそ、たのしき御行末なりや、祝ひ奉る志の程、何にしらせん由もなけれど、猶も常盤堅磐の御榮を祈りて、松竹梅の三幅率る、あなかしこや。

綿野りき子

年月は過ぎやすくて、はやも七十の御よはひにみたせ給ひぬさか、さるに、露よわらせたまひしみけしきなく、まめやかによろつの業にいそしみ給ふ、かくも御めでたき御事の侍るを、誰も皆御うらやみまつるにこそ。尙千代に八千代の坂をこねさせられ、之にましたる御喜びを重れ給はんこさ、御手植の庭の松にも知られ侍り、此赤白の品、いさ粗末にははべれど、いさゝか御ことほぎのしるしまでにまゐらするなん、あなかしこ。

河村君子

なにがしの翁、ことし七十の春を迎へ給ひぬ。されど耳もよくきこね、目もよく見ね給ふなり。七十路のよはひを保つ世に例すくなからざれど、かく若人にかはらぬ人こそ、世にまれなれ。さてそが祝ひのむしろに、己れもまねかれたり。そのむしろにて、つたなき一首をうたひいでたるは、神路山の麓、五十鈴川のほさりにすむ河村の君子、

度川會の川水は
流れて千代も絶ねじかし
君かこゆべき年波も
此の川水に異ならじ

名取正代子

御そばの君、ことし八そぢの春秋をかされたまひぬさて、來ん天長節の佳き日をねらみ給ひて、御祝の宴せさせ給ふさかや、よりて數ならぬわらはにも御席のかたばしをけがしまゐらすべきやういひおこし給へるなん、いさもうれしうよろこび聞ね侍る、さてもよのつれに、七十八そぢをば、高き齢さまをし聞ゆる物から、日ごろまめやかにおはし給ふ君にしあれば、八十路はかりのやすらかにこね給ふは、更にもいはず、今より千させの山路のぼらせ給はんには、いまだはるかにて、やう〳〵ふもさにやたはさんかし。されば、この後、ますます御すこやかにものし給ひて、行く末は尾上の松に、將、岩が根にすむらむ鶴龜のよはひにも、立ちまさりたまふべくさ、いはひあげまゐらするになん。さて此酒肴、いさゝか御祝のしるしまでに、御らんぜさす、いかでをさめたまひてよ、あまりはまゐのぼりて、よろづよろこび聞ねあぐ

べくこそあなめでた。

佐藤喜代子

千代八千代かはらぬ御代にきほひつゝ、空飛ぶつるを、友となし、幾萬代も色かへぬ、松のみさりを手いけとなし、日頃ゝみつむきのわざにもたけたまひて。多くのみまこの君たちにも、こと〳〵のわざをなりもころになしへさせ給ひつゝ、いつも〳〵、春の日ののどやかにすごし来て、今ははや、八十八の御いはひもいとおごそかになけさせられ、さしも〳〵にすゝみ行く世をあふぎつゝ、いとおもしろく、いつも〳〵御すこやかにましますとの、あはれ芽出たく又うれしさゝはみになれは、いと拙くはべれども、此五葉のまつは、妾か年頃朝に夕に手入れなしつゝおひ立てぬるものにはべれは、すゑ永くあやからまほしさ、根こしてまゐらするになむ、あなかしこ。

無名

すべて、人と生れたらんには、よはひ長からんことなれがはぬ者やはある、されどまことに志を得ぬるは、百人が中に、二人一人もおぼつかなきばかりにあなるを、御祖父の君には、米の御よはひ重ねさせ給ひしなもて、来ん菜の日に、御祝のむしろひらかせ給はんことの嬉しさよ、いまよりは、千代八千代にかぎりなく、いよゝ栄ゑさせ給ふらん、あな嬉し、あなめでたと、操返し〳〵ことほぎまつる、實や御自らはもとより、うからやからの君たちの御悦び、いかにか、御坐らん。時しも秋の末つかたに侍れど、御翁のみは春の心地して、ゑみつゞひ給へるかた〳〵の御有さまを見まゐらせなば、高砂の尾上の松に、ま年経つるも、羨やみなんと、たゞ其日のみぞまたれ侍る、何れ對面たはりて、つきぬ御祝は聞ゑ上ぐべけれど、嬉しさのあまりにいそぎ一筆かくなん。

日吉あさ子

あなうれしやな。我師の君には、和歌の浦波重ねつゝ、稀なりといふ、御齢をさへ。四年の前にすぎ玉ひ、日々教へ子等を導き玉ふ、御すこやかさ、老てふ事も、白菊の、千代の下露、くみやし玉ひけん、千ぅた八千歌かぎりなき御言葉の花、たかき御齢と共に匂ひて、八千代の末もうつらふ時はなかるべし、けふしも、菊がされの節會にあたれば、古しへの仙人のためしさへ思ひ出で、心にあまる、よろこびを、かくなん述べ侍る。

美濃君子

七そぢだに、むかしより稀なりと云ふなるを、御老母様には、今年八十路をいと安く御越しなされ、實によろこびの極にて、芽出たくたんことほき申納め候、さて、来ん廿五日は、御誕生日に當るを以て、祝の席を御開き成され候。私も故郷にあらむには、親しく御祝ひ申上げ、且つは、御餘興なりも頂戴して、御長壽をあやからむものをと、他國にさすらふ身は、只これのみ残念に存じ候、別封老松遊亀の畫軸は、いと拙き品には候へ共、古歌をちなみて、此松と亀とに千歳をまかせおきて、八百萬の御齢をは重ねさせ給はん事を祈る心のしるし迄に、呈上致し候。何卒御納め下され候ひて、當日宴席の御装飾の料ともならば、幸福に存じ候、先は御祝詞まで、あなかしこ。

佐久間八重子

たれか、鶴の年亀の齢を願はざらむ、然はあれども、之を得るには道あり。常磐の松の操を守らざらば、あだなる道にふみまひて、命を縮むることあらむ。よし、行ひ常にたゞしくも、呉竹の節のごと、身を詮はざらば、ゆくりなう、玉の緒を絶つことあらむ。よし、又行ひ正しく、命永くとも、もの學び、いそしみごとに、いくそばくの艱苦を堪へ忍び、能く励みて、譽れを世に擧ぐることと、籬の笠にすてふ、梅の霜雪寒風にめげで、いと美しき花を開き、最芳ばしき香を發つ如くならずば、世に生ひ出でし甲斐やなからむかし。

御祖父の大人には、今年米字の齢を迎へさせ給ひて、腰に未だ弓も張り給はず、眼に未だ玉の光りもかり給はず、頭に雪は頂かせらるゝも、未だ最みづ〳〵しうて、いと健かに渡らせられ、殊に、世の人の覺ねは、益よく、譽れの聞ねは、愈々、たかう響きわたれり。これ他なし、皆日頃行ひ正しく、辛苦を嘗め、勤勉の功を積ませ給ひし結果にやあらむ。い

とゝ稀にめづらしうなむ。よて、今日そのことほぎの筵を張らせらるとかいとゝめでたうなむ。それに付き、御招きに預りいと忝なうなむ。わらは如きは、其の行ひ其の功しは、迚も似るべうもあられども、其の壽だにだぐへとの、厚き志にや侍らむ。いとうれしうなむ。さればやがて、必まゐで侍りて、御壽ぎを聞ゆあげ、尚、長へに榮ゑさせ給はむことを、祈り上げ、御盃の雫をも頂かなむ。此鯛海老取交ぜ一籠、此賑くは侍れど、今日の祝ひの驗迄に、參らせ侍るになむ。速に御取收め給はらば最忝なうなむ。あなかしこ。

隆田滿起子

無常の嵐の、吹すさぶ世に、六十路七 路、生くるは、古よりいと稀なりと云ひ傳へ侍るに、君が祖父君には、今年八十のよはひを重ねさせ給ひて、いとゞすこやかにおはし給ふぞよ いとゞ珍らしく、目出度限になん。御子御孫達、數多おはしませば、朝な夕な御そばに事へ給ひて面白う樂しう、日を過し給らん、そがさりどりに榮ゆ行き給ふを見たまひては、如何ばかり、嬉しう思召すらん げに幸多き御身の上、いとも御うらやましう、いかであやかりなんと こそ思ひ給ふれ、なほ千代に八千代に、萬代までもながらへ給へと祈り奉るになん、

事もなく、八十路を越し君なれば、
千年の坂ももの〻數かは

日頃植木など好ませ給ふよし承り侍れば、此松一鉢御長壽を祝ふしるしにと、送りまゐらするを、御慰みの料にもなし給はゞ、いと嬉しうこそ、

みもとにと送るときはの姫小松
君とこもにも千代をふるらん

何もく君よりもよきやうに取りなし給ひてよあなかしこ。

丸山郁子

御祖父の君には、古來稀なりといふなる七十路の阪をあとに見なひて、今年は米の字の御齡に寄らせ玉ふとか、いとも御目出たき事に存じ侍り、殊に御家の礎は、ときはにいたう据ゑさせられ、猶御うからやからも榮ゆ玉へば、實に人生の樂しさを御集め遊ばされ候御身と、重ね〳〵も御よろこび申上げ參らせ候、かゝる御高齡におはしまし候ひても、いよ〳〵御健かにて、壯者も及ばぬ迄におはすと承り候は、やがて百年の阪も安々と越ゆさせられて、千代萬代も榮ゆまさく御志るしと存じ上げ候、古より、仁者は命長しとこそは申し候へ、日頃御情深くまして、御慈しみは草木にも及ぶと承り侍れば、其の御陰德の御齡殿にて、かゝる御長壽は自然の理と、失禮乍ら存じ上げ參らせ候、さて、明日は其の御祝ひの御宴を張らせ玉ふ由にて、妾までも御案内下され、實に身に餘る光榮と、御よろこび申 候、菊の下露それならで、御盃の雫を頂き候ひて、御長命にあやかり候はゞ、いかにか嬉しからましと存じ候、此の石龜は、昨日弟の總と川原に參り候ひて、皆むしたる巖の上に遊べるを、携へ歸りしものに侍り、是こそ御箱にさゝげまつりて、御祝ぎのしるしにせよとの奇瑞なるらめと存ぜられ候まゝ、やがて御目にかけ參らせ候願はくは、御池に放ち玉ひて、御祖父樣萬代の友とせられんことを、あなかしこ。

大友つぎ子

四方の峰々には、紅葉色を争ひて春の花よりもと打誦すべく、庭の黄菊は、いと艶に匂ひて香はしく、雪の中なる梅よりはと勝へつべし、かゝるよき時のよき日をゑらひて、茶道の師の君若松の翁の、八十の祝ひのむしろを、常磐の緑したいろ千代の松原にひらかれしこそうれしけれ。千年の鶴は空にまひ、萬代の龜も汀に遊ふゆたけさ、翁のうひらやからはさらなり、多くの人びとも打集ひ、此の常磐の、いつまでも榮ゆませとほぎ祈り、うちあそび遊ぶこそうれしきわざなれ。此にひ、千代の吳竹もて、あまたの茶杓つくらせ給ひ、授けらるゝぞ、いと目出たきことなりけると、拙き筆もて思ふ旨をかいつゝりて、ほぎ言の一くさとはするなり。

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

金銀摺彩色表紙
大和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢
郵税金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 電話本局八八 國光社

玩味せむ、蓋し得る處鮮少ならざるべし。文中、所々、文辭、ふり假名等の杜撰なるふし〳〵の見ゆるは、本書のもとも遺憾とする處なり。口畫、及、さし畫は、永の洗筆にて、口畫の彩色刷ことにいとうつくし。

○小學校農業科 教授及實施方法　山形市橫町　山形教育社發兌

本書は、山形縣妙見寺農業補習學校訓導大場尙會氏の編述せしにて、仝縣師範學校敎諭青木佐市氏の校閱にかゝる。緖言に曰く

農業敎育の必要は今更余の贅辯を俟たず既に敎育者諸氏の知了する處ならん然れども其教授の方法は未だ他學科の如く整備せざるの傾あり是れ余輩の遺憾とする所なり幸に本年六月本縣師範學校內に於て農業科甲種講習會を開設せられ小學校農業科に關する教授法を講習せしめ以て實業の準備をなさしめたりき即ち該書は講習の結果により青木講師の口授したる材料を蒐集し傍ら余が多年實驗の事項を挿入して一部の小册子を編したるものなり今や本邦初等農業教育實施の必要の眼前に迫るに際し只該書を篋中に藏するも誠に遺憾と思ひ玆に廣く刊行して以て教授者の參考に資せんとす

明治三十一年十月　編者識

と。庶幾くは農業敎育の發達に資する處あらんか。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

…………………………
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……。……。
……。……、……、……、
……、……。……、……。
……、……、……、……、
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。

教の庭

十一月五日兼題　深夜鹿

天

よひのまは遙にきこえし鹿のねの
　ま近になりぬ夜やふけぬらむ
　　北海道石狩國石狩郡若生町　畠山百合子

地

小夜嵐ふきたゆむまにきこゆなり
　とほさとを野のさをしかの聲
　　常陸國稲敷郡鳩崎　關口美津子

人

ぬば玉のゆめ野の鹿のそれならで
　つまとふ夜半の聲ぞかなしき
　　肥後國菊地郡城北村　佐々小琴子

秀逸（五首）

ともしびの影はそりゆく小夜中に
　哀れさそへてをしかなくなり
　　肥後　田代艶子

心なきさつをもいかにしのぶらん
　ふけゆく夜半のさをしかの聲
　　栃木　青木たま子

小夜ふかみ松のあらしの音たえて
　尾の上に殘るさをしかのこゑ
　　下總　足立富子

さらぬだに夜半の寢覺の淋しきに
　かなしささそふさをしかの聲
　　日吉あさ子

月影もさえてさびしきさよなかに
　あはれさそふるしかのこゑ哉
　　長崎　長澤いゑ子

（以下原稿到着順）

さゐしかの聲もはるかにきこゆなり
　夜ふくるまゝにつまやこふらん
　　瀧口貞子

山田もるかりいほまびしさよふけて
　つまこふしかのこゑもきこえて
　　石井盟子

さよふけて娶こふしかのこゑきけば
　あきのあはれもいやまさるなり
　　江口華子

秋のよにいははしわたるしかのねも
　ふけ行くまゝにあはれまされり
　　山内かず子

小夜ふけてひとりねる身の悲しさに
　つま戀ふしかのこゑきこゆなり
　　久米貞子

さよふけてをのへはるかになく鹿の
　こゑもあらしにともなはれけり
　　橋本さよ子

秋やまにひとりなかこつさをしかや
　夜ふくるまゝになきしきるらん
　　井口楽子

さよふけて露けきこゑのきこゆるは
　つままきかねしをしかなるらん
　　佐々有鄰子

さよふかみねやのさもしび影消えて
　まくらにのこるさをしかのこゑ
　　根岸豊子

さよふけてあはれ男鹿のこゑすなり
　ねざめのさとにつまやこふらん
　　浦井登子

さよふけていづこなるらん哀れにも
　つまこふしかのこゑきこゆなり　西村芳子

さよふけてあはれみにしむ鹿のねに
　たびのやどりのゆめもむすばず　曾山みち子

秋のよのふけゆくまゝにたびやかた
　つまこふしかのこゑあはれなり　長島寶子

吹く風にあはれをそへてきこゆなり
　いづこのみねのしかのなくらん　曾山花子

月さゆるよはのねざめにきゆるは
　あはれをそふるさをしかのこゑ　楠　楠子

小男鹿のこゑにあはれはまさりけり
　なれてさびしきたびのやどりに　島田好子

つきみつゝふくるもしらて遊ふみを
　あはれもよほすさをしかのこゑ　野田千代子

近くなりまたさほざかるしかのねに
　たびのまくらぞねられざりける　秋園菊子

いる月ななほやまふかくたづねらん
　さよふくるまでさをしかのなく　松原常子

さよふけてきくも淋しきたびやかた
　さだかにわかぬさをしかのこゑ　町田つる子

山ふかくつまやさふらんさよふけて
　きくだにあはれさをしかのこゑ　瀧口信子

旅まくらゆめもむすばぬよもすがら
　かすかにきこゆさをしかのこゑ　瀧口直子

草まくらねざめてきけばふくるよに
　しかのなくねぞものあはれなる　西村虎子

妻こひにいもねざるらんふかきよに
　かすかにしかのこゑきこゆなり　神田樂子

さほやまのふもとの里にかりねして
　ふけゆくよはにしかのこゑきく　木村衆子

うきあきを思ひわびてやふかき夜に
　なり〳〵きこゆさをしかのこゑ　近藤秀子

月にだにねられぬあきのよもすがら
　いづこのささぞさをしかのなく　細井糸子

たくひくる峰のあらしはすみながら
　ふけゆくよはにさをしかのこゑ　白井玉子

さをしかの聲はいづこさわかれども
　ふけゆくよはにしかのなくなり　吉川貞子

なかつきの長きよすがらいささほく
　ふけゆくまゝにしかのこゑする　水島良子

さよふけて夜寒のかぜのみにしみて
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　成田延子

さらでだにねさめがちなる手枕に
　きくもあはれにしかのなくなり　小川倉子

なか〳〵にねざめの友となりにけり
　さよふくるまでしかのこゑして　根岸英子

さよ深く小倉のやまになくしかぞ
　たびねのゆめをさましはつらむ　山本つる子

秋ふけて夜さむのさとにさをしかの
　こゑきくさきそ身にしみわたる　眞島千鶴子

鹿の音もかたむくつきにすみわたり
　あはれつゆけきあきのよはかな　竹村竹呈子

松がぜのおささへたねしまよなかに
　あはれをそふるさをしかのこゑ　江口隼子

さらでだに淋しきものを小夜ふけて
　づゆにつまさふさをしかのこゑ　中山さみ子

さよふけてさびしきしかの聲きけば
　そゞろに落つるわがなみだかな　高井孟子

ふけゆけはここに哀れもますものを
　さひしさつけてしかそなくなる　田代綾子

ふけてゆくよはのねさめのた枕に
　あはれ身にしむさをしかのこゑ　羽田三緒子

ものゝ音もたえてふけゆく秋のよに
　をのへにたかきさをしかのこゑ　河田ふく子

さよふけて小野の草ふしつゆしけく
　ぬれてなくらんさをしかのこゑ　河田いし子

山かせもふきしつまりてふくるよに
　をしかなくなりしからきのさと　淺井靜子

きく人そたもとはしめるふくる夜の
　をしかやなにゝぬれてなくらむ　畠山雪子

小夜ふけて賤がきぬたもうちやみぬ
　つまこふしかのこゑのみはして　畠山千代子

ふくる夜の松のあらしにたぐへくる
　こゑすみのぼるみねのさをしか　大谷友子

さよふかきまくらにきけばひさしほに
　あはれますなりさをしかのこゑ　住山幾子

ま萩咲く野をなつかしみよもすがら
　つゆにぬれてもしかやなくらん　住山靜子

さをしかのこゑほのかにも聞ゆなり
　ひとり寢さむる夜半のまくらに　孫子かつ子

きゝ馴れし身にも悲しくおほゆるは
　ふけゆく夜半のさをしかのこゑ　福原藍子

月になくをしかのこゑもきこゆなり
　ねさめがちなる夜半のまくらに　生駒ふね子

いざよひのくまなくてらす山さとに
　なにをこふらんしかの鳴くなる　所佐以子

にし山のたかねさやかにつきふけて　山口千枝子

秋の夜のなかきゆめぢもさめはてゝ
　あはれをそふるさをしかのこゑ　高島蓉子

さよ更けてをしかなくなり妻こひに
　ねられぬわれやひとりきくらん　横山柳下

さ夜ふけていさゝさひしき山さとに
　あはれ身にしむさをしかのこゑ　吹田たけ子

いもせ山つまやとふらんさよふけて
　きくもさひしきさをしかのこゑ　坪内晴子

さほやまになく鹿のねもきこえきて
　ふけしつまれるあきの夜半かな　長松かね子

物おもひ寢られぬ夜半はことさらに
　あはれと聞くやさをしかのこゑ　赤羽もと子

萩のはなちりてあさなきかすか野の
　かたふくつきにをしかなくなり　林　治子

なれてすらきけばあはれと覺ゆるは
　さよふけてなくをしかなりけり　早川信恵子

更けてゆく夜半のあらしや寒からん
　みやまがくれにをしかなくなり　遠藤艮久子

夜もすがらうき世をかこつ我そでに
　つゆおきそふるさをしかのこゑ　石川頼子

さなきだに秋はかなしきものなるを
　よふかくきなくさをしかのこゑ　石川樂子

ふけ行けはなほ淋しさの身にしみて
　つまこふしかのこゑあはれなり　石川南江子

かれもまた妻やこふらむ物おもふ
　まくらにちかきさをしかのこゑ　石川久子

なく鹿のこゑもあはれにきこゆなり
　つきかけさゆるあきのまよなか　間宮道子

こと更にあはれもふかし小夜ふけて　ものにまぎれぬさをしかのこゑ　鈴木金子

おほかたの物のまぎれもなかりけり　ふけ行く夜半のさをしかのこゑ　鈴木銀子

あきかぜもふけて夜寒のさびしきに　こゑぞ身にしむみねのさをしか　曾根雪子

小夜ふけてをぎの葉風もみにしむを　なくねかなしきさをしかのこゑ　高橋輝子

ふくるまでつまこひわひて北さがの　おくもさびしきさをしかのこゑ　萩原章子

更けゆけばさとのきぬたもうちやみて　たかねおろしのさをしかのこゑ　上杉光子

すきもりてさす月かげの手まくらに　ゆめおどろかすさをしかのこゑ　野見節子

小夜ふけて妻こふしかのこゑきけば　あきのあはれのなほまさるかな　安村歌子

さをしかのなくねさびしき眞夜中は　いとゞあはれの身にぞしみける　木村きく子

さよふけていほりまぢかく鳴く鹿の　こゑあはれにもすみわたるかな　栗生きく子

きゝなれし我だにかなしさ夜ふけて　をしかなく音にゆめもさめつゝ　辻本ひさ子

小夜更けて身のうさ思ふ折しもあれ　つまこふしかのこゑぞきこゆる　大塚儀子

紅葉ちるかぜのたえまにきこゆなり　つきすむみねになくしかのこゑ　黒木信子

遠くなるさをしかのこゑにしられけり　こよひもいたくさよふけぬとは　玉井隆子

さよふけてともし火くらき眞夜中に　西村ひろ子

さよふけて妻やこふらんたえ〲に　こゑもかすかにさをしかのなく　竹村眞子

遠かたのみねのあなたになくしかも　ねざめかなしきさをしかのこゑ　川上喜代子

ふけゆけばきぬたの音も打たえて　しかのこゑのみひゞくころかな　川上博子

夜もすがらなく聲かなしさをしかの　さやまのさとにつまやこふらむ　六鹿ひろ子

小男鹿のこゑかすかにもなりにけり　つまこひわびて夜やふけぬらむ　無名

かすか山ふもとをかよふさをしかの　こゑもさびしきあきのよはかな　遠藤まん子

小倉やまみねのまつかぜ夜をふかみ　まくらにちかき小男しかのこゑ　幡谷よう子

小夜ふかくさびしき風にさそはれて　つまこふしかのこゑぞきこゆる　澤田まさ子

くろゝより忍びたりけんさをしかの　ふけたるつきにこゑたてゝなく　山田璋子

くれ竹のまとにうつろふかげきえて　なほすみまさるしかのこゑかな　武田登子

さびしさを何にたとへんさをしかの　なくねもふくるあきのやまさと　遠藤さくの子

さよ更けてみ山のおくになくしかを　ねざめにきくぞあはれなりける　高橋つた子

小夜ふけてそこはかとなく鳴く鹿は　つままきかれてまさふなるらん　最上志げ子

月かげのふけゆくたにもあるゝのを　あはれをそふるさをしかのこゑ　高橋りつ子

秋の夜のふくれはいとゞさびしさに
　みやまをいでゝしかも啼くらん　上遠野愛子

紅葉ちるおさゝへあるをしかなく
　こゑもかなしきあきのよはかな　菊盛さき子

小夜ふけてなくさを鹿のこゑきけは
　あきのあはれのなほまさりけり　池谷富子

つまこひにふけてさびしきさを鹿の
　こゑをねさめのとこにきくかな　舘脇ます子

秋といへはさらでも袖のつゆけきを
　そへて夜ふかにしかぞなくなる　諸井久頁子

よそにさへあはれときけと妻こひに
　ふくるよすがらしかのなくらむ　吾妻たち子

かすがやまふもとの里にねさめして
　よふかきしかのこゑをきくかな　中桐杏子

さをしかのつまとひわひてなく聲を
　よふかきねやにひとりきくかな　戸塚てつ子

小よふけてまくらの山になくしかの
　こゑはなれてもかなしかりけり　谷口てつ子

あきかぜの音もさびしきよ半なるを
　しはの戸ちかくしかぞ鳴くなる　谷口さだ子

吹きまさる松のあらしにたぐひきて
　しかの音たかしよやふけぬらん　谷口ふさ子

しぐれふるかたやまざとはよを深み
　のきばまぢかにしかぞなくなる　河原よし子

さらぬだに淋しきものを小よふけて
　つまごふらんさをしかのこゑ　吉江いく子

よふけぬと紅葉ちる野のなかのべに
　こゑあらゝけてさをしかのなく　栗林みゆき子

小夜ふけて寝れざりけりひとり居の
　まどにをしかのこゑのきこえて　戸髙すゞゑ子

いくたびかねさめがちなる秋のよに
　おもひやおなしさをしかのこゑ　椎野ぬき子

つまこふるをしかの聲のきこゆなり
　あらしもねむる夜半のまくらに　八木沼里子

秋の夜もあかつきちかくなりぬらし
　つまとふしかのこゑのかれゆく　田中しげ子

さはるべき物のひゞきもなき夜半に
　つまをこひてかしかのなくらん　藪内ひろ子

さよふけてあはれ妻とふさをしかの
　こゑさへすめるあきぞかなしき　藪内つぎ子

山さとに住みなれしみもかなしきは
　つきにふけゆくさをしかのこゑ　湊谷いく子

小夜ふけてめぐる嵐にいつらさも
　わかぬ男しかのこゑぞかなしき　湊谷孫子

吹きすさぶ松の夜あらしおさふけて
　とほくなりゆくさをしかのこゑ　吉岡歌子

ゆめさめてひとりもの思ふ小夜中に
　あはれをそへてしかのなくなり　綿野りき子

あらし吹くよさむの床のさむしきに
　つまこふしかのこゑぞきこゆる　四　[illegible]子

もみぢ散るあらしの山につきふけて
　ねさめさびしくしかぞなくなる　三好つれ子

ゆふづきは野すゑの松にかけきえて
　そともの小田にさをしかの鳴く　田中豊子

月さゆるみねのはぎはら小夜ふけて
　つま戀ふしかのなくこゑぞする　目黒佐喜子

つゆふかたきかやまもとの小萩はら
　ふけゆくつきにをしかなくなり　都水波留子

さよふけて志かのね遠くなりにけり
　みねのまつかぜふきよわりけん　　足立ます子

なにさなく人のこひしきよなかに
　あはれなるそふる小男しかの聲　　足立まつ子

まさろめばのきばの松につきふけて
　尾のへにたかゝなしかなくなり　　足立宗子

きぬたうつ音かすかなる小夜なかに
　あはれなそへてなしかなくなり　　千石粲子

妻こふるこゝろもあはれふかきよの
　まくらにちかききなしかのこゑ　　鵜濃喜代子

遠くなりちかくきこゆる小男しかの
　つまさふこゑに夜はふけにけり　　大寺浪速子

小くらやまふけゆく月になくしかは
　そのまくら戸のむかしこふらん　　笹子茂子

目さめてもかたらふ人のなき夜半は
　しかのなくねそわひしかりける　　笹子歌子

きな鹿もうかれいでけんふくるまで
　さやけき野邊のつきになくなり　　河村君子

みどり子に夢さまされてきよなかに
　おもはずきゝつなしかのこゑ　　羽室粂子

たびねしておもひも深きさよなかに
　つまこふしかのこゑきこゆなり　　榛屋美子

つききよみ松もねむれるま夜なかに
　あはれ妻こふなしかのこゑ　　志鎌たか子

まさほにもきゝしきぬたの音たえて
　ふくるまくらになしかのなく　　篠崎ふさ子

風さむみふけゆく夜中のあはれなは
　たれに聞けさかしかのなくらむ　　名取よし子

なしかなく聲聞くまゝに小夜ころも
　かたしく袖のぬれまさるなり　　名取正代子

なかき夜のふくるもしらて妻こひに
　なくなしかのこゑあはれなり　　坂田きみ子

もみち散るあらしの山のたくふかく
　夜中もつまこふしかのこゑかな　　佐藤喜代子

すきまもる月もいつしかかけふけて
　ねやにちかよるなしかのこゑ　　白石藤子

やさしくもわかづま思ふねやの月に
　ふけてちかよるなしかのこゑ　　白石さき子

夜はいまかふけわたるらん遥かたの
　しかのなく音もきこえきにけり　　無名

さよふけてなく音悲しきなしかは
　たづぬるつまやつれなかるらん　　仁保しま子

虫もねなつきにゆづりてふくるよに
　ひさりさやけきなしかのこゑ　　並木春子

秋のよのいもかきぬたのたさ絶えて
　つきにのこれるなしかのこゑ　　尾形さみ子

夜な深みはぎのうはかぜふきやみて
　ひさきはたかきなしかのこゑ　　渡井葛子

さよふけてそこさもわかずきな鹿の
　千々のあはれなつさへてそなく　　十川いま子

あはれさもいやまさりけり小夜更て
　かたむくつきに志かのなくころ　　沼越むら子

月おちておくしも志ろききよなかに
　やましたごゝみしかのなくかな　　藤井さかね子

さなしかの聲もかすかにきこゆなり
　ふけゆくつきになにしのふらむ　　木下つれ子

月ふけてつまこふ志かのこゑきけは
　わか身もさもにそて、のつゆけさ　　木下千代子

やまさとにひとよかりねの草まくら
　ふけてさびしくさをしかのなく
田中瀧子

むしの音のよわりもゆけはまはぎ原
　しかのこゑのみさゆる夜半かな
長尾都子

よる深みさびしさまさるひとりねの
　まくらにひゞくさをしかのこゑ
高屋はきの子

さよふけて心もいとゞさびしきに
　つまよふしかのこゑあはれなり
絹川ますゑ子

こゝろなき我さへそてをしぼるかな
　ふけゆくつきぞなくしかのこゑ
美濃君子

さよふかく老のねさめをなくさむる
　なくかのきはのさをしかのこゑ
永井るい子

ぬは玉のよふかくきくぞあはれなる
　ゆめ野のしかのつまこふるこゑ
金原吉子

もみぢちる音羽のさとになくしかの
　こゑも更けゆくあきのよ半かな
進藤敏子

さよ更けていとゞ身にしむあき風に
　をしかなくなり小野のやまさと
進藤遊喜子

秋のよのふけゆくまゝにつきさえて
　しかのねたかく澄みわたるかな
進藤美子

そよくゝと萩ふくかぜのおとさえて
　ふけゆくつきにしかぞなくなる
田中靜子

つきかげも軒端のやまにかたぶきて
　つまこふしかのこゑぞふけゆく
田中登子

ふくかぜの音にひゞきてよもすがら
　ゆめ野のしかのこゑぞきこゆる
川澄はな子

小よふけてきけばぞいとゞ身にはしむ
　まくらのやまのさをしかのこゑ
川田孝子

ふくるまにかたむく秋のつきかげを
紀内清子

　さゞめまほしさしかのなくらむ

やまさとはふけゆくまゝに賤が家の
　瀬戸にちかくもしかの鳴くかな
青木幾子

ふくかぜのおとだに秋はさびしきを
　よふけしつきにさをしかのなく
磯野こさ子

さまされし夢のまくらにふしぬれば
　あらしにつるゝさをしかのこゑ
加藤さく子

さなきたにさしびきものを旅ねして
　ふけゆくつきにさをしかのこゑ
佐久間八重子

月かげもふけてさびしきさよなかに
　つまこふしかのこゑのきこゆる
降田満喜子

ころもうつ音もふけてはたゆるよに
　いつまでしかのうきになくらむ
仲田榮子

ふくるまでこなたかなたになく鹿は
　いくよつれなきつまやこふらん
林久米子

松かぜのたえ行くまゝにさよふけて
　さやまのつきにさをしかのなく
小林久子

ねざめして見はてぬ夢のはかなきに
　またあはれさやしかのなくなり
野中あさ子

小よふかくねざめて聞ぞあはれなる
　つまこひかねてしかのなくねを
森こさ子

さもし火のかげもふけゆく小よ中に
　さびしさそふるさをしかのこゑ
白石楓子

よし野やまみねのあらしに月更けて
　ふもとのさとにをしかなくなり
高砂菊代子

更け行くやかけひのみつの音すみて
　わがのきちかくさをしかのなく
高砂き代子

月かげのふけゆくよ半にいれらせて
　たにをかなしみしかはなくらん
寺尾まさ子

さよふけて聲もあはれになくしかは
こよひもつまやつれなかるらむ　山根久子

ふくかぜも身にしむ秋のさよふけて
つまこふしかのこゑあはれなり　野口三子

さよふけて鹿のなく音におさろけば
むすひしゆめのあさぞわひしき　濱田直子

さよふけてかたふくつきの小倉なる
みねにつまこふしかぞ鳴くなる　齋藤せん子

秋の野につままちわびてさをしかの
小よ更けてなくこゑぞさびしき　林琴子

秋かぜの身にしむよ半はいねがてに
しかのなく音もわびしかりけり　林瑟子

妹やまのみねのつきかけふけゆけば
背やまに高しさをしかのこゑ　平小路子

あふ坂やせきのあきかぜさよふけて
つまこふしかのこゑきこゆなり　竹腰婦美子

まさの戸もさゝてふけゆく月見れは
こゑもしめりてをしかなくなり　竹腰隆子

よもすがらまどゐうれしき我いほも
しかのさほれにさひしかりけり　原田雪子

小よふけて鹿の音さほくきこゆなり
よさむわぶらんつまやこふらん　丸山いく子

背よりはなくこゑちかくきこゆなり
ふけてをしかはいつち行くらむ　村尾郁子

たへかれて妹やさふらんふけゆけは
つれてきこゆるさをしかのこゑ　尾立英子

さらてたにかなしき秋をしのふやま
しのふるつきにしかそなくなる　尾立富子

いさすゞきいさしわひしきさよ中に　村上ていこ

つまをふしかのこゑそきこゆる

月かげをしたひてなくかさよふけて
をちになりゆくさをしかのこゑ　西内ためこ

小鹿なくこゑこそうけれさよふけて
ものたもふころはこささらにこそ　出口ねひら子

秋のよのふけ行くまゝにさをしかの
こゑはいよ〳〵すみわたりけり　山崎志つ子

ふるさとの空なつかしきさよなかに
つまよふ志かのこゑをきくかな　山崎つき子

ちきりおきし友もこぬよの小よ中に
ねさめうれしきさをしかのむれ　魚住愛子

あき風もふけゆくよ半のさよなかに
さびしさそへてしかのなくなり　北原季子

月ふけてみねのあらしにふきまやふ
さをしかのこゑあはれなりけり　遠山よし江子

山ささのふけ行くよ半の志かのねは
あきのあはれのかきりなりけり　遠山唯子

ねさむれは鹿のねさほくきこゆなり
ふけたるつきにつまやこふらん　高橋かね子

ふくるまゝ我いほちかく成りにけり
あらしにたぐふさを志かのこゑ　安田ふ志子

ふけ渡るつきをかなしみさをしかの
なくねもそらにすみわたるかな　森村すゝ子

山すみのなれし身にさへかなしきは
ふけゆくよ半のさをしかのこゑ　畠山香代子

てる月もをはなかそてにかけふけて
やまもさほくをしかなくなり　長島英子

よさもに月さへにしにかけふけて
をのへにたかしさをしかのこゑ　荻原濱子

ゆめうつゝうつゝにあらぬ夢の中に
さひしくきゝししかのはつこゑ　大友つき子

さよふけて鹿のねさむくきこゆなり
なれもながよをあかしかぬらん　服部かつみ子

さよふけて露わけまよひなくしかは
はぎのおちばにとこもさむらん　中村きさ子

つまこふるかすがの山にさよふけて
なくねさむしきこなしかのこゑ　野田郁子

月かげのふけゆくまゝにさをしかの
つまこふこゑもすみまさりけり　大村須賀子

秋ごとになくものながらさよふけて
きくはさびしきさをしかのこゑ　梨本信子

ひとり寢の身にしむ風もたへぬ夜を
つまこふしかのこゑぞ洩れ來る　玉井ふく子

かり人のふゑも絶えてつきかけの
かたふくやまにしかのなくなり　飯塚むつ子

さをしかのなく音もあはれをぐら山
よふけてひとりつまやこふらん　高石登代子

小夜ふけてつまこふしかの聲きけば
あきのあはれはみにぞしむなる　佐藤多磨子

ねざむればはやよもふけてさを鹿の
なくこゑすなりみねのまつばら　佐藤多嘉子

十一月五日兼題　長壽を祝ふ

天

羽後國 四馬音内町　飯塚むつ子

あまたの春秋を送りむかへて、世の中の移り變りをまのあたりに見、あるは人のため國のため、をゝしき事をなして、かくはしき功を立て、あるは自ら學び、人にも問ひて、よろづの事にも暗からぬは、老いたる人なりけり。命ながきを耻づるは佛家のひか事にして、老いたるを捨つるは野蠻のならはしなり。今もし老いたる人のなれはしまさゞりしかば、いかにしてか世のうつり變りを知るべき。いかにしてか此世を安らかに送るべき。いかにしてか心得られぬふしを辨ふべき。去れば、唐國にても、齡をば尊きものゝ一にかぞへ、我國にても七曲の故事さへぞ侍る。げにや命ながきばかり、世にありがたく尊きものはあらじかし。今某翁の七十の賀にあたり、此よしを述べて、祝辭に代ふるになん。

地

備前國 和氣郡閑谷　西　艶子

黄金にもかへ難く、位に因りても得難きは、長壽にこそあなれ。我が友某の君の祖父に當らせらるゝは、いと健やかに、古稀の祝賀も、幾年の昔に過ぐさせ給ひて、早くも八十年の齡を、迎へ給はんとす。されば來ん年の二月を待ちて、いと盛なる、賀宴をあげさせ給ふに、先だちて、翁が、日頃好みませるまに〳〵、廣く歌文を募り給ふよし、はるかに告げこされぬ。あな目出たき事にもある哉、世の事業をのがれて、唯月花を友とし、數多の子孫が、榮行くさまを見つゝ、かゝるめでたき大御代の惠の露に浴して、心静けく、老を

養ひ給へる、翁が幸福、たとへまつらんものも、侍らずかし。よその雅人も、さこそは、松にことほぎ、竹にたとへて、とりどりに、めでたき詞の華を寄せて、かぎり無き翁が壽をぞ、祝ぎまつるべき。我が身、かゝる道には、一層つたなく、名木の中にまじれる何とやらん、いと、恥かしき極みなれど、嬉しさのあまりに、一言かくなん。

人

磐城國白河町　八木沼　里子

明らかに治まる御代の、三十とせあまり一とせの神無月、五日といふ日。山田いさ子刀自の、ことし七十のよはひたらひ給ひけるをことほかんとて、うみの子達のはかり給ひて、このにぎはしきまとゐを開かれぬ。妾は幼きより、わきて刀自のみなさけうけつる身にしあれど、いとゞうれしさに堪へぬまゝ、拙き言の葉をもかへりみず、一とふしのほぎことをまゐらするになん。そも、刀自の君は、いにしへよりまれなるよはひに至り給ひながら、しかもいとすこやかに、日夕業を執りて、安逸に身を置き給はず、婦女子の業としては、欠くることとなければど、裁縫の道には、わきて秀でさせ給ひぬれど、こゝかしこの婦女、皆其門に入りて、教へを乞ひぬるを、いとねもころに導き給ひて、なほ點茶、活花、禮法、且つは婦女子の世に處する道まで、教へて倦まず、說きて厭かず、幾年月一日の如くはこくみ給へど教へ子は、師とも母ともかしづきてぞなつかしみ慕ひける。まして、妾は幼きより家居近く住みなしければ、朝な夕なに行きかひて、出でゝは手をぞ携へられ、居てはみひざにまつはりて、はかなきたはぶれも、刀自を友として親しみしこと、今も昔もかはらねど、刀自の御身にさち多かれといのる心も、亦一としほまさりてなん、されどけふのむしろをことほくと共に、なほこの末は、千代に八千代に榮えまして、數多かる教へ子や、馴れ慕へる妾等が、世の大海に棹さし出でんうしろ見し給ひてよと、乞ひまつるになん。

（以下原稿到着順）

中山さみ子

日毎に、寒さもいみじう候を、御揃ひみけしきうるはしうておはしますこここよなう御目出度御事さ、祝ひまつるになん、扨御祖母樣には、八十あまり八ませに、渡らせ給ふよし、さても御目出度事にこそ。かゝる高齢はれぎても、中くにもづかしきに、猶御不自由のきころもなく、御すこやかにおはしますは、いとも稀なる御事にて、御祖母樣も、定めし御滿足に、御思召され、御一同樣も嘸かしよろこび給ふらん、こなたにも、かげながらうれしうなん、げに申す迄もなき事ながら、次第に寒もまさり侍べれば、猶一しほ、御氣をつけられ、此上幾千とせもこゝへ給んこさを祈りまつるになん。さて此品、粗末には侍れど、御祝ひの印迄に御目にかけまゐらせ候。先は失禮ながら、文もて御祝ひ申上ぐるになん、あなかしこ。

生駒ふれ子

七十をしも、古稀の賀さ、申すなるか、祖母君には、今年八十路にならせ玉ふよ　にて、近き内に、擧げませ玉ふ、御祝ひのまとゐに、

かり申したく今より樂しみ居り候、御家は、いや榮ゆに榮ゆ給ふ上に、御老人は、別て御健勝に、ましませば、定めて、御盛典の御事と存じ奉り候、古銅の鶴龜、八十路の後も、なほ千代萬代と、かはりなく、八十宇治川の、流れも、盡きせぬ樣にと、御祝申上げ候、いづれ御目たまはり候ふ上、萬づ御喜び申上ぐべく候。先は目度かしこ。

佐々有鄰子

筑紫の道のくちの國嘉穂の郡飯塚の町に歷代すみませる老翁在しけり。氏は木村名は二艮となも稱へたまひける。今年は、八十歲の上なひとつふたつ超ねたまひて、いとすこやかに在しけるが、年ごろ口中の齒落ちて不便におもひたまひしかば、入齒をなしたまはんと齒醫にあつらへたまひ、すでに入れまさんとなしけるに、おもひきや八十老翁の、おく齒の生ひいでんとは、その老翁の、消息を妾におくりこしたまひぬ、そのはしつかたに歌かきそへられたり。

老はてしふるははおちてまたさらに

かれいろみせぬにひはもねけり

とあり。いとめづらしき、長壽の老翁。あなめでたきためしの大人。これみづみづしきみづはの生ひいづるそ千秋の長五百秋にうるし滿の、末ながくとよはひかされますしるしなるらんと、ほぎこと奉る、かしこ。

谷口ふさ子

我がなぢや、古も稀なるといふ年より十年をも過しきて、今年は自傳ふ八十とはなりにけり。されど腰もかゞまらず、手足もなゐず、老いて益々すこやかなるぞ、いとめづらかなるや。さて我がなぢには、人をめぐみいつくしむ心のいと深くて、貧しき人ともに、衣を與へ、米麥をめぐまれぬること、數知らず、殊に昨年は稀なる凶作にして殆と、道に饑ゑ死にたる人を見んばかりなりければ、或は倣をひくゝして米麥を賣り、買ひ得ぬ者にはそれをめくみ、又粥なにてたうべさせなどして、細き玉の緒

[illegible]れまたよにめづらかなる人といふべからん。古語に善を積む家には必ず餘慶あり、又陰德ある者は、必ず陽報ありとこそうけたまはれ。なぢの此めよろびめあるは必ずこるゆゑならんかし。こたび八十のよろこびの式をものし給はんとすときたまはりて、嬉しさにおさへがたくて、つたなりなるつたことをも恥ぢずかくなん。

河原芳子

千早振神路の山のいやさかゐにさかゐ、五十鈴の川の千世かけて清きながれのたゐせざらんごとく、古よりまれなりといへる七十も、十とせのまへに經て、ことしは八十の祝ひのむしろを開き給ふとて、妾をもまねき給ひたれば、そのめでたさにゐ堪へず、つたなき筆もて、君の齡のすぐれたまへるをことほぎまつるになむ、

もゝちかき八十路のさかも越ゐてきし

君や千とせの松にいこはん

藪内つき子

桐の一葉落ちそめしより、朝夕は一きは肌寒く、木々の梢も色に出て、虫の音も夜々によわりゆき、籬のもとの菊のみ、人待がほにさきにほひ、やう〳〵秋ふかう相成候折から、御全家樣御揃ひ、御きげんよう御すごし遊ばされ候御事、まことにうれしう存上げ候、扨て御祖父樣事、御高年に渡らせられ候よし、かねて承り居候ひしゝ今年は米壽の齡にならせ給ふよしにて、近き程に、その祝の宴をひらかんとて、數ならぬ私まで御招き下され、有がたく御禮申上候、あなた樣方は、御家族も多く榮ね給ひ、御親族もあまたあらせらるゝ事に候へば、定めて御賑はゝしき御事にて、御老人樣御始め、御一家樣、さぞ〳〵御よろこび遊ばされ候はんと、只今より察せられ、私共までうれしう存居り候、殊に御祖父樣には、御高年に渡らせ給ひても、御身体すこやかに、髮の白くならせ給ひしのみにて、いと〳〵御達者のよし、松のみどりのいや深く、かめの齡の萬代までも、さかゐまさむことを祈り上げ候、ついては、古銅の鶴一雙、樂燒のかめ二つ、千代萬代にあやからせ給はんやうにと、御祝ひの志

るしまでに差上げ候間、御床飾になし下され候はゞ、妾の嬉しさ、此上もこれなく候、御當日には、かならず伺ひ奉りて、くさ〴〵の祝言申上げ度、今より待ち居り候、先つは御招きの御禮まで、申述ぶるになむ、あなかしこ。

湊谷いく子

世には長壽の人も多かめれど、この茱萸の如きは、實に稀なるべし、また世には壯健の人も多かめれど、茱萸の如きは、實に珍しかるべし、翁はいさわかゝりし程より、養生の道をよくまもり、日ごとにあさは早くおきてよきほどに運動し、又さけをも飲ます、煙草をも嗜み給はすさか、さる故にや、今年は八十歳になりぬれど、ありくにも杖を力させす、居るにもおしまづきをたのます、常にあさは粗をいたゞきて、出て、下男ともの、なすわざを掟て、夕は月をふみて歸るも、いさゝかもつかれたるさまも見ゐ給はず、實に珍しさいひつべく、世に稀なりさいひつべし、かくては、

いさやすく千年の坂もすき行きて
八千代のつはき君ばはたならん

吉岡歌子

かしこまりて承りぬ、御祖母の君には、今年六十の御齡を重ねたまふさて、そが御祝のむしろを開かせ給ふさか、御自らの御よろこびは云ふも更なり、常に御浮む深き、かぞいろの君、さてはあなた樣の御心の中、まぞかしさ推しはかり奉る、誠や、童顔鶴髮さか申し昔より、齡久しき人の例に引き出で侍るもの、こはまた御髮さへ黑々しう物し給へば、更に左様の御年とも思ほゐぬまで若やかに見ゐさせ給ふは、まさしく千代の御齡を重ねたまふ御徵にて、全く日頃御いつくしみの御心ふかく、物したまふ御むくいにこそ、たのしき御行末なりや、祝ひ奉る志の程、例にしらせん由もなけれど、猶も常盤堅磐の御榮を祈りて、松竹梅の三幅ぞ奉る、あなかしこや。

綿野りき子

年月は過ぎやすくて、はやも七十の御よはひにみたせ給ひぬさか、さるに、露よわらせたまひしみけしきなく、まめやかによろつの業にいそしみ給ふ、かくも御めでたき御事の侍るを、誰も皆御うらやみまつるにこそ。尙千代に八千代の坂をこゐさせられ、之にましたる御喜びを重ね給はんこさ、御手植の庭の松にも知られ侍り、此赤白の品、いさ粗末にははべれど、いさゝか御ことほぎの志るしまでにまゐらする なん、あなかしこ。

河村君子

なにがしの翁、ことし七十の春を迎へ給ひぬ。されど耳もよくきこゐ、目もよく見ゐ給ふなり。七十路のよはひを保つ世に例すくなからざれど、かく若人にかはらぬ人こそ、世にまれなれ。さてそが祝ひのむしろに、己れもまねかれたり。そのむしろにて、つたなき一首をうたひいでたるは、神路山の麓、五十鈴川のほさりにすむ河村の君子、

度川會の川水は
流れて千代も絕ゐじかし
君かこゆべき年波も
此の川水に異ならじ

名取正代子

御そぼの君、ことし八そぢの春秋をかされたまひぬさて、來ん天長節の佳き日をゐらみ給ひて、御祝の宴せさせ給ふさかや、よりて數ならぬわらはにも御席のかたばしをけがしまゐらすべきやうにいひおこし給へるなん、いさもうれしうよろこび聞ゐ侍る、さてもよのつれに、七十八そぢをば、高き齡さまをし聞ゆる物から、日ごろまめやかにおはし給ふ君にしあれば、八十路はかりのやすらかにこゐ給ふは、更にもいはす、今より千させの山路のぼらせ給はんには、いまだはるかにて、やう〳〵ふもさにやおはさんかし。されば、この後、ますます御すこやかにものし給ひて、行く末は尾上の松に、將、岩が根にすむらむ鶴龜のよはひにも、立ちまさりたまふべくさ、いはひあけまゐらするになん。さて此酒肴、いさゝか御祝のしるしまでに、御らんぜさす、いかでをさめたまひてよ、あまりはまゐのぼりて、よろづよろこび聞ゐあぐ

代八千代かにふと御代にさほひつゝ　空飛ふつるを、友となし、幾代も色かへぬ、松のみとりを手いけとなし、日頃ゝみつむきのわさにたけたまひて。多くのみまこの君たちにも、こと〳〵のわさなれりころになしへさせ給ひつゝ、いつも〳〵、春の日ののどやかにすごし、今はや、八十八の御いはひもいとおごそかになけさせられ、さく〳〵にすゝみ行く世をあふぎつゝ、いとおもしろく、いつも〳〵御こやかにましますとの、あはれ芽出たく又うれしきはみになれは、と描くはべれとも、此五葉のまつは、姿か年頃朝に夕に手入れなしつおひ立てぬるものにはべれは、すゑ永くあやからまほしさ、根こしてゐるちするになむ、あなかしこ。

無　名

へて、人と生れたらんには、よはひ長からんことをねがはぬ者やはる、されどまことに志を得ぬるは、百人が中に、二人一人もおぼつかきばかりになるを、御祖父の君には、米の御よはひ重ねさせ給ひぬもて、來ん菜の日に、御祝のむしろひらかせ給はんことの嬉しさ、いまよりは、千代八千代にかぎりなく、いよ〳〵榮ゑさせ給ふらん、な嬉し、あなめでたと、操返し〳〵ことほぎまつる、實や御自らはとより、うからやからの君たちの御悦ひ、いかにか、御坐らん。時も秋の末つかたに侍れど、御爺のみは春の心地して、ゑみつどひ給るかた〳〵の御有さまを見まゐらせなば、高砂の尾上の松に、ま年經るも、談やみなんと、たゞ其日のみぞまたれ侍る、何れ對面たはり、つきぬ御祝は聞え上ぐべけれど、嬉しさのあまりにいそぎ一筆かくん。

日吉あさ子

なうれしやな。我師の君には、和歌の浦波重ねつゝ、稀なりといふ、[illegible]なさへ。四年の前にすぎ玉ひ、日々數へ子等を導き玉ふ、御すこやき、老てふ事も、白菊の、千代の下露、くみやし玉ひけん、千うた八……古しへの仙人のためしさへ思ひ出で、心にあまる、よろこびを、かくなん述べ侍る。

美濃君子

せそぢだに、むかしより稀なりと云ふなるを、御老母樣には、今年八十路をいと安く御越しなされ、實によろこびの極にて、芽出たくたんことほぎ申納め候、さて、來ん廿五日は、御誕生日に當るを以て、祝の席を御開き成され候。私も故鄕にあらむには、親しく御祝ひ申上げ、且つは、御餘瀝をも頂戴して、御長齡をあやからむものをと、他國にさすらふ身は、只これのみ殘念に存じ候、別封老松遊龜の圖軸は、いと拙き品には候へ共、古歌をちなみて、此松と龜とに千歳をまかせおきて、八百敷の御齡をは重ねさせ給はん事を祈る心のしるし迄に、呈上致し候。何卒御納め下され候ひて、當日宴席の御裝飾の料ともならば、幸福に存じ候、先は御祝詞まで、あなかしこ。

佐久間八重子

たれか、鶴の年龜の齡を願はざらむ、然はあれども、之を得るには道あり。常磐の松の操を守らざらば、あだなる道にふみまひて、命を縮むることあらむ。よし、行ひ常にたゞしくも、吳竹の節のごと、身を莚はざらば、ゆくりなう、玉の緒を絶つことあらむ。よし、又行ひ正しく、命永くとも、もの學び、いそしみごとに、いくそばくの艱苦を堪へ忍び、能く勵みて、譽れを世に擧ぐることと、綻の笠にすてふ、梅の雪霜寒風にめげで、いと美しき花を開き、最芳ばしき香を發つ如くならずば、世に生ひ出でし甲斐やなからむかし。

御祖父の大人には、今年米字の齡を迎へさせ給ひて、腰に未だ弓も張り給はず、眼に未だ玉の光りもかり給はず、頭に雪は頂かせらるゝも、未だ最みづ〳〵しうて、いと健かに渡らせられ、殊に、世の人の覺ゑは、益よく、譽れの聞ゑは、愈々、たかう響きわたれり。これ他なし、皆日頃行ひ正しく、辛苦を嘗め、勤勉の功を積ませ給ひし結果にやあらむ。い

いと稀にめづらしうなむ。よて、今日そのことほぎの筵を張らせらるかいさゝゝめでたうなむ。それに付き、御招きに預りいと忝なうなわらはは如きは、其の行ひ其の功しは、迚も似るべうもあられども、の露だにだぐへとの、厚き志にや侍らむ。いとうれしうなむ。さればかで、必まゐで侍りて、御壽ぎを聞ゆあげ、尙、長へに榮ゆさせ給はことを、祈り上げ、御盃の雫をも頂かなむ。此鯛海老取交ぜ一籠、後瞬は侍れど、今日の祝ひの驗迄に、參らせ侍るになむ。速に御取收め給らば最恭なうなむ。あなかしこ。

降田滿起子

雨の嵐の、吹すさぶ世に、六十路七　路、生くるゝは、古よりいと稀なりふひ傳へ侍るに、君が祖父君には、今年八十のよはひを重ねさせ給ひいとゝすこやかにおはし給ふぞよ　いとゞ　〳〵珍らしく、目出度限なん。御子御孫達、數多おはしませば、朝な夕な御そばに事へ給ひて日う樂しう、日を過し給らん、そがさりごりに榮ね行ま給ふを見たましは、如何ばかり、嬉しう思召すらん　げに幸多き御身の上、いともうらやましう、いかでおやかりなんと　こそ思ひ給ふれ、なほ千代に千代に、萬代までもながらへ給へと祈り奉るになん、

千年の坂もものゝ數かは

事もなく、八十路を越し君なれば、

頃植木など好ませ給ふよし承り侍れば、此松一鉢御長壽を祝ふしろしと、送りまゐらするを、御慰みの料にもなし給はゞ、いと嬉しうこみもとにと送るときはの姫小松

君とともにも千代をふるらん

もしく君よりもよきやうに取りなし給ひてよあなかしこ。

丸山郁子

祖父の君には、古來稀なりといふなる七十路の阪をあさに見起ひ、今年は米の字の御齡に當らせ玉ふとか、いとも〳〵御目出たき事にじ侍り、殊に御家の礎は、ときはにかたう据ゑさせられ、縮御うからやからも榮ね玉へば、實に人生の樂しさを御集め遊ばされ候御身と、重ね〳〵も御よろこび申上げ參らせ候、かゝる御高齡におはしまし候ひても、いよ〳〵御健かにて、壯者も及ばぬ迄におはすと承り候は、やがて百年の阪も安々と越ねさせられて、千代萬代も榮ねまさく御志るしと存じ上げ候、古より、仁者は命長しとこそは申し候へ、日頃御情深くまして、御慈しみは草木にも及ぶと承り侍れば、其の御淸德の御餘蔭にて、かゝる御長壽は自然の理と、失禮乍ら存じ上げ參らせ候、さて、明日は其の御祝ひの御宴を張らせ玉ふ由にて、妾までも御案內下され、實に身に餘る光榮と、御よろこび申　候、菊の下露それならで、御盃の雫を頂き候ひて、御長命にあやかり候はゞ、いかにか喜しからましと存じ候、此の石龜は、昨日弟の總七川原に參り候ひて、皆むしたる磯の上に遊べるを、携へ歸りしものに侍り、是こそ御贈にさゝげまつりて、御ほぎのしるしにせよとの奇瑞なるらめと存ぜられ候まゝ、やがて御目にかけ參らせ候願はくは、御池に放ち玉ひて、御祖父樣萬代の友とせさせられんことを、あなかしこ。

大友つぎ子

四方の峰々には、紅葉色を爭ひて春の花よりもと打誦すべく、庭の黃菊は、いと艶に匂ひて香はしく、霜の中なる梅よりはと讚へつへし、かゝるよき時のよき日をねらひて、茶道の師の君若松の翁の、八十の祝ひのむしろを、常磐の緣したいろ千代の松原にひらかれしこそうれしけれ。千年の鶴は空にまひ、萬代の龜も汀に遊ふゆたけさ、翁のうひらやからはさらなり、多くの弟子ども打集ひ、松の常磐に、いつまでも榮ゆませと壽き祈り、うちあそび遊ぶこそうれしきわざなれ。此にひ、千代の吳竹もて、あまたの茶杓つくらせ給ひ、授けらるゝぞ、いと目出たきことなりけると、捐き筆もて思ふ旨なかいつゝりて、ほき言の一くさとはするなり。

國學院雜誌

第四卷第十二號

十月廿日發行

定價一冊金十五錢

發行所　東京市麴町區飯田町五丁目　國學院

婦學　裏錦

一冊定價金六錢◎外に郵税一錢を要す◎每月十五日發刊◎每號六十頁以上

◎第七拾二號(要目)

明治三十一年十月十五日發行

發行所　東京神田駿河臺北甲賀町十三番地　尚絅社

こゝろの華は歌文専門惟一の雑誌にして畏くも天覽の榮を辱うす

こゝろの華

九

附録

加茂眞淵翁加筆邑子詠草

論説

神代の和歌……武島羽衣

消息文の栞(承前)……丸山松盧

ならべのせつ……林陸夫

續戀歌論……速見晴文

講演

江戸時代國文評釋(其四)……大和田建樹

文苑

歌●久我建通●高崎正風●本居豊穎●下田歌子●宮地嚴夫●久保猪之吉

平井刀自の貞操にめでゝ……大島爲足

閑居友……宮地嚴夫

延壽の記(承前)……坂正臣

書畫帖の序……萩原正夫

漫録

有園病中詠草……大口旅師寄

詞海

薩摩守忠度歌(其三)……林陸夫寄

淨瑠璃百首(其五)……小野務

柿屋雑記……赤松景福

短歌……百〇五首

新体詩……三首

文章……四篇

雑報

和歌●歌人●流派●結社●雑誌●青年●合同●附録

學園

課題歌……百九十一首

課題文……三十九篇

●定價●一冊金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊前金一圓●郵税一冊金一錢●郵券代用一割增●爲替は東京青山局宛の事●

●發兌元 東京市赤坂區青山北町 こゝろの華發行所●

●發賣所 東京神田表神保町 東京堂●東京市麻布區笄町 文遊堂●

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送…

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金（三ヶ月分）	十二冊前金（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十一年十一月四日印刷

同　年十一月五日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 東京國光社印刷部）